仏教実在論の研究

—三世実有説論争—

上

秋 本　 勝

まえがき

本書に至る最初の出発点は、卒業論文で『倶舎論』第５章の内容をまとめたときである。それより以前に、櫻部建先生（当時大谷大学教授）から『倶舎論』の読み方の基本を学んでいた。先生は 1973 年後期に京都大学に出講され、本庄良文氏とともに『倶舎論』読解の手ほどきを受けた。それを基に筆者は卒論で第５章をまとめることとした。その際、いくつかのトピック別にサンスクリットからの和訳を参考資料として提出したが、その中には「三世実有」論も含まれていた。卒論諮問の折には、この部分の訳に対して服部正明教授（当時）から評価を頂いたことが、拙いながらもここまで続ける力になってきたように思う。その後、『南都仏教』にそれを発表する機会を得てからは『倶舎論』以降の各文献の三世実有論解読に携わってきた。

本書上巻で訳出した文献は、次の五文献、即ち、ヴァスバンドゥ（世親）の『倶舎論』（AKBh）、その註釈書であるヤショーミトラ（称友）の『明義』（SA）、スティラマティ（安慧）の『真実義』（TA[T]：チベット語訳）、作者不詳の『アビダルマ灯論』（ADV）、シャーンタラクシタ（寂護）・カマラシーラ（蓮華戒）の『真実集成』（TS）とその註釈『真実集成釈』（TSP）である。前の三点はすでに発表済みのものを改訂したもの、後の二点は新たに和訳研究に加えたものである。和訳と共に、サンスクリット文献またはチベット語文献（いずれも校訂版）を加えた。

以下に、本書各章が成った経緯を少しばかり述べておこうと思う。

まず、第１章の『倶舎論』三世実有論に関してである。「三世実有」をめぐる精緻な議論は世親の『倶舎論』第５章「随眠品」において展開されるが、筆者はこの議論の和訳を、1978 年、「倶舎論―三世実有説（訳注）」というタイトルで『南都仏教』第 41 号に発表した（秋本・本庄 1978）。その際、畏友本庄良文氏との共著の形で世に問うこととした。序文及び和訳註は筆者が、また、シャマタデーヴァ註『ウパーイカー』の

相当箇所は本庄氏が担当した。そこで、本書第１章では、『南都仏教』の論稿をできるだけ尊重するという方針で、序文及び和訳・註の内容をできるだけ残した。ただし、必要に応じて改訂は行った。第２章以下でも同様の方針で発表済みのものは元の内容を尊重しながら適宜改訂している。また、『倶舎論』だけでなくすべての文献についても、今回は便宜のため校訂テキストを新たに附した。

第２章は、ヤショーミトラ（称友）釈『明義』（SA）である。この和訳研究は、1987 年、渡辺文麿氏（当時、近畿大学教授）の科研報告書*にほんの一部を投稿したことに始まる。

* 昭和 61 年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書「アビダルマにおける存在論の体系的研究---翻訳伝承学の観点から」（6151-0014）1987, 3.

それを基に、1991 年、『筑紫女学園大学国際文化研究所論叢』第 2 号に「ヤショーミトラの『倶舎論』註―三世実有説」というタイトルで全訳を発表した（秋本 1991a）。今回適宜改訂して、本書に含めた。但し、五章全体として、訳語の統一が必ずしもできていないことをお断りしておく。

第３章のスティラマティ（安慧）釈『真実義』（TA）は、1993 年以降2000 年に至るまで 7 回に亘ってチベット語訳からの和訳研究を試みた*。

* 秋本 1993, 1995, 1996, 1997, 1998, 2000a, 2000b.

それを今回適宜改訂して本書に含めることとした。ところで、これについては江島恵教氏に感謝の言葉を記しておきたい。筆者の和訳研究より以前に、氏は既に一部和訳を含む論文を出されていた（江島 1986）が、その箇所を含む本文献の和訳を筆者は上記のように発表した。筆者としても本文献の和訳を進めていたこともあり、三世実有論が展開される諸文献の和訳をすべてやり遂げたいと思っていたからである。チベット語訳の拙劣さもあって遅々として進まなかったところ、江島氏の和訳は私に大いなる光を与えて下さった。その折、一部にせよ訳の上塗りに似たことをしたことで氏にお詫びを申し上げたが、氏は筆者に様々な助言を与え激励して下さった。感謝してもしきれないという思いで一杯である。その後、氏は急逝され、驚きと無念さが今も残るが、氏への恩返しとの思いからここに

掲載する。なお、サンスクリット写本からの訳は下巻に掲載する予定である。

第4章の『アビダルマ灯論』（ADV）については、その前半の和訳を、2003 年刊行の『瓜生津隆真博士退職記念論集・仏教から真宗へ』に“*Abhi-dharmadīpa*：「三世実有説」和訳（未完）”というタイトルで発表した*。

* 秋本 2003. ADV: 256, 11-260, 16 の和訳。

今回は当時未発表分の後半訳も新たに加えた。後半の和訳草稿も 2004 年には大凡出来ていたが、発表の機会を得なかった*。

* 後半の一部の和訳は、『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』第 29 号（2016 年 3 月発行予定）に掲載予定である。

本文献については、その後、2 種類の和訳*が公表されているが、いずれも筆者の理解と異なる部分も少なくない。よって、本章を設ける意義は十分あろうかと思われる。

* 那須 2004, 三友 2007.

第5章の『真実集成』・『真実集成釈』の「三時の考察」（第２１章：Traikālyaparīkṣā）については、和訳草稿がすでに 2005 年頃までに出来上っていた。その後、2006 年 10 月から 2007 年 9 月までの 1 年間、京都大学大学院の非常勤講師を務めさせていただいた折に、本文献を学生と共に読む機会を得た。その後速やかに和訳研究として発表しておくべきであったが、今日までその機会を得なかった。そして、2013 年から行われたダルシャナ科研（京都班）の研究会*では当該章の読解が行われ、筆者も参加させていただくことになった。その際には、和訳研究を志賀浄邦氏との共著の形で出すことで双方一致していたが、桂紹隆氏の薦めで別々に発表することとなった。桂氏には研究会にお誘い下さり、また、本書出版に際して激励の言葉をいただいたことをここに記し、感謝の意を表したい。

* 科学研究費・基盤（A）「インド哲学諸派の＜存在＞をめぐる議論の解明（課題番号：23242004）」（通称：ダルシャナ科研）。本研究会は桂紹隆氏の指導を中心に下記の日程で 3 回開催された。志賀浄邦氏が自身の和訳を読み上げ、Jaisalmer 写本も必要に応じて参照し、参加者全員で論議

して進められた。筆者は第 2 回と第 3 回に参加した（第 1 回は筆者の日程誤解により結果的に欠席）。・第 1 回 : 2013 年 3 月 4~6 日（TS 1785-1800）・第 2 回 : 2014 年 3 月 5~7 日（TS 1801-1819）・第 3 回 : 2014 年 8 月 7~9 日（TS 1820-1855）

なお、志賀氏は本文献の前半部和訳研究を本書とほぼ同時に別誌に掲載される予定である。また、志賀氏から Jaisalmer 写本のコピーをいただいた。ここに謝意を表す。

以上、上巻五章が成った経緯を述べた。

下巻にはサンスクリット（写本）の『倶舎論』安慧釈、チベット語訳の『倶舎論』満増釈の各和訳等のほか、仏教実在論に関連する論文等も掲載する予定である。また、上下巻で使用した略号と全体索引は下巻に掲載することとしたい。但し、上巻で言及したテキストや参考文献は本書末尾に付した。

本書（上巻）が成ったのは、京都女子大学より出版助成を賜ったお蔭である。ここに深く謝意を表す。

凡例

1．［　］は、和訳の際の語句の補いを示すとき、（　）は同義語、原語等を示すときに用いた。
2．和訳・原文ともに、太字部分は原則として偈（カーリカー）全体またはその一部を示す。第２章、第３章については、『倶舎論』の偈、長行の語句はすべて太字で示した。また、特に第２章第２節（原文）では、偈の語句は太字かつ下線を附した。
3．第２章第２節（原文）のなかで斜体にした部分は、註の対象となる語句を明示するためである。
4．各テキストの頁数・行数を示すときは、例えば『倶舎論』であれば、「AKBh 295, 2-301, 16」と記した（295 頁 2 行目から 301 頁 16 行目）。参考文献であれば、例えば、「秋本 1991a: 83」等と記した（83 は頁数）。
5．チベット語訳の場所を示す場合は、例えば、D Ku239a2-243b2 なら、Ku を省いて D 239a2-243b2 と記した。

目次

まえがき 1

凡例 5

序 9

三世実有論の展開 9

第１章　AKBh『倶舎論』（世親） 15

第１節　序文・構成・和訳 15

（１）序文 15

（２）構成 19

（３）和訳 21

第２節　校訂テキスト 41

第２章　SA『倶舎論明義釈』（称友） 53

第１節　和訳 53

第２節　校訂テキスト 77

第３章　TA[T]『倶舎論真実義釈』（安慧）[1] 93

第１節　和訳 93

第２節　校訂テキスト 145

第４章　ADV『アビダルマ灯論』（作者不詳） 195

第１節　和訳 195

（１）構成 195

---

[1] チベット語訳をテキストとしたもの。サンスクリット写本からの訳は下巻に掲載予定

（２）和訳 197
第２節　校訂テキスト 231

第５章　TS『真実集成』(寂護)・TSP『真実集成釈』(蓮華戒) 255
第１節　和訳 255
（１）構成 255
（２）和訳 257
第２節　校訂テキスト 305

略号（上巻） 335
テキスト 335
参考文献 339

あとがき（上巻） 343

序

三世実有論の展開

本書は、説一切有部（Sarvāstivādin）の実在論、所謂「三世実有説」論争が展開される諸文献の和訳研究である。

三世実有説は、上座部仏教（小乗仏教）のうちでも最有力部派であった説一切有部（以下、有部と略記する）の特異な実在論として有名である。この説は、周知のとおり、過去・現在・未来のすべてのものが実在するという有部独特の定説（宗義）であり、ヴァスバンドゥ（世親 c. 400-480）の『倶舎論』（AKBh）において、それまでに成立していたこの伝統的な有部説は批判的に整然とした形でまとめられた。その際、世親の三世実有批判は、経量部的立場に基づくものであった。

これに対して、有部のサンガバドラ（衆賢 c. 430-490）は『倶舎論』の三倍とも言われる分量の『順正理論』（NA）を著わして、有部の立場を擁護しながら世親批判を展開した。スティラマティ（安慧 c. 510-570）は、倶舎論註『真実義』（TA）のなかで頻繁にサンガバドラの所説を引用しながらそれへの批判を加えている。そして、おそらくそれ以後に、プールナヴァルダナ（満増）の『随相』（LA）、ヤショーミトラ（称友）の『明義』（SA）等の倶舎論註釈書が現れたであろう。

さらに、大乗中観派のシャーンタラクシタ（寂護 c |725-788）・カマラシーラ（蓮華戒 c |740-795）によって、有部批判は最終段階に至った。シャーンタラクシタの『真実集成』（TS）と蓮華戒の註釈（TSP）では、ダルマキールティ（法称 c. 600-660）以後の発達した認識論と論理学の成果に基づいて「三世実有」に対して徹底した批判が行われた。この文献における議論もまた『倶舎論』に見える世親の議論を基本としているが、サンガバドラ及びスティラマティの議論も踏まえた上で批判を展開している。このように、世親を起点として衆賢→安慧→寂護・蓮華戒という繋がりが見られるなかで、思想的発展も跡づけられることになる

これらの文献以外にもう一つ興味深い文献がある。そこには有部の立場から世親に対する応答批判が行われている。作者不詳の『アビダルマ灯論』（ADV）がそれである。この書の年代は不明であるが、サンガバドラ以降のものであることは間違いないであろう。『真実集成』とその註釈にも、本文献の内容は触れられているようには思えないので、それより後に位置付けることも可能なのかもしれない。この書の特徴は、有部・経量部だけでなく、大乗や仏教以外のインド哲学諸派（サーンキヤ、ヴァイシェーシカ等）への直接的な批判も行われている点である。

以下には、諸文献に見える三世実有論の大要を示しておこう[2]。

『倶舎論』では、有部批判の順序は作用説批判が先で、教証・理証批判が後になるが、『順正理論』は当然ながら有部の正統説を弁護すべく教証・理証の論述から始め、作用説に関する論述を後に置いている。『真実義』では、〈現在〉を特徴づける作用（kāritra）が特にダルマキールティ以後の仏教認識論・論理学の伝統における〈arthakriyā〉の概念につながるものであることに注意しておきたい。まず、有部は過去・現在・未来の三時に実在するダルマ（存在要素）は作用の有無によって区別されるとする。つまり、或る存在要素は作用が未だ起こらないとき未来、作用が現に起こるとき現在、既に作用をし終えたとき過去であるという。『倶舎論』では、作用を有部の体系中の取果・与果作用と考えた場合の誤りが論じられる[3]。これに対して、『順正理論』は同類因のもつ取果作用すなわち「引果の功能」（phalākṣepaśakti）だけを作用の意味であるとするのである[4]。このように現在のダルマを過去・未来の存在要素から区別するための作用は、サンガバドラに至ってかなり明確に定義されることになるが、さらにそれはダルマキールティ以後の存在の定義である「因果効力

---

[2] この内容は、秋本 2000 に論じたものである。

[3] 取果（phalapratigrahaṇa）とは、現在に生じたダルマは必ず自らの結果としての未来のダルマをつかむということであり、与果（phaladāna）とは結果を現在に生起させるということである。従って、有部の体系では取果は現在のみで与果は現在または過去でありうる。作用が取果・与果作用であるなら、その作用が現在を決定する要因ではありえない、というのが AKBh における批判の要旨であった。

[4] NA 631c5-17. cf. TSP 617, 19-23. なお、福田 1988 参照。

（arthakriyāśakti）をもつもの」[5]というときのまさに因果効力に繋がるものであると考えられる。それはシャーンタラクシタによって『真実集成』で明らかに関係づけられている[6]。

次に三世実有説の根拠である教証・理証の議論に移ろう。なかでも第二教証と第一理証とは、有部の三世実有の根拠として最も中心的な主張となっているものである。即ち、「認識が起こるとき、必ずその対象は実在する」という主張である。この主張は「十八界」[7]という仏教の伝統的な存在の分析を前提とした「認識は感官と対象とに依拠して生じる」という経典の句に基づいていることは言うまでもないが、もう一つの拠って立つ基盤は、認識が起こるとき、感官も対象もまた同時に存在しているという考え方（理証）である。眼識から身識に至る五識については、それぞれに対応する感官と対象とは現在のものであると言われる。また、意識についてはそれが起こるとき、感官としての「意」は過去であり、対象としての「法」は過去・現在・未来にわたると言われる[8]。しかし、有部の立場によれば、意識を含めた六種の認識の対象は認識が生じる現在時に必ず存在するから、意識の対象である過去・未来のものも実在する、即ち、本性（svabhāva）をもって存在するということになる。それはまさに、観念と考えられるものまでが外界に実在するということを意味する。経量部の

---

[5] 桂 1983: 97-100 等参照。但し、二義性をもつ"arthakriyāśakti"の方が"phalākṣepaśakti"より意味は広い。サンガバドラの"phalākṣepaśakti"は、法称の"arthakriyāśakti"の語義のうち、桂氏の言う「因果効力」という第一義的意味、それも特に「次々と自己に類似する瞬間を生じる能力」に一致するであろう。

[6] 例えば、TS1809：「作用と呼ばれる引果力（＝結果を引く力）は言葉の対象ではない。力こそ実在に他ならないからである。どうしてそれ（力）が仮象的存在であろうか。」、TS1820：「因果効力のあるもの 、それこそが真の存在である。そして、それ（＝因果効力のあるもの）が両方（＝過去・未来）にはない。そのようなもの（＝因果効力のないもの）から結果が生じるはずもない。」等に見られる。

また、TA[T]でも因果効力に関係すると思われる議論が見られる。本書第３章参照。

[7] 言うまでもないが、対象としての、色・声・香・味・触・法、感官としての、眼・耳・鼻・舌・身・意、認識としての眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識であって、「色－眼－眼識」等の対応が前提である。有部はこのような対応関係をきわめて機械論的に理解していると考えられる。

[8] AKBh 34, 3 以下、 櫻部建 1975: 230 以下参照。

立場によれば、認識の対象には実在と非実在とがあると認めることから、過去・未来のものが意識の対象となるときもそれは実在ではない。実在しないものがどのように認識されるかという点については『倶舎論』では明らかにはされない。しかし、その問題は突き詰めていくと、法称の「自己認識」の理論にまで至ることになるのかもしれない。

これは、無形象・有形象知識論の議論につながる問題であろう。後の認識論上の議論から言えば、有部の立場は無形象知識論、経量部のそれは有形象知識論とされ、感官と対象とがそれぞれ別個にしかも同時に存在しながら認識が成立すると見る有部の立場は、知識は形象をもたず外界の対象を観照するのみという無形象知識論である。他方、実在と非実在とを対象として認識が成立するとする経量部の立場は、認識の対象とは認識に表れた形象即ち認識内容そのものであってしかもそれは認識の自覚性（自己認識）に他ならないという有形象知識論である[9]。そのように発展した認識論上の問題をヴァスバンドゥとサンガバドラとの間で議論されているわけではないが、十分に関係し合っているであろう。

また、認識の対象をめぐる問題は過去・未来のものだけに限らず、以下のような誤知についても論じられている。

サンガバドラは『順正理論』の三世実有論冒頭において、認識の対象の実在性（「有相」）の定義[10]を行った後、譬喩論者の有部批判を引用して逐一反駁している[11]。そのなかで、実在しない対象の認識として譬喩論者の挙げる「旋火輪と我の二覚」「夢の中、翳目、多月の識等」に対して、サンガバドラはそれらのいずれの認識も実在する対象をもつということを論じている[12]。たとえば、旋火輪の認識にしても我のそれにしてもその対象は有部の実在の範疇内にある「火」であり「五蘊」である。それを旋火輪や我と認識するのは認識そのものに錯覚（「転倒」）が起こっていると

---

[9] 梶山 1983:6 以下・43 以下参照。

[10] NA 621c20-622a2. 以下の TA の「第一理証批判」中に略して引用されている。

[11] 譬喩論者の有部批判は、NA 622a16-27 にあり、サンガバドラの反駁は、NA 623b8~ にある。

[12] この議論を含む、認識の対象の実在・非実在性の議論の詳細については、Cox1988（福田 1996）参照。

いう。サンガバドラはそこに「杭と人」の喩えを加え、杭を見て人と錯覚する場合も、対象はあくまで杭であるとする。

この議論は、以下のスティラマティ釈（TA）[13]にも引用され、このサンガバドラ説に対して「そこに存在しない人の認識が起こっている以上、その認識は存在しないものを対象としているのである」という趣旨で批判されている。『倶舎論』で知られるとおり、経量部の立場では認識の対象はそのあるがままが対象である。このことは、後の認識論上の議論としての有形象知識論によれば知識に顕現した形象即ち認識の表象がそのまま対象であるということであり、自己認識の観点からすれば誤知もまた認識それ自身としては正しいということになる[14]。しかし、ここで議論されている誤知は対象を直接知覚する場合の誤りが主として問題になっているのであって、過去・未来のものの認識の場合とは異なる。しかし、有部はあくまで過去・未来のものの認識も誤知も、必ず、外界に実在するものを対象とする、と言うのである。

最後に、第二理証とその批判は行為とその結果の関係からの主張である。有部の立場では、行為の結果が生じるとき原因である行為はその結果を現在に生起させる働きをすると考えられるが、結果が生じるとき原因である行為は過去のものとなっているから、過去の行為が結果を生起させる、即ち過去の行為が〈与果〉すると言うのである。従って、有部の体系では、過去のものが実在していなければ因果関係の成立はありえないことになる。これに対して、経量部は、周知のとおり、種子の理論をもって批判する。有部の言うように過去のものが実在して結果を生起させるということではなく、行為が残した残骸のようなものが種子として一瞬一瞬の現在に連綿と維持され、種が芽を吹き出すようにあるときその行為の種子は結果として生まれ変わるという。この考え方は随眠（anuśaya）を顕勢態とする有部と潜勢態とする経量部との論争において現れることもよく知られている。

以上、三世実有論の発展過程を概観した。

---

[13] 本書第３章：IV-3「第一理証批判」参照。
[14] 梶山 1983:48-49 参照。

第１章　AKBh『倶舎論』（世親）

AKBh 295, 2 – 301, 16 ad AK V 25-27

第１節　序文・構成・和訳

（1）　序文[1]

説一切有部（Sarvāstivādin、以下「有部」と略す）の三世実有説をめぐる、有部と世親（Vasubandhu）または経量部（Sautrāntika）との間の議論は、『倶舎論』第五章「随眠品」に見出される[2]。そこではまず、有部の論証として二教証及び二理証が挙げられ、さらに有部の四論師の異説が紹介される。そのうちの第三説、即ち、三世の違いは位態によるとする世友（Vasumitra）の説が有部で正統説であること、その位態（avasthā）は作用（kāritra）の有無によって区別されることが述べられる。ここまでは、有部の定説となっているものである。世親はこの後、その作用説に対して批判を加え、さらに有部の二教証及び二理証を厳しく批判する。そこでは、有部の、過去・未来・現在のものが実在するという説が、対論の形で厳密に吟味される。そこでの世親の立場は、従来から指摘されているごとく、経量部的であると言えよう。倶舎論全般に見られるように、世親は経量部説を持ち出して、有部を明に暗に批判する。

三世実有説をめぐる議論の直前に、「過去・未来の対象に関して、過去・未来の随眠（anuśaya）とどのように人は結びついているか」についてのアビダルマ的定義が述べられる。有部は明らかに過去・未来のものの実在を前提としてその問題を扱うのであるが、世親は経量部の種子（bīja）

---

[1] 本章では、本書の他の章とは別に、元の稿にあった「序文」も残した。また、例えば「ヴァスバンドゥ」と記述するところを「世親（Vasubandhu）」という表現を残すなどオリジナル版を尊重した。

[2] AKBh 295, 2-301, 16 ad AK V 25-27. AKBh 1975: 295, 1-301, 18.

説を取り上げて、過去・未来のものの実在を認めることなしにその問題の解釈をせんとする。そのような世親の態度は次の場合にも見られる。

同じ倶舎論第五章の冒頭で、「kāmarāgānuśaya（欲貪随眠）という複合語は、”kāmarāga evânuśayaḥ”（Karmadhāraya「欲貪という随眠」）なのか、"kāmarāgasyânuśayaḥ"（Tatpuruṣa「欲貪の随眠」）なのか」（AKBh 277, 17 - 278, 1）という問題が提起される。有部は前者をとり（278, 5）、経量部は後者をとる（278, 17-18）。経量部によれば、潜勢態の煩悩が anuśaya であり、顕勢態の煩悩が paryavasthāna（纏）である（278, 19）。しかも、anuśaya は顕勢態の煩悩と別のものではない（278, 18 - 19）。そして潜勢態とは、表面に現われ出ない煩悩が種子の状態で維持されていることである（280, 20）。さらに、その種子とは、煩悩から生じ煩悩を生起させる力である（278, 21）。このような経量部の説を、世親は正論としている（278, 17）。

世親についてはさておくとして、今略述したことからも、anuśaya に関する有部と経量部の見解の差異は歴然としている。一般に有部は、過去・未来のものの実在を説くことによって因果関係を説明するのに対して、経量部は、過去・未来のものの実在を否定して、現在時に連綿と持続して保たれる種子の理論によって因果関係を説明する。anuśaya についても、有部の方はあくまでも三世に実有とする立場から、経量部が言うような煩悩の潜勢、顕勢を考える必然性をもたない。言わば、有部にとって anuśaya は煩悩の異名にすぎない。従って、有部の言う、過去・未来の anuśaya は経量部にとって、そのまま種子たる anuśaya に取って代わられるのであるとも言えよう。

倶舎論の三世実有説の記述については、古来多くの先学が研究吟味してきたところである。しかし、あえてここにその訳及び註を出すのは、一つに、これまでの研究成果を踏まえて、サンスクリット本を中心とした訳を試み、また、『真実集成』とその註釈（TS & TSP）の「三時の考察」章（Traikālyaparīkṣā）研究を進めるに当たって基礎作業をしておきたかったこと等による。もう一つの理由として、「倶舎論所引の経典を検討す

ることによって、その出典を明らかにすること」（桜部建「シャマタデーヴァの倶舎論註について」[3]参照）等を試みたかったことが挙げられる[4]。

尚、訳出に当たっては、プラダン本 1967 年版（AKBh）を底本とし、主にチベット語訳（北京版・デルゲ版）及び漢訳（真諦訳、玄奘訳）、ヤショーミトラの註釈等を参照した。また、訳中に（　）または［　］を付したが、前者は言い換えや補い等、後者はヤショーミトラ註または筆者の補いである。

---

[3] 櫻部 1956.

[4] このシャマタデーヴァ註に関わる理由説明は、本庄良文氏が当時担当した部分に言及したものである。最近、以下の労作が出版されている。本庄良文『倶舎論註ウパーイカーの研究 訳注篇』上・下, 大蔵出版 2014。

（2）構成

I　序
II　三世実有説
II－1　第一教証
II－2　第二教証
II－3　第一理証
II－4　第二理証
II－5　説一切有部と呼ばれる理由
III－1　四大論師の異説
III－1－1　第一説［ダルマトラータ（法救）説］
III－1－2　第二説［ゴーシャカ（妙音）説］
III－1－3　第三説［ヴァスミトラ（世友）説］
III－1－4　第四説［ブッダデーヴァ（覚天）説］
III－2　四異説中の第三説が有部の正統説
III－2－1　第一説批判
III－2－2　第二説批判
III－2－3　第四説批判
III－2－4　第三説が定説
III－2－5　三世の違いは作用によって決定される
IV　作用説批判
IV－1　その一
IV－2　その二
IV－3　その三
IV－4　作用と存在要素とが別ものでないとき
IV－4－1　三世は不成立
IV－4－2　「三世実有かつ無常」は不合理
V　二教証・二理証批判
V－1－1　第一教証批判その一
V－1－2　第一教証批判その二

V－1－3　第一教証批判その三
V－2　　第二教証批判
V－2－1　第二教証批判その一
V－2－2　第二教証批判その二
V－2－3　第二教証批判その三
V－2－4　第二教証批判その四
V－2－5　第二教証批判その五
V－3　　第一理証批判
V－4　　第二理証批判
V－4－1　第二理証批判その一
V－4－2　第二理証批判その二
VI　　結び

（3）和訳

I　序（295, 2-5）

ところで、この過去のもの・未来のものは、実在[5]するのか［実在し］ないのか。もし［実］在するなら、因果的存在（saṃskāra）はすべての時間に存在するから、恒常であるということになる。また、もし［実］在しないなら、どうしてそれ（過去、木来のもの）に関してそれ（過去、未来の随眠 anuśaya）と結びつき、また。離れるのか[6]。「因果的存在が恒常である」ということを、ヴァイバーシカ派（毘婆沙師）は認めない。［因果的存在は、生住異滅の四つの］因果的存在の特徴（saṃskṛtalakṣaṇa）[7]と結びつくから。

II　三世実有説（295, 5-6）

しかし、明らかに主張される、

［存在要素は］**すべての時間**（過去・現在・未来）**に存在する。**｜**25a1**｜

II－1　第一教証（295, 7-12）

どうしてか。

［経典に］**説かれているから。**｜25a2｜

---

[5] AKBh 295, 2: -nāgatam ucyate を-nāgataṃ dravyato と訂正。cf. D 239a2: ci ‘das pa dang ma ‘ongs pa’i dngos po rdzas su yod ‘on te med…, P 279b5: ci ‘das pa dang ma ‘ongs pa ‘di rdzas su yod ‘on te med; 真諦 257b29: 過去未来為実有物為仮名有, 玄奘 巻二十の一左: 応弁諸事過去未来、為実有無方可説繫。

[6] SA 468, 24-25: *kathaṃ tatra tena ca saṃyukta* iti. katham atītānāgate vastuni. tena câtītānāgatenânuśayena saṃyukta iti *visaṃyukto vā*. なお、 saṃyukta… visaṃyukto vā の主体は pudgala である。cf. AKBh 294, 4: yasya pudgalasya yo ‘nuśayo yasminn ālambane sa tena tasmin saṃprayuktaḥ….

[7] cf. AKBh 75, 18-20 ad AK II45cd.

なぜなら、世尊によって［次のように］説かれたからである。「比丘らよ。もし過去の物質的存在（rūpa）がないなら、教えを聞いた聖弟子が過去の物質的存在に対する関心を捨てる[8]ことはないであろう。過去の物質的存在があるから、教えを聞いた聖弟子は過去の物質的存在に対する関心を捨てるのである。もし未来の物質的存在がないなら、教えを聞いた聖弟子が［未来の］物質的存在に対する楽しみを捨てることはないであろう。［未来の物質的存在が］あるから、［未来の］物質的存在に対する［楽しみを捨てるのである］」と云々[9]。

II－2　第二教証（295, 13-16）

［認識は］**二つ**［に依拠して生じる］**から。**｜25b1｜

「二つに依拠して認識は生じる。」[10]と説かれた。「二つとは何か。眼と色形と、ないし意（manas）と観念（dharma 法）との［各々二つ］である。」あるいは、過去・未来のものがないなら、それを対象とする認識は二つに依拠して［生じるのでは］ないことになる[11]。以上のように、まず経典に基づいて、過去・未来のものは存在する［ということが証明されるという］。

II－3　第一理証（295, 16-19）

論理に基づいても［過去・未来のものは存在するということが証明されるという］。

---

[8] ふつう「無関心となる」と訳すところであるが、櫻部建先生は「〈関心を捨てる〉という訳の方がより良い」と言われたことにより『倶舎論』ではそのように訳す。

[9] 本庄 2014: 671-672 [5016] 参照。

[10] 本庄 2014: 673 [5017] 参照。

[11] 二つに依拠して生じ、しかも過去・未来を対象とする認識とは意識（manovijñāna）のことであり、この教証は次の第一理証と内容的に同じものである。SA 469, 13-14: na dvayaṃ pratītya manovijñānaṃ syāt yad atītānāgatālaṃbanam iti viśeṣaḥ. cf. 梶山 1983:20-31.

［認識は、実］**在する対象**［に依拠して生じる］**から。**｜25b2｜
対象が存在するとき認識は生じ、［対象が］存在しないとき［認識は生じ］ない。そして、もし過去・未来のものが存在しないなら、認識は存在しないものを対象とすることになってしまう。［しかし、存在しないものを対象とするような認識はない。］ 従って、［過去・未来のものがないなら］認識そのものがないことになってしまう[12]。対象が存在しないのであるから。

II－4　第二理証（295, 20－296, 1）

［行為の］**結果**［がある］**から。**｜25b3｜
また、もし過去のものがないなら、善悪の行為の結果がどうして未来にあろうか。というのは、結果が生じるとき、［結果が］熟するための原因は［過去にあって］現在にないからである。従って、過去・未来のものは必ず［実］在する、とヴァイバーシカ派は［主張する］。

II－5　説一切有部と呼ばれる理由（296, 1-6）

そして、すべてがあると説く者があれば、その者によって必ずこの［過去・未来のものが実在するという］ことが認められるであろう、と伝説される。なぜなら、

それ（過去・未来・現在のものの一切）**が有ると説くから、説一切有部と認められる**［からである］。｜25cd1｜
なぜなら、過去のもの・未来のもの・現在のものの一切が［実］有であると説く人々が説一切有部であるからである。

[12] SA 469, 15-16: sādhanaṃ câtra. sadālaṃbanam eva manovijñānaṃ. upalabdhisvabhāvāt. cakṣurvjñānavad iti. 梶山 1983:20-31. なお、『倶舎論』の二教証及び二理証については各々、TSP 615, 24-616, 6 が「理証一」、TSP 616, 6-9 が「教証二」、TSP 616, 9-12 が「理証二」、TSP 616, 15-19 が「教証一」に相当する。

しかし、ある人々は「現在の結果とまだ結果を与えていない過去の［行為］とは存在するが、すでに結果を与えた過去の［行為］と未来の［行為］とは存在しない。」と分けて説くが、それは分別説部である。

III－1　四大論師の異説（296, 6-8）

そして、この説一切有部は何種類［の論者］か［と言えば、次のように］言う。

四種類［の論者］である。彼らは、様態の違い、特徴の違い、位態の違い、見方の違いとする者と呼ばれる[13]。｜$25d_2$-26ab｜

III－1－1　ダルマトラータ（法救）説（296, 9-14）

大徳ダルマトラータ（法救）は、様態の違いとする。この人は［次のように］言ったと伝説される。存在要素（dharma）は、［過去・現在・未来の］時間にあるとき[14]、様態の違いはあるが実体の違いはない。たとえば、金の器を壊して別様にするとき、その器の形の違いはあるが、色の違いはないように。また、牛乳がヨーグルトに変化するとき、［その］味・効力・熟成度を捨てるが、色を［捨て］ないように、そのように存在要素も、未来時から現在時へやってくるとき、未来という様態を捨てるが実体であることを［捨てはし］ない。同様に、現在時から過去時へ行くとき、現在という様態を捨てるが実体であることを［捨てはし］ない［と］。

III－1－2　ゴーシャカ（妙音）説（296, 15-18）

---

[13] 以下の AKBh に記述される四論師の説から作用説までは、婆沙 396a10-b23、TSP 614, 7-14＝第一説、614, 15-18＝第二説、614, 19-25＝第三説、615, 3-6＝第四説、615, 8-19＝第一・二・四説批判、616, 24-617, 8＝作用説）に相当する。

[14]有部では、時間（adhvan）と因果的存在（saṃskṛta）とは同義である。cf. 婆沙 393c4-7; AKBh 5, 3-4 ad AK I 7c. 時間を実在と見る部派が存在したことは、婆沙 393a9-17; 700a26-b2 で知られる。

大徳ゴーシャカ（妙音）は、特徴の違いとする。この人は［次のように］言ったと伝説される。存在要素は、［過去・現在・未来の］時間にあるとき、過去の［存在要素］は過去の特徴と結びつくが、未来・現在の特徴と離れるわけではない。［同様に、］未来の［存在要素］は未来の特徴と結びつくが、過去・現在の特徴と離れるわけではない。同様に、現在の［存在要素］も［現在の特徴と結びつくが］過去・未来の［特徴］と離れるわけではない。たとえば、男が一人の女を愛しているとき、他の［女］を愛していないわけではないように［と］。

III－1－3　ヴァスミトラ（世友）説（296, 19-21）

大徳ヴァスミトラ（世友）は、位態の違い［による］とする。この人は［次のように］言った、と伝説される。存在要素は、［過去・現在・未来の］時間にあるとき、それぞれの位態に達して、それぞれ［つまり、未来とか現在とか過去］と呼ばれる。位態の違いによるのであって、実体の違いによるのではない。たとえば、一つの［計算］棒[15]が一の位に置かれると一と呼ばれ、百の位に［置かれると］百と［呼ばれ］、千の位に［置かれると］千と［呼ばれる］ように［と］。

III－1－4　ブッダデーヴァ（覚天）説（297, 1-3）

大徳ブッダデーヴァ（覚天）は、見方の違いとする[16]。この人は［次のように］言った、と伝説される。存在要素は［過去・現在・未来の］時間にあるとき、前後に相対して、それぞれ［つまり、未来とか現在とか過去］と呼ばれる[17]。たとえぱ、一人の女が母とか娘とか言われるように［と］。

---

[15] AKBh 296, 20: vartikā. cf. SA 470, 9: gulikā; TSP 614, 21: mṛdguḍikā; 真諦 258a15: 畫; 玄奘 巻二十の三右: 籌。

[16] “anyathānyathika”は、秋本 1993 以来、「味方の違い［による］とする」と訳す。

[17] SA 470, 14-16:「前即ち過去または現在に相対して未来と呼ばれ、前である過去または後である未来に相対して現在と呼ばれ、後即ち未来または現在に相対し

以上の四者が説一切有部［の古師］である。

III－2　四異説中の第三が有部の正統説

III－2－1　第一説批判（297, 4）

しかし、これらのうちの第一の［ダルマトラータ］は、転変（parināma）を説くものであるから、サーンキヤ派の中に含まれるべきである。

III－2－2　第二説批判（297, 4-6）

第二の［ゴーシャカ］には、時間の混乱があることになる。すべての［存在要素］が、［過去・現在・未来の］すべての特徴[18]と結びつくから。また、男の、ある［一人の］女に対する愛が現に起こっているとき、別の女に対しては［愛する可能性を］ただ備えている（samanvāgama）[19]だけであるから、どうして［比喩と主張との間に］同一性があろうか[20]。

III－2－3　第四説批判（297, 6-8）

て過去と呼ばれる」。なお、AKBh 297, 2 の ”avasthāntarato （na*） dravyāntarataḥ” の句は、P 281b3-5 及び真諦 258a17-24、玄奘 巻二十の三右-四左に相当句がないことからも削除する。 * ’na’は写本にないがプラダンは挿入するとする（297, n.2）。但し、婆沙 396b4 に「体雖無別由待有異」とあり、また、Frauwallner（1973: 99, 30-31 & n.10）は、nâvasthāntarato na dravyāntarataḥ とする。cf. SA 470, 19: pūrvāparā-pekṣayā na dravyāntarataḥ.

[18] AKBh 297, 5: sarvakṣaṇayogāt の kṣaṇa を lakṣaṇa と訂正。cf. P 281b5-6: tham cad la mtshan nyid tham cad dang ldan pa’i phyir |; 真諦 258a22: 一切世与一切相相応故; 玄奘 巻二十の四左: 三世皆有三世相故。

[19] cf. SA 470, 2-3: śeṣāsu strīṣu rāgaprāptir evâsti na samudācāra iti.

[20] ヤショーミトラは SA 470, 28-30 で「比喩の場合と同様に、 dharma に一つの lakṣaṇa だけがあって他の二つの lakṣaṇa はないとは言えない」という意味の註釈を加えている。 cf. TSP 615, 15: …na sāmyaṃ dṛṣṭāntasya dārṣṭāntikena.

第四［のブッダデーヴァ］には、同一の時間に［過去・現在・未来の］三時があることになる。［即ち］過去時の中の前後の瞬間が過去・未来であって、真中の瞬間が現在となる。未来時においても同様である。

III－2－4　第三説が正統説（297, 8-10）

従って、このすべて［の論者］のうちで、

第三の［ヴァスミトラ］がすぐれている。｜$26c_1$｜

この、位態の違いとする［論者］である。

III－2－5　三世は作用により区別される（297, 10-13）

その［論者］に関しては、［次のように］伝説される。

三時は作用（kāritra）によって確立される。｜$26c_2d$｜

かの存在要素が［まだ］作用しないとき、未来である。［作用］するとき、現在である。［作用］して消滅したとき、過去である[21]。以上のことはすべてよく知られている。

IV　作用説批判

IV－1　その一（297, 13-17）

しかし、次のことが説明されるべきである。もし過去のものも未来のものも実在するなら、なぜ過去のものまたは未来のものと言われるのか。

〈有部〉「三時は作用によって確立される」と言ったではないか。

〈反論〉もしそうなら、［視覚］機能をしていない（tatsabhāga 彼同分）眼にどんな作用があるのか[22]。

---

[21] cf. 婆沙 393c13-16; 396b5 - 8; TSP 616, 24-617, 8; SA 470, 3-5. なお、Frauwallner（1973: 102, 18-106, 13）参照は、位態説と作用説とはもともと同名異人の Vasumitra によって唱えられたとする。

〈有部〉結果を与えたり取ったりする［作用］がある。

〈反論〉では、［同類の結果を生じさせる］過去の同類因等も結果を与えるから、［過去のものも］作用する、［即ち現在である］という過失に陥る[23]。あるいは、［過去のものも結果を与えるという］半分の作用をする［即ち半分現在であるという過失に陥る[24]］。このように［過去のものにも現在の］特徴［があるという］混乱が［起こる］。

IV－2　その二（297, 17-20）

そして、次のことも言わねばならない｜［即ち］そ［れ自身］の本体をもって存在する存在要素が、常に作用することに対して

どんな妨げがあるのか。｜27a1｜

［即ち］それによってあるときは作用し、あるときは作用しないような［どんな妨げがあるのか、］ということである。諸原因（pratyaya）が完全にそろわないこと［が妨げである］、と言うなら、それはおかしい。［原因も］常に存在することが認められているのであるから。

IV－3　その三（297, 20－298, 3）

そして、その作用［自体］が過去とか未来とか現在と言われる[25]ような、

そんな［作用］はどのようにしてあるのか。｜27a2｜

---

[22] cf. SA 417, 7-11; TSP 617, 8-13. 正理 631cl-l4 では、視覚機能（darśana）を作用には含めない. cf. 婆沙 393c26-394a15. なお、彼同分（tatsabhāga）については、AKBh 28, 1-6; 28, 20-22 ad AK-I39cd 参照。

[23] cf. SA 471, 11-20; TSP 617, 14-18. 正理 631cl-l4 では、作用（kāritra）を「引果の功能」とするから、取果・与果（phaladānaparigraha）のうちの取果のみが作用である。cf. TSP 617, 19-23. 取果・与果の時間については、AKBh 96, 17 ad AK II 59c; 97, 9 ad AK II 59d 参照。cf. SA 471, 17.

[24] cf. SA 471, 20-27; TSP 617, 8-9.

[25] SA 472, 3: siddhānta uparatakāritram atītam ity evamādivacanāt. また、SA 470, 3-5 及び AKBh 297, 12-13 参照。

作用にもまた別な作用があるのか[26]。また、もし作用は過去でも未来でも現在でもないなら、因果的存在でない（asaṃskṛta 無為）から、［作用は］常にあることになってしまう。従って、［まだ］作用しないとき、存在要素は未来である、［など］と言うべきではない。

IV－4　作用と存在要素とが別ものでない場合

IV－4－1　三世は不成立（298, 4-10）

〈有部〉もし作用が存在要素とは別のものなら、そのような誤りがあろう。しかし、それ（作用）は、

［存在要素と］別なものではない[27]。|27a3|

従って、そのような誤りはない。

〈反論〉それでは、それ（存在要素）は、

［過去・現在・未来の］時間と結びつかない。|27b1|

もし作用は存在要素に他ならないなら、その存在要素がそれ自身の本体をもって存在しながら、あるときは過去と言われ、あるときは未来と言われるのはどうしてか。従って、三時の確立はできない。

〈有部〉[28]［まだ］生じていない存在要素が未来であり、生じて［まだ］消滅していないのが現在であり、消滅したのが過去であるから、［三時の確立が］どうしてできないのか。

IV－4－2　「三世実有かつ無常」は不合理（298, 10-22）

---

[26] cf. TSP 619, 23-620, 10.

[27] cf. TSP 617, 24-619, 18; TS1793-1800etc.

[28] 宝疏・国訳一切は経量部の議論ととるが、光記・Poussin1971 は有部の議論とする。 cf. D 241a1: chos gang ma skyes pa de ni ma ‘ongs pa yin no || gang skyes la ma shig pa de ni da ltar byung ba yin no || gang shig pa de ni ‘das pa yin* no shes bya ba ‘di la mi ‘grub pa ci shig yod. *ma yin (P 282al-2).

今や、この［今あなたが言った］　ことが説明されるべきである。［即ち］もし現在が実在するごとくに過去・未来のものも実在するなら、それに［即ち］

そのように［実］在する［存在要素］に、［まだ］生じていないとか［すでに］消滅したということがどうしてあるのか。　|　27b2c |

［即ち］それ自身の本体をもって存在する存在要素に、どうして［まだ］生じていないとか［すでに］消滅したということが成り立つのか。これ（存在要素）に、それがないから　［まだ］生じていないと言われるような何が以前にはなかったというのか。また、それがないから滅したと言われるような何が後になくなるというのか。従って、「前に無くて今存在し、存在し終わってもう存在しない」ということが認められないなら、三時はどうしても成り立たない。

「因果的存在の特徴と結びつくから、恒常であるという過失に陥ることはない」と言っても、それはことばだけで（実質か伴わない）。生滅と結びつかないから。そして、「存在要素は確かに常に存在し、かつ恒常でない」という［前後相矛盾する］このような論法はかつてないものである。［ある人が次のように］も言った。「本体は常に存在し、かつ様態は恒常とは認められない。しかも、様態は本体とは別のものでない、［とは］明らかに自在天のなせる業である。」[29]

V　二教証・二理証批判

V－1－1　第一教証批判その一（299, 1-8）

しかし、［有部が］「［経典に］説かれているから」と言ったが、我々も「過去・未来はある」と言う。ただし、以前に存在したものが過去であ

[29] cf. TS1801: kāritraṃ sarvadā nâsti sadā dharmas tu varṇyate | dharmān anyac ca kāritraṃ vyaktaṃ devaviceṣṭitam ||. 婆沙 394c5-8: 問作用与体為一為異、答不可定説為一為異、如有漏法一一体上有無常等衆多義相、不可定説為一為異。

り、原因があれば生じるであろうものが未来である。そのようにして［過去・未来は］あるとは言うが、実［在］すると言うのではない。

〈有部〉しかし、それ（過去・末末）が現在のごとくに存在する、と誰が言ったか。

〈反論〉そうでないなら、どのようにして存在するのか。

〈有部〉過去・未来の本体をもって［存在する］。

〈反論〉再び次のことがあなたに提示される。［即ち］もし常に存在するなら、どうしてそれが過去とか未来とか言われるのか。

従って。以前に存在した原因には「かつてあった」ということ、これから存在するであろう結果には「これからあるであろう」ということを教えようとして、因果［があるのにないと］する見解を否定するために、世尊によって「過去はある。未来はある。」と説かれたのである、「ある（asti）」ということばは不変化詞（nipāta）[30]であるから[31]。たとえば、「灯火の以前にはないことが『ある』、後にはないことが『ある』」と言う人があり、また、「その灯は消えて『ある』が、私によって消されたのではない」と言う人があるように、そのように「過去のものはある（過ぎ去って『ある』）、未来のものはある（まだ来ずに『ある』と言われたのである。なぜなら、さもなくば過去・未来のものの存在そのものが成り立たなくなるからである。

V－1－2　第一教証批判その二（299, 8-11）

---

[30] nipāta の意味が「不変化詞」であるとの指摘を卒論諮問（1975 年 2 月）の際に既に服部正明教授（当時）から受けていたにもかかわらず、『南都仏教』提出原稿では「変則型」にしたままであった。当時、抜き刷りを送る際には訂正表を添付し、nipāta については「不変化詞」と訂正していたことをここに記しておく。因みに、秋本勝 1991 で既に「不変化詞」と訳出して改めている。

[31] SA 473, 5-7: āsīd atītam bhaviṣyaty anāgatam iti vaktavye 'stîti vacanam. astiśabdasya nipātatvāt. trikālaviṣayo hi nipātaḥ. āsīdarthe bhaviṣyadarthe 'pi vartate.

（有部）では、ラグダシキーヤカ派（杖髻外道）の遊行者たち［の説］に関して、世尊によって「行為は過ぎ去り、尽き、消滅し、壊れ、変化しても存在する。」[32]と説かれた。その［遊行者たち］はその行為がかつてあったということを認めなかったのか、［否、認めたのである］[33]。

〈反論〉しかし、その［経典］では、それ（前にあった行為）によって心の流れ（santati 相続）の中に置かれた、結果を与える効力（samarthya）のことを意味して［世尊はそう］説かれたのである。なぜなら、さもなければ［あなたが言うような、］自らの本体をもって現に存在する過去のものなど成り立つはずはないからである。

V－1－3　第一教証批判その三（299, 12-16）

そして、次の、勝義空性経に世尊によって説かれたことは、そのよう［に未来も過去も実在しないということ］[34]なのである。「眼が生じるとき、［眼は］どこからもやってこないし、消滅するとき、どこにも集まらない。というわけで、比丘らよ、眼は前に無くて今存在し、存在し終わって元［の無］にもどる」[35]と。もし未来の眼が存在するなら、「前に無くて今存在する」[36]とは言われなかったであろう。

---

[32] 「過去の行為の結果がある」という経も有部の教証の一つと考えられるが、ここでは、「第一教証その二」としておく。しかし、趣旨は第二理証と同じである。本庄 2014: 673-676 [5018] 参照。

[33] 有部の主張は,「ラグダシキーヤカ派も行為がかつてあったことは認めるが、その本体の存在まで認めなかったので、世尊はわざわざ過去の行為の実在を説かれたのである」ということである。 SA 473, 20: etad uklaṃ bhavati. icchanti sma te tasya karmaṇo bhūtapūrvatvaṃ. kiṃ tu na drayya iti. tasmin karmaṇi te vipratipannāḥ. nâsti tat karmābhyatītam iti. yato bhagavatā yatra te vipratipannāḥ svabhāve tat karmābhyatītam astîti vistareṇa. tasmād asti svabhāvenâtītam iti vistaraḥ.

[34] SA 474, 1-2: itthaṃś câitad evam iti. yathânāgataṃ dravyato nâsty atītaṃ cêti.

[35] この「前に無くて今存在し、存在し終わって消滅する」（本無今有）という句は有部批判の中心となっており、世親以後の刹那滅論証にもつながると考えられる。cf. TSP 631, 15-24 ad TS1850-1851 等. 本庄 2014: 676-677 [5019] 参照。

[36] AKBh 299, 14: bhūtvā na bhavati を abhūtvā bhavati と訂正。cf. D 241b5, P 283a2: gal te ma 'ongs pa'i mig cig yod par gyur na ma byung ba las 'byung ngo

「現在時において、［眼は］前に無くて今存在する［ということである］」と［反］論するなら、それはちがう。［現在］時と、［眼という］存在とは別のものでないから[37]。また、もし自らの本体［である眼］について、［眼は］前に無くて今存在する［と言う］なら、未来の眼は存在しないということが成立する[38]。

V－2　第二教証批判（299, 16-18）

「二つに依拠して認識は生じるから」と言われたことも、今ここで検討されるべきである[39]。意（manas）と観念（dharma）とに依拠して[40]、意識（manovijñāna）は生じるが、意は[41]それ（意識）を生じさせる原因（pratyaya）であるように、観念も［意識を生じさせる原因であるの］か、それとも観念は対象であるだけなのか。

V－2－1　第二教証批判その一（299, 18-20）

まず、もし観念が［意識を］生じさせる原因であるなら、未来にあって千劫の後に生じてくるか、あるいは［生じ］ないかもしれない［観念］がどうして今認識を生じさせるのか。また、涅槃はあらゆる生起の消滅であるから[42]、［認識を］生じさせる［原因］ではない［ことになるか、実

---

shes gsung par mi 'gyur ro. 真諦 258c29-259a1: 若未来眼根是有則無此説、 謂未有有等。玄奘 巻二十の六右: 未来眼根若実有者、経不応説本無等言。

[37] cf. SA 474, 2-8.

[38] cf. TSP 632, 9-11.

[39] cf. TSP 630, 16-18.

[40] AKBh 299, 17: dharmaś を dharmaṃś と訂正。cf. P 283a4, D241b7: yid dang chos rnams la brten nas⋯.

[41] AKBh 299, 17-18: mano-janakaḥ を mano janakaḥ と訂正。P 283a4, D241b7 : ji ltar yid skyed par byed pa'i rkyen yin pa de (P omits de) ltar... 真諦 267a5-6: 依意根縁法塵是所生意識、為如意根於此識作生縁法塵亦爾、為但作所縁境。玄奘 巻二十の六右: 意法為縁生意識者、為法如意作能生縁、為法但能作所縁境。

[42] cf. SA 474, 14-15.

際には涅槃についての認識は生じる。従って、観念は意識を生じさせる原因ではない］。

V－2－2　第二教証批判その二（299，20-25）

また、もし観念が対象であるだけなら、我々にしても「過去・未来のものも対象である」と言う。

〈有部〉もし［過去・未来のものが実有で］ないなら、［過去・未来のものは］どのようにして対象であるのか。

《反論》これに対し今や我々は言おう。「その［過去・未来のもの］が対象であるとき、そのあるがままに［対象］である[43]。それはどのようにして対象であるか［と言えば］、「あった」、「あるだろう」と［いうようにであると答えよう］。なぜなら、過去の物質的存在や感受を思い出すとき、誰も「今ある」とは考えないのであって、「あった」と［考えるのである］から、あたかも現在の物質的存在が経験されるごとくに、その過去の［物質的存在］が思い出されるのである。そして、未来のものが現在のものとなるであろう、というように認識（buddhi）[44]によってとらえられる。もしその［未来のもの］が全く［現在のもの］のようにあるなら、現在であるということとなる。また、もし［現在のもののようで］ないなら、［実］在しないものも対象となるということが成立する。

V－2－3　第二教証批判その三（299, 25－300, 6）

それ（過去・未来のもの）は、それ（現在のもの）が散乱しているのである、と言うならば、そうではない。散乱したものをとらえることは

---

[43] AKBh 299, 21: yadā を yathā と訂正。P 283a8, D242a3: ji ltar na dmigs pa yin pa de ltar... 真諦 259a11: 如成境界如此有。玄奘 巻二十の六右-七左: 彼有如成所縁。

[44] AKBh 299, 24: チベット訳と真諦訳は buddhyā を「諸仏の智」とする。P 283b2, D242a4: sangs rgyas rnams kyis mkhyen to｜ 真諦 259, 15: 諸仏如来見彼亦爾。

ないから。もしそれぞれの物質的存在は、［過去・未来では］ただ原子に分解しているだけなら、原子は恒常であるということになり、また原子の集積と分解だけがあることになる。しかし［そうなると］「何も生起せず消滅もしない」というアージーヴィカ（邪命外道）の説に頼っていることになり、「眼は、生じるときどこからも生じない」[45]云々という［前述の］経典が無視されていることになる。

［また］原子の集まりでない感受などに、どうして散乱性があろうか。［過去のものの場合］それら［感受など］も、［現在］生じているものがあたかも経験されるように、思い出されるのである。もし　［過去のものが思い出されるとき］それら［感受など］は、全く［現と同じ］ままで存在するなら、恒常であるということになる。また、もしそうでないなら、［実］在しないものも対家となる、ということが成立する。

V－2－4　第二教証批判その四（300, 6-12）

〈有部〉もし［実］在しないものも対象となるなら、第十三処も［対象と］なってしまう。

〈反論〉では、「第十三処はない」というこの認識の対象は何か。

〈有部〉［第十三処という］この名弥こそが対象である[46]。

〈反論〉それでは、「名称は存在しない」と理解されることになろう。また、「音声は以前にはない」ということを対象とする人にとって、対象は何か、

〈有郎〉音声こそが［対象である］。

〈反論〉それでは、音声が［発せられ］ないことを望む人に、音声は［ないのに］発せられることになろう。

「［音声は以前にはないというとき］未来の位置にある［音声が対象である］。」と言うなら、［あなた方は、未来のものが存在すると言う

---

[45] 本節 V-1-3 参照。

[46] SA 475, 15-16: etad eva nāmêti Vaibhāṣikāḥ. yad etan nāma trayodaśam āyatanam iti tad ālaṃbanam.

のだから[47]、その］存在する［音声］に対して、「ない」という認識は、どうしてあるのか。

「現在の［音声］はない」というなら、それはおかしい。［現にあるという点で、現在とは］同一であるから[48]。あるいはまた、その［未来の後、現在の位置に特殊性が生じるとき[49]、［その特殊性に対して、「現在はない」という知識が生じるなら、］その［特殊性］は、「［以前には］存在しないで［後に］存在する」ということが成立する。従って、認識の対象は、存在するものと存在しないものとの二つである。

V－2－5　第二教証批判その五（300, 12-18）

〈有部〉では、［釈迦牟尼］菩薩が「この世にないものを私は、知ったり見たりするようなことはありえない。」[50]と言われた［のであるから、存在しないものを対象とする認識はない］。

〈反論〉「他の人々は、増上慢をもっていて、存在しない光明（avabhāsa）[51]さえも存在する、と見る。しかし、私は、存在するものだけを存在すると見る」ということが、その［経典］における趣旨である。もしそうでなくてすべての認識が、存在するものを対象とするなら、かの［菩薩］にどうして［「世間にないもの」云々という］思案があろうか[52]。あるいはまた、［菩薩とそうでない者たちとに］どんな違いがあろうか[53]。そして、次のように別の［経典］に世尊によって説かれたことは、そのよ

---

[47] SA 475, 25: vidyāne tasminñ śabde…. 玄奘 巻二十の七右: 未来実有如何謂無。

[48] SA 475, 27-28: na. ekatvāt. yad eva tad anāgataṃs tad eva vartamānaṃ bhavati. na tasmād anyad iti.

[49] AKBh 300, 11: yāvatā を yo vā と訂正。P 284a2, D242b3: yang na de'i bye brag gang yin pa de…. SA 475, 29: yo vā tasya viśeṣaḥ.

[50] これも教証の一つと考えられるが、「第二教証その二」としておく。本庄 2014: 677-679 [5020] 参照。

[51] 本庄 2014: 677-679 [5020] 参照。

[52] cf. SA 476, 7-10.

[53] Yaśomitra は、SA 476, 10-12 で、「菩薩とそうでない者との違いを、その識の対象が存在するものと存在しないものであるか、存在するものだけであるかに依る」とする。

う［に認識は存在するものと存在しないものを対象とするということ］[54]なのである。［即ち］「私の声聞弟子たる比丘は来るがよい[55]……かの［声聞弟子］は、夜明けに[56]私によって教えられたなら、夕べにすぐれたものとなるであろう。夕べに教えられたなら、夜明け[52]にすぐれたものとなるであろう。あるものをあると知り、ないものをないと［知り］、普通の（その上がまだある）ものを普通と知り、最高のものを最高のものと［知る］であろう」[57]と。

V－3　第一理証批判（300, 18-19）

従って、「認識は［実］在するものを対象とするから[58]」ということも理由にならない[59]。

V－4　第二理証批判（300, 19）

「［行為の］結果［がある］から」[60]と言われたことも［理由にならない］。

V－4－1　第二理証批判その一（300, 19-21）

なぜなら、経量部は、過去の行為から結果が生じる、とは言わないからである。そうではなくて、それ［行為］を伴う特殊な心の流れから［結

---

[54] SA 476, 12-13: itthaṃś câitad evaṃ sadasadālaṃbanā buddhaya iti.

[55] AKBh 300, 16: etad bhikṣur を etu bhikṣur と訂正。 P 284a5, D242b6: nga'i nyan thos kyi dge slong tshur shog bya ba nas de ngas de ngas nang gtams na nub kyhad par du 'gro |. 真諦 159b11-13: 善来比丘為我弟子、若我朝教汝…朝至証勝得。本庄 2014: 679-683 [5021] 参照。

[56] AKBh 300, 17: kalpaṃ…kalpaṃ を kālyaṃ…kālyaṃ と訂正。 なお、プラダンは写本では kālpa であるとする（AKBh 300, n.12）。

[57] 本庄 2014b: 679-683[5021] 参照。

[58] cf. AK V 25b$_2$; TSP 630, 19-631, 12 ad TS1847-1848.

[59] cf. SA 476, 15-16: tasmād ayam apy ahetur iti. yad etad bodhisattvenôktam iti.

[60] cf. AK V 25b$_3$; TSP 631, 13-14 ad TS1849.

果が生じるのである］。そのことは、有我論否定［の章「破我品」］で我々は説明しよう。

V－4－2　第二理証批判その二（300, 21 - 301，6）

しかし、ある人に過去と未来が実在するとき、その人にとって結果は恒常であるから、その場合行為にどんな能力があるというのか[61]。

〈有部〉［結果の］生起に関する能力がある。

〈反論〉では、〈生起〉（utpāda）は前に無くて今存在する、ということが成立することになる[62]。また、もしすべてが存在するなら、何の、何に対する能力があるのか[63]。次のようなヴァールシャガニヤ[64]（雨衆外道）の説が［あなたによって］示されている［にすぎない。即ち］「存在するものは必ず存在する。存在しないものは決して存在しない。存在しないものが生起することはない。存在するものが消滅することはない」と。

〈有部〉では、現在のものにする能力がある［と答えよう］。

〈反論〉「現在のものにする」とはどういうことか。「別な場所に引くことである」と言うなら、［結果は］恒常であることになる[65]。また、非物質的な［感受など］に、どうして［別な場所に引くことかあろうか[66]。そして、引くことは、前に無くて今存在するものである[67]。「［原因が結果の］本体を区別する」[68]と言うなら、前に無くて今存在することが成立する。従って、以上のように［過去・未来のものは実在すると説く］説一切有部は、その教説において正しくない。

VI　結び（301, 6-11）

---

[61] cf. TSP 629, 8-10.
[62] cf. TSP 629, 10-11.
[63] cf. TSP 629, 11 - 12.
[64] サーンキヤ派の古師。
[65] cf. SA 476, 25-27.
[66] cf. SA 476, 27-29.
[67] cf. TSP 629, 12-15.
[68] SA 476, 30-32.

しかし、経典に説かれているように「すべてがある」と言えば、正しい。経典にはどのように「すべてがある」と説かれているか。「バラモンよ、すべてがあるとは、十二処すべてが、である」[69]と［説かれているのである］。あるいはまた、三時も説かれたが、その［三時］がある通りに説かれたのである[70]。

〈有部〉では、過去・未来のものがないとき、どうしてそれ（過去・未来の事物）に関して、それ（過去・未来の煩悩）と結びつくのか[71]。

〈反論〉それ（過去の煩悩）から生じ、それ（未来の煩悩）の原因である随眠（anuśaya＝bīja）があるから、［過去・未来の］煩悩と［結びつくのであり］、それ（過去・未来の事物）を対象とする煩悩の随眠があるから、［過去・未来の］事物に結びつくのである[72]。しかし、ヴァイバーシカ派は、「過去・未来のものは必ず存在する」と言う。確かめることができないときには、自ら［の見解］を愛する者[73]は、次のように教えることとなろう。

実に、ものの本来のあり方（dharmatā 法性）**は深遠である。**‖27d‖

---

[69] 本庄 2014: 683-685 [5022] 参照。

[70] SA 477, 2-4.

[71] cf. AKBh 295, 3-4.

[72] SA 477, 4-11. 有部は、過去・未来の実有に固執し因果関係をすべて過・未の実有によって説明する故に、潜在・顕在を持ち出す必然性がないのに対して、経量部は、 過去の実有を否定する故に、anuśaya をその本来的な意味即ち bīja（種子）の意味に用いる。 この点が有郎と経量部を分かつ一つの大きな特徴と言えよう。cf. Jaini1959b. なお、AKBh 301, 9-10: tadālaṃbane kleśānuśayabhāvād を tadālaṃbanakleśānuśayabhāvād と訂正。cf. SA 477, 10: tadālaṃbanaḥ kleśaḥ tasyânu-śayaḥ tasya bhāvā...; P 284b8, D243a7: de la dmigs pa'i nyon mongs pa'i phra rgyas yod pas...; 真諦 259c6-7: 縁彼為境惑随眠眼生故。

[73] AKBh 301, 10-11: yatra netum śakyate tatrâtmakātmanâivaṃ を yan na netuṃ śakyate tatrâtmakāmenâivaṃ と訂正。cf. D 243a7, P 285a1: gang shig drang bar mi nus pa de la ni 'di ltar. 但し、チベット語訳は、ātmakāmenâiva の句を欠く。真諦 259c8-10: （若義証此聖言可得了達、自愛人於中必応信受.） 若不爾、自愛人於中…。玄奘 巻二十の九左: 所有於中不能通釈、諸自愛者…。

［深遠とは］必ずしも論理によって証明されない[74]［ということである］。

［同義であっても、違う］説き方がある[75]。［即ち］生じるものが消滅する。［たとえば、］もの（A）が生じ、［その同じ］もの（A）が消滅する［というように］。あるものが生じ、別なものが消滅する、という説き方がある。［たとえば、］未来のものが生じ、現在のものが消滅する。［また、］時間も生じる［と言える］。生じてくるものは、時間に含まれているから。時間からも生じる［と言える］。未来時には多くの瞬間があるから。

［本論に］付随して入った［議論］が終わった。

（AKBh 終）

[74] AKBh 301, 13: tarhy asādhyā を tarkasādhyā と訂正。D243b, P 185a1-2: gdon mi za bar rtog pas sgrub pa ma yin no... 真諦 259, 10 - 11: 非必定由自思量之所能解。玄奘 巻二十の九左: 非尋思境。

[75] cf. 婆沙 394c9-10; c16-17: 問為此法生即此法滅、為法生余法滅耶…; 問諸有為法未来生時、為世体生、為世中生…。

第２節　校訂テキスト　AKBh 295, 2 – 301, 16 ad AK V 25-27.[76]

I（295, 2-5）

kiṃ punar idam atītānāgatam dravyato[77] 'sty atha na | yady asti sarvakālāstitvāt saṃskārāṇāṃ śāśvatatvaṃ prāpnoti | atha nâsti | kathaṃ tatra tena vā saṃyukto bhavati visaṃyukto vā | na saṃskārāṇāṃ śāśvatatvaṃ pratijñāyate Vaibhāṣikaiḥ saṃskṛtalakṣaṇayogāt |

II（295, 5-6）

pratijñāyate tu viśadaṃ

sarvakālāstitā | 25a1 |

II – 1（295, 7-12）

kiṃ kāraṇam |

uktatvāt | 25a2 |

uktaṃ hi bhagavatā "atītaṃ ced bhikṣavo rūpaṃ nâbhaviṣyan na śrutavān āryaśrāvako 'tīte rūpe 'napekṣo 'bhaviṣyat | yasmāt tarhy asty atītaṃ rūpaṃ tasmāc chrutavān āryaśrāvako 'tīte rūpe 'napekṣo bhavati | anāgataṃ ced rūpaṃ nâbhaviṣyat na śrutavān āryaśrāvako 'nāgataṃ rūpaṃ nâbhyanandiṣyat | yasmāt tarhy asty anāgataṃ rūpam" iti vistaraḥ |

II – 2（295, 13-16）

dvayāt | 25b1 |

"dvayaṃ pratītya vijñānasyôtpāda" ity uktam | dvayaṃ katamat | cakṣū rūpāṇi yāvat mano dharmā iti | asati vā 'tītānāgate tadālambanaṃ vijñānaṃ dvayaṃ pratītya na syāt | evaṃ tāvad āgamato 'sty

---

[76] AKBh 1975: 295, 2-301, 18.

[77] AKBh 295, 2: -nāgatam ucyate を-nāgataṃ dravyato と訂正。 cf. D 239a2: ci 'das pa dang ma 'ongs pa'i dngos po rdzas su yod 'on te med., P 279b5: ...ma 'ongs pa 'di rdzas su yod 'on te med; 真諦 257b29: 過去未来為実有物為仮名有; 玄奘（巻二十の一左）：応弁諸事過去未来、為実有無方可説繫。

II – 3 (295, 16-19)

atītānāgataṃ yuktito 'pi |

sadviṣayāt | 25b2 |

sati viṣaye vijñānaṃ pravartate nâsati | yadi câtītānāgataṃ na syād asad-ālambanaṃ vijñānaṃ syāt | tato vijñānam eva na syād ālambanābhāvāt |

II – 4 (295, 20 - 296, 1)

phalāt / | 25b3 |

yadi câtītaṃ na syāt śubhāśubhasya karmaṇaḥ phalam āyatyāṃ kathaṃ syāt | na hi phalotpattikāle varttamāno vipākahetur astîti | tasmād asty evâtītānāgatam iti Vaibhāṣikāḥ |

II - 5 (296, 1-6)

avaśyaṃ ca kilâitat sarvāstivādena satā 'bhyupagantavyam | yasmāt

tadastivādāt Sarvāstivādā iṣṭāḥ | 25cd1 |

ye he sarvam astîti vadanti atītam anāmataṃ pratyutpannaṃ ca te Sarvāstivādāḥ | ye tu kecid asti yat pratyutpannam adattaphalaṃ câtītaṃ karma kiṃcin nâsti yad dattaphalam atītam anāgataṃ ceti vibhajya vadanti te Vibhajyavādinaḥ |

III- 1 (296, 6-8)

kati câite sarvāstivādā ity āha

caturvidhāḥ || 25d2 ||

te bhāvalakṣaṇāvasthā 'nyathānyathikasaṃjñitāḥ | 26ab |

III – 1 – 1 (296, 9-14)

bhāvānyathiko bhadanta-Dharmatrātaḥ | sa kilâha | dharmasyâdhvasu, pravartamānasya bhāvānyathātvaṃ bhavati na dravyānyathātvam | yathā suvarṇabhājanasya bhittvā 'nyathā kriyamāṇasya saṃsthānānyathātvaṃ

bhavati na varṇānyathātvam | yathā ca kṣīraṃ dadhitvena pariṇamad rasavīryavipākān parityajati na varṇam | evaṃ dharmo 'py anāgatād adhvanaḥ pratyutpannam adhvānam āgacchann anāgatabhāvaṃ jahāti na dravyabhāvam | evaṃ pratyutpannād atītam adhvānaṃ gacchan pratyutpannabhāvaṃ jahāti na dravyabhāvam iti |

III－1－2（296, 15-18）

lakṣāṇānyathiko bhadanta-Ghoṣakaḥ | sa kilâha | dharmo 'dhvasu pravartamāno 'tīto 'tītalakṣaṇayukto 'nāgatapratyutpannābhyāṃ lakṣaṇābhyām aviyuktaḥ | anāgato 'nāgatalakṣaṇayukto 'tītapratyutpannābhyām aviyuktaḥ | evaṃ pratyutpanno 'py atītānāgatābhyām aviyuktaḥ | tad yathā puruṣa ekasyāṃ striyāṃ raktaḥ śeṣāsv avirakta iti |

III－1－3（295, 19-21）

avasthānyathiko bhadanta-Vasumitraḥ | sa kilâha | dharmo 'dhvasu pravartamāno 'vasthām avasthāṃ prāpyânyo'nyo nirdiśyate avasthāntarato na dravyāntarataḥ | yathâikā vartikā ekāṅke nikṣiptā ekam ity ucyate śatāṅke śataṃ sahasrāṅke sahasram iti |

III－1－4（297, 1-3）

［297］anyathānyathiko bhadanta-Buddhadevaḥ | sa kilâha | dharmo 'dhvasu pravartamānaḥ pūrvāparam apekṣyânyo'nya ucyate[78] | yathâikā strī mātā vôcyate duhitā vêti | ity ete catvāraḥ sarvāstivādāḥ |

---

[78] この直後の"avasthāntarato（na*）dravyāntarataḥ"の句は、D 240a4-5, P 281b3-5 及び真諦 258a17-24、玄奘（巻二十の三右-四左）に相当句がないことからも削除する. * "na" は写本にないがプラダンは挿入している（297 n.2）。但し、婆沙 396b4 に「体雖無別由待有異」とあり、また、Frauwallner（1973: 99, 30-31 & n.10）は、nâvasthāntarato na dravyāntarataḥ とする。この句を生かすとすれば、称友註を採ってもよい。cf. SA 470, 19: pūrvāparāpekṣayā na dravyā-ntarataḥ.

III – 2

III – 2 – 1 (297, 4)

eṣāṃ tu prathamaḥ pariṇāmavāditvāt sāṃkhyapakṣe nikṣeptavyaḥ |

III – 2 – 2 (297, 4-6)

dvitīyasyâdhvasaṃkaraḥ prāpnoti | sarvasya sarvalakṣaṇayogāt [79] | puruṣasya tu kasyāṃcit striyāṃ rāgaḥ samudācarati kasyāṃcit kevalaṃ samanvāgama iti kim atra sāmyam |

III – 2 – 3 (297, 6-8)

caturthasyâpy ekasminn evâdhvani trayo 'dhvānaḥ prāpnuvanti | atīte 'dhvani pūrvapaścimau kṣaṇāv atītānāgatau madhyamaḥ kṣaṇaḥ pratyutpanna iti | evam anāgate 'pi |

III – 2 – 4 (297, 8-10)

ata eṣāṃ sarveṣāṃ

tṛtīyaḥ śobhanaḥ | 26c1 |

yo 'yam avasthānyathikaḥ |

III – 2 – 5 (297, 10-13)

tasya kila

adhvānaḥ kāritreṇa vyavasthitāḥ || 26c2d ||

yadā sa dharmaḥ kāritraṃ na karoti tadânāgataḥ | yadā karoti tadā pratyutpannaḥ | yadā krrrtvā niruddhas tadâtīta iti, parigatam etat sarvam |

IV

IV – 1 (297, 13-17)

---

[79] AKBh 297, 5: sarvakṣaṇayogāt の kṣaṇa を lakṣaṇa と訂正。cf. D 240a5-6, P 281a5-6: tham cad la mtshan nyid tham cad dang ldan pa'i phyir |; 真諦 258a22: 一切世与一切相相応故; 玄奘 巻二十の四左: 三世皆有三世相故。

idaṃ tu vaktavyam | yady atītam api dravyato ‘sty anāgatam iti | kasmāt tad atītam ity ucyate ‘nāgatam iti vā | nanu côktam adhvānaḥ kāritreṇa vyavasthitā iti | yady evaṃ pratyutpannasya tatsabhāgasya cakṣuṣaḥ kiṃ kāitram | phaladānapratigrahaṇam | atītānām api tarhi sabhāgatetvādīnāṃ phaladānāt kāritraprasaṅgo 'rdhakāritrasya vêti lakṣaṇasaṃkaraḥ |

IV－2（297, 17-20）

idaṃ ca vaktavyam | tenâivâtmanā sato dharmasya nityaṃ kāritrakaraṇe

kiṃ vighnaṃ | 27a1 |

yena kadācit kāritraṃ karoti kadācin nêti | pratyayānām asāmagryam iti cet | na | nityam astitvābhyupagamāt |

IV－3（297, 20－298, 3）

yac ca tat kāritram aītam anāgataṃ praty-utpannaṃ côcyate

tat kathaṃ | 27a2 |

［298］ kiṃ kāritrasyâpy anyad asti kāritram | atha tan nâivâtītaṃ nâpy anāgataṃ na pratyutpannam asti ca | tenâsaṃskr̥tatvān nityam astîti prāptam | ato na vaktavyaṃ yadā kāritraṃ na karoti dharmas tadânāgata iti |

IV－4

IV－4－1（298, 4-10）

syād eṣa doṣo yadi dharmāt kāritram anyat syāt | tat tu khalu

nânyat | 27a3 |

ato na bhavaty eṣa doṣaḥ | evaṃ tarhi sa eva

adhvāyogaḥ | 27b1 |

yadi dharma eva kāritraṃ kasmāt sa eva dharmas tenâivâtmanā vidyamānaḥ kadācid atīta ity ucyate kadācid anāgata ity adhvanāṃ vyavasthā na sidhyati | kim atra na sidhyati | yo hy ajāto dharmaḥ so 'nāgataḥ | yo jāto bhavati na ca vinaṣṭaḥ sa vartamānaḥ | yo vinaṣṭaḥ so 'tīta iti |

IV – 4 – 2 (298, 10-22)

etad evâtra vaktavyam | yadi yathā vartamānaṃ dravyato 'sti tathâtītam anāgataṃ câsti | tasya

tathā sataḥ | 27b2 |

ajātanaṣṭatā kena | 27c |

tenâiva svabhāvena sato dharmasya katham idaṃ sidhyaty ajāta iti yo vinaṣṭa iti vêti | kim asya pūrvaṃ nâsīd yasyâbhāvād ajāta ity ucyate | kiṃ ca paścān nâsti yasyâbhāvād vinaṣṭa ity ucyate | tasmān na sidhyati sarvathâpy atrâdhvatrayam | yady abhūtvā bhavatîti nêṣyate bhūtvā ca punar na bhavatîti | yad apy uktaṃ "saṃskṛtalakṣaṇayogān na śāśvatatvaprasaṅga" iti | tad idaṃ kevalaṃ vāṅmātram utpādavināśayor ayogāt | nityaṃ ca nāmâsti sa dharmo na ca nitya ity apūrvâiṣā vāco yuktiḥ | āha khalv api

svabhāvaḥ sarvadā câsti bhāvo nityaś ca nêṣyate |
na ca svabhāvād bhāvo 'nyo vyaktam Īśvaraceṣṭitam ||

V

V – 1 – 1 (299, 1-8)

[299] yat tûktam **uktatvād** (25a2) iti | vayam api brūmo 'sty atītānāgatam iti | atītaṃ tu yad bhūtapūrvam | anāgataṃ yat sati hetau bhaviṣyati | evaṃ ca kṛtvā 'stîty ucyate na tu punar dravyataḥ | kaś câivam āha | vartamānavat tad astîti | katham anyathâsti | atītānāgatātmanā | idaṃ punas tavôpasthitam | kathaṃ tad atītam anāgataṃ côcyate yadi nityam astîti | tasmāt bhūtapūrvasya ca hetor bhāvinaś ca phalasya bhūtapūrvatāṃ bhāvitāṃ ca jñāpayituṃ hetuphalāpavādadṛṣṭipratiṣedhārtham uktaṃ Bhagavatā "asty atītam asty anāgatam" iti | astiśabdasya nipātatvāt | yathâsti dīpasya prāgabhāvo 'sti paścādabhāva iti vaktāro bhavanti yathā câsti niruddhaḥ sa dīpo na tu mayā nirodhita iti | evam atītānāgatam apy astîty uktam | anyathā hy atītānāgatabhāva eva na sidhyet |

V－1－2（299, 8-11）

yat tarhi Laguḍaśikhīyakān parivrājakān adhikṛtyôktaṃ Bhagavatā "yat karmâbhyatītaṃ kṣīṇaṃ niruddhaṃ vigataṃ vipariṇataṃ tad astîti | kiṃ te tasya tasya karmaṇo bhūtapūrvatvaṃ nêcchanti sma | tatra punas tadāhitaṃ tasyāṃ saṃtatau phaladānasāmarthyaṃ saṃdhāyôktam | anyathā hi svena bhāvena vidyamānam atītaṃ na sidhyet |

V－1－3（299, 12-16）

itthaṃ câitad evaṃ yat Paramārthaśūnyatāyām uktaṃ Bhagavatā "cakṣur utpadyamānaṃ na kutaścid āgacchati nirudhyamānaṃ na kvacit saṃnicayaṃ gacchati | iti hi bhikṣavaś cakṣur abhūtvā bhavati bhūtvā ca pratigacchatîti yadi cânāgataṃ cakṣuḥ syān nôktaṃ syād abhūtvā bhavatîti[80] | varttamāne 'dhvany abhūtvā bhavatîti cet | na | adhvano bhāvād anarthāntaratvāt | atha svātmany abhūtvā bhavati | siddham idam anāgataṃ cakṣur nâstîti |

V－2（299, 16-18）

yad apy uktaṃ "dvayaṃ pratītya vijñānasyôtpādād" itîdaṃ tāvad iha saṃpradhāryam | yan manaḥ pratītya dharmaṃś[81] côtpadyate manovijñānaṃ kiṃ tasya yathā mano janakaḥ[82] pratyaya evaṃ dharmā āhosvid ālambanamātraṃ dharmā iti |

---

[80] AKBh 299, 14: bhūtvā na bhavati を abhūtvā bhavati と訂正。cf. D 241b5, P 283a2: gal te ma 'ongs pa'i mig cig yod par gyur na ma byung ba las 'byung ngo shes gsung par mi 'gyur ro |. 真諦 258c29-259a1: 若未来眼根是有則無此説、 謂未有有等。玄奘 巻二十の六右: 未来眼根若実有者、経不応説本無等言。

[81] AKBh 299, 17: dharmaś を dharmaṃś と訂正。cf. P 283a4, D241b7: yid dang chos rnams la brten nas...

[82] AKBh 299, 17-18: mano-janakaḥ を mano janakaḥ と訂正。P 283a4, D241b7 : ji ltar yid skyed par byed pa'i rkyen yin pa de (P omits de) ltar... 真諦 267a5-6: 依意根縁法塵是所生意識、為如意根於此識作生縁法塵亦爾、為但作所縁境。玄奘 巻二十の六右: 意法為縁生意識者、為法如意作能生縁、為法但能作所縁境。

V－2－1（299, 18-20）

yadi tāvat janakaḥ pratyayo dharmāḥ kathaṃ yad anāgataṃ kalpasahasreṇa bhaviṣyati vā na vā tad idānīṃ vijñānaṃ janayiṣyati | nirvāṇaṃ ca sarvapravṛttinirodhāj janakaṃ nôpapadyate |

V－2－2（299, 20-25）

athâlambanamātraṃ dharmā bhavanti | atītānāgatam apy ālambanaṃ bhavatîti brūmaḥ | yadi nâsti katham ālambanam | atrêdānīṃ brūmaḥ | yathā[83] tadālambanaṃ tathâsti | kathaṃ tadālambanam abhūd bhaviṣyati cêti | na hi kaścid atītaṃ rūpaṃ vedanāṃ vā smarann astîti paśyati | kiṃ tarhi | abhūd iti | yathā khalv api varttamānaṃ rūpam anubhūtaṃ tathā tad atītaṃ smaryate | yathā cânāgataṃ varttamānaṃ bhaviṣyati tathā buddhyā gṛhyate | yadi ca tat tathâivâsti vartamānaṃ prāpnoti | atha nâsti | asad apy ālambanaṃ bhavatîti siddham |

V－2－3（299, 25 - 300, 6）

tad eva tadvikīrṇam iti cet |［300］na | vikīrṇasyâgrahaṇāt | yadi ca tat tad eva rūpaṃ kevalaṃ paramāṇuśo vibhaktam | evaṃ sati paramāṇavo nityāḥ prāpnuvanti | paramāṇusaṃcayavibhāgamātraṃ câivaṃ sati prāpnoti | na tu kiṃcid utpadyate nâpi nirudhyata ity Ājīvikavāda ālambito bhavati | sūtraṃ câpaviddhaṃ bhavati "cakṣur utpadyamānaṃ na kutaścid āgacchati" iti vistaraḥ | aparamāṇusaṃcitānāṃ vedanādīnāṃ kathaṃ vikīrṇatvam | te 'pi ca yathôtpannānubhūtāḥ smaryante | yadi ca te tathâiva santi nityāḥ prāpnuvanti | atha na santi | asad apy ālambanam iti siddham |

V－2－4（300, 6-12）

---

[83] AKBh 299, 21: yadā を yathā と訂正。P 283a8, D242a3: ji ltar na dmigs pa yin pa de ltar... 真諦 259a11: 如成境界如此有。玄奘 巻二十の六右-七左: 彼有如成所縁。

yady asad apy ālambanaṃ syāt trayodaśam apy āyatanaṃ syāt | atha trayodaśam āyatanaṃ nâstîty asya vijñānasya kim ālambanam | etad eva nāmâlambanam | evaṃ tarhi nāmâiva nâstîti pratīyeta | yaś ca śabdasya prāgabhāvam ālambate kiṃ tasyâlambanam | śabda eva | evaṃ tarhi yaḥ śabdābhāvaṃ prārthayate tasya śabda eva kartavyaḥ syāt | anāgatāvastha iti cet | sati kathaṃ nāstibuddhiḥ | vartamāno nâstîti cet | na | ekatvāt | yo vā[84] tasya viśeṣas tasyâbhūtvābhāvasiddhiḥ | tasmād ubhayaṃ vijñānasyâlambanaṃ bhāvaś câbhāvaś ca |

V－2－5（300, 12-18）

yat tarhi Bodhisattvenôktam "yat uta loke nâsti tad ahaṃ jñāsyāmi vā drakṣyāmi vā nêdaṃ sthānaṃ vidyata" iti | apare ābhimānikā bhavanty asantam apy avabhāsaṃ santaṃ paśyanti | ahaṃ tu santam evâstîti paśyāmîty ayaṃ tatrâbhiprāyaḥ | itarathā hi sarvabuddhīnāṃ sadālambanatve kuto 'sya vimarśaḥ syāt ko vā viśeṣaḥ | itthaṃ câitad evam yad anyatra Bhagavatôktam "etu bhikṣur mama śrāvako yāvat sa mayā kālyam[85] avoditaḥ sāyaṃ viśeṣāya paraiṣyati | sāyam avoditaḥ kālyaṃ[86] viśeṣāya paraiṣyati | sac ca sato jñāsyati asac câsataḥ sottaraṃ ca sottarataḥ anuttaraṃ cânurattarata" iti |

V－3（300, 18-19）

tasmād ayam apy ahetuḥ | sadālambanatvād vijñānasyêti |

V－4（300, 19）

yad apy uktaṃ **phalād** <25b3> iti |

---

84 AKBh 300, 11: yāvatā を yo vā と訂正。P 284a2, D242b3: yang na de'i bye brag gang yin pa de…. SA 475, 29: yo vā tasya viśeṣaḥ.

85 AKBh 300, 17: kalpaṃ を kālyaṃ と訂正。

86 AKBh 300, 17: kalpaṃ を kālyaṃ と訂正。なお、プラダンは写本では kālpa であるとする（AKBh 300, n.12）。

V – 4 – 1 (300, 19-21)

nâiva hi sautrāntikā atītāt karmaṇaḥ phalotpattiṃ varṇayanti | kiṃ tarhi | tatpūrvakāt saṃtānaviśeṣād ity Ātmavādapratiṣedhe saṃpravedayiṣyāmaḥ |

V - 4 – 2 (300, 21 - 301, 6)

yasya tv atītānāgataṃ dravyato 'sti tasya phalaṃ nityam evâstîti kiṃ tatra karmaṇaḥ sāmarthyam | utpādane sāmarthyam | utpādas tarhy abhūtvā bhavatîti siddham | [301] atha sarvam eva câsti | kasyêdānīṃ kva sāmarthyam | Vārṣagaṇyavādaś câivaṃ dyotito bhavati | "yad asty asty eva tat | yan nâsti nâsty eva tat | asato nâsti saṃbhavaḥ | sato nâsti vināśa" iti | vartamānīkaraṇe tarhi sāmarthyam | kim idaṃ varttamānīkaraṇaṃ nāma | deśāntarākarṣaṇam cet | nityaṃ prasaktam | arūpiṇāṃ ca kathaṃ tat | yac ca tad ākarṣaṇaṃ tad abhūtvābhūtam | svabhāvaviśeṣaṇaṃ cet siddham abhūtvābhavanam | tasmān nâivaṃ sarvāstivādaḥ śāsane sādhur bhavati | yad atītānāgataṃ dravyato 'stîti vadati |

VI (301, 6-16)

evaṃ tu sādhur bhavati | yathā sūtre sarvam astîty uktaṃ tathā vadati | kathaṃ ca sūtre sarvam astîty uktam | "sarvam astîti brāhmaṇa yāvad eva dvādaśāyatanāni" iti | adhvatrayaṃ vā | yathā tu tad asti tathôktaṃ athâsaty atītātānāgate kathaṃ tena tasmin vā saṃyukto bhavati | tajjataddhetvanuśayabhāvāt kleśena tadālambanakleśānuśayabhāvād[87] vastuni saṃyukto bhavati | asty eva tv atītānāgatam iti Vaibhāṣikāḥ | yan na netum śakyate tatrâtmakāmenâivaṃ[88] veditavyam |

---

[87] AKBh 301, 9-10: tadālaṃbane kleśānuśayabhāvād を tadālaṃbanakleśānuśayabhāvād と訂正。cf. SA 477, 10: tadālaṃbanaḥ kleśaḥ tasyânu-śayaḥ tasya bhāvā...; P 284b8, D243a7: de la dmigs pa'i nyon mongs pa'i phra rgyas yod pas...; 真諦 259c6-7: 縁彼為境惑随眠眼生故。

[88] AKBh 301, 10-11: yatra netum śakyate tatrâtmakātmanâivaṃ を yan na netuṃ śakyate tatrâtmakāmenâivaṃ と訂正。cf. P 285a1: gang shig drang bar mi* nus pa de la ni 'di ltar. *ni (D 243a7). 但し、チベット語訳は、ātmakāmenâiva の句を欠

gambhīrā khalu dharmatā | 27d |

nâvaśyaṃ tarkasādhyā[89] bhavatîti | asti paryāyo yad utpadyate tan nirudhyate | rūpam utpadyate rūpaṃ nirudhyate | asti paryāyo 'nyad utpadyate 'nyan nirudhyate | anāgatam utpadyate varttamānaṃ nirudhyate | adhvâpy utpadyate | utpadyamānasyâdhvasaṃgṛhītatvāt | adhvano 'py utpadyate | anekakṣaṇikatvād anāgatasyâdhvanaḥ | gatam etat yat prasaṅgenâgatam |

（AKBh 終）

く。真諦 259c8-10:（若義証此聖言可得了達、自愛人於中必応信受.）若不爾、自愛人於中…。玄奘 巻二十の九左: 所有於中不能通釈、諸自愛者…。

[89] AKBh 301, 13: tarhy asādhyā を tarkasādhyā と訂正。P 185a1-2, D243b: gdon mi za bar rtog pas sgrub pa ma yin no... 真諦 259, 10 - 11: 非必定由自思量之所能解。玄奘 巻二十の九左: 非尋思境。

第２章　SA『倶舎論明義釈』（称友）　468, 24－477, 26

第１節　和訳　（構成は本書第１章第１節（２）参照）

I　序　（468, 24-28）

どうしてそれに関して、それと結びつくのかとは、どうして過去・未来のものに関して、**それと**［即ち］過去・未来の随眠と**結びつくのか**、ということである。**または、離れるのか**。あるいは［換言するなら］、どうして［随眠が］まだ断ち切られていないとか既に断ち切られたという状態であると決められようか。**因果的存在の特徴と結びつくから**とは、**因果的存在の**諸特徴［即ち］「生」等（＝生住異滅）が、因果的諸存在が時間を移行するために生じるから、ということである。従って、それらが**恒常であるとは認められないのである**。

II　三世実有説

II－1　第一教証　（468, 28 - 469, 10）

「**比丘らよ、もし物質が**」［云々］というこの経典[1]の原文は、最初から［引用すると以下のとおりである］。「過去・未来の物質は無常である。現在の［物質］はさらに言うまでもない。教えを聞いた聖弟子は、そのように見て、過去の物質に無関心となり、未来の物質を喜ばなくなり、現在の物質を嫌悪し［それに対する］貪欲を捨てそれを消滅するために修行する。**比丘らよ、もし過去の物質がなかったなら、教えを聞いた聖弟子は過去の物質に無関心となることはないであろう。過去の物質があるから、教えを聞いた聖弟子は過去の物質に無関心となる。もし未来の物質がなかったなら、教えを聞いた聖弟子は未来の物質を喜ばなくなることはな**

[1] 本庄良文「三世実有説と有部阿含」（『佛教研究』12, 1982 所収）参照。以下、引用経典に関しては、本庄良文 2014 参照。

いであろう。未来の物質があるから、教えを聞いた聖弟子は未来の物質を喜ばなくなる。比丘らよ、もし現在の物質がなかったなら」云々と。**教えを聞いた聖弟子は過去の物質に無関心となることはないであろう**とは、対象がないから、［それに対する］貪欲を捨てるときに、過去の対象に関心をもった聖弟子の心が無関心になることはないであろう、という意味である。過去の物質に関心があるとき、それに対する執着心が起こるのである［から、対象がなければそれらを捨てることもない］。**喜ぶ**とは、「楽しむ」である。「比丘らよ、もし現在の物質がなかったなら、教えを聞いた聖弟子は現在の物質を嫌悪し［それに対する］貪欲を捨てそれを消滅するために修行することがないであろう」というのは、［教証として］語られているものではない。［それは立論者と対論者との］両者に認められているからである。

II－2　第二教証　（469, 11‐14）

二つから（$25b_1$）と。「先［の教証］では直接明確に説かれているということが示されたが、今度は意味の上からであって直接明確に［説かれているのでは］ない」という違いがある。［過去・未来のものがないなら］**二つに依拠して意識は生じるのではないことになる**[2]。「過去・未来のものを対象とする［意識］」という限定がつく。

II－3　第一理証　（469, 14-16）

従って、対象がないから認識そのものもないことになるというのは、認識されるものがあるとき［のみ］認識はあるということを前提としている。これについての論証：「〈主張〉意識は存在するものを対象とする。〈理由〉認識を本性とするから。〈喩例〉眼識のように。」[3]

---

[2] 語順が AKBh と少し違っているが、引用文と見なす。以下、引用と見なす語句はできるだけ限定した。

[3] 梶山 1983: 26-27.

II – 4　**第二理証**　（469, 17‐19）

結果から（$25b_3$）とは、［論証式にして言うなら］「［主張］過去の善悪の行為は、その本性が現に存在するものである。［理由］異熟のときに、結果が生じるから。［喩例］現在の存在要素のように。」[4]

II – 5　**説一切有部と呼ばれる理由**（称友釈なし）

III – 1　**四大論師の異説**

III – 1 – 1　**第一説［ダルマトラータ（法救）説］**　（469, 20‐25）

様態の違いはあるとは、過去・未来・現在の**様態**に**違いがある**という意味である。**実体の違いはない**とは、色形などの本性に**違いはない**という意味である。なぜなら、未来の［存在要素］は現在時に到達しながら、**未来の様態を捨て**現在の様態を得る。現在の［存在要素］もまた過去［時に到達しながら、現在の様態を捨て過去の様態を得る］。金と乳との二つの喩例はそれぞれ形状と属性の違いを知らせるためのものである。

III – 1 – 2　**第二説［ゴーシャカ（妙音）説］**　（469, 25 ‐ 470, 3）

特徴の違いによるとする［ゴーシャカ］の論説は、特徴が生じることから見てのものである。従って、［ゴーシャカは］言った。「**存在要素は、［三］時を行くとき過去のものは過去の特徴と結びつくが、未来・現在の特徴と離れているわけではない**」云々と。もし未来のものが過去・現在［の特徴］と離れているなら、未来のものが現在のものになり過去のものになることはないであろう。また、もし過去のものが未来・現在［の特徴］と離れているなら、未来から現在になり、［ついに］過去になること

---

[4] 梶山 1983: 27-28.

はないであろう。［また、もし］現在のものが、過去・未来［の特徴］と離れているなら、未来のものが現在となったり、現在のものが過去となることはないであろう。実に、［存在要素は］生じた特徴と結びつくと確立される。それ以外［の特徴］と**離れているわけではない**。欠いているわけではないという意味である。従って、［以下のように］例示される。**「例えば、男が一人の女を愛するとき、残りの［女たち］を愛していないわけではないように」**と。**一人の女に**こ［の男］が懸命に愛情をかける［とき］、**残りの**女たちに対しては愛の「得」[5]だけがあって、［愛情が］現に起こるわけではないということである。

III－1－3　第三説［ヴァスミトラ（世友）説］　（470, 3-13）

位態の違いによるとする［ヴァスミトラ］の論説は、位態から見てのものである。その存在要素は［まだ］作用をしない位態にあるとき、未来と言われる。［作用を］する［位態］にあるとき、現在［と言われる］。［作用を］して後に消滅した位態にあるとき、過去［と言われる］。従って、**それぞれの位態に達して、それぞれ［即ち、未来など］と呼称される**。［つまり、］未来の位態に達して未来、ないし、過去の位織に達して過去［と呼ばれる］ということである。［このように］**位態の違いによるのであって、実体の違いによるのではない**とは、［それぞれに］特徴の違いをもたない、未来などの位態に達した［存在要素］が、未来などの語によって呼称されているにすぎないという意味である。従って、**「例えば、一つの［計算］棒が」**云々と例示される。**例えば、一つの**［計算］玉**が一の位に置かれると**［即ち］一の場所に置かれると**一と呼ばれ**、同様に**百の位に［置かれると］百**、**千の位に［置かれると］千**と呼ばれるように、である。［それは］位態の違いに依拠してのことである。

---

[5] 心不相応行の"prāpti"については、AK II 36b-40 に論じられる。cf. AKBh 62, 16: dvividhā hi prāptir aprāptavihīnasya ca lābhaḥ pratilabdhena ca samanvāgamaḥ.「得は二種類であり、まだ得ていないもの及びすでに失ったものの獲得と、獲得したものの具備とである。」（櫻部建 1975: 301~）.

それ（＝計算棒）に本性の違いが生じるのではないのであって、それぞれの場所の違いから、数を表すそれぞれの名称が［同一の計算棒に］生じるのである。

III－1－4　第四説［ブッダデーヴァ（覚天）説］　（470, 13-19）

前後から見て、それぞれ［即ち、未来など］と呼ばれるとは、前・後から見て、過去・未来・現在と呼ばれるという意味である。前即ち過去または現在から見て未来、前即ち過去または後即ち未来から見て現在、後即ち現在または未来から見て過去と［呼ばれる］。［このように］見方の違いとする［ブッダデーヴァ］は、前後に依拠しての論説である。従って、［以下のように］例示される。「**例えば、一人の女が母と呼ばれたり娘と［呼ばれる］ように、である**」と。［つまり、］**例えば、一人の女が**娘から見て**母**と**呼ばれ**、母から見て**娘と**［呼ばれる］ように、である。［それは、］前・後に依拠してであって、実体の違いによるのではない。

III－2　　四異説中の第三説が有部の正統説

III－2－1　第一説批判（470, 19-21）

サーンキヤ学派の主張に含められるべきであるとは、サーンキヤ学派の主張に対する否定は、そのまま彼（＝ダルマトラータ）の主張の否定であり、サーンキヤ学派の主張は以前に否定された[6]という意味である。

---

[6] AK III 50a: catūratnamayo meruḥ. 即ち「スメールは四つの宝石より成る。」とあり、これに対する註釈が AKBh159, 18-22 に見られる。

AKBh159,18-22: katham ca Sāṃkhyānāṃ pariṇāmaḥ. avasthitasya dravyasya dharmāntaranivṛttau dharmāntaraprādurbhāva iti. kaś cātra doṣaḥ. sa eva hi dharmī na saṃvidyate yasyâvasthitasya dharmāṇāṃ pariṇāmaḥ kalpyeta. kaś câivam āha dharmebhyo 'nyo dharmîti . tasyâiva tu dravyasyânyathībhāvamātraṃ pariṇāmaḥ. evam apy ayuktam. kim atrâyuktam. tad eva cêdaṃ na cêdaṃ tathêty apūrvâiṣā vāco

---

yuktiḥ.「［問:］サーンキヤ学派の〈変化〉とはどのようなものなのか。［答:］存続する実体のもつ或る属性が消滅するときに他の属性が生起するということである。これにどんな誤りがあるのか。［答:］或る存続する［実体］のもつ諸属性の変化ということが想定されるような、そのような〈属性をもつもの〉（＝基体）は存在しないのである。［反論:］諸属性とは別に基体がある、と誰が言ったか。変化とは同一の実体が変質するというだけのことである。［答:］それでも不合理である。［反論:］どうして不合理か。［答:］これはそれに他ならずしかもこれはそれのようではない、というこの論法はかつてないものである。」

SA 324,31-325,5: *avasthitasya dravyasyêti*. rūparasādyātmakasya. ṭ*dharmāntaranivṛttāv* iti. kṣīranivṛttau. *dharmāntaraprādurbhāva* iti dadhijanma. *sa eva dharmī nê*ti. rūpādyātmakakṣīrādidharmebhyo 'nyo dharmotpādavyaye 'py anutpanno 'vinaṣṭaḥ. *pariṇāma* iti. kṣīranivṛttau dadhibhāvaḥ. *tad eva cêdam* iti. kṣīram eva dadhi. *na cêdam tathê*ti. na cêdam dadhi kṣīram. *tad evêdam* iti. yat pariṇāmenêty uktam. *na cêdam tathêti tasyâiva dravyasyânyathībhāvamātraṃ pariṇāma* iti vacanāt. *apūrvâiṣā vāco yuktir* iti. svavacanaviruddêty abhiprāyaḥ. pūrvottarayor hi kṣaṇayor anyathātvam iṣyate. yayoś cânyathātvaṃ tayor anyatvaṃ dṛṣṭam. tad yathā Devadatta-Yajñadattayoḥ. tasmāt kāryakāraṇayor anyatvena bhavitavyam.「**存続する実体の**とは、色・味などを本性とするものの、である。**或る属性が消滅するとき**とは、ミルクが消滅するとき、である。**他の属性が生起する**とは、ヨーグルトが生じる、である。**まさにそのような属性をもつもの（＝基体）はない**とは、色などを本性とするもののもつミルクなどの諸属性とは別のもので、属性が生じたり滅したりしても生じもせず滅しもしないようなものは［ない］、である。**変化**とは、ミルクが消滅してヨーグルトが生じることである。**これはそれに他ならない**とは、ヨーグルトはミルクに他ならない、である。**しかもこれはそれのようではない**とは、しかもこのヨーグルトはミルクではない、である。**これはそれに他ならない**とは、変化によって［こうなる］と説かれたことである。**しかもこれはそれのようではない**とは、**変化とは同一の実体が変質するというだけのことである**という［サーンキヤ学派の］説に基づく。**この論法はかつてないものである**とは、自説に矛盾があるという意味である。実に、前後の二瞬間に違いが認められ

III－2－2　第二説批判（470, 21-30）

第二には［即ち］大徳ゴーシャカには**時間の混乱があることになる。**［つまり、］過去時と認められたものが現在でも未来でもあることになる。どのようにしてか。過去のものは、過去の特徴と結びついているが、未来・現在の特徴と離れているわけではない。結びついていることにほかならないという意味である。未来のものもまた、未来の特徴と結びついているが、過去・現在の特徴と離れているわけではない。現在のものも、現在の特徴と結びついているが、過去・未来の特徴と離れているわけではない。以上のようにして［混乱が］ある。それぞれが三つの**特徴と結びつくから**、過去のものが未来でもあり現在でもあることになる。未来のもの・現在のものも同様に論じられるべきである。

どうしてここに同一性があろうかとは［以下のとおりである］。**一人の男に**［ある女に対する愛が起こっているとき］**別の女に対してはただ**［愛する可能性を］**備えている**[7]**だけである。**［それと］同様に、存在要素に［も］一つの特徴［のみ］が存在するというのであろうか。［つまり、］そのように例えられているという理由で、［他の］二つの特徴は存在しないのであろうか。［否である。］　従って、［喩例と主張とには］同一性はないのである、

III－2－3　第四説批判　（470, 3 - 471, 3）

る。違いのある両者は別のものであると見られる。例えばデーヴァダッタとヤジュニャダッタの両者のように。従って、原因と結果の両者は別のものであるべきである。」

なお、サーンキヤの転変説と仏教との関係については、村上 1982: 115-164 に詳説される。

[7] ヤショーミトラはこれを心不相応行の「得」（prāpti）と註釈しているのである。

第四にも［即ち］大徳ブッダデーヴァにも**同一の時間に三つの時間があることになる。**［つまり､］**同一の**［時間に］［即ち］**過去時の中に**前後の瞬間が確立される。そ［の過去時］の中にある**前後の瞬間が過去・未来であり、**［即ち］前の瞬間が過去、後の［瞬間］が未来であり、**真中の瞬間が現在であることになる。**このように、過去時に三つの時間があることになる。

III – 2 – 4　**第三説が定説**　（471, 3-5）

従って、このすべての［論師たちの］うちで、「**第三［のヴァスミトラ］が勝れている**」（$26c_1$）とヴァイバーシカは言う。

III – 2 – 5　三世の違いは作用によって決定される（471, 5-7）

どうして勝れているのかを［次に］言う。なぜなら、そ［の第三説］の「**三時は作用によって確立される**（$26c_2d$）」からである。

r

IV　**作用説批判**

IV – 1　**その一**　（471, 7-27）

ところで、作用とは眼などの「見る」など［の機能］のことである。色形などが自らの感官（＝眼等）の感官の対象であることも作用である。**もしそうであるなら**［即ち］もし作用によって［三時が］確立されるなら、**彼同分の眼にどんな作用があるのか。**実に作用という［感官］自らの機能をなさないようなもの、それが彼同分である。そして、それ（＝彼同分の眼）に「見る」という作用はない。［だから］どうして、それが現在であろうか、というのが意図である。

結果を与えることと取ることとは、その眼が自らの等流果を取り［即ち］引き、そして、結果を与える［即ち］直後の等流果及び士用果を与え

るということである[8]。たとえ「見る」作用をしなくても、他の［作用をする。即ち］結果を作るのである。それ（＝彼同分の眼）には、結果を与えることと取ることとが現に存在するから、それは現在であることが確立されるのである。

その場合、過去の同類因なども、と。**など**という語によって異熟因などが把握される。それらも**結果を与えるから**とは、「**二つ**（＝同類因と遍行因）**は、現在のものと過去のものとが、**［また］**一つ**（＝異熟因）**は過去のもの**［のみ］**が**［結果を］**与える**（AK II 59cd）[9]」という説に基づく。［よって］**作用の過失に陥る**［即ち］作用があるという［過失に陥る］。従って、これら過去の同類因などは現在であるという過失に陥る。なぜなら、現在のものと同様、作用が現に存在するからである。以上のように、**特徴の混乱が起こる**。

もし取果と与果の両方を行うものが現在であって、どちらか一方のみを［行うものが］現在であるのではないとあなたは言うなら、そのとき次のことが言われることになる。**あるいは半分の作用の**と。「過失に陥る」と［前出の言葉が］補われる。［よって］**あるいは半分の作用の**過失に陥る［となる］。［つまり、］あるいはそれら過去のものが半分現在であるという過失に陥る［ということである］。実に、取果作用はすでに止まっているからそれらは過去の特徴を備えており、与果作用は起こっている

---

[8] AK II 59: vartamānāḥ phalaṃ pañca gṛhṇanti dvau prayacchataḥ | vartamānâbhyatitau dvāv eko ' tītaḥ prayacchati.「これにより、以下のことが知られる―異熟因以外の五因はすべて現在のものが果を取り、そのうち、能作因を除く四因は現在のものが果を与える。四因のうち、倶有因と相応因とは士用果を、同類因と遍行因とは等流果を与える。議論にある〈眼〉の場合、倶有因であり、同類因である。」（櫻部 1975: 387-389）. cf. AK II 56cd: sabhāgasarvatragayor niṣyandaḥ pauruṣaṃ dvayoḥ.「同類と遍行には等流がある。［相応と倶有の］二には士［用果］がある。」櫻部 1975: 384 参照。

[9] 同類因と遍行因とは過去のものも果を与えるという定義があり、それが問題とされる。

から現在の特徴を備えているというように、まさにこれは**特徴の混乱**という誤りである。なぜなら、過去などの時間の次のような特徴——作用がすでに止まったものが過去、まだ作用していないものが未来、作用してまだそれが止まっていないものが現在である[10]——が認められているからである。

IV－2　その二　（471, 27 - 472, 1）

どんな妨げがあるのか（27a1）と。［vighnam という］この語形は中性の［活用語形］である。どんな傷害があるのかという意味である。「これにはどんな妨げがあるのか」と［bahuvrīhi-compound と考えて］「作用はどんな妨げをもつのか（kiṃvighnam）」と他の人々は［解釈する］。

諸条件がそろわないと言うなら［即ち］そ［の問い］に対して「因［縁］・等無間［縁］などの**諸条件**[11]**がそろわない**から、常に作用するとは限らないのである」と［有部が答える］なら、［そうでは］**ない。常に存在することが認められているからである**［と言う］。［つまり、］諸条件がそろわないと想定することは合理的で**ない**。なぜなら、諸条件も**常に存在することが**あなたがた［有部］によって認められているからである。存在するものは消滅しない［と認められている］からである。

IV－3　その三　（472, 1-10）

そして、その作用が過去云々と。そして、定説として「作用がすでに止まったものが過去である」などと説かれているから、**作用も過去とか未来**と言われ、**また現在と言われる**［はずである］。［その場合、その］

---

[10] TSP 616, 24-617, 8 における表現がこれに近い。

[11] AK II 61c: catvāraḥ pratyayā uktaḥ. これ以下に「四縁」の定義が論じられる。AKBh 98, 5-6 によれば、四縁とは因縁（hetupratyaya）・等無間縁（samanantara-pratyaya）・所縁縁（ālaṃbanapratyaya）・増上縁（adhipatipratyaya）である。

作用（A）にもまた別の作用（B）があるのか。［即ち］それ（B）によってそれ（A）が過去などと言われるような［別の作用（B）があるのか］。もしあるなら、無限遡及の過失に陥る。もしないと言うなら、作用が未来などであるということが、それ自体の存在性によることになるように、諸存在が未来などであるということも、同様のことになろう。［よって］作用を想定することに何の意味があろうか。［また、もし別の作用はないと言うなら、］**それ（＝作用）がどうして**過去であるなどと言えようか。

また、もしそれか過去でもなく云々と。**過去でもなく未来でもなく現在でもない**ようなものは、因果的存在でないということから、**因果的存在でないから、常にあることになってしまう**［と言う］。「作用は」と［前出の言葉が］補われる。だからどうであるのかを［次に］言う。**従って、存在要素は作用をしないとき未来であると言うべきではない**［と］。作用は［常にあるのに］機能することができないということになるからである。

IV－4　作用と存在要素とが別ものでないとき

IV－4－1　三世は不成立（472, 10-20）

この誤りがあろう云々と。**もし作用が存在要素とは別のものなら、この誤り**［即ち］作用にまた別の作用があるという過大適用の過失または因果的存在ではなくなってしまうという過失**があろう。しかし、それは別のものではない**（27a$_3$）から、**この誤りはない。まさにその本性で**とは、現在のものの本性でという意味である。

これには何が以前にはなかったのかとは、未来の位態に関して［言われている］。もし［それが］作用であるなら、［作用は存在要素と］別のものではないから、［未来の位態では］グルマそのものがなかったと言われるべきであろう。**また、何か後になくなるのか**とは、過去の位態に関して［言われている］。もし［それが］作用であるなら、［過去の位態では］存在要素そのものがなくなると言われるべきであろう。存在要素と作

用とは別のものではないからである。**もし前に無くて今存在するということが**認められないなら、現在は成立しない。もし存在し終わってもう存在しないということが認められないなら、過去時は成立しない。他方、未来とは「前に無くて今存在する」ということがまだないものであると、意味の上から理解される。このようにして三時は成立するが、これ以外の仕方で成立することはない、というのが文意である。

IV－4－2　「三世実有かつ無常」は不合理　（472, 20-33）

生滅はありえないから［即ち］すべての時間に存在するから**生滅はありえない**。従って、「**因果的存在の特徴と結びついているから、恒常的であるという過失に陥ることはない**」と言うことも**言葉だけである**。**この論法はかつてないものである**とは、常に存在し且つ生滅が可能であるという**この論法**は面後相矛盾しているという意味である。「**本性は常にある**」とは、色形などの本性はすべての時間に存在することが認められているということである。もし色形などの本性が常にあるなら、それゆえに色形などの存在は恒常であることになってしまう。従って、「**しかも存在は恒常であるとは認められない**」と言う。そのようなとき、よって存在は本性とは別のものであるのかと［問われる］。従って、「**存在は本性と別のものではない**」と言う。それは、望むとおりにすぎないから、「**明らかに自在神のなせる業である**」。ここには合理性はない［ということである］。

V　二教証・二理証批判

V－1－1　第一教証批判その一（472, 33‐473, 14）

ただし、以前に存在したものが過去であるとは、［過去のものは］本性をもってあるのではないということを示す。**原因があれば生じるであろうものが未来である**とは、［未来のものは］今存在しないが、［いつか］原因の生起に基づいて確立されるということを示す。**そのようにし**

てあると言われる［即ち］「以前に存在した」・「生じるであろう」というようにして［過去・未来のものはあると言われる］**が、実体として**そのように存在するの**ではない**。

因果を［あるのにないと］非難する見解を否定するためにと。原因を非難する見解を否定するために**過去のものはある**、結果を非難する見解を否定するために**未来のものはある**と［世尊によって］説かれたのである。「過去のものはあった」、「未来のものはあるであろう」と言うべきところを「ある」と言うのは、**「ある」（asti）という語は不変化詞であるからである**。実に、不変化詞は三時を対象としている。「あった」という意味にも、「あるであろう」という意味にもなる。**例えば灯火の**云々と。**例えば「灯火の以前にはないことが『ある』、後にはないことが『ある』」と言う人々がいるように**。しかし、実体として「ある」のではない。**また、「その灯火は消えて『ある』が、私によって消されたのではない」と［言う人々がいる］ように**。しかし、「ある」［という語］が用いられるからといって、それ（＝灯火）は消えてもなお「ある」というわけではない。　［問：］ヴァイバーシカにとっては、それは消えてもなお「ある」のではないのか。　［答：］確かに「ある」が、［実際は］灯火から成ることを保持しながらそれは「ある」のではない。**そのように過去・未来も「ある」と言われたのである**とは、たとえ実体としての存在性がなくともということである。なぜなら、**さもなければ過去・未来そのものが成り立たなくなるからである**とは、もしまさにその［本］性をもって存在するとすれば、過去・未来そのものが成り立たなくなるという意味である。

V－1－2　第一教証批判その二　（473, 14 - 474, 1）

もし以前に存在したものが過去であるなら、「**では、ラグダシキーヤカ派の**」云々と。聖者の因縁譚で、ナーランダーにおいてブッダによって説かれた『サンユクタカアーガマ』（『雑阿含』）のなかの経典は［次のように説く］――「ラグダシキーヤカ派の遊行者たちによって目連尊者

は殺された」と非難された［その遊行者たち］は、「決して殺されたということはないから」［云々］と言った、と[12]。この経典では、以下のことが示されている。［即ち］「無間［業］を行うラグダシキーヤカ派の遊行者たちは過去の行為はないと主張する」云々と。**彼ら**ラグダシキーヤカ派の遊行者たち**は、その行為**［即ち］無間［業］[13]**が以前にあったことを認めなかったのか**と。［これによって］以下のことが言われている。［つまり、］彼らはその行為が以前にあったことを認めたが、実体であると［認め］ない。彼らはその行為について、過去のその行為はないとする誤った見解をもつ。その本性について彼らが誤った見解をもつような「過去のその行為はある」と世尊によって［説かれた］[14]。従って、過去のものは本性をもってある云々と［有部は主張する］。［以上のことが言われている。］

しかし、そこでは［即ち］経典では、以前にあった行為は過去のものに他ならないということを意図して「その［過去の］行為はある」と言われたのではなくて、**それによって置かれた**［と］。**それによって**［即ち］以前にあった行為によって**置かれた**［即ち］留められた**その心の流れにおける結果を与える効力を意図して［その行為はあると］言われたのである**。［意図して言われた（saṃdhāyoktam）とは］この意図をもって言われた（anenābhiprayeṇoktam）ということである。［それは］どのように理解されるのかを［次に］言う。**なぜなら、さもなければ過去のものがその本性をもって現に存在するということは成り立つはずがないからであると**。その行為が本性をもって**現に存在する**［即ち］**過去のものが**現在の［本］性をもって**現に存在するということは成り立つはずがない**。［つまり、］現在のもののみが成り立つということが意図されている。**それによって置かれた**云々というように言われるなら、過去のその行為は［その意味において］あるということが成り立つのである。

---

[12] この部分は語順、特に"āhur"の位置などがわかりにくい。

[13] これの定義は AKBh 259, 8~（ad AK IV 96）にある。cf. AKBh 259, 20-23.

[14] cf. SA 473, fn.5, 6.

V－1－3　第一教証批判その三　（474, 1-10）

以下のことはそのようにある［即ち］未来のものも過去のものも実体としてはないというようにある。**現在時において**云々とは、現在の存在という点では**［眼は］前に無くて今存在する**という意味である。**［そうでは］ない。時間と存在とは別のものではないからであると**。そうではない。**時間**［即ち］現在［時］**と存在**［即ち］眼と呼ばれるもの**とはべつのものではないからである**。別の実体ではないからであるという意味である。現在時というものが存在に他ならない。従って、どうしてその現在の［存在］が自らの本性である時間において、前に無くて今存在するということがあろうか。すなわち、「**それら［因果的存在］は、時間であり、言葉の対象である**[15]。（AK Ⅰ 7c）」と言われている。**また、もし自らの本性**［即ち］眼**について**、眼は**前に無くて今存在するというなら、この未来の眼はないということが成立するのである**。

V－2　　第二教証批判

V－2－1　第二教証批判その一　（474, 10-15）

対象であるのみと。**のみ**という語は［意識を］生じさせる［原因］であることを排除するためのものである。［意識に］その形が生じるから、諸観念は対象であるという意味である。

未来のもので千劫の後にと。未来のものは、近い［未来の］ものでも［意識を］生じさせる［原因］であるのは不合理である。まして、長時間を経て**生じるであろう［未来の］ものは**なおさらである。なぜなら、後の時間に起こるものが前の時間に起こった結果の原因であるというのは不合理であるからである。**また、涅槃は**と。実に、涅槃は消滅であるから

[15] 'kathavastu'については以下を参照。 AKBh 5, 3~（ad　AK Ⅰ 7c）: kathā vākyam. tasya vastu nāma. sārthakavastugrahaṇāt tu saṃskṛtaṃ kathāvastûcyate... 櫻部 1975: 146, 147, n3 参照。

認識を生じさせない。輪廻の活動の消滅であるから、というのが意図である。

V－2－2　第二教証批判その二　（474, 15-23）

「あった」、「あるであろう」と。現在の位態にあった、［または］あるであろう物質が対象であるという意味である。「それがそのように対象とされるとして、存在しないということはどのようにして知られるのか」と［問われる］から、［次のように］言う。**なぜなら、過去の物質または感受を思い出すとき、誰も「今ある」とは考えないのであって、「あった」と［考えるのである］から**と。眼識の直接知覚によって見たとおりに物質を、また、体験したとおりに感受を思い出すのである。**まるで**云々によって、［ヴァスバンドゥ］師は過大視の原因を言った。あったもの、あるであろうものが、まるで現在のものであるかのように把握されるという意味である。**もし全くそのとおりにあるなら**［即ち］現在のもののとおりに［あるなら］、**それ（＝過去・未来のもの）は現在であるということになる**。また、もしそれが全くそのとおりで**ないなら、現に存在しないものも対象となるということが成立する**。現在のものであるかのようなものは［現に］存在しないから、また、それは［ただ］思い出されている［にすぎない］からである。

V－2－3　第二教証批判その三　（474, 23 - 475, 11）

それ（＝過去・未来のもの）はそれ（＝現在のもの）が散乱したものであるとは、それ［即ち］現在のもの**が散乱したもの**、それが過去・未来のものであるということである。**［そうでは］ない。散乱したものは把握されないからである**と。［**そうではない**とは］それは合理的ではない、ということである。**散乱したものは把握されないからである**とは、この［の散乱した］物質は、以前は散乱していなかったが今散乱しているというようにして把握されることはないからである。**また、もしそれぞ**

れの云々と。**また、もし**［それぞれの］物質は、現在の位態では固まりとなり、過去の位態及び未来の位態ではそれは原子に分解するから、［それは］現在のもののようには把握されないのであるということなら、**その場合、諸原子は**それぞれの位態にあるから**恒常である**ということになる。同じ諸原子が未来にも現在にも過去にもあるということである。また、**その場合、原子の集合と分解のみがあることになる。しかし、**［そうであるなら］「どんな生起も消滅も**ない**」という**アージーヴィカの人々**［即ち］宗教的偽善者たち**の説**が採用されている［ことになる］。そして、そのように認められるとき、［以下の］**経典が**破棄されて**いる**［ことになる］。「比丘らよ、**眼は生じるときどこからもやってこない。**消滅するときどこへも集まらない。従って、実に、比丘らよ、眼は前に無くて今存在し、存在し終わって消えていく」と。ところで、どうしてこの**経典が無視されている**［即ち］矛盾するとされているのか。なぜなら、眼は［有部によれば］本性をもって生じてくる［と言うのであるから、その］とき、「どこからもやって来ない」というこの句が退けられているからである。［また、］過去時にそれ（＝眼）の諸原子は散乱したり集まったりしていることが［有部によって］認められるから、「消滅するときどこへも集まらない」というこの句も退けられている。

原子の集合でない［云々］と。**感受など**原子を本性としないもの**はどうして散乱しようか。**なぜなら、［原子に］集合や拡散がもしあるとすれば[16]、それは物質的なものにはあろうが、非物質的なものにはないからである。**また、それら（＝非物質的な感受など）もまるで今生じて経験されるかのように思い出されるのである**とは、ちょうど現在のものである［かのように］思い出されるということである。**そして、もしそれら（＝非物質的な感受など）は**現在のもののように**全くそのとおりに存在するなら、［それらは］恒常であるということになる。**また、もしそのもの（＝現在のもの）でないなら、存在しないものも対象となることが成立する。

---

[16] チベット語訳には、” bhavat”という語は訳されていない。D 118b5-6, P 134a8: ...lu can rnams la ‘gyur gyi lus can ma yin pa rnams la ni ma yin no.

V－2－4　第二教証批判その四（475,11-34）

第十三処も対象と**なってしまう**と。「十三」処（複数形）の序数が「第十三」処である。それが認識の対象となってしまうということである。存在しないものを対象とすることが認められるなら、それ（＝第十三処）を対象とする認識もあることになろう。このようにヴァイバーシカによって言われるのに対して、［ヴァスバンドゥ］師は、**それでは第十三**［処は存在しないという認識の対象は何か］と言う。**この名称だけが、**とヴァイバーシカたちは言う。第十三処というこの名称が**対象である、**ということである。**それなら「名称こそが存在しない」と理解されよう。**［即ち］第十三処の非存在という言葉の対象は［存在し］ない［からである］。

また、音声がまだないことを対象とする人にとって、何が対象か。「である」と前文に補うべきである。［即ち「何が対象であるか」となる。］　そのような文脈で、ヴァイバーシカは言う。**音声こそが**［と］。「対象である」という文脈［である］。即ち「音声こそが対象である」となる。その場合云々と［ヴァスバンドゥ］師は［言う］。音声がまだないことを対象とする人々によって、音声こそが対象とされ、まだないことが［対象とされ］ない［から］、次のようなことになる。［即ち］**音声がないことを望む人に、その音声こそが発せられることになる。**

未来の位態にある［音声が対象とされる］と言うなら［と］。［つまり、］あるもの（A）がまだないという場合、**未来の位態にある**それ（A）が彼によって対象とされるのであるから、音声がないことを望む人に音声が発せられることはないと考えるなら［ということである］。そこで、**あるのにないという認識がどうして［生じるの］か、**と言われる。［つまり、］まだないというその音声が現に存在するのに、これ（＝音声）が**ないという認識**［即ち］まだないことを対象とする［認識］が**どうして［生じるの］か**［ということである］。

現在のものはないと言うなら［と］。［つまり、］上［の問］に対して、現在のものはないというようにしてそれ（＝音声）を対象とするから、それ（＝音声）がないという認識が生じるのであるとするなら［ということである］。**［そうでは］ない。同一であるからである**［と］。［つまり、］その未来であるものは現在のものに他ならない。［それは］それ（＝現在のもの）と別のものではない。よって、どうしてその現在に他ならないものについて、ないという認識が生じようか。

あるいは、それに特性が［生じるときと］。**あるいは、それ**［即ち］未来のもの**に**後に**特性が**現在の位態に生じるとき、その特性について現在のものはないという認識が生じるなら、**それは前に無くて今存在するということが成立する。それ**［即ち］特性**はもと存在しないで**［即ち］前に［存在しないで］**今存在する**［即ち］後に［存在する］。そのことが**成立する。存在と非存在**と。**存在**とは、現在の位態に［あるもの］である。非存在とは、過去・未来の位態に［あるもの］である。以上の二つが認識の対象である。

V－2－5　第二教証批判その五　（475, 34‐476, 15）

非存在が認識の対象であるなら、**その場合**云々と。最後の再生となった**菩薩によって**次のように**言われている**［ことと矛盾すると、有部は考える］。「**世間にないものを私が知るということはありえない**」という言葉から、非存在を対象とする［認識は］ないということが示されている［とされる］。

［ヴァスバンドゥ］師は、この経典が別の意図をもつことを示して「**他の人々は増上慢をもち**」云々と言う。不浄の三昧に入った**他の人々は増上慢をもち、**加行の位のときに天眼に現れるような**存在しない光明をさえも存在すると見る。しかし、私は存在する**光明のみ［即ち］以前の色形**を**天眼により**あると見る、というのがそこにおける**［即ち］経典における**意図である。**

どうして、か［の釈迦牟尼菩薩］に思案がと。すべての認識が存在するものを対象とすることが確立されているなら、**どうして、か［の菩薩］に思案が**［即ち］考察または疑念があろうか。「およそ世間にないもの」云々と説かれた［思案、ということである］。他方、諸認識があるものとないものとを対象とするなら、この思案はありうる。それ以外には［ありえ］ない。

あるいは、どんな違いがあろうかと。**あるいは**、菩薩とそうでない者たちと**にどんな違いがあろうか**。もし彼ら（＝菩薩でないもの）も存在する光明のみを見、存在しない［光明］を［見］ないなら、である。実に、諸認識があるものとないものとを対象とするなら、この違いがあるのである。

また、次のような［経典］はそのようである［と］。諸認識があるものとないものとを対象とすること［を示している］ということである。**あるものをあると知り、ないものをないと［知る］**というのがこれ（＝対象が二つあること）に対する例示である。ある事物をあると［知って、すぐれたものと］**なる**［ということがすぐれた仕方で］知る［ということである］[17]。ないものをないと［知る］ということから、諸認識はないものを対象とするということが成立する。

V－3　第一理証批判　(476, 15-16)

従って、このことも理由にならないと。菩薩によって言われたこのこと、ということである[18]。

V－4　第二理証批判

V－4－1　第二理証批判その一　(476, 16-17)

---

[17] チベット語訳から、以下のようなサンスクリットが考えられる。sac ca vastu sattvataḥ ［jñāsyati viśeṣāya］ paraiṣyati ［viśeṣeṇa］ jñāsyati.

[18] 理証批判ととる。理証は AK V 25b_2.

それを前提とする［云々］とは、行為を**前提とする特殊な**心の**流れから**ということである。

有我論否定［の章］でとは、［この］論書の最後、ヴァートシープトリーヤ（犢子部）の説を否定する［章］で、ということである。

V－4－2　第二理証批判その二　（476, 17 - 477, 1）

それでは〈生起〉は前に無くて今存在する［云々］とは、〈生起〉は以前に無くて今存在する（**idānīm bhavati**）から、［それは］新たなものが出現することであることが成立する。〈生起〉ということと生起するものとは同じことを言っているからである。

また、もしすべてのものが存在するならとは、「生起」も存在するなら、ということである。原因や未来の結果だけでなく［生起も］という意味である。**今、何の何に対する能力があるのか**とは、**どんな**原因の**どんな**結果**に対する能力があるのか**ということである。なぜなら、原因と上述のような「生起」と未来の結果とが［すべて］存在するからである。

現在のものにする［能力がある］とヴァイバーシカ［は言う］。**「現在のものにする」とはどういうことか**云々と［ヴァスバンドゥ］師は［言う］。〈生起させること〉は「現在のものにする」［能力］ではない。それは今存在する（**vidyamāna-** ）からである。従って、次のように問うのである。

（i）**別の場所へ引くことであると言うなら**［と］。［つまり、］もし原因が結果を別の場所へ引くことが「現在のものにする」ということであると考えるなら、ということである。これに対して我々は［次に］言う。

恒常であることになる［と］。「結果は」と前文に補うべきである。ただある場所から別の場所へ引くだけということは、何も新しいものは生じないということであるから、［結果は］**恒常であることになる**のである。

また、非物質的なもの［即ち］感受など**にどうしてそれ**［即ち］別の場所へ引くこと**があろうか**。物質的なものでないという点で、場所を占めるわけではないから、それ（＝別の場所へ引くこと）は不合理であるとい

うことを意味している。**また、その引くこと**［即ち］作用（kriyā）と呼ばれるものは、**もと存在しないで今生じるものである**と。「前に無くて今存在する」ことの成立を意味している。（ii）**本性を区別することであると言うなら**とは、もし原因によってその結果の本性が区別され、それによって結果を限定するものが生じると考えるなら、ということである。これに対して我々は［次に］言う。**もと存在しないで今生じることが成立する**と。限定者はもと存在しないで今生じること［即ち］出現することが**成立する**ということである。

VI　結び　（477, 1-26）

あるいは三時は［ある］と。何か。「［三時の］すべてはある」という文脈である。**しかし、それがあるとおりに説かれたのである**と。［つまり、］以前に存在したものが過去のものである。原因があるとき生じるであろうものが未来である。生じてまだ消滅しないものが現在のものである。以上のようにして「すべてがある」と説く（sarvāstivāda-）なら、それは教えに適うものである。

どうしてそれと、また、それに関して結びつくのかとは、**どうしてそれと**［即ち］過去・未来の煩悩と、**また、それに関して**［即ち］過去・未来の事物に関して、どうして**結びつくのか**ということである。**それから生じそれの原因である随眠があるから煩悩と**、と。「その過去のものから生じ」というのが、**それから生じ**、である。「その未来のものの原因である」というのが、**それの原因である**、である。［以上が］**それから生じ、しかも、それの原因である**（tajjataddhetu-）［の意味である］。それから生じそれの原因である随眠［即ち］種子というのが、**それから生じそれの原因である随眠**である。それが**あるから**、過去と未来の**煩悩**とそれぞれ結びつくのである。その過去・未来の事物を対象とするというのが、**それを対象とする**である。［そのような］**煩悩**、それ**の随眠**、それが**あるから**、過去と未来の**事物に関して**それぞれ**結びつくのである**ということである。

法性とは、諸々の存在要素の本性である。過去などの時間が確立しているとき、それとの関係を教えるために言う。**言い方がある**云々と。言葉の組み合わせがあるということである。**生じるものが消滅する**と言ったあと、喩例を［以下に］言う。**物質が生じ物質が消滅する**［と］。実体として別のものでないからである。**あるもの（A）が生じ別のもの（B）が消滅する**［という言い方がある］。［例えば、］あるもの（A）がまさに生起しようとしているから、未来のものが生じ、別のもの（B）がまさに消滅しようとしているから、現在のものが消滅する［と］。［過去・現在・未来という］時間も生じる［と言える］。生じてくる存在要素は時間に拘束されているからである。時間を本性としているからである、という意味である。「**それらは時間であり、言葉の対象である**（AK I 7c）」という定義に基づいている。時間からも［即ち］質料因として［の時間］から存在要素は生じる［と言える］。なぜかを［次に］言う。**未来時には多くの瞬間があるからである**と。山とある未来の多くの瞬間のうちのある一つの瞬間のみが生じるから、時間からも生じると言われるのである。

付随して入ったとは、「しかし、［人は］**残りのすべて**［の煩悩］**とすべて**［の事物］**に関して**［結びつく］（AK V 24c_2d）」という［本論に］**付随して入った**過去・未来の考察ということである。

（SA 終）

第２節　校訂テキスト　SA 468, 24－477, 26.

I　(468, 24 – 28)

kathaṃ tatra tena ca saṃyukta[19] iti. **katham** atītānāgate vastuni. **tena** câtītānāgatenânuśayena **saṃyukta** iti **visaṃyukto vā**. kathaṃ vâprahīṇa-prahīṇāvasthāyāṃ vyavasthāpyante. **saṃskṛtalakṣaṇayogād** iti. yasmāt **saṃskṛtalakṣaṇāni** jātyādīni **saṃskārānnām** *adhvasaṃcārāya*[20] prava-rtante. atas teṣāṃ ***na śāśvatatvaṃ***[21] **pratijñāyate**.

II

II – 1　(468, 28 – 469, 10)

rūpaṃ ced bhikṣava[22] ity asya sūtrasyâyam āditaḥ pāṭhaḥ. "rūpam anityam atītānāgatam. kaḥ punar vādaḥ pratyutpannasya. evaṃdarśī śru-tavān ārya śrāvako 'tīte rūpe 'napekṣo bhavati. anāgataṃ rūpaṃ nâbhina-ndati. pratyutpannasya rūpasya nirvide virāgāya nirodhāya pratipanno bhavati. **atītaṃ ced bhikṣavo rūpaṃ nâbhaviṣyan na śrutavān āryaśrāvako 'tīte rūpe 'napekṣo 'bhaviṣyat. yasmāt tarhy asty atītaṃ rūpam. tasmāc** [469] **chrutavān āryaśrāvako 'tīte rūpe 'napekṣo bhavati. anāgataṃ ced rūpaṃ nâbhaviṣyan na śrutavān āryashrāvako 'nāgataṃ rūpaṃ nâbhyanandiṣyat. yasmāt tarhy asty anāgataṃ rūpam**. tasmāc chrutavān āryaśrāvako 'nāgataṃ rūpaṃ nâbhinandati. pratyut-pannaṃ ced bhikṣavo rūpaṃ nâbhaviṣyad" iti vistaraḥ. **na śrutavān āryaśrāvako 'tīte rūpe 'napekṣo 'bhaviṣyad** iti. nirviṣayatvād vairāgyakāle 'tītaviṣayāpekṣāryaśrāvakasyânapekṣā matir na syād ity arthaḥ. yad atītaṃ rūpam apekṣyate tadā tatrâsaktir iti. **abhyanandiṣyad** ity abhyalaṣiṣyat.

---

[19] この文はチベット語訳にはない。D 113a4, P 128a3.

[20] SA 468, 27: arthasaṃcārāya. D 113a5, P 128a5: dus su 'pho bar bya ba'i phyir (phyir は P にはない).

[21] SA 468, 28: aśāśvatatvam (cf. 468, fn.4). AKBh : na saṃskārāṇāṃ śāśvatatvam.

[22] AKBh: atītaṃ ced bhikṣava...

pratyutpanaṃ ced bhikṣavo rūpaṃ nâbhaviṣyan na śrutavān āryaśrāvakaḥ pratyutpannaṃ ced bhikṣavo rūpaṃ nâbhaviṣyan na śrutavān āryaśrāvakaḥ pratyutpannasya rūpasya nirvide virāgāya nirodhāya pratipanno 'bhaviṣyad ity etan nôktam ubhayapakṣaprasiddhatvāt.

II – 2　(469, 11 – 14)

dvayād [AK V $25b_1$] iti pūrvaṃ kaṇṭthata uktam iti pradarśitam. idānīm arthato na kaṇṭthata iti viśeṣaḥ. *na dvayaṃ pratītya manovijñānaṃ syāt*[23]. yad atītānāgatālaṃbanam iti viśeṣaḥ.

II – 3　(469, 14 – 16)

tato vijñānam eva na syāt ālaṃbanābhāvād iti. vijñeye sati vijñānam iti kr̥tvā. sādhanaṃ câtra. sadālaṃvanam eva manovijñānam. upalabdhisvabhāvatvāt. Cakṣuruvijñānavad iti.

II – 4　(469, 17 – 19)

p**halād** [AK V $25b_3$] iti vidyamānasvalakṣaṇaṃ śubhāśubham atītaṃ karma. vipaktikāla utpadyamānaphalatvāt. vartamānadharmavad iti.

II – 5　(なし)

III – 1

III – 1 – 1　(469, 20 – 25)

bhāvānyathātvaṃ bhavatīti. Atītānāgatapratyutpannasya **bhāvasyānyathātvaṃ bhavatîty** arthaḥ. na **dravyānyathātvam**. **na** rūpādisvalakṣaṇasy**ānyathātvam** ity arthaḥ. anāgato hi vartamānam adhvānaṃ pratipadyamāno **'nāgatabhāvaṃ jahāti**. vartamānabhāvaṃ pratilabhate.

---

[23] AKBh: vijñānaṃ dvayaṃ pratītya na syāt.

vartamāno ‘py atītam. suvarṇaṃ kṣīraṃ cêti dṛṣṭāntadvayaṃ yathākramam ākṛtiguṇānyathātvajñāpanārtham.

III – 1 – 2　(469, 25 – 470, 3)

lakṣaṇānyathikasya lakṣaṇavṛtilābhāpekṣo vyavahāraḥ. ata evāha. **dharmo ‘dhvasu pravartamāno ‘tīto ‘tītalakṣaṇayūktaḥ. anāgatapratyutpannābhyāṃ lakṣaṇābhyām aviyukta** iti vistaraḥ. *yady anāgatam atītapratyutpannābhyāṃ viyuktaṃ syāt. evaṃ sati nânāgatam evôtpannam atītaṃ vêti syāt. Athâtītam anāgatapratyutpannābhyāṃ viyuktaṃ syāt. nânāgataṃ vartamānaṃ câtītaṃ syāt. vartamānam atītānāgatābhyāṃ viyuktaṃ syāt. nânāgataṃ*[24] *eva vartamānaṃ vartamānam evâtītaṃ syāt.*[25] labdhavṛttinā hi lakṣaṇena yukto vyavasthāpyate. tadanyen**âviyukto** na virahita ity arthaḥ. ata evôdāharati. [470] **tad yathā puruṣa edasyāṃ striyāṃ raktaḥ śeṣāsv avirakta** iti. e**kasyāṃ striyâm** asya rāgādhyavasānaṃ vartate. **śeṣāsu** strīṣu rāgaprāptir evâsti. na samudācāra iti.

III – 1 – 3　(470, 3 – 13)

avasthānyathikasyâvasthāpekṣo vyavahāraḥ. yasyām avasthāyāṃ so dharmaḥ. kāritraṃ na karoti. tasyām anāgata ucyate. yasyāṃ karoti tasyāṃ vartamānaḥ. yasyāṃ kṛtvā niruddhaḥ. tasyām atīta ity **avasthām avasthāṃ prāpyânyo'nyo nirdiśyate**. anāgatāvasthāṃ prāpyānāgato yāvad atītāvasthāṃ prāpyâtīta iti. **avasthāntarataḥ na dravyāntarata** ity abhinnalakṣaṇo 'nāgatādyavasthāprāpto'nāgatādiśabdanirdeśaḥ devalaṃ bhavatîty arthaḥ. ata evôdāharati. **yathâikā vartikêti** vistaraḥ. **yathâikā** gulik**âikāṅke nikṣiptâ**ikasthāne sthāpit**âikam ity ucyate**. evaṃ **śatāṅke śataṃ sahasrāṅke sahasram** ity ucyate. avasthāntarāpekṣayā. na punas

---

[24] SA 469, 30-31: anāgatam を nânāgataṃ と訂正する。cf. SA 469, n.6…6.

[25] “yady”から始まる5行はチベット語訳にない。D 114a5, P 129a6. cf. SA 469, n.7…7. 但し、SA 469 の n.6…6 と n.7…7 の内容は逆になっている。

tasyāḥ svabhāvānyathātvam. kiṃ tarhi sthānāntaraviśeṣāt saṃkhyābhidyotakaṃ saṃjñāntaram utpadyata iti.

III – 1 – 4 (470, 19 – 21)

pūrvāparam apekṣyânyo'nya ucyata iti. pūrvam aparaṃ câpekṣyātītānāgatavartamānā ucyanta ity arthaḥ. pūrvam evâtītaṃ vartamānaṃ vâpekṣyānāgata iti. pūrvaṃ vâtītam aparaṃ vânāgatam apekṣya vartamāna iti. aparam eva vartamānam anāgataṃ vâpekṣyâtīta iti. **yathâikā strī mātā vôcyate duhitā cêti. yathâikā strī** duhitaram apekṣya **mātêti ucyate**. mātaram apekṣya **duhitā** ***cêti***[26]. pūrvāparāpekṣayā na dravyāntarataḥ.

III – 2 (なし)

III – 2 – 2 (470, 21 – 30)

Sāṃkhyapakṣe nikṣeptavya iti. yaḥ Sāṃkhyapakṣe pratiṣedhaḥ sa eva tatpakṣasya pratiṣedhaḥ. Sāṃkhyapakṣaḥ pūrvaṃ pratiṣiddha ity abhiprāyaḥ.

III – 2 – 2 (470, 21 – 470, 30)

dvitīyasyâpi bhadantaGhoṣakasyâpy **adhvasaṃkaraḥ prāpnoti**. yo 'tītādhvābhipretaḥ sa vartamāno 'nāgato 'pi prāpnoti. kathaṃ kṛtā. *atîto*[27] 'tītalakṣaṇayukto bhavann anāgatavartamānalakṣaṇābhyām aviyuktaḥ. yukta evêty arthaḥ. anāgato 'py anāgatalakṣaṇayukto 'tītavartamānalakṣaṇābhyām aviyuktaḥ. vartamāno 'pi vartamānalakṣaṇayukto 'tītānāgatalakṣaṇābhayām aviyukta iti kṛtvā. ekaikasya tri**lakṣaṇayogād** atīto 'nāgato vartamānaś ca prāpnoti. ity evam anāgatavartamānāv api yojyau.

---

26 AKBh: vêti.

27 SA 471,23: atīte. cf. D 114b7, P 130b3: 'das pa ni. SA 470, 24: anāgato 'pi; 470, 25: vartamāno 'pi.

kim atra sāmyam iti. **puruṣasya kasyāṃcit kevalaṃ samanvāgamaḥ**. kim evaṃ dharmasyâikaṃ lakṣaṇaṃ vidyate. ita eva lakṣaṇe na vidyete. yata evam udāhriyata ity asāmyam.

III – 2 – 3　(470, 30 – 471, 3)

caturthasyâpi bhadanta-Buddhadevasyâpi **ekasminn evâdhvani trayo 'dhvānaḥ prāpnuvantîti. ekasminn evâtīte** [471] **'dhvani** pūrvāpara-kṣaṇavyavasthâsti. tatra **pūrvapaścimau kṣaṇāv atītānāgatau**. pūrvaḥ kṣaṇo 'tītaḥ paścimo 'nāgataḥ. m***adhyamaḥ kṣaṇaḥ pratyutpanna***[28] ity atīte 'dhvani trayo 'dhvānaḥ prāpnuvanti.

III – 2 – 4　(471, 3 – 5)

ata eṣāṃ sarveṣāṃ tṛtīyaḥ śobhana [AK V 26c₁] iti Vaibhāṣikaḥ.

III – 2 – 5　(471, 5 – 6)

kathaṃ kṛtvā śobhana ity āha yasmāt tasya **adhvānaḥ kāritreṇa vyava-sthitaḥ** [26c₂d].

IV

IV – 1　(471, 7 – 27)

kāritraṃ punaḥ cakṣurādīnāṃ darśanādīnîti. rūpādīnām api svendri-yagocaratvaṃ kāritram. **yady evam** iti vistaraḥ. yadi kāritreṇa vyavasthāpitāḥ. **tatsabhāgasya cakṣuṣaḥ kiṃ kāritram**. yad dhi kāritra-lakṣaṇaṃ svakarma na karoti tat tat sabhāgaḥ. tasya ca nâsti kāritraṃ darśanalakṣaṇam. kathaṃ tat pratyutpannam ity abhiprāyaḥ.

---

[28] SA 471, 2: madhyamaḥ pratyutpannaḥ. cf. D 115a, P 130a8: dbus kyi skad cig ma ni da ltar byung ba yin. AKBh: madhyamaḥ kṣaṇaḥ pratyutpannaḥ.

phaladāna***pratigraha***[29] iti. tac cakṣuḥ svaniṣyandaphalaṃ parigr̥hṇāty ākṣipati. phalaṃ ca dadāti niṣyandaphalam anantaraṃ dadāti puruṣakāraphalaṃ ca. yady api darśanakāritraṃ na karoti. anyat tu phalaṃ karotîti. tasya phaladānaparigraha-sadbhāvāt tat pratyutpannam iti vyavasthāpyate.

atītānām api tarhi sabhāgahetvādīnām ity **ādi**śabdena vipākahetvādīnāṃ parigrahaṇam. teṣāṃ **phaladānāt**. **vartamānābhyatītau dvāv eko 'tītaḥ prayacchati** [AK I 59cd] iti vacanāt. **kāritraprasaṅgaḥ**. kāritram astīti. tataś câiṣāṃ sabhāgahetvādīnām atītānāṃ vartamānatvaprasaṅgaḥ. vartamānavat kāritrasadbhāvād iti lakṣaṇasaṃkaraḥ.

brūyās tvaṃ yeṣāṃ phalaparigrahaḥ phaladānaṃ côbhayam asti te vartamānāḥ. yeṣāṃ tv ekataram na te vartamānā iti. tata idam ucyate. **ardhakāritrasya vê**ti prasaṅga ity adhikr̥iam. **ardhakāritrasya vā** prasaṅgaḥ. ardhavartamānā iti vā te 'tītāḥ prasajyante. uparataphalaparigrahakāritratvād dhi te 'tītalakṣaṇayuktāḥ. vartamānaphaladānakāritratvāc a vartamānalakṣaṇayuktā iti. sa eva **lakṣaṇasaṃkara**doṣaḥ. etad dhy atītādīnām adhvanāṃ lakṣaṇam iṣṭam. uparatakāritram atītam aprāptakāritram anāgataṃ prāptānuparatakāritraṃ vartamānam iti.

IV – 2 (471, 27 – 472, 1)

kiṃ vighnam [AK V 27a₁] iti. napuṃsakaliṅgam etac chabdarūpam. ko vibandha ity arthaḥ. ko vighno 'syêti *kiṃvighnaṃ*[30] kāritram ity apare.

pratyayānām asāmagryam iti cet. tatrâitat syāt. **pratyayānāṃ** hetusamanantarādīnām **asāmagryam**. ato na sarvadā kāritraṃ karotîti. **na**. **nityam astitvābhyupagamāt**. na pratyayānām asāmagryaṃ kalpayituṃ

---

[29] AKBh: -pratigrahaṇa. cf. D 115a7, P 130b4: 'dzin pa. 但し、SA 471, n.3 には、"parigraha would be preferable."とあるのは、この後に"parigrah-"が多出するからであろうが、『倶舎論』の語の引用であるなら、"prati-graha"でよいと思われる。

[30] SA 471, 30: kiṃ vighnaṃ.

yujyate. yasmād iha bhavadbhir **nityaṃ** pratyayānām ［472］ **astitvam** abhyupagamyate. satām avināśāt.

IV－3　(472, 1－10)

yac ca tat kāritrm atītam iti vistaraḥ. **yac ca kāritram atītam** ucyate **anāgataṃ pratyutpannam** iti **côcyate**. siddhānta uparatakāritram atītam ity evamādivacanāt. **kiṃ kāritrasyâpy anyat kāritram** ***asti***[31]. yatas tasyâtītādi-tvaṃ kathayate. yady asty anavasthāprasaṅgaḥ. na ced asti *yathânāgatāditvaṃ*[32] *kāritrasya svarūpasattāpekṣayâivaṃ bhāvānām apy anāgatāditvaṃ bhaviṣyati. kiṃ kāritrakalpanayā.*[33] **katham tad**[34] ［AK V 27a2］ atītam ityādi.

atha tan āivātītam iti vistaraḥ. yan **nâivâtītaṃ nâpy anāgataṃ na pratyutpannaṃ** tad asaṃskṛtam ity **asaṃskṛtatvān nityam astîti prāptam**. kāritram ity adhikṛtam. tataḥ kim ity āha. **ato na vaktavyaṃ yadā kāritraṃ na karoti dharmas tadânāgata** iti. kāritrasya kartum aśakya-tvaprāpteḥ.

IV－4

IV－4－1　(472, 10－20)

syād eṣa doṣa iti vistaraḥ. **syād eṣa doṣaḥ** kāritrasyânyat kāritram ity atiprasaṅgo 'saṃskṛtatvaprasaṅgo vā **yadi dharmāt kāritram anyat syāt. tat tu khalu nânyad** ［AK V 27a3］ iti. **nâiṣa doṣaḥ. tenâivâtmanêti**. yaḥ pratyutpannasya svabhāvaḥ. tenêty arthaḥ.

kim asya pūrvaṃ nâsīd ity anāgatāvasthāyām. yadi kāritram ananyatvād dharma eva nâsīd ity uktaṃ bhavet. **kiṃ ca paśān nâstîty** atītāvasthāyām. yadi kāritraṃ dharma eva nâstîty uktaṃ bhavet. dharmakāritrayor ananya-tvāt. **yady abhūtrā bhavatîti nêṣyate** pratyutpanno na sidhyati. **bhūtvā ca**

---

[31] AKBh: asti kāritram.

[32] SA 472, 5: athânāgatāditvaṃ.

[33] チベット語訳に欠落。D 116a3, P 131a8.

[34] AK V $27a_2$: tat katham.

punar na bhavatîti yadi nêṣyate 'tīto 'dhvā na sidhyati. anāgatas tu yo na tāvad abhūtvā bhavatîty arthād gamyate. evam adhavatrayaṃ sidhyaty ato 'nyathā na sidhyatîti vākyārthaḥ.

IV – 4 – 2　(472, 20 – 33)

utpādavināśayor ayogād iti. sarvakālāstitvād **utpādavināśayor ayogaḥ**. tasmād **vāṅmātram** etat **saṃskṛtalakṣaṇayogān na śāśvatatvaprasaṅga** iti. **apūrvâiṣā vāco yuktir** iti. pūrvāparaviruddhâiṣā **vāco yuktir** ity arthaḥ. sarvadā câsty utpādavināśābhyāṃ ca yujyata iti. **svabhāvaḥ sarvadā âstîti**. yad rūpādeḥ svalakṣaṇam tat sarvasmin kāle vidyata itîṣyate. yadi rūpādeḥ svabhāvaḥ sarvadâsti tena rūpādibhāvo nityaḥ prāpnoti. ata āha. **bhāvo nityaś ca nêṣyate**. evaṃ sati tasmāt svabhāvād bhāvo nūnam anya iti. ata āha. **na ca svabhāvād bhāvo 'nya** iti. tad *idam icchāmātratvāt*[35] **vyaktam īśvaraceṣṭitam**. nâtra yuktir asti.

V

V – 1 – 1　(472, 33 – 473, 14)

atītaṃ tu yad bhūtapūrvam iti. na svalakṣaṇenâstîti darśa [473] yati. **anāgataṃ yat sati hetau bhaviṣyatīti**. avidyamānam api hetusadbhāvād vyavasthāpyata iti darśayati. **evaṃ hi kṛtvâsty ucyata** iti. bhūtapūrvaṃ bhaviṣyati cêti kṛtvā. **na tu punar dravyata** *eva*[36] bhavati **hetuphalāpavādadṛṣṭipratiṣedhārtham** iti.

hetvapvādadṛṣṭipratiṣedhārtham asty atītam ity uktam. phalāpavādadṛṣṭipratiṣedhārtham **asty anāgatam** iti. āsīd atītaṃ ity uktam. phalāpavādadṛṣṭipratiṣedhārtham asty anāgatam iti. āsīd atītaṃ bhaviṣyaty anāgatam iti vaktavye 'stîti vacanam **astiśabdasya nipātatvāt**. trikālaviṣayo hi

[35] SA 472, 5: idam-icchā-mātratvāt. cf. D 116b5, P 132a4: 'di ni 'dod rgyal tsam du zad pa'i phyir ro（P には "ro"なし）.

[36] SA 473, 3: evam. cf. D116b7, P 132a6: [rdzas su yod pa ni ma yin pa] nyid do.

nipātaḥ. āsīdarthe bhaviṣyadarthe 'pi vartate. **yathâsti dīpasyêti** vistaraḥ. **yathâsti dīpasya prāgabhāvo 'sti paścādabhāva iti vaktāro bhavanti**. na ca dravyato 'sti. **yathā câsti niruddhaḥ sa** ***pradīpo***[37] **na tu mayā nirodhita** iti vaktāro bhavanti. na câstiprayogān niruddho 'py asāv astîti. nanu ca Vaibhāṣikasya niruddho 'py asāv astîti. satyam asti. na tu pradīparūpatām eva bibhrāṇaḥ so 'sti. **evam atītānāgatam** ***apy***[38] **astîty uktam**. asaty api dravyasattve. **anyathā hy** ***atītānāgata***[39] **eva na sidhyet**. yadi tenâiva lakṣaṇena vidyetâtītānāgata eva na sidhyed ity arthaḥ.

V－1－2　(473, 14 - 474, 1)

yaṃ bhūtapūrvaṃ **yat tarhi Laguḍaśikhīyakān** iti vistaraḥ. “Laguḍaśikhīyakaiḥ parivrājakair” *Āryanidānaṃ*[40] *Nālandāyāṃ*[41] Buddha-bhāṣitaṃ ca sūtram Saṃyuktakāgame ca "Āryamahāmaudgalyāyanaś ca mārita” ity āhur abhiyuktāḥ “yato no mārita" ity. atra sūtra evaṃ paṭhyate, Laguḍaśikhīyakāḥ parivrājakā ānantaryakāriṇo yat karmābhyatītaṃ tan nâstîty evammvādina iti vistaraḥ. **kiṃ te** Laguḍaśikhīyakāḥ parivrājakās **tasya karmaṇa** ānantaryasya **bhūtapūrvatvaṃ nêcchanti**. etad uktam bhavati. icchanti sma te tasya karmaṇo bhūtapūrvatvam. kiṃ tu na dravyam iti. tasmin karmaṇi te vipratipannāḥ nâsti tat karmābhyatītam iti. yato Bhagavatā yatra te vipratipannāḥ svabhāve tat karmābhyatītam astîti vistareṇa tasmād asti svabhāvenâtītam iti vistaraḥ.

tatra punaḥ sūtre yad bhūtapūrvaṃ karma na tad evâtītam ity abhisammdhāyôktaṃ tat karmâstîti. kiṃ tarhi. **tadāhitaṃ** tena bhūtapūrveṇa karmaṇ**āhitam** arpitam. **tasyāṃ saṃtatau phaladānasāmarthyaṃ saṃdhāyôktam** ity anenâbhiprāyeṇôktam iti. kathaṃ gamyata ity āha.

---

[37] AKBh: dīpo.
[38] SA 473, 12 には、“apy”なし。cf. D 117a4, P 132b3: ［‘das pa dang ma ‘ons pa］ yang ［yod do］. AKBh: atītānāgatam apy...
[39] AKBh: atītānāgatabhāva...
[40] SA 473, 15: nâryo nidānam. D 117a5, P 132b4: ‘phags pa’i gleng gzhi yul.
[41] SA 473, 15: Nālaṃdāyā. D 117a5, P 132b4: nalāndar.

anyathā hi svena bhāvena vidyamānam atītaṃ na sidhyed iti. sva-lakṣaṇena **vidyamānaṃ** tat karma pratyutpannalakṣaṇena **vidyamānam atītam** iti **na sidhyet**. pratyutpannam eva sidhyed ity abhiprāyaḥ. **tadāhitam** iti vis [474] tareṇâivam ucyamāne 'bhyatītaṃ tat karmâstîti sidhyati.

V – 1 – 3 (474, 1 – 10)

itthaṃ câitad evam iti. yathânāgataṃ dravyato nâsty atītam cêti. **va-rtamāne 'dhvanîti** vistaraḥ. vartamānabhāven**âbhūtvā bhavatî**ty arthaḥ. **na. adhvano bhāvād anarthāntaratvāt.** *nâitad evam*[42]. **adhvanaḥ** pratyut-pannasya **bhāvāc** cakṣuḥsaṃjñakād **anarthāntaratvāt**. adravyāntaratvād ity arthaḥ. ya eva vartamāno 'dhvā sa eva bhāvaḥ. tat kathaṃ sa eva va-rtamānaḥ svātmany adhvāny abhūtvā bhaviṣyati. tathā hy uktaṃ **ta evâdhvā kathāvastv** [AK I 7c] iti. **atha svātmani** cakṣuṣi cakṣur **abhūtvā bhavati siddham idam anāgataṃ cakṣur nâstî**ti.

V – 2

V – 2 – 1 (474, 10 – 15)

ālaṃbanamātram iti. **mātra**śabdo janakatvavyāvartanārthaḥ. tadrūpo-tpatter ālaṃbanaṃ dharmā ity abhiprāyaḥ. **yad anāgataṃ** ***kalpasahasreṇa***[43] iti. saṃnikṛṣṭam apy anāgataṃ janakaṃ na yujyate. kim aṅgāticireṇa kālena **yad bhaviṣyati**. na hi pūrvakālīnasya phalasya paśātkālīno hetur yujyata iti. n**irvāṇaṃ cê**ti. nirvāṇaṃ hi vijñānaṃ *nirodhān*[44] na janayet. *saṃsārapravṛttinirodhād*[45] ity abhiprāyaḥ.

---

[42] SA 474, 4: nâiva tad evam. n.2…2 には、“nâitad evam? ”とある。

[43] SA 474, 11: sahasrair. cf. D 118a1, P 133b1: bskal pa stong na.

[44] SA 474, 14: viruddhān. cf. D 118a2, P 133b3: ‘gag par byed…phyir.

[45] D 118a2, P 133b3: ‘khor ba’i ‘jug pa dang ‘gal ba’i phyir. “’gal ba”は、ふつう” virodha”の訳語（“’gag ba”は”nirodha”）であるが、ここでは逆転しているようにも取れる。なお、AKBh の相当箇所も、”nirodha”が“’gal ba”と訳されている。訳者または書写上の混乱か否かは不明。

V－2－2　(474, 15－23)

abhūd bhaviṣyati cêti. yad vartamānāvasthāyāṃ rūpam **abhūd bhaviṣyati ca**. tad ālaṃbanam ity arthaḥ. kathaṃ jñāyata evaṃ tad ālaṃbyate na punar astîty ata āha. **na hi kaścid atītaṃ rūpaṃ vedanāṃ vā smarann asîti paśyati. kiṃ tarhi. abhūd** iti smarati tad rūpaṃ yathādr̥ṣṭaṃ yathānubûtaṃ ca vedanāṃ cakṣurvijñānānubhavabalena. **yathā khalv apî**ti vistareṇâcārya evôpacayahetum āha. vartamānarūpam iva bhūtaṃ bhaviṣyac ca gr̥hyata ity abhiprāyaḥ. ***yadi ca tathâivâstîti*** *yathā vartamānaṃ* ***vartamānaṃ tat prāpnoti***.[46] **atha nâsti tat tathâivâsad apy ālaṃbanaṃ bhavatîti siddham**. varthamānavad rūpasyâbhâat. tasya ca smaryamāṇatvāt.

V－2－3　(474, 23－475, 11)

tad eva tadvikīrṇam iti. yad eva tad vartamānam tad eva **vikīrṇam** atītānāgatam. **na. vikīrṇasyâgrahaṇād** iti, **na** yuktam etat. **vikīrṇasyâgrahaṇāt**. pūrvaṃ na vikīrṇam idānīṃ vikīrṇam etad rūpam ity evam asyâgrahaṇāt. **yadi ca tat tad evêti** vistaraḥ. **yadi ca** vartamānāvasthāyām piṇḍībhūtaṃ **rūpaṃ** tad atītāvasthāyām anāgatāvasthāyāṃ ca **paramāṇuśo vibhaktam**. ato na vartamānavat gr̥hyate. **evaṃ sati** tādavasthyān **nityāḥ paramāṇavaḥ** syuḥ. anāgataḥ pratyutpannā atītāś ca ta eva ta iti. **evaṃ ca sati paramāṇusaṃcayavibhāgamātram eva prāpnoti. na tu** kaścid utpādo nâpi nirodha **ity Ājīvikānāṃ** pāṣaṇḍināṃ **vādaḥ** parigr̥hīto **bhavati**. tathā cêṣyamāṇe **sūtram** apāstaṃ bhavati. **cakṣur** bḥikṣava **utpadyamānaṃ** [475] **na kutaścid āgacchati**. nirudhyamānaṃ na kvacit saṃnicayaṃ gacchati. iti hi bhikṣavaś cakṣur abhūtvā bhavati bhūtvā ca prativigacchatîti. kathaṃ punar idaṃ **sūtram apaviddhaṃ** virodhitaṃ bhavati. yasmāc cakṣur utpadyamānaṃ svena rūpeṇa na kutaścid āgacchatîty etat

---

[46] AKBh: yadi ca tat tathâivâsti vartamānaṃ prāpnoti.

padaṃ bādhitaṃ bhavati. nirudhyamānaṃ na kvacit saṃnicayaṃ gacchatîty etad api padaṃ bādhitaṃ bhavati. atīte 'dhvani tatparamāṇūnāṃ viprakīrṇasaṃcitatvābhyupagamāt.

aparamāṇusaṃcitānām iti. **vedanādīnām** aparamāṇvātmanāṃ **kathaṃ viprakīrṇatvam**. mūrtānāṃ hi saṃcitatvaṃ viprakīrṇatvaṃ *vā bhavad*[47] bhaven nâmūrtānāṃ. **te 'pi ca yathôtpannānubhūtāḥ smaryanta** iti. vartamānarūpā eva smaryante. **yadi ca te tathâiva santi**. yathā vartamānā **nityāḥ prāpnuvanti. atha na santi** tadrūpāḥ **asad apy ālaṃbanam iti siddham.**

V – 2 – 4 (475, 11 - 34)

trayodaśam apy āyatanam ālaṃbanaṃ **syād** iti. trayodaśānām āyatanānāṃ pūraṇaṃ trayodaśam āyatanam. tad vijñānasyâlaṃbanaṃ syāt. asadālaṃbanatva iṣyamāṇe tadālaṃbanaṃ vā vijñānaṃ syāt. evaṃ Vaibhāṣikeṇôkta ācārya āha. **atha trayodaśam** iti vistaraḥ. **etad eva nāmêti** Vaibhāṣikāḥ. yad etan nāma trayodaśam āyatanam iti tad **ālaṃbanam. evaṃ tarhi nāmâiva nâstîti pratīyeta**. nâbhidheyaṃ trayodaśāyatanābhāvalakṣaṇam.

kiṃ ca **yaś ca śabdasya prāgabhāvam ālaṃbate kiṃ tasyâlaṃbanam**. bhavatîti vākyaśeṣaḥ. evaṃprakṛte[48] Vaibhāṣika āha. **śabda evâlaṃbanam** iti prakṛtam. **evaṃ tarhîti** vistareṇâcāryaḥ. yaḥ śabdasya prāgabhāvam ālaṃbate śabda eva tenâlaṃbito bhavati. na prāgabhāvaḥ. prāptam idaṃ bhavati. **yaḥ śabdābhāvaṃ prārthayate tasya śabda eva kartavyaḥ syād** iti.

anāgatāvastha iti cet. syān matam. yasyâsau prāgabhāvaḥ so **'nāgatāvasthas** tenâlaṃbyate. tasmād yaḥ śabdābhāvaṃ prārthayate na

---

[47] SA 475, 8: vā 'bhavad. cf. D 118b5-6, P 134a8: …lu can rnams la 'gyur gyi lus can ma yin pa rnams la ni ma yin no.
[48] SA 475, 18: evaṃ prakṛte. D 119a2-3, P 134b6: de lta bu'i gnas su.

tasya śabda eva kartavyaḥ syād iti. tad ucyate. **sati kathaṃ** ***nāstibuddhir***[49] iti. vidyamāne tasmin śabde yasyâsau prāgabhāvaḥ **katham** asya **nāstibuddhir** yā prāgabhāvam ālaṃbate.

vartamāno nâstîti cet. tatrâitat syāt vartamāno nâstîty evaṃ tadālaṃbanān nāstibuddhis tasyôtpadyata iti. **na**. **ekatvāt**. yad eva tad anāgatam. tad eva vartamānaṃ bhavati. na tasmād anyad iti. kathaṃ tasminn eva vartamāne nāstibuddhir utpadyate.

yo vā tasya viśeṣaḥ. **yo vā tasyâ**nāgatasya paśād **viśeṣo** vartamānāvathāyām bhavati. tatra viśeṣe vartamāno nâstîti tadbuddhir utpadyate. **tasyâbhūtvābhāvasiddhiḥ**. **tasya** viśeṣasy**âbhūtvā** pūrvaṃ paścād **bhāvaḥ**. tasya **siddhir** iti. **bhāvaś câbhāvaś cêti**. **bhāvo** vartamānāvasthāyām **abhāvo** 'tītānāgatāvasthayoḥ. iti vijñānasyôbhayam ālaṃbanaṃ bhavati.

V－2－5　(475, 34－476, 15)

yady abhāvo vijñānasyâlaṃbanaṃ **yat tarhîti** vis [476] taraḥ. **bodhisattvena** caramabhavikenâivam **uktam**. ***yal loke nâsti***[50] **taj jñāsyāmîty** eṣa saṃbhavo nâstîti vacanād abhāvālaṃbanaṃ na bhavatîti darśitaṃ bhavati.

ācāryo 'nyābhiprāyatām asya sūtrasya darśayann āha. **apara ābhimānikā** iti vistaraḥ. apariśuddhasamādhayo **'para ābhimānikā bhavanty asantam apy avabhāsaṃ**. divyacakṣuravabhāsaṃ prayogāvasthāyāṃ **santam** ity eva **paśyanti**. **ahaṃ tu santam evâ**vabhāsaṃ pūrvarūpaṃ divyacakṣuṣo **'stîti paśyāmîty ayaṃ tatra** sūtre **'bhiprāyaḥ**.

kuto 'sya vimarśa iti. sarvabuddhīnāṃ sadviṣayatve vyavasthāpyamāne **kuto 'sya vimarśo** vicāraḥ saṃdeho vā **syāt**. **yad uta loke nâstîti** vistareṇa

---

[49] SA 475, 24: nâstîti buddhir. D 119a5, P 135a1: med pa'i blor.
[50] SA 476, 1: lokenâsti.

ya uktaḥ. *sadasadālaṃbanatve*[51] tu buddhīnām ayaṃ vimarshaḥ saṃbhavati. nânyathā.

ko vā viśeṣa iti. **ko vā** bodhisattvasyânyebhyo **viśeṣo**[52] yadi te 'pi santam evâvabhāsaṃ paśyanti nâsantam. sadasadālaṃbanatve hi buddhīnām ayaṃ viśeṣo bhavati.

itthaṃ câitad evaṃ *sadasadālaṃbanā*[53] buddhaya iti. **sac ca sato jñāsyaty asac câsata** itîdam atrôdāharaṇam. ***sac ca*** *vastu sattvataḥ* ***paraiṣyati*** *jñāsyati*[54]. **asac câ**sattvata ity asadālaṃbanā buddhaya iti siddham.

V – 3 (476, 15 - 16)

tasmād ayam apy ahetur iti. yad etad bodhisattvenôktam iti.

V – 4

V – 4 – 1 (476, 16 - 17)

tatpūrvakād iti. karma**pūrvakāt** citta**saṃtānaviśeṣāt**. **ātmavāda-pratiṣedha** iti. śāstrāvasāne Vātsīputrīyamatapratiṣedhe.

V – 4 – 2 (476, 17 - 477, 1)

utpādas tarhi adhūtvā bhavatîti. utpādaḥ pūrvaṃ nâstîdānīṃ bhavatîti siddho 'pūrvaprādurbhāvaḥ. utpādasyôtapādavartā saha tulyavārttatvāt.

atha ***sarvam evâstîti***[55]. utpādo 'pi yady asti. na kevalaṃ hetur anāgataṃ ca phalam ity abhiprāyaḥ. **kasyêdānīṃ kva sāmarthyam** iti. **kasya** hetoḥ

---

[51] SA 476, 9: sadasadālaṃbane. D 119b5, P 135b2-3: dmigs pa yod pa dang med pa nyid gcig yin na ni...

[52] SA 476, 10: viśeṣaḥ.

[53] SA 476, 12: sat. asadālaṃbanā.

[54] D 119b7-120a1, P 135b5-6: dngos po yod pa la yang yod pa nyid du shes so || khyad par du 'gro 'o zhes bya ba ni bye brag tu shes par 'gyur ba'o. チベット語訳から、以下のようなサンスクリットが考えられる。" sac ca vastu sattvataḥ [jñāsyati viśeṣāya] paraiṣyati [viśeṣeṇa] jñāsyati."

[55] SA 476,19: sarva evâstîti. AKBh: sarvam eva câsti.

kva phale **sāmarthyam**. *hetur hi*[56] yathokta utpādaḥ phalaṃ cânāgatam astîti.

vartamānīkaraṇa iti Vaibhāṣikaḥ. **kim** ***idaṃ***[57] **vartamānīkaraṇam** iti vistareṇâcāryaḥ. nôtpādo vartamānīkaraṇam. tasya vidyamānatvāt. ata evaṃ pṛcchati. **deśāntarākarṣaṇaṃ cet**. yadi manyase hetunā phalasya **deśāntarākarṣaṇaṃ** vartamānīkaraṇam iti. atra brūmaḥ. **nityaṃ prasaktam**. phalaṃ iti vākyaśeṣaḥ. kevalaṃ deśāntarād deśāntarākarṣaṇaṃ na kiṃcid apūrvam utpadyata iti **nityaṃ prasaktam**. **arūpiṇāṃ ca** vedanādīnām. **kathaṃ** ***tad*** *deśāntarākarṣaṇam*[58]. amūrtatvenâdeśasthatvān na tad yujyata ity abhiprāyaḥ. **yac ca tad ākarṣaṇaṃ** kriyāsaṃjñakam. **tad abhūtvā bhūtam** ity abhūtvābhāvasiddhir ity abhiprāyaḥ. **svabhāvaviśeṣaṇaṃ cet**. yadi manyase hetunā svabhāvo 'sya phalasya viśeṣyate. tena phalaviśeṣaṇaṃ bhavatîti. atra brūmaḥ. **siddham abhūtvābhavanam** iti. **siddham abhūtvā** viśe-［477］ṣaṇasya **bhavanaṃ** prādurbhāva iti.

VI　(477, 1 - 26)

adhvatrayaṃ vā. kim. sarvam astîty adhikṛtam. **yathā** ***tu***[59] **tad asti tathôktam** iti. yad bhūtapūrvaṃ tad atītam. yat sati hetau bhaviṣyati tad anāgatam. yad bhūtvâvinaṣṭaṃ tat pratyutpannam ity evaṃ sarvāstivādaḥ śāsane sādhuru bhavati.　**kathaṃ tena tasmin vā saṃyukta** iti.

kathaṃ tenâtītānāgatena kleśena **tasmin vâ**tītānāgate vastuni ***saṃyukta***[60] iti. **tajjataddhetvanuśayabhāvāt kleśenêti**. tasmād atītāj jātas **tajjaḥ**. tasyânāgatasya hetus **taddhetuḥ**. tajjaś câsau taddhetuś ca **tajjataddhetuḥ**. **tajjataddhetur anuśayo** bījaṃ **tajjataddhetvanuśayaḥ**. tasya **bhāvāt**.

---

[56] SA 476, 21: hetuś ca. D 120a4, P 136a2-3: rgyu dang. しかし、SA 476, n.5 には、「写本では" hetur hi"」とある。

[57] SA 476, 22: idānīm. cf. D 120a5, P 136a3: da ltar du byed pa zhes (P: no) bya ba 'di...

[58] SA 476, 28: tad-deśāṃtar'ākarṣaṇā.

[59] SA 477, 2: 'tra. AKBh: tu.

[60] SA 477, 5-6: kathaṃ saṃyukta.

atītenânāgatena ca **kleśena** yathākramaṃ saṃyuktaḥ. tad atītānāgataṃ vastv ālaṃbanam asyêti **tadālaṃbanaḥ kleśas** tasy**ānuśayaḥ**. tasya **bhāvād** atīte 'nāgate ca **vastuni** yathākramaṃ **saṃyukta** iti.

dharmatê [AK V 27d] ti. dharmāṇāṃ svabhāvaḥ. atītādikādhvavyavasthāne sati tatsaṃvyavahāravyutpādanārtham āha. **asti paryāya** ityādi. asti vacanakramaḥ. **yad utpadyate tan nirudhyata** ity uktvā dṛṣṭāntam āha. **rūpaṃ utpadyate rūpaṃ nirudhyate** dravyānanyatvāt. **anyad utpadyate 'nyan nirudhyate. anāgatam utpadyate** 'nyadutpādābhimukhatvāt. **vartamānaṃ nirudhyate** 'nyannirodhābhimukhatvāt. **adhvâpy utpadyate utpadyamānasya** dharmasy**âdhvasaṃgṛhītatvād** adhvasvabhāvatvād ity arthaḥ. **ta evâdhvā kathāvastv** [AK I 7c] iti lakṣaṇāt. **adhvano 'py** upādānarūpād **utpadyate** dharmaḥ. kasmād ity āha. **anekakṣaṇikatvād anāgatasyādhvana** iti. yasmād anekeṣāṃ kṣaṇānām anāgatānāṃ rāśirūpāṇāṃ kaścid eva kṣaṇa utpadyate ato **'dhvano 'py utpadyata** ity ucyate.

prasaṅgenâgatam iti. **śeṣais tu sarvaiḥ sarvatrê**ti [AK V $24c_2d$] **prasaṅgenâgatam** atītānāgatavicāraṇam.

(SA 終)

第３章　TA[T]『倶舎論真実義釈』（安慧）

D 135a1-150b1; P 270a6-P288a4

第１節　和訳（構成は第１章第１節（２）参照）

I　序　D 135a1-5; P 270a6-b3.

ところで、この過去や未来のものは実在するのか[1]とは、現在のものと同様に本体または本性[2]をもって存在するのか、ということである。**あるいは［実在し］ないのか**とは現在のものと同様に本性をもって存在しないのか、ということである。そこで、［実在する場合：］未来のものは本性がまだ得られていないのであるから、そして、過去のものは本性が消滅しているのであるから、［実在する、即ち］すべての時間に存在するとはどういうことであるか。現在のものが過去または未来の位態にあるということなら、恒常であるということになる。［実在しない場合：］**どうしてそれに対して**とは、［どうして］過去・未来のものに対して、である。**それと**とは、過去・未来の随眠と、である。**結びつき、また、離れるのか**とは、二者（過去・未来）とも決して存在しないのであるから、存在しないものに［対して］存在しないものと結びつき、また、離れるのは不合理である、ということである。

因果的存在（有為）の特徴と結びつくから、因果的諸存在が恒常であるとは認められない[3]とは、因果的存在である諸々の存在要素は有為の特

---

[1] AKBh 295, 2~：「ところで、この過去や未来のものは実在するのか、あるいは［実在し］ないのか。もし［実］在するなら、因果的存在はすべての時間に存在することになるから、恒常であるということになる。また、もし［実］在しないなら、どうしてそれに対してそれと結びつき、また、離れるのか」。

[2] 以下においては、rang gi ngo bo（svabhāva） 及び rang gi mtshan nyid（svalakṣaṇa） はいずれも原則として「本性」と訳す。

[3] AKBh 295, 4~.

徴により時間を移行していくのであって、諸々の時間を行く［その］諸々［の存在要素］が恒常であるのは不合理である、ということである。

Ⅱ　三世実有説　D 135a5; P 270b3.

しかし、明らかに主張される[4]とは、［過去・未来のものも］現在のものと同様に本性をもって存在する［と主張される］、ということである。

Ⅱ－1　第一教証　D 135a5-8; P 270b3-6.

どうして[5]それらはそのようであると主張されるのか。経典、論理あるいは［その］両者に依拠してであるか、というのが質問の意図である。**説かれているから**[6]によって、まず経典が示される。なぜなら、「過去の物はある。未来の物はある」と直接に過去と未来の存在が説かれているからである。どうして現在には言及されていないのかと言うなら［、答えよう］。「比丘らよ、現在の物がなかったなら、教えを聞いた聖弟子は、厭い、欲望を捨て、消滅するために修行することがないことになるであろう」ということには、両者に矛盾対立する主張はないからである[7]。

Ⅱ－2　第二教証　D 135a8-b2; P 270b6-271a1.

二に依って[8]云々と。こ［の経典］では、過去・未来の存在が暗示的に説かれているのである。すなわち、前［の経典］で直接に説かれたものと異なる[9]。ここでは、「眼と色形とに依って、ないし、意と観念とに依っ

---

[4] AKBh 295, 5.
[5] AKBh 295, 7.
[6] AK V 25a2.
[7] cf. SA 469, 8-10. 本書第２章参照。cf. LA P141b1-2.
[8] AKBh 295, 14.
[9] cf. SA 469, 12-13. 本書第２章（秋本 1992: 84）参照。

て」と、六認識は拠り所（感官）[10]と対象とによって決定されると言われている。が、もし［二に依ってという］限定がないと言われ、対象がなくても認識が生じると考えられるなら、盲人などについても拠り所がなくても認識は生じるとどうして考えられないことがあろうか。［認識の］原因としての限定がないからである。

II－3　第一理証　D 135b2-4; P 271a1-4.

非存在は六対象に含まれないから、非存在を対象とする認識は存在しない。**従って、［過去・未来のものがないなら］対象が存在しないから認識そのものもないということになる**[11]とは、認識は各々の存在を知るものであるが、認識の対象が存在しないときにはこれ（認識）によって知られるべきものはないから、認識はないということになる、ということである[12]。独自相も一般相もないとき、それ（認識）によって知覚されたり思惟されたりするであろうか[13]。

II－4　第二理証　D 135b4-6; P 271a4-5.

結果が生じるとき[14]云々と。「善悪の行為は消滅して後長い時を経ているから、消滅して［もはや］存在しないのである」ということなら、原因がないことであるから、異熟果も生じることはない。原因のないものは生じないのである。過大適用の過失に陥るからである。

---

[10] AKBh 11, 26~: evam āśrayāśritālambanaṣaṭkavyavasthānād aṣṭādaśadhātavo bhavantîti. 櫻部 1975:169 参照。
[11] AKBh 295, 19.
[12] =TSP 616, 5-6 ; =LA 141b6.
[13] この文は SA, TSP になし。=LA 141b7.
[14] AKBh 295, 21

II－5　説一切有部と呼ばれる理由[15]　D 135b6-7; P 271a5-8.

［すべてがあると説く者＝説一切有部によって］**必ずこのことが認められるであろう、と伝説される**[16]云々と。なぜなら、「説一切有部」という語が［その主張を知る］根拠となっているからである。それゆえにこそ、**それがあると説くから説一切有部**［と認められる］[17]と言われる。三時の意味で「すべて」という語が必ず言及されるから、「すべて」という語によって三時が言われているのである。他の部派で、「結果の生じていない［行為］は存在する」と説く人々は分別説部である。経量部の人々は現在のみ［存在する］と説く。

III－1　四大論師の異説

III－1－1　第一説［ダルマトラータ（法救）説］　D 135b7-136a5; P 271a8-b6.

存在要素は［三］**時を行くとき、様態の違いはある**とは、未来などの様態の変化［はある］、である。ここでは、未来の様態を捨てて現在の様態となり、現在の様態を捨てて過去の様態となる［ということを言う］。**実体に違いはない**とは、実体の本性に違いはない、である。様態は［三］時を行くとき［変化しても］、本性を逸脱しない（＝本性は変わらない）からである。さもなければ、未来・現在・過去のものはそれぞれ別のものということになる[18]。また、もしこの過去等の様態とは何かと問うなら、それによって過去・未来・現在であるという認識と表現が生じるような特殊な属性である。例えば**金の器**［云々］は、まさにそれ（特殊な属性）に関する二つの喩例［即ち］金と牛乳［のことを言う］。すなわち、二つとも色などの集合体をその本質としているが、そのなかでも腕環・腕輪等

---

[15] II-1 以下及び III は、江島 1986 に訳されているが、筆者と読み方の異なる部分がある。また、筆者が註記を少し付加した箇所もある。

[16] AKBh 296, 1~.

[17] AK V $25cd_1$.

[18] 江島 1986: n.19 参照。cf. TSP 614, 12-13.

という表現の根拠であり属性と形態とを本質とするものだけが変化するのであって、色は［変化し］ない。同様に、**牛乳・ヨーグルト**・バターミルクという表現の根拠である**味・効力・熟成度**・活力が変化するのであって、色は［変化し］ない[19]。

III－1－2　第二説［ゴーシャカ（妙音）説］D 136a6-b1; P 271b6-272a1.

特徴の違いによるとする［ゴーシャカ］の論説は、特徴が生じることを見てのものである[20]。**例えば男が**［云々］と。彼（男）の本性の違いによって離貪の生起を得ると得ないとの違い［が起こる］[21]。もし未来のものが過去及び現在［の特徴］と離れているなら、未来のものが生じ［て現在のものにな］ることはなく、過去のものになることもないであろう。過去のものが未来及び現在［の特徴］と離れているなら、未来のものが現在のもの、また、過去のものになることもないであろう。もし現在のものが過去及び未来［の特徴］と離れているなら、未来のものが現在のものになり、現在のものが過去のものになることもないであろう[22]。

III－1－3　第三説［ヴァスミトラ（世友）説］　D 136b1-4; P 272a1-6.

それぞれの位態に達して［云々］[23]とは、未来の位態にあって未来というが、それ［存在要素］は現在ではなく、過去ではない。同様のことが現在のもの及び過去のものについても言われるべきである[24]。**実体の違いに**

---

[19] 江島 1986: 11-14 参照。 cf. SA 469, 20-25. 本書第２章（秋本 1991a: 85）参照。 TSP 614, 8-14 は「金」の例のみで、「牛乳」の例はない。また、「属性（guṇa）」のみであって「形態（dbyibs）」の語はない。

[20] cf. SA 469, 25. 本書第２章（秋本 1991a: 85）参照； TSP 614, 18.

[21] この文の意図は、「本性が変化しない限り、離貪は起こらない」ということであろう。

[22] cf. SA 469, 27-31, fn. 6. 本書第２章（秋本 1991a: 85）; 100, 10; 107, n.7）参照。江島 1986: n.30 参照。

[23] AKBh 296, 19~.

[24] LA P142b2-3; SA 470, 3-7; TSP 614, 21-23 はいずれも「作用」と絡ませてヴァスミトラ説を註釈している。江島 1986: n.32, 33 参照。

よる［即ち］実体の違いに基づく**のではない**とは、実体は三時のどこにあっても区別されない[25]からである[26]。彼の論説は位態から見てのものである[27]。それゆえにこそ、**例えば一つの計算棒**［云々］と言われる。土の［計算］玉である。
一の位にとは、一の場所に、である。**百の位に**とは、百の場所に、である。**千の位に**とは、千の場所に、である[28]。それ（計算棒）に本性の違いが生じるのではなくて、特定の場所と結びつくことによって数を表す［それぞれ］別の名称が生じるのである[29]。

III－1－4　第四説［ブッダデーヴァ（覚天）説］D 136b4-7; P 272a6-b2.

見方の違いによるとする云々と。**前後から見てそれぞれと呼ばれる**が、本性の違いによるのでもなく、実体の違いによるのでもない[30]。過去または現在から見て、後［即ち］未来、現在または未来から見て、前［即ち］過去、前または後［即ち］過去または未来から見て現在と［呼ばれるのである］[31]。彼の論説は前後から見てのものである[32]。前のみがあって後のないものが未来であり、後のみがあって前のないものが過去であり、前と後とがあるものが現在である[33]。他の人々は「いかばかりかは[34]前と後とがこれによって説明されるとは認められない」と言う。それゆえにこそ、

---

[25] TA[T] P272a3; D136b2: tha dad pa'i を tha mi dad pa'i と訂正。LA P142b4: tha mi dad pa'i. cf. TSP 614, 20-21; P115b7; D81a2: tha mi dad pa'i.
[26] cf. SA 470, 7-9. 本書第２章（秋本 1991a:85-86）参照。cf. TSP 614, 20-21.
[27] cf. SA 470, 3; TSP 614, 23.
[28] cf. SA 470, 9-11.
[29] cf. SA 470, 11-13; TSP 614, 24-25.
[30] 江島 1986: n.39 に関しては、AKBh の当該句と TA[T] のこの部分とに関係があるのか、また AKBh に当該句の入る必然性があるのか筆者には不明である（入って不都合ではないが）。
[31] 江島 1986: n.43 参照。cf. SA 470, 14-16.
[32] cf. SA 470, 16-17; TSP 615, 5.
[33] cf. TSP 615, 5-6.
[34] TA[T]: du tsam gyi は筆者には不明。

［例えば］**一人の女が母と呼ばれたり娘と**［呼ばれる］**ようにである**と言われる。前後から見てであって、実体の違いによるのではない[35]。

III－2　四異説中の第三説が有部の正統説

III－2－1　第一説批判　D 136b7-137a5; P 272b2-273a2.

［第一のダルマトラータは］**転変を説くから**云々と言う。サーンキヤ学派の定説は、「属性をもつものは実体としてあるかのように[36]、ミルクという属性を捨ててヨーグルトという属性を本質とするものとして確立され、ヨーグルトという属性を捨ててバターミルクなどを本質とするものに変化する」というものである[37]。同様に、彼（ダルモトラータ）の［説］も「実体が未来の様態を捨てて現在の様態になり、現在の様態を捨てて過去の様態になる。しかも、未来等の様態は実体と別のものではない」というものである。**サーンキヤ学派の主張に含められるべきである**とは、それ（サーンキヤ学派の主張）の否定はこれ（ダルマトラータ説）の［否定］でもあるということを示している[38]。

サンガバドラ師は、「しかし、私にとってそれは正しくない」と言う。何故かと問うなら、「［ダルマトラータ説は］類似したものが連続して起こることを意図してそのように説かれたのである。存続する［実体］のもつ或る属性が消滅して、別の属性が生じる[39]のではない。大徳ヴァスミト

---

[35] LA P142a2: rdzas ni gzhan ma yin no ‖ cf. SA P130a1: rdzas gzhan gyi sgo nas ni ma yin no ‖ （SA 470,19: pūrvāparāpekṣayā na dravyāntarata |）.

[36] TA[T]: grangs can gyi bzhin du … を誤とし、LA P143a2: grangs can gyi grub pa'i mtha' ni chos can rdzas nas bzhin du … を取る。江島 1986: 18 & n.49 参照。

[37] cf. SA 324, 31-325, 5 ad AKBh 159, 18-22.

[38] cf. SA 470,19-20; TSP 615, 8-9. 江島 1986: n.52 参照。

[39] AKBh 159, 18~.: [kathaṃ ca Sāṃkhyānāṃ pariṇāma|] avasthitasya dravyasya dharmāntaranivṛttau dharmāntaraprādurbhāva iti.

ラの認めるものと同義のこ［の説］を金とミルクの例によって示すから、これは［サーンキヤ学派の］転変説ではない」と言う[40]。

［しかし、それは］言葉だけ［で実質的でない］。大徳ヴァスミトラの主張に基づいて、もし前の存在要素の位態を捨てて後の位態が成立するとしても、これ（ダルマトラータ説）は転変説と異ならないのである。また、もし前の位態を捨てない[41]としても、位態が混乱することによって時間が混乱することになる。

III－2－2　第二説批判　D 137a5-b2; P 273a2-7.

［第二のゴーシャカ説については、］もし現在のものが生じたり滅したりすることが少しでもないとしても、前と後との違いが確立するのはどうしてかが言われるべきである。**すべて［の存在要素］がすべての特徴と結びつくから**とは、「結びついている」と「離れているわけではない[42]」という二語は同じ意味であるから、［三時の］すべて［の存在要素］がすべて［の特徴］と結びつく［から、ということである］。また、もし「得（prāpti）」の生起が「備えている（samanvāgama）」ことであると言われるなら、互いに「離れている」という意味は［「備えている」ことと］同一性はない[43]。その場合、あるものに何かある特徴が現に起こっている

[40] cf. NA 631b6-10.（「類似したものが連続して起こる（TA[T]）」→「性類異（NA）」,「或る属性が消滅して別の属性が生じる（TA[T]）」→「法隠法顕（NA）」）

[41] 江島 1986: n.55 の指摘通り、TA[T] に欠く否定の語”ma”を加えるべきであろう。

[42] 江島 1986: n.60 の指摘通り、TA[T]: mi ldan pa'i に否定の語を加えるべきであろう。但し、"mi ldan pa ma yin gyi" と訂正。

[43] ダルマと特徴との関係については―「離れているわけではない　(aviyukta)」という意味は「備えている」ことであり、それは「得の生起である」ことであるなら、そこには決して「離れている」という意味は含まれ得ない―ということか。cf. SA 470, 2-3: śeṣāsv avirakta iti. … śeṣāsu strīṣu rāgaprāptir evâsti. na samudācāra iti.

とき、［その両者とは］別のものはないのであるから[44]、それ（特徴）がどうして［あるものに対しては］結びつき他［のもの］に対しては離れることがあろうか。**一人の男**云々と。一人の男にある女に対する［即ち］他に対する愛が現に起こっていて、激しく女を愛していると言われ、［別の女に対しては愛の可能性を］備えているという点で愛していないわけではない[45]と言われる。［それに］対して、存在要素には特徴が現に起こったり、特徴を備えてい［るだけであっ］たりする[46]ことはない。なぜなら、諸々の存在要素の諸々の特徴は諸々の時間において逸脱しないからである。従って、ここで例と［例えられる］存在（存在要素）とにどうして同一性があろうか[47]。

III－2－3・III－2－4・III－2－5[48]（欠落）

IV　作用説批判

IV－1　その一　D 137b2-138a5; P 273a7-274a.

その存在要素が［まだ］**作用しないとき未来である**云々[49]と。ところで、作用とは眼[50]等の「見る」等［の機能］のことである。認識の「知る」［機能も作用である］。色形等が相応する感官の対象であること［も作用である］[51]。

---

[44] TSP 615, 13: arthāntarabhūta-（「他のものに対する」？）と関係があるようにも思える。

[45] 江島 1986: n.63 の指摘通り、TA[T]: dang bral ba を dang ma bral ba と訂正。

[46] 江島 1986: n.64 の指摘通り、TA[T]: dang mi ldan pa を dang ldan pa と訂正。

[47] cf. SA 470, 28-30. 本書第２章和訳参照。cf. TSP 615, 12-15.

[48] LA 143b2-3; SA 470, 30-471, 3. 本書第２章和訳参照。cf. TSP 615, 17-19. 江島 1986: n.66, 67 参照。

[49] AKBh 297, 12~: 「そのダルマが［まだ］作用しないとき未来である。［作用］するとき、現在である。［作用］して消滅したとき、過去である。」

[50] TA[T]: mi を mig と訂正。LA P143b4: mig. cf. SA P130b1-2; D115a6: bya ba yang mig la sogs pa'i bya ba ni lta ba la sogs pa yin no ‖（SA 471, 7: kāritraṃ punaḥ cakṣu-rādīnāṃ darśanādīnîti.）

[51] cf. SA 471, 7-8. 本書第２章和訳参照。TSP 617, 8-12 に詳しい。福田 1991 は、全般的に作用についての厳密な議論を展開している。

もし過去のものも…実在するなら云々[52]と。もし過去のもの及び未来のものが現在のものと同様に実在するなら、現在のものと全く違いがないから、それ（一つの存在要素）が過去のものまたは未来のものであるということがなくなってしまう、という意味である。

ところが、［過去・未来のものは実］在し、［しかも］現在との違いがあることを示すために、［三］**時は作用によって確立されると言われているではないか**云々[53]と［有部は］言う。

もしそうであるなら、現在の云々[54]と。眼の作用は「見る」ことであるなら、それ（眼）が彼同分のときは［まだ］作用しないから、そのとき現在の［眼］も未来のものであるということになる[55]。よって、作用によって時間が確立されるということは不合理である。以上が質問の意図である[56]。

［その場合、作用とは］**結果を与えることと取ることである**[57]［と言うなら］とは、「このように「見る」こと等の作用によって時間が確立されることはないが、結果を与えることと取ることを本性とする［作用］によって［時間は確立されるの］であって、［作用は時間に対して］逸脱しないからである」と言うなら、ということである。説明しよう[58]。「［眼と］倶有の諸々の存在要素[59]はそれ（眼）の士用果であり、その直後に生じる眼という感官は士用果または等流果[60]であるが、このような結果を与え、また、取るとき［眼は］現在である」ということである[61]。

---

[52] AKBh 297, 13~: 「もし過去のものも未来のものも実在するなら、なぜ過去のものまたは未来のものと言われるのか。」

[53] AKBh 297, 14~.

[54] AKBh 297, 15: 「もしそうであるなら、現在の彼同分の眼の作用とは何か。」

[55] cf. TSP 617, 12-13.

[56] cf. SA 471, 8-11. 本書第２章和訳参照。

[57] AKBh 297, 16.

[58] cf. TSP 617, 14-17.

[59] jātyādaya（TSP 617, 14-15）.

[60] TSP 617, 15 では、両者の間に adhipatiphala（増上果）を加える。

[61] cf. SA 471, 11-15. 本書第２章和訳参照。TSP 617, 14-17.　福田 1991:53 参照。但し、その訳文の中で「…［自身の倶生法にとっては］士用果、［前の眼根にとっては］等流果である。…」と分けて解されているが、ここはあくまで直前の眼

それなら、［過去の］**同類因等**[62]とは、同類因、遍行因及び異熟因[63]ということである。**結果を与えるから**とは、等流［果を与えるから］ということである。もし作用を［同類因等の］各々に認めるなら、［過去のものにも］作用があることになる。従って、過去のものも現在であるということになる[64]。［あるいは］**半分の作用**と。もし結果を与えることと取ることのすべてが作用であると認めるなら、それでも［半分過去］半分現在であるということになる[65]。

サンガバドラ師は「諸々の実在の作用は結果を引く力であって、結果を与えることではないから、特徴の混乱はない」と言う[66]。［つまり、］「力は作用のみ［を意味するの］ではなくて[67]、それ（作用）とは別の力もある[68]。そのように、暗闇[69]では眼の『見る』力[70]は妨げられるが、作用は［妨げられ］ない[71]から［現在時においては作用という力が働く］[72]。

を主題としているから、前半の［　］内は不適切であろう。つまり、「直後の眼は直前の眼（同類因）に対して士用果であり、等流果である」。cf. AKBh 95, 3-5 & 櫻部 1975: 384-385. SA 223, 3-12: …sabhāgasarvatragakāraṇahetūnāṃ. … sabhāgasarvatragahetvor anantarotpannam eva puruṣakāraphalaṃ … tathā hi taddhetusadṛśotpatter niṣyandaphalaṃ. tadbalenôtpatteḥ puruṣakāraphalaṃ. avighnabhāvāvasthānenotpatteś câdhipatiphalam iti.

[62] AKBh 297, 16~: 「それなら、過去の同類因等も結果を与えるから、［過去のものも］作用するという過失に陥る。あるいは、半分の作用をする［という過失に陥る］。このように特徴の混乱がある」。

[63] いずれも過去のものが与果する。以下に、取果・与果と三時との関係を以下に図示しておく。（AK II 55, 56, 59 等より）

[64] cf. SA 471, 15-20 . 本書第２章（秋本 1991a : 87）参照。TSP 617, 17-18.

[65] TA[T]: de lta na bya ba yang snga ma bzhin du snga ma nyid du 'gyur ro ‖ は意味不明のため、LA P144a5: de lta na yaṅ phyed da ltar ba nyid du thal bar 'gyur ro ‖ で読む。cf. TSP 617, 18-19; SA 471, 20-25. 本書第２章和訳参照。

[66] NA 631c5-17; TSP 617, 19-23 は NA の内容の要約。

[67] TA[T] は「力のみが作用ではない」と読める。

[68] NA 631c7-8: 非唯作用総摂功能。亦有功能異於作用。

[69] TA[T]: min を mun と訂正。

[70] TA[T]: mig las tha dad pa'i nus pa を mig gi lta ba'i nus pa と訂正。宮下 1986: 34, n.26 参照。

[71] TA[T]: bya ba med pas を bya ba ni ma yin pas と訂正。宮下 1986: 34, n.26 参照。

[72] NA 631c8-11: 且闇中眼見色功能、為闇所違非違作用。…故眼闇中亦能引果。無現在位作用有欠。…

［また、作用は］滅しても、生じる諸々の有為の存在要素の特殊な力は、他の実在が生じる原因となるが、これら［有為の存在要素］の力は［与果であって、］作用ではないのである[73]。現在の位態のみが［結果を］引くからである[74]。［また、］無為の存在要素は結果を引くことができないからである[75]。結果を引くことが作用であって、結果を与えることが作用ではないのである[76]」［と、以上がサンガバドラの意図である］。

IV－2　その二　D 138a5-139a7; P 274a4-275b1.

ところで、作用と呼ばれるその力とは別の諸存在（＝存在要素）が、先に存在せずして今存在し存在し終えて消滅するから、その実在（＝作用）も恒常でないというのか。もし、先に存在せずして今存在し存在し終えて消滅する実在（＝存在要素）とは別でない実在（＝作用）が生滅する［即ち］生じたり滅したりすると認められるとするなら、まさに［作用という力による］これ（存在要素）の生・不生、滅・不滅がありえないことになる。なぜなら、前の力と後の力とで変化すると考えられるとき、［存在要素と別でない］どんな力も［存在要素の生滅を］決定する原因ではなくなってしまうからである[77]。

---

[73] NA 631c11-13: 諸作用滅不至無為、於余性生能為因性。此非作用但是功能。尚、秋本 1991b: n.9 において「不至無為を至無為と読む」としたが、「不至無為」と再び訂正する。 cf. Frauwallner（1973:11）は「至無為」と読んでいる。（Ist alle Wirksamkeit geschwunden, dann wird etwas zum Nichtverursachten (asaṃskṛtam). & n.50）.

[74] NA 631c13: 唯現在時能引果故。

[75] NA 631c13-14: 無為不能引自果故。

[76] NA 631c14: 唯引自果名作用故。　福田 1991: 56-58 参照。それによれば、引果は同類因の取果に限るという。

[77] この段落は必ずしも意味が明らかでない。「諸存在は先に存在しないで今存在し、存在し終えて消滅するという立場に立てば、諸存在の生滅を決定するために作用という別の存在を想定する必要はない」という趣旨であろうか。因みに、TS 1793-99 & TSP 617, 24-619, 14 では、ダルマと作用との間の別同によって明解に整理されている。

また、力であり且つ力でないものは存在しない。従って、［作用という力と存在要素とは］別のものであると認められるべきである。なぜなら、［作用は］過去・未来の位態では本性を欠くからである。そのような場合、力（＝作用）だけが過去・未来である（＝本性を欠く）ことになるが、実在（＝存在要素）は［そのようで］ないから、［二］滅[78]と同様に変化しないものである。［従って、存在要素以外の］他のものが力を［生じさせる］原因である［ということになる］。［つまり］それにもまた別の力が認められる［ということになって］無限遡及の過失に陥る。

また、もし［作用は］実在と同様であると想定される[79]なら、実在と同様に作用も恒常であることになるから、時間の確立は不合理である。特徴を異にしない全く同一のものがすべての時間に作用を起こすことに対する妨げが［あるということは］不合理である、ということである[80]。［そこで］問として、また、**次のことも答えられなければならない**[81]と言うのである。**まさにその本性をもって**云々[82]と。

「＜有部＞地等[83]は［物を構成するという点では本性を異にしないが、各々その］特徴を異にする[84]。また、眼［・耳］等は［物である点で本性を異にしないが、「見る」、「聞く」等の能力という点で］種類を異にする[85]から、このこと（同一の本性をもつものは作用も常に行うこと）は必

---

[78] 無為(asaṃskṛta）の中の択滅(saṃkhyānirodha）、非択滅(asaṃkhyānirodha）を指すのであろうか。

[79] TA[T]: rtag を brtags に訂正。

[80] ここまでの三段落で第二節より第五節まで（本稿で訳出した箇所）の議論を眺望していると考えられる。

[81] AKBh 297, 17.

[82] AKBh 297, 17-19: 「まさにその本性をもって存在するダルマが常に作用することに対してどんな妨げがあるのか（AK V 27a$_1$）。［つまり］あるときは作用しあるときは［作用し］ないような［どんな妨げが］ということである。」.

[83] 「地等（pṛthivyādi）」とは地・水・火・風である（AK I 12ab）が、ここではそれらから成る物（rūpa）を指していると考えられる。

[84] チベット語訳文だけでは意味が明らかでないので、NA 631c27-28 及び 625a19-b2 を参照して語を補って訳出した。特に後者の「…如地界等内外性殊。…由是地等体相雖同、而可説為内外性別。…」参照。

[85] NA 625a24-28: 「又如眼等在一相続、清浄所造色体相同、而於其中有性類別。以見聞等功能別故。非於此中功能異有。可有性等功能差別。然見等功能即眼等有。由功能別故有性定別」参照。

ずしも［正しく］ない」とサンガバドラ師は言う[86]。＜答論＞それに対して「異なる実在は［各々］種類を異にする」と答えよう。もし「実在として異なる地等の関係は何に基づいて［知られる］かが答えられなければならない」と言うならば、地等は［たとえ各々の］特徴が異なっていなくても種類は異なるということを見ることによって［知られるのであると答えよう］[87]。

諸条件がそろわない云々[88]と。［つまり］過去、未来の位態において諸条件がそろわなくても作用をするから、それに対する妨げはなく、作用しないときがあるということはないのである。**なぜなら、**［諸条件も］**常に存在することが認められているからである**[89]［と］。［つまり］諸条件もまた条件をもつもの（＝存在要素）と同様に［常に存在することが］認められている［から］、それらが諸存在においてそろわないということは不合理であると言われている。

また［サンガバドラによって］「また、かの長老[90]［ヴァスバンドゥ］が言ったことを我々は理解できない。［つまり］現在のものでどの存在が彼によって作用と把握されているのか［がわからない］。なぜなら、未来のもの、過去のものにどうして作用はないと考えるのか［と、ヴァスバンドゥは詰問する］からである。すなわち、未来の存在要素が［現在に］生じるとき特性をもって起こるが、その特性に対して現在とされる」[91]と言われたが、＜答論＞それはおかしい。本性は［それとは別に］そのような特性をもたないからである。もし「［特性をもたないものは］過去とされる」と言うなら、それもおかしい。本性をもたないことになるからである。

［また、サンガバドラによって］「事実、まさにそれ（特性）は未来の存在要素に作用として生じる。生じた作用はそれ（未来の存在要素）に

---

[86] NA 625a19-b2.

[87] ここの議論も明らかでないが、有部側の持ち出す例では「異種類のものの区別を示すだけで、同一のダルマの区別を証明することにはならない」ということが趣旨であろう。cf. TSP 620, 16-23.

[88] AKBh 297, 19:「諸条件がそろわないと言うなら、それはおかしい。」

[89] AKBh 297, 19-20.

[90] āyuṣmat（具寿）.

[91] NA 632b13-18.

［生じた］作用である。［しかし、作用の生じたものは］未来ではな［く現在である］。［作用し終えたものは現在ではない。］［それは作用が］消滅しているから過去である。従って、このように作用によって［三］時の確立が知られるべきであると言われたのである」[92]［と言われたが］、<答論>それは答えにならない。常に作用することに何の妨げもないということはここでは経典に基づいて知られるべきである[93]、ということが意図されている。その結果が引かれた存在が現在であり、結果を引くことが作用である。［しかし］今、前後に区別がないから、未来も過去もそれ（現在）になってしまうということである。長老たち[94]によって存在は知られない。

［これこそが］現在であると限定するものは何であるのか。［各々が］相違していることが区別の本質である。［以前の本性を］捨てることによって生じるのか、あるいは捨てないことによって［生じるのか］[95]。捨てることによって［生じるということ］はない。［なぜなら］そのように［捨てることによって］生じるとき、全く別のものが未来から生じるということになる［からである］。また［もし捨てないことによって生じるのなら、以下のようになろう。］未来のものは「まだ生じない」［という性質］だけ［があって］「消滅する」という［過去の］性質はないが、実在として存在しないわけではない。捨てて［生じる場合］と同様に、［現在において］実在の本性とは別の［「今生じている」という］特性が生じることになる。［それは］三時を逸脱することである。その［現在の］存在の本性が「まだ生じない」という性質をもつことになるからである。また、ある存在（＝現在）が別の存在（＝未来）と同様である［ということになる］[96]。過去についても同様に論じられよう。［有部は］偶然に（＝根拠

---

[92] NA 632b18-23.
[93] 「ダルマの本性は常に、作用は現在にのみあることを主張すれば、例えば作用だけが経典で説かれる存在の範疇（五蘊・十二処・十八界）を逸脱する」という趣旨であろうか。cf. TS 1797 & TSP 618, 21-23.
[94] sthavira（上座）.
[95] cf. TSP 615, 9-11.
[96] この直後の TA の一文は意味不明のため訳出していない。

なく）すべての実在があると主張する者である。もし、特性が生じることに基づいてそれ（実在）を限定するというなら、すべての実在は同一のものであることになる。特性が生じるということに基づいても、特性は［すべての実在に］生じるからである[97]。

IV－3　その三　D 139a7-b5; P 275b1-8.

［また、その］**作用も過去**云々[98]とは、次のように説明されよう。もし別の作用がないのに［作用が］未来等であるということが認められるなら、その場合作用によって時間が確立されると言うべきでない。なぜなら、［作用だけが他の諸存在を］逸脱するからである。［そして］作用が未来等であるということが、［それ］自体が存在すること[99]［だけ］に基づいて確立される［とするなら］、諸存在が未来等であるということもまた同様に［存在するだけで確立されることに］なろう。［従って］作用が想定されること[100]に何の意味があろうか［ない］。また、もし［別の作用がないとき］逸脱という誤りに至るから、作用にもまた別の作用が認められるとするなら、その場合には無限遡及の過失に陥るのである[101]。

それ（作用）もまた過去、未来、現在［と呼ばれることになる］ということについて、サンガバドラ師は「それ（A）もまた別の作用（B）によって生じるのであるなら、それ（B）もまた別の作用（C）によって生じることになろう」と言う。［つまり］過去、未来の作用が［あると］あなた方は言うべきではない。むしろ、特性の生じた未来の存在要素が現在になり、特性の成立し終えたものが過去である［と言うべきであるというこ

---

[97] この段落は全体に把握し難い。

[98] AKBh 297, 20-298, 1:「また、その作用も過去とか未来とか現在と言われる［はずであるが］、そのような［作用］はどのようにして［そう言われることになるの］か(AK V 27a$_2$)。作用にもまた別の作用があるのか。」.

[99] TA[T]: rgyud（saṃtati）を TSP 620, 7=P118b8; D84a1 に依って"yod pa"（sattā）に訂正。

[100] TA[T]: btags を brtags に訂正。cf. P119a1; D84a2.

[101] この段落は、TSP 619, 23-620, 10 とほぼ一致する。但し、TSP には若干の語句の追加が見られる。

とである］[102]。＜答論＞まだ生じていない、今生じている、成立し終えたという［各々の］位態の違いが認められているのであるから、どうして特性という過去、未来、現在の作用が言われないのか。従って、「党派的偏向の闇」という表現が適切である。

また、もしそれ（作用）**は過去でも**［未来でも現在でも］**ないなら**云々[103]と言う。［存在要素は］**まだ作用しないとき**［云々］とは、すべての時間にこれは作用しないから因果的存在でない（＝無為）ゆえに、すべての時間に存在することになる［ということである］。

IV－4　作用と存在要素とが別ものでないとき

IV－4－1　三世は不成立　D 139b5-140b3; P 275b8-276b8.

＜有部＞**そのような誤りがあろう**[104]とは、作用にもまた作用があるという過失と、無為である［という過失とに陥る］ということである。**もし作用が存在要素と別のものなら**とは、存在要素と別でないから作用は存在要素と同様に無為ではないのであり、また、存在要素と同様にそれ（作用）にまた別の作用があるということはないから無限遡及の過失もない［ということである］。

＜答論＞**それなら**[105]［存在要素に過去・未来・現在の三］時はありえないことになろう。なぜなら、まさに**それ**（存在要素）**は**それ自身では

---

[102] NA 632b24-c4.

[103] AKBh 298, 1-3:「また、もしそれ（作用）は過去でも未来でも現在でもないなら、因果的存在でないということであるから、［作用は］常にあることになってしまう。したがって、ダルマはまだ作用をしないとき未来である［など］と言えなくなる。」

[104] AKBh 298, 4-6:「もし作用がダルマと別のものなら、そのような誤りがあろう。しかし、それ（作用）は［ダルマと］別のものではない（AK V $27a_3$）。したがって、そのような誤りはない。」

[105] AKBh 298, 6-9:「それなら、それ（ダルマ）は［三］時と結びつかない（AK V $27b_1$）。もし作用はダルマに他ならないなら、そのダルマがまさにその本性で存在しながら、どうしてあるときは過去と言われ、あるときは未来と言われるのであるか［言われ得ない］。したがって、三時の確立は成立しない。」

［三］時を確立する根拠でありえないからである。以上のことを示すために、**もし存在要素が作用に他ならないなら**云々と言う。

＜有部＞［三時の確立が］**どうして成立しないのか**[106]と言う。［つまり］実在の本性が［三］時を確立する根拠と認められるのではなくて、生じたもの生じていないものの［各々の］位態が［三］時を確立する根拠と認められる［からである］。サンガバドラ師は「［あなた方の種子説において］特殊な原因によって引かれ、特殊な結果を生じさせる根拠となる別の属性（＝種子）が限定するものと認められるように、ここ（我々の説）においても別の属性である作用が限定するものになるのである」[107]と言う。

＜答論＞これも自説を楽しむことによって、無いものを有ると考えて語られたものであって、［そのような］力であり限定するものである別の或る属性というものは成立しないのである。従って、結果を生じさせるもの（＝種子）は仮の存在（＝仮有）であるということも、我々は『倶舎論』第二章にすでに説いた[108]。

また、彼（サンガバドラ）は[109]「作用は存在要素と別であってしかもそれ（存在要素）と異なるものではない。［なぜなら作用は存在要素とは別の］本性をもたないからである[110]。［また、作用は］存在要素そのものではない。［なぜなら、存在要素の］本性は存在しても［作用は］存在

---

[106] AKBh 298, 9-10: 「まだ生じていないダルマが未来であり、生じてまだ消滅していないものが現在であり、消滅したものが過去であるから、［三時の確立が］どうして成立しないのか。」

[107] NA 632c4-633a16. TS 1803abc$_1$ & TSP 620, 12-15 では、"sapratighādi-"に関する議論を持ち出している。その内容はむしろ NA 625a19-b2 と符合するように思われる。秋本 1991b 参照。

[108] AKBh 63, 18-64, 9: … tasmād bījam evâtrânapoddh（tam anupahataṃ paripṛṣṭaṃ ca vaśitvakāle samanvāgamākhyāḥ labhate nânyad dravyam. kiṃ punar idaṃ bījaṃ nāma. yan nāmarūpaṃ phalotpattau samarthaṃ sākṣāt pāraṃparyeṇa vā. … evam ayaṃ samanvāgamaḥ sarvathā prajñaptidharmo na tu dravyadharmaḥ. 櫻部 1975: 304-306.

[109] TA[T]: yang de nyid la smras pa を yang de nyid kyis smras に訂正。cf. TSP P119b4; D84b4.

[110] TA に従って訳出したが、おそらく TSP とほぼ同文であったから、「作用はダルマと別のものではない。なぜなら、それ（ダルマ）とは別の本性は認識されないからである。」と訳した方がよいのかもしれない。

しないときもあるからである。［また、作用は］存在しないわけではない。［作用は存在要素と］相違しないからであり、作用は以前になかった［が、現在に生じる］からである。［それは］連続体と同様である[111]。［すなわち］間断なく生じる存在要素に対して連続体と言われるが、これはそれ（存在要素）と異なるものではない。［連続体］はそれ（存在要素）を本性としているからである。また、存在要素そのものでもない[112]。［さもなければ］一瞬間でも連続体であることになってしまうからである[113]。また、［連続体は］それ（存在要素）の結果として存在するから、存在しないというわけでもない。」[114]と言う。また、「連続体という結果は認められるが、［存在要素とは別に］連続体が存在することは決してない。それと同様に、作用による［三］時の確立を論理によって知れ」[115]と言う。

＜答論＞それに対して我々は「過去と未来と現在とは各々別の本性をもつというような［作用による三］時の確立はほとんど無意味である［と答えよう］。連続体と諸存在は同一であるとか別であるとかと言われるべきではないというのであるから、プドガラと同様に［連続体に］本性はないことになる。［なぜなら］本性があるときに同一であるとか別であるとかと見られるのであって、そのようでないものには本性はないと認められる[116]［からである］。作用もまた仮有であるから、［生じる］前と同様、［生じた］後にもそのよう（仮有）である。存在しないものがどうして限定するものとなりえようか［なりえない］。従って、このように過去、未来、現在のものは、各々別の本性をもつことはない。［そして］別の本性をもたないなら、［三］時の確立は成立しない［ということになるのである］[117]。

---

[111] TA は意味不明のため、TSP 621, 12-13 に依って訳出した。
[112] TA[T]: chos tsam gyi を TSP P119b5; D84b4 に依って chos tsam yang ma yin te に訂正。
[113] TA[T]: ma yin pa'i phyir ro を yin pa'i phyir ro に訂正。
[114] NA 633a24-b2. =TSP 621, 11-15.
[115] TA は意味不明のため、NA 633b3-4 及び TSP 621, 16-17 に依って訳出した。
[116] TA は意味不明。
[117] cf. TSP 621, 19-622, 14.

また、［偈で］「物等は苦であるというように多種類の苦は区別される。それと同様にまだ生じないもの（＝未来）等も［区別される］」[118]と説かれているが、ここでも例と実物とは一致しない。（44－［つまり］まだ生じない、すでに消滅したということに依らずに[119]苦は確立されるのである。まだ生じないもの[120]（＝未来）等には区別はないということと、［苦が］多種類に想定されることとには何の矛盾もないのである。

IV－4－2　「三世実有かつ無常」は不合理　D 140b3-7; P 276b8-277a5.

［しかし、有部は言う。］過去のもの、未来のものは実在すると認められるが、過去のもの未来のものが現在のとおりに成立するわけではない、相違が認められているからこそ、未来のものが［そのまま］現在であったり現在のものが［そのまま］過去であったりすることは不合理である［と］。このことは次のようにすでに詳しく［『倶舎論』で］説かれている。

このような論法はかつてないものである[121]と［いう中で、「かつてない」と］は、前と矛盾するからであるか、または、以前には得られていないから以前にはないということであるかである。物等の本性はすべての時間にあると認められている。そうであるなら、物等の存在（様態）はすべての時間にあるから恒常であることになってしまう。しかし、それに対して**且つ存在（様態）は恒常であるとは認められない**[122]と言う。そうであるなら、本性と存在（様態）とは別のものであることになってしまう。しかし、それに対して、**しかも本性と存在（様態）とは別のものではない**と言う。**明らかに自在神のなせる業である**とは、世間における論理に依

---

[118] NA 633c4-5.
[119] TA は意味不明。
[120] TA[T]: skyes pa を ma skyes pa に訂正。
[121] AKBh 298, 19: 「そして、ダルマは確かに常に存在し且つ恒常でないという、このような論法はかつてないものである。」
[122] AKBh 298, 21-22: 「本性は常に存在し、且つ存在（or 状態）は恒常であるとは認められない。しかも本性と存在（or 状態）とは別のものではない［という］。明らかに自在神のなせる業である。」

存しない［ということである］。望むとおり［を言う］にすぎないからである[123]。

V　四理由批判（二教証・二理証批判）

V－1－1　第一教証批判その一　D 140b7-142a3; P 277a5-278b4.

以前に存在したものが過去のものであって[124]、本性をもってあるのではないと説かれた。**原因があれば生じるであろうものが未来のものであ**って、［実体として］あるのでは**ない。そのようにしてあると**［言う］とは、以前に生じた［過去の］もの、［後に］生じるであろう［未来の］ものが［あると言う］ということである。

サンガバドラ師は、「経量部は『現在のものの別のあり方がある』と主張しているのであって、過去・未来のものが［あるとは主張でき］ないと見るべきである」と言う[125]。

＜答論＞これに対して、現在のものがまだ生じていないから未来のものであり、消滅してもう存在しないから過去のものである［と答えよう］。なぜなら、それら（過去・未来のもの）もまた現在のものに依存しないで説かれることはないからである。現在のものが仮の存在（＝仮有）である状態として［つまり］まだ生じていないもの・消滅して最早存在しないものとして知られるから、過去のものはある・未来のものはあると言われるのである。もしそれが未来のものでも過去のものでもないなら、常に現在であることになってしまうと、敷衍して言うことになる。

---

[123] =LA P145a8; D115b3. cf. SA 472, 31-33.

[124] TA[T]: ma yin gyi の ma は不要。AKBh 299, 1f:「しかし、［有部が］『［教典に］説かれているから』と言ったが、我々も「過去・未来のものはある」と言う。但し、以前に存在したものが過去のものであり、原因があれば生じるであろうものが未来のものである。そのようにして［過去・未来のものが］あると言うが、実体として［あるのでは］ない。」

[125] NA 626c2-6. cf. NA 626c27-28.

以前に生じたものが過去のものである云々と。その「**ある**」とは以前に存在したもの、後に生じるであろうものが［ある］ということである。そうでないなら、常に［ある］ことになるからである。

＜有部＞**過去・未来の本性をもって**[126]とは、過去・未来の本質（svabhāva）をもって、ということである。

しかし、それ（過去・未来のもの）は**因果を**［あるのにないと］**非難する見解を否定するために**[127]そのように「ある」と［世尊によって］説かれたのである。過去のものが原因であり、未来のものが**結果**である。それがないとする**見解**というのが、**因果を非難する**［見解］である。「ない」というのは、それら原因と結果とについて［言われている］。

＜反論＞また、もし「ない、すなわち、［過去・未来のものが］ないとする見解［つまり］それ（過去・未来のもの）を非難する［見解］を否定するために、『過去のものはある。未来のものはある』と世尊によって説かれたのである」と言うならば、＜答論＞諸々の過去のもの［のどれ］が原因であり未来のもの［のどれ］が結果であるかは不確定であるから、因果を非難する［ことに陥るが、その過ちを］否定するために、「過去がある」［と世尊によって説かれたのである。つまり、「過去がある」とは］原因を本性とするものによって置かれた特殊な効力によって結果が生じるということである。

＜反論＞「『未来のものがある』とは結果を本性とするものものによって置かれた特殊な効力によって生じることであるということになろう」と言う。つまり、彼ら（ヴァイバーシカ）は言う。「たとえ過去・未来のものが実体としてあるとしても、現在のものの通りに過去・未来のものがあるというわけではない。［つまり、恒常であるという誤りはない。］

---

[126] **AKBh 299, 3**：「＜有部＞［過去のもの・未来のものは現在のものの通りに存在するのではなく、］過去・未来の本性をもって［存在するのである］。」

[127] **AKBh 299, 4-6**：「したがって、以前に存在した原因には『かつてあった』ということ、これから存在するであろう結果には『これからあるであろう』ということがあることを教えようとして、因果を非難する見解を否定するために、世尊によって『過去はある。未来はある』と説かれたのである。」

従って、世尊によって『過去のものはある。未来のものはある』と説かれたことは［「ある」ということ以外の他の解釈を許す］余地はないことになる。すなわち、説かれたことは、原因によって置かれ結果を生じさせる効力に重きを置いて考察されているとは見られない」と。

<答論>それに対して、これ（効力）の正しい考察に重きが置かれているから、従って、［あなたの説は］長老たち（sthavira）によって認められない［と答えよう］。各々の実在に効力はないという決定は、因果の関係との結びつきがないということになる。また、され（実在）に［原因としての］効力がない［のに結果が生じる］なら、諸々の実在のすべての本性にあらゆる効力があるという過失に陥るから、原因から結果［が生じる］というように特殊なそれ（効力）が認められるべきである[128]。従って、**「ある」という語は不変化詞であるから**[129]と言われたのである。不変化詞と言われるのは、述語を本性とすることを否定するためである。なぜなら、［不変化詞は］三時［のもの］を対象としている[130]ことが知られるべきであるからである。もしこ［の語］が述語（abhidhāna）であるなら、「これの過去がある、未来がある」という用法はなくなるであろう。なぜなら、［「ある」という語の時制は］現在時であるからである。

灯火の以前にないことがある云々と。「灯火が以前にない」、「消えてない」、「実体としてある」［と言う］のではなく、［すべての場合に］「ある」と言う［人がいる］。そうではなく、まだ生じていない［灯火］、すでに消えた灯火を各々「以前にない」、「消えてない」と言う「人がいる」[131]。現在の位態においてまだ生じていないものが「以前にない」ものであり、過去の位態［にあるもの］が「消えてない」ものである。このことに誤りはない。同一のものが以前の位態を捨てて別の位態を成立させるということは不合理であるから、以前のものが消えたということである。

---

[128] cf. TS: 1837 & TSP 628, 16-20. 「（TS1837: ）諸存在の確定した効果的作用の能力は諸条件によって生じる。原因がないなら、すべてのものからあらゆる［結果］が等しく生じざるをえないことになってしまう。」

[129] AKBh 299, 6：「『ある』という語は不変化詞であるからである。」

[130] ≒SA 473, 6-7. 本書第２章参照。

[131] 次の文は意味不明（de lta yin na … thal bar 'gyur ro ||）。

従って、「以前にない」、「消えてない」ことが実在の本性であると言うことは揺るぎないことである。＜問＞「**たとえば消えてある**[132]云々において、消えて［もなお］灯火が「ある」というのはヴァイバーシカの「説」ではないのか」[133]と言うなら、＜答＞そうではない。この場合の意味は「灯火は消えている」と理解される。何が本当に消えたのかと［問う人がいるから］従って、「ある」という語は全く無意味なものというわけではないと理解される。

そうでなければ[134]とは、もし生じ［て消滅し］たものが過去のものであり、原因があれば生じるであろうものが未来のものであるというようにして「ある」という語は述べられているということが認められないとすれば、ということである。生じ［て消滅し］たその過去のものは「ある」、原因があれば生じるであろうその未来のものも「ある」ということである。従って、**過去・未来のものの存在［表現］そのものが成り立たなくなるからである**と言われたのである。現在のものの通りに、すべての時間に本性をもって存在することになってしまうからである。

V－1－2　第一教証批判その二　D 142a3-b3; P 278b4-279a5.

＜有部＞**世尊によって説かれた**[135]云々と。すなわち、経典に「舎利弗よ、ある人々は『過ぎ去り、尽き、消滅し、壊れ、変化した行為は存在しない』と言うが、その言葉は[136]、ラグダシキーヤカ派の遊行者達のよう

---

[132] AKBh 299, 7：「…また、たとえば消えて『ある』灯火は私によって消されたのではない」と言う人があるように…」。但し、TA と AKBh のチベット語訳は一致しない（TA[T]: ji ltar 'gags pa yod; AKBh: dper na mar me shi ba ni yod）。

[133] ≒SA 473, 10-11. 但し、この問に対する答えはTAとSAとで違っている。本書第２章参照。

[134] AKBh 299, 8：「なぜなら、そうでなければ過去・未来のものの存在［表現］そのものが成り立たなくなるからである。」

[135] AKBh 299, 8：「では、ラグダシキーヤカ派の遊行者たちに関して、世尊によって『行為は過ぎ去り、尽き、消滅し、壊れ、変化してもなお、ある』と説かれたが、彼ら（ラグダシキーヤカ）はその行為がかつてあったということを認めなかったのか、［否、認めたのである］。」

[136] TA の一部、意味不明。

な無知で愚かで明晰でない善からぬ者たちが軽率によく思慮せずに言ったものである」云々[137]と説かれている。＜問＞それはどうしてか、と言うなら、＜答＞「舎利弗よ、**行為は過ぎ去り、尽き、消滅し、壊れ、変化してもなお、ある**」と説かれたとき、彼ら（ラグダシキーヤカ）はその行為がかつてあったことを認めなかったのか。［否、］彼らは行為がかつてあったと認めてはいるが、それが［結果として］熟することを恐れて、消滅したものが実在するとは認めないのである。従って、その存在を教えるために世尊によって「それはある」と説かれたのである。そうでなければ、［そのように］教える意味がないであろう。以上のようにまず、ヴァイバーシカの［主張する］経典の意味が示された。

＜答論＞［それに対して、ヴァスバンドゥ］師が別の［意味］を示すために、**そ**［の経典］**では**[138]云々と言う。**その**[139]とは、その行為が内在化した［ということであり、そのような］**連続体に**、ということである。**それによって置かれた**とは、その行為によって置かれた［すなわち］生じた、ということである。＜問＞それは何かと言うなら、＜答＞**結果を与える効力**と言う。つまり、その行為によって連続体に特定の結果を生じさせる能力である。従って、その行為は消滅してもそれによって置かれた、結果を生じさせる効力があるということを教えるために、世尊によって「それはある」と説かれたのである。**そうではないなら**[140]とは、もし過去のものが確かにあるということを教えているなら、ということである。**自らの本性をもって現に存在する**云々とは、その行為が本性をもって、現在のものと同じようなものとして存在する過去のものが［あることになるが、そのようなものが］成立するはずはない、ということである。従っ

---

[137] 本庄 1982: 56 参照。Up のチベット語訳と内容はほぼ一致するが訳語等はくい違う。

[138] AKBh 299, 10~：「しかし、そ［の経典］ではそれ（行為）によってその［心の］連続体に置かれた、結果を与える効力のことを意図して［世尊によってそのように］説かれたのである。

[139] TA[T]: de las ni（tatra）を de la（tasyām）と訂正。

[140] AKBh 299, 11:「なぜなら、そうではないなら自らの本性をもって現に存在する過去のものなど成立するはずはないからである。」

て、この［過去の］行為は意味上から認められるのであるが、以前の［行為が実在することが認められるわけでは］ない。

V－1－3　第一教証批判その三　D 142b3-143b7; P 279a5-280b4.

次のことはそのようなことである[141]とは、世尊によって直接明確に「過去・未来のものはない」と説かれているから、この経典（『勝義空性経』）の意味は、まさにそういうこと（過去・未来のものはないということ）であって、ヴァイバーシカによって構想されたようなことではないと知れ、ということである。

＜反論＞**現在時において**[142]［云々］とは、**現在時において**現在の存在が**前に無くて今存在する**という意味である。＜答論＞**そうではない。なぜなら、時間と存在とは別のものではないからである。**［つまり］この現在時と眼等［の存在］とは別のものでないものとしてあるということである。［従って］どうしてそれ（眼）を本性とする［時間」において、前に無くて今存在することがあろうか。［時間と］それ（存在）とは別のものではないからである。すなわち、「それら（因果的存在）は時間であり、言葉の対象（拠り所）である」[143]と言われている。

未来の眼は存在しないということが成立する[144]とは、**もし自らの本性**［である時間すなわち眼］**において前に無くて今存在すると言うなら、**現在［の眼」において眼は前に無くて今存在するということになり、従って未来の眼は存在しないということが成立する。

---

[141] AKBh 299, 12~：「次の、『勝義空性経』に世尊によって説かれたことはそのようなこと（過去・未来は実在しないということ）である。」

[142] AKBh 299, 14-15：「『＜反論＞現在時において［眼は］前に無くて今存在するということである』と言うなら、＜答論＞そうではない。なぜなら、時間と存在とは別のものではないからである。」

[143] AK I 7c. SA 474, 8 にも引用されている。本書第２章参照。

[144] AKBh 299, 15-16：「また、もし自らの本性［である時間すなわち眼］において［眼は］前に無くて今存在すると言うなら、未来の眼は存在しないということが成立する。」

＜有部＞サンガバドラ師は「プドガラのようには否定されることが何もないから、過去・未来はあるのであって、［そのように説く］この経典（āgama）[145]は了義（nītārtha）である」[146]と言う。

＜答論＞了義は別の形で考えられることは不合理である。「プドガラはある」とそこここに説かれているが、［それは］人間［という意味］であって、諸々の経典などでその実在は否定されているから、「それ（プドガラ）はある」と説く諸経典は不了義（neyārtha）であるということは合理である。同様に「父母を殺すべし」等ということも不了義であることが合理である。他の箇所では無間業をなす者たちはそれに相応して地獄に生まれると説かれているから、そのようではない（父母を殺すべきでない）のである。自明のものとして「過去・未来のものはある」と言われ、また、ある［経典］によってそれと全く同様にして明らかに否定されることが見られるから、「過去・未来のものはある」ということを証明するこの経典は不了義である。[147]

＜反論＞ここで言われたことがどうして別様にして（＝逆に）過去・未来のものを実在として証明しないのか。＜答論＞過去・未来の因果的存在は実在として生じることはない。［過去・未来のものが実在するならそれは因果的存在が常に存在することになるから、因果関係が存在しないことになり、それは即ち］[148]苦［という真理］・［苦の］原因という真理が実体すらしないということになるからである。また、［苦の］消滅［という真理］・［苦の消滅に至る］道［という真理］もまた同様である。四つの真理（四聖諦）は「実体として］存在しないから、［苦の］遍知、［苦の原因の］断、［苦の消滅の］直証、「道の］修習[149]［の実在］も不合理である。それらが［実体として］存在しないから、四向四果の人[150]参

[145] 教証に引かれた経文（AKBh 295, 9~）、ラグダシキーヤカに関する経典などを指すのであろう。
[146] NA 625c14-16.
[147] この答論の部分も、NA 625c16-25 に見出される。
[148] この文のつながりは TSP を参照した。
[149] AKBh 371, 16~参照。
[150] AKBh 366, 1~参照。

照。も［実体として］存在しない。つまり、言葉のある通りに考察して過去・未来のものがあることを証明する諸経典は、教え全体と矛盾するのである[151]。従って、この経典は不了義であり、了義ではないと決定される。

さらにまた、『勝義空性経』で、過去・未来のものが実体として［あることが］が否定されている。［すなわち］「**眼は前に無くて今存在し、存在し終えて消滅する**」[152]と。従って、長老達が証明して言うこと[153]は［今の文脈と］無関係であるから、その否定は本書が増大することを恐れて詳説しない。

<反論>ある人々は次のように「眼は火を本姓とするから、日輪から生じ、またその中に解消するであろう。他のものも同様に考えられるべきである。未来時の眼は現在時に生じ、現在［時］から過去［時］へ行く。従って、ある実在を別の［実在］と知るから、別の［実在］に含まれた本姓から眼は生じ、またその中に解消する」と言う[154]。

<答論>それを否定するために、**眼は生じるときどこからもやって来ないし、消滅するときどこにも集まらない**と言われたのである。自らの見解を示すために、従って、ビクらよ、眼は前に無くて今存在し、存在し終えて消滅する」と説かれた［と言われた］。得られた本姓を捨てて［消滅する］というように経典の意味は確立される。

<有部>サンガバドラ師[155]は言う。「他［の経典］で説かれた『前に無くて今存在する』とは、もと存在しないである所に集まる［すなわち］それ自身の原因と諸条件とから生じる、という意味である。ある人々は［結果である眼に対して、眼を含む?］身体全体が原因であると認めるから、従って原因の中に『もと存在しない』と説くのであって、その原因となる

---

[151] この答論部分は、TSP 632, 11-15 とほぼ一致する。

[152] AKBh 299, 12-14：「眼は生じるときどこからもやって来ないし、消滅するときどこにも集まらない。というわけで、ビクらよ、眼は前に無くて今存在し、存在し終えて消滅する」

[153] 内容不明。

[154] cf. NA 626a12~. サンガバドラも、このような見解を否定するために『勝義空性経』の句が説かれたとする。次のサンガバドラの説、及び宮下 1986 参照。

[155] 以下に、NA 626a18-27 の議論が引かれている。TA は NA と若干異なる。なお、宮下 1986: 31 に TA のこの部分が和訳されている。

全く別のものからそれ（結果である眼）は生じるということである。あるいは、『前に無くて今存在する』とは、以前［に達していない］位態に達するという意味である。『存在し終えて消滅する』とは、果を引いて、以前と同様に作用のない位態に達することであると考えるべきである」[156]と。

＜答論＞これらの経典の意味もまた、説かれた［経典］全体の意味と矛盾するから、また、論理と矛盾するから、不合理である。＜サンガバドラ＞「『存在し終えてもう存在しない』とは言われていないから、この意味（＝過去はある）は認められる」[157]と言うなら、＜答論＞それも不合理である。ここでは、諸々の実在がもう存在しない［すなわち］本性が成立して後、得られた本性を捨てて消失するということを言おうとしてそのように「存在し終えて消滅する」と言われたのである。

V－2　第二教証批判　D 143b6-144a2; P 280b4-8.

今ここで[158]云々と。眼識等［の五識］は対象が現在であるから［眼等の］感官と同様に対象もまた［眼識等を］生じさせる原因であるが、［第六の］意識こそが［今］問題となる。　まさに現在の［感官である］**意がそれ**（意識）の原因としてあるから［**意識を］生じさせる原因であるように、［対象である］観念もまたそのよう［に意識を生じさせる原因］であるのか**。もしそうであるなら、過去・未来のものは実在することが成立する。すなわち、過去・未来のものが実在するなら、それらを対象をする認識が［必ず］生じる［ことになる］から、実在こそが［意識を］生じさせるということが認められる。

---

[156] NA 626a18-24. 宮下 1986:11-12; n.11 参照。

[157] NA 626a24-27. "pratigacchati"（還去）であって、"na bhavati"（無）ではないと言う。

[158] AKBh 299, 16-18:「『二に依拠して認識は生じるから』と言われたことも、今ここで検討されるべきである。意と観念とに依拠して意識は生じるが、意がそれ（意識）を生じさせる原因であるように、観念もまたそのよう［に意識を生じさせる原因］であるのか。あるいは、ただ対象であるだけであるのか。」

あるいは、実在ではなく**ただ対象であるだけなのか**。［つまり、意識を］生じさせる原因ではない、ということである[159]。すなわち、過去・未来のものは実在しないにもかかわらず対象として実在するということには矛盾があるのである。

V－2－1　第二教証批判その一　D 144a2-3; P 280b8-281a1.

千劫の後に生じてくる［云々］[160]とは、未来のものは近いものでも［意識を］生じさせる原因とは認められないから、きわめて遠いものはなおさらである、という意味である。結果が先にあって原因が後であるという考えは合理的ではない。[161]

V－2－2　第二教証批判その二　D144a3-145a6; P281a1-282a7.

もし［過去・未来のものが実］在しないなら、どのようにして［認識の］対象であるのか[162]［と有部は問うが］、［意識を］生じさせる未来のものが実体として［存在するということ］は認められない。むしろ、［それは認識の］対象であるというだけであるから、［実］在するわけではない。そのことに言及しないで、［ただ］対象が実在する［とばかり言う］のは不合理である。［しかし、有部は］過去または未来と言われる物は、過去または未来の［実在］物でないものとして存在することはない［と言う」。

---

[159] ≒SA 474, 10. 本書第２章参照。

[160] AKBh 299, 18-20:「まず、もし観念が［意識を］生じさせる原因であるなら、未来のもので千カルパの後に生じてくる、あるいは生じてこないかもしれないものがどうして今認識を生じさせることがあろうか。また、涅槃はあらゆるものの生起の止滅であるから、［それが認識を］生じさせる［原因では］ありえない。」（但し、TA では「涅槃」云々の句の註釈はない。）

[161] ≒SA 474, 11-12. 本書第２章参照。

[162] AKBh 299, 20-21:「また、もし観念がただ対象であるだけであるなら、我々も「過去・未来のものは対象である」と言う。［これに対して、有部は］もし［過去・未来のものが実］在しないなら、どのようにして［それは認識の］対象であるのか［と問う］。」

これに対して今［我々は言おう。それは］対象である［通りに］云々と[163]。我々はそれ（過去・未来のもの）が［認識の］対象であると言うとき、［対象のある］通りにないというわけではない［と言う］。ところが、あなた方［有部］は実体として［あると］構想し、［対象のある］通りにはないと［言う］。

「**あった**」[164]とは過去のものを対象としている。［過去の対象は］そのように存在するのである。「**あるであろう**」とは未来のものを対象としている。それ（未来の対象）もそのように存在するのである。「どのようにしてこれ（過去・未来のもの）が認識されるのか」と［有部が］問うのに対して、**「あった」「あるであろう」と**いうようにして［認識の］対象とされるのであって［実］在するわけではない［とヴァスバンドゥは答えるのである］。

そこで**［なぜなら］過去の物や感受**云々[165]と言われた。また、**あたかも現在の色形が**眼、［音声が］耳、［香が］鼻、［味が］舌、［触れられるものが］身体及び［眼識から身識に至るまでの］諸認識によって[166]**経験されるように過去のものが思い出されるのである。**［つまり］まさにそれ（対象）として［認識に］集積したものとは別なもの（＝現在のもの）がまるで経験されるかのように、「まさにそれ自体は過ぎ去ったものである」と［いう意味で］「あった」と把握される。経験されたものと等しいものとして思い出されるのである。

---

[163] AKBh 299, 21-22:「これに対して今我々は言おう。それ（過去・未来のもの）は対象である通りにあると。」

[164] AKBh 299, 22:「どのようにしてそれは対象であるか［と有部が問うのに対して］、「あった」「あるであろう」と［いうようにして対象であると答えよう］。」

[165] AKBh 299, 22-24:「なぜなら、過去の物や感受を思い出すとき、誰も今『ある』と思うのではなく『あった』と［思う］からである。あたかも現在の色形が経験されるように過去のものが思い出されるのである。」

[166] ここでは五蘊ではなく、十八界の分類に依っている。

認識（予想）[167]**によって把握される**[168]とは、［人は］どんな場合にも抵触性のない知識をもつのであるから、一方（知識）が他方（未来のもの）を「あるであろう」と認識する、ということである。

また、もし[169]過去・未来のものが**全くその［現在のものの］通りにあるなら、**［それは］経験されている通りに今あるから**現在であるということになる。**なぜなら過去・未来・現在のものに違いがないからである。**また、もし［現在のものの通りに］ないなら、**［以前に］経験された通りに［また、今後］あるであろう通りに存在するという理由で、［現在時に］得られる物の本性は捨て去られているから、過去・未来の物は［実］在することはない。従って、**その場合［実］在しないものも対象であるということが成立する。**

サンガバドラ師は、「実体として及び仮設として対象を捉える認識には対象が［実］在しないということがない。なぜなら、［実］在しないものを「二」と説くことはないからである。従って、［非実在が対象であるということは］不合理である」[170]と言う。［即ち］過去のものも未来のものも［認識の］対象であるということは、両者とも［意］識を生じさせる原因である［ということである］。意は感官を本性とし、観念は対象を本性としている。従って、感官が存在しないのに［意識が］生じるということは不合理であるように、対象が存在しないのに［意識が生じるということも不合理である］。なぜなら、［原因が存在しなければ］結果も存在しないからである[171]。「すべての観念はどんな場合にもただ対象であると

---

[167] TA は「諸仏によって認識される」となっている。AKBh のチベット語訳及び真諦訳も同様である（本書第 1 章参照）。ここで「諸仏」と解する文脈的必然性がないので誤訳であろう。

[168] AKBh 299, 24: 「そして、未来のものがいかにして現在のものとなるかが認識（予想）によってとらえられる。」

[169] AKBh 299, 24-25「また、もし［過去・未来のものが］全くその［現在のものの］通りにあるなら、［それは］現在のものであるということになってしまう。また、もし［現在のものの通りに］ないなら、［実］在しないものも対象であるということが成立する。」

[170] NA 627c26-29.

[171] NA 628a5-9.

いう限りにおいて、ある時ある［認識］を生じさせる」[172]というような言を弄することは無意味である。認識しがたいものに関して世間の認識手段は優れた清浄知とは言えないから、それら（認識手段）は経験（＝知覚）知や記憶知を通して時間を区別する［にすぎない］。そのように経験知であるこの［認識手段］は未来のものを対象とするものではない。［未来のものは］清浄知の対象なのである[173]。

［＜答論＞以上のサンガバドラの見解に対して答えよう。即ち、認識は］それとは別の形で（＝「あった」「あるであろう」という形で）過去・未来のものを対象とするのである。別の形で存在するということは、まだ存在しないもの（＝未来のもの）及び消滅して存在しないもの（＝過去のもの）とが構想されたものとして存在するということである。それらの本性は実在に依拠しないで構想されたものである。［それは］壺と同様である。従って、［実在しないものも］「二」の中に含まれるということが成立する。ゆえに、過去・未来のものを対象とするということとこのこと（過去・未来が実在するということ）とは無関係である。

［また、別の観点から言おう。即ち］もし未来の観念が意と同様に現在の［意］識を生じさせる［原因である］ということが認められるなら、まだ把握（＝経験）されていない未来の［観念］は士用果をもたないから［結果を引くことはありえないにもかかわらず、現在の意識という］結果を引くということになってしまう[174]。

---

[172] cf. AKBh 299 20-21.
[173] NA 628b5-9.
[174] 士用果（puruṣakāraphala）は倶有因（sahabhūhetu）及び相応因（saṃprayuktakahetu）の果であって、同時因果または因の直後に生じるものである。今の場合、因は未来、果は現在であるから、未来の観念が現在の意識を士用果として生じることが決してないにもかかわらず、それが起こるではないかということ。cf. AK II 56d: 「二には士［用果］がある。」; AKBh 95 2~: 「倶有［因］と相応因の［二］には士用果がある。…［問：］士用果は他［の因］の［果］でもあるのか、［倶有因と相応因の］二［因］だけの［果］であるのか。［答：］他［の因］の［果］でもある。但し、異熟因を除く。なぜなら、士用果は［因と］同時に生じるか、または［因の］直後に生じるものであるが、異熟因はそうではないからである。」櫻部 1975:384-385 参照。

また、［意］識を生じさせる［原因］でないなら、［意識は］未来の観念の増上果であって、士用果ではないということが合理である[175]。［ところが、現在の意識は未来の観念の増上果ではありえない。］なぜなら、増上果とは「先に存在したもの以外の因果的存在は、すべての因果的存在の増上果である」と説かれているからである[176]。士用果もまた原因よりも先に生じるということは認められない。従って、未来の観念が現在の［意］識を生じさせるものであるということは［有部］自らの定説と矛盾するから、［そのように］生じさせる［原因］がないとき生じさせられる［結果］もないことになるということが合理である。

［未来の観念は認識の］対象であるだけであるということを認めるとき、定説と矛盾することはない。一切の存在要素に関して、原因がないときそれによって［生じる］どんな結果も否定されるのであるが、それは原因そのものを否定しているわけではない。

もし過去・未来のものが［それ自体とは］別様にして対象であり、別様にして存在するとすれば、［それは］現在のものであるということになる。なぜなら［それには］「あった」「あるであろう」ということが全くない［ことになるからである］。従って、［過去・未来のものに関しては現在とは］別の［非実在という］形で認識が生じるということが認められるのである。[177]

---

[175] この場合は、「能作因・増上果」の関係を想定しているのであろう。cf. AK II 56b: 「先［に説かれた因］の果が増上果である。」; AKBh 94, 20: 「先とは能作因が先に説かれたからである。それの［果が］増上果である。」なお、能作因とは、ある存在要素の生起に対して妨げとならないもののすべてを意味する。cf. AK II 50a.

[176] 語句が必ずしも一致しないが、AK II 58cd の引用であろう。cf. AK II 58cd: 「先に存在したものでない因果的存在は［すべての］因果的存在の増上果である。」; AKBh 96, 7: 「先に生じたもの以外の因果的存在であるダルマはすべての因果的存在の増上果である。」

[177] cf. AKBh 299, 24-25: 「また、もしそれ（過去・未来のもの）が全くそのよう（現在の通り）であるなら、現在のものであるということになるであろう。また、もし［現在の通りで］ないなら、［実］在しないものも対象であるということが成立する。」

IV－2－3　第二教証批判その三　D 145a6-146a1; P 282a7-283a3.

「［過去・未来のものは］**それが散乱したものである**」と言うなら[178]、［すなわち、］現在のものが散乱したものである［と言うなら］、「過去・未来のものは［散乱したものでは］**ない。なぜなら、散乱したものを把握することはできないからである**」［とヴァスバンドゥは言う］。もし、「その散乱した［過去・未来の］ものは把握できるのであって、現在のものがあたかも経験されるかのように思い出されるというわけではない」と言うならば、それは生じたもの［即ち、現在のもの］であるということになってしまう。たとえば、現在時の集合体が散乱しているとして、集合体の状態を待たずに散乱したものを把握するようなものである。[179]

もし「それぞれの[180]［即ち］過去・未来・現在の実在は、**原子に分解しているとき**「過去・未来」と呼ばれるのであって、何らかの属性が生じたり滅したりするわけではない」と言うならば、**その場合、原子は恒常であるということになってしまう**。なぜなら、三時にわたって［原子は］変化しないからである。［また、その場合ただ原子の］**集積と分散だけがあることになってしまう**と。［すなわち、］順次、現在時にあるものは原子が集積したものであり、［原子が］分散しているだけのものが過去・未来のものである、ということである。

その場合**アージーヴィカ派の説が採られている**[181]と［ヴァスバンドゥは］言う。［また、］**経典も無視されている**[182]［即ち］見過ごされている［と言う］。どのように見過ごされているかと言えば、眼という感官の

---

[178] AKBh 299, 25:「『それ（過去・未来のもの）は、それ（現在のもの）が散乱しているのである』と言うならば、そうではない。なぜなら、散乱したものを把握することはできないからである。」

[179] cf. SA 474, 25-26. 本書第2章（秋本 1991a: 92）参照。

[180] AKBh 300, 1-2:「もしそれぞれの物質的存在は［過去・未来時には］ただ原子に分解しているだけなら、原子は恒常であるということになってしまう。また、その場合ただ原子の集積と分解だけがあることになってしまう。」

[181] AKBh 300, 2-3:「しかし、［その場合］『何も生起しないし消滅しもしない』というアージーヴィカ派の説が採られていることになる。」

[182] AKBh 300, 4:「『また、眼は生じるときどこからもやってこない』云々という［前述の］経典が無視されていることになる。」

諸原子は、未来時には分散し現在時には密集するということから、「**眼は生じるときどこからもやってくるわけではない**」[183]という［この経典の句が］見過ごされているのである。同様に、眼という感官の諸原子は集積したり分散したりするだけであると認められるなら、「**消滅するときどこにも集まるわけではない**」[184]というその「経典の句］も見過ごされている［ことになる］。［さらに、アージーヴィカ派のように］「［何も生起しないし］**消滅しもしない**」と言うことによって、「**眼は前に無くて今存在し、存在し終えて消滅する**」というその［経典の句］[185]も見過ごされている［ことになる］。なぜなら、眼という感官の原子は恒常であるからである。また、［もし原子が実在しないなら］集積したものも実在しないからである。[186]

また、原子の集合体でないもの（＝感受等）**に**云々[187]とは「原子が集合したものでないものに」という意味である。**どうして散乱性があろうか**とは、「［原子があるべき］場所でないところにある［という前提そのものが誤りである］から、散乱性そのものが「もとより］ない」という意味である。**それらも**とは、「感受等［も］」である。

V－2－4　第二教証批判その四　D 146a1-147a7; P 283a3-284b6

＜有部＞**第十三処も**［認識の］**対象であるということになってしまう**[188]と。［すなわち、］意識の対象が存在するとしても、それと同様に第十三処が存在するということはないから、過去・未来のもののようには第

---

[183] AKBh 299, 12-13 に出る。
[184] AKBh 299, 13 に出る。
[185] AKBh 299, 13-14 に出る。
[186] この一文は文脈上唐突で意味不明。
[187] AKBh 300, 5-6:「また、原子の集合体でない感受等にどうして散乱性があろうか。［過去の］それら（感受等）も、［現在に］生じているものがあたかも経験されるように思い出されるのである。そして、もしそれら（感受等）は、全く［現在のものの］通りに存在するなら、恒常であるということになる。また、そうでないなら存在しないものも［認識の］対象となることが成立する。」
[188] AKBh 300, 7:「＜有部＞存在しないものも［認識の］対象となるなら、第十三処も［対象である］ことになってしまう。」

十三処が［認識の］対象［として存在する］ということはない。従って、［有部においては］対象をもたない認識は存在しないと決定される、ということである。

＜ヴァスバンドゥ＞**では、第十三処**云々[189]と。「第十三処は存在しない」というこの認識の対象が実在であることは不合理である。第十三処は眼等「の十二処］のようには存在しないからである。従って、［有部にとって］存在しないはずのないこの［認識の］対象は何であるかが説かれなければならない、ということである。

＜有部＞［第十三処という］**この名称だけが対象である**[190]と。ヴァイバーシカは「［第十三処は実体としての］対象をもたないからである」と言う。サンガバドラ師は、「ここで、存在しないことを言い表す言葉［例えば「第十三処」等］の存在が、そのこと（存在しないこと）を言い表すのである。従って、存在しないことを述べる言葉の表示によって［「存在しない」という］認識が生じるのである」と言う。[191]

＜ヴァスバンドゥ＞［第十三処という名称が］存在しないということなら、**その場合「名称こそが存在しない」と理解されることになってしまう**。［そして、］それは無意味である。［なぜなら、］名称を知覚する耳識が「［名称は］存在しない」などとどうして理解しようか［、するはずはないからである］。

＜有部＞サンガバドラ師は、「それ（名称）については、存在しないという認識が生じるのではなくて、存在するという認識が生じるという点で確定しているから、実在の否定を対象とする諸々［の認識］は、実在を対象として実在を否定するのである。［Aは］存在しないと言うとき、それによってその言明の認識［が生じるのである］。『［認識が］対象なしに生じることは不合理である［と言うのである］から、［Aは存在しないというときの］否定の対象は何か』と問うなら、それは対象（A）を表示す

---

[189] AKBh 300, 7-8: 「＜ヴァスバンドゥ＞では、『第十三処は存在しない』というこの認識の対象は何か。」

[190] AKBh 300, 8.

[191] NA 623c28-624a3.

る［語］である［と答えよう］。そして、例えば［『非バラモン』、『無常』という認識が生じるとき、］『バラモン』や『恒常』と表す［語］で表示されるものを『存在しない』とする認識がどうして生じないであろうか」と言う。[192]

＜答論＞それ［例えば、「第十三処」という語］は［表示］対象をもたないから、非存在を表示する［語］の認識においてもし非存在が表示対象となるなら、どんな語も表示対象をもたないことになってしまう。［なぜなら、］もし実在の否定を対象とすることが、「存在しない」という認識にあるとすれば、名称を対象とすることはなくなってしまう［からである］。あるいは、名称は存在しないということになってしまうからである。

もし実在の否定を対象としても実在こそが認識の対象であるなら、バラモン等の否定を対象としてもバラモンこそが認識の対象であることになってしまう。

「言われたところの実在の否定とは存在しないと言明することであり、それによってこの［語］は実在の無を本性とするから、あるいは、表示されるものの否定であるから、実在の否定を表示すると考えられる」と言うなら、どちらにしても［認識の対象が］生じることはない［と答えよう］。なぜなら、それ（非存在）を本性としているからである。

また、もし「実在という語は存在するという語を表す［即ち、実在の否定の場合「存在しない」という語が認識の対象である］」と言うなら、その場合にも不合理である。ここで、「存在しない」という語が［認識の対象であることを］言おうとしているのではなく、第十三処という語の表示対象が［認識の対象であることを言おうとしているのである］。「非バラモン」という［語によって］もバラモンに似て非なるものが理解されるのである。「すべての他者［即ち、バラモン］でないもの」が「非バラモン」ということである。語を［対象とする］認識があるのではない。「第十三処は存在しない」というときも、第十三処という語の表示対象は存在しないということであると成立する。[193]

---

[192] NA 624a4-20.
[193] cf. TSP 630, 19-24 ad TS1847.

［あなた方によっては］「存在しない」という語を本性とするものによって［実在と実在の無との］二つが表示されると認められるから、実在と実在の無を表示する語は表示対象をもたないことが認められることになる。「全く存在しないものと言われるものは認識の対象でもなく、［語の］表示対象でもない」と言うなら、その場合には「壺」・「布」等も認識の対象でもなく、［語の］表示対象でもないということになってしまう。全く存在しないものは「先にない」等の区別によって異なることは不合理である。見方によって異なる「壺」・「布」等と同様に[194]。

「音声は先にない」ということを対象とする人[195]［即ち］「［音声は］まだ生じていない」ことを対象とする人、その人**にとって対象は何か**と［ヴァスバンドゥが］[196]問うなら、ヴァイバーシカは「生滅以外の別のものはないから、音声がまだ生じないで存在する」と考えて、＜有部＞「**音声こそが対象である**」と答える。［なぜなら、］三時において音声の本性に区別はない［と考える］からである。［これに対して］**それでは**云々と［ヴァスバンドゥは］言う。もし、「音声は先にない」ことを対象とする人が他ならぬ音声を対象として、［それの］否定だけを了解する限りであるならば、その場合、**音声がないことを望む人に音声が発せられることになってしまう**。つまり、音声［がないのに、それ］を望む人には音声が常にあることになってしまう、ということである。

もし未来時にある［音声が対象である］**と言うならば**[197]と。［未来時とは］未生の位態［ということであり、そこにある］音声がすなわち「音

---

[194] この喩例部分の意味は必ずしも明らかでない。

[195] AKBh 300, 9-10: 「＜問＞また、『音声は先にない』ということを対象とする人にとって、［認識の］対象は何か。＜有部＞音声こそが対象である。＜ヴァスバンドゥ＞それでは、音声がないことを望む人に音声が発せられることになってしまう。」

[196] NA には譬喩師の質問として出る。NA 622a25-26: 「又若縁声先非有者、此能縁覚為何所縁。」

[197] AKBh 300, 10-11: 「もし『未来時にある［音声が対象である］』と言うならば、［未来のものが存在すると主張するあなた方が、その］存在する［音声］に対してどうして「ない」という認識が起こるのか。『現在［の音声］はない』と

声は先にない」である。音声がないことを望む人は未生の位態にある音声をこそ望んでいるのであって、その人に［音声が］発せられるはずがない［と言うならば］、［未来のものが存在すると主張するあなた方が、その］**存在する**［音声］**に対してどうして「ない」という認識が起こるのか**と［ヴァスバンドゥは問う］。**現在**［の音声］**はない**と。「すなわち、］この現在［の音声］はないというようにして「ない」という認識が生じるのであって、［そのとき］存在しないものを対象としているのではない、ということである。［もし有部がそのように言うなら、「それはおかしい」とヴァスバンドゥは言う。なぜなら、］**同一であるからである。**［すなわち、有部にとって］未来であるものは現在のものに他ならないから、どうして［未来のものがあって］現在のものがないということがあろうか。また、［逆に］未来のものがないときには現在のものもないという認識が生じるのである。［なぜなら、両者に］区別がないからである。

あるいは、それに特性が［生じる］[198]と。［すなわち、］現在時にない［その特性］は今［どこにも］存在しないということである。［そのとき、］**それ（特性）は「前に無くて今存在する」ということが成立する**と。未来時にあって［もと］存在しないで、現在時に［今］存在するからである。［従って、認識の対象は］**存在するものと存在しないものとの二つである。**［すなわち、認識は］現在時に関しては「存在するもの」を対象とし、未来時に関しては「存在しないもの」を対象とする、ということである。

V－2－5　第二教証批判その五[199]　D 147a7-b4; P 284b6-285a3.

言うなら、それはおかしい。［現に対象とするという点で現在のものと］同一であるからである。」

[198] AKBh 300, 11-12:「あるいは、それに特性が［生じるとき］、それは「前に無くて今存在する」ということが成立する。したがって、認識の対象は存在するものと存在しないものとの二つである。」

[199] この項は全体が SA の註釈と語句的にも内容的にもかなり一致する。本書第2章（秋本 1991a: 94）参照。

［有部は、］「もし［認識が］＜存在しないもの＞を対象とするならそれでは［釈迦牟尼］**菩薩が『世間にないもの』**云々[200]と［経典に］説かれたことはどのように了解されるのか」と反論する。これによって、［有部は］それ（認識）が＜存在しないもの＞を対象とすることを否定するのである。

［これに対して、］**他の増上慢をもつ人々**云々[201]と［答える］。この経典の意図は「不浄の三昧に入った者たちは、存在しない表象、即ち加行の状態においては**存在しない**天眼の**表象さえも存在すると見るが、私は**天眼の明らかな表象そのものだけを存在すると**見る**」ということである。

どうして思案があろうか[202]とは、「あるのかないのか」という疑いが［どうしてあろうか］ということである。諸々の認識が存在するものと存在しないものとを対象とするなら、その両者を認識の対象として［思案することが］成立するが、存在するもの［だけ］を対象とするなら、［思案は］成立しない。

あるいはどんな違いがあろうか[203]とは、もし彼ら（菩薩でないもの）も存在する表象のみを見、存在しない［表象］を［見］ないなら、菩薩とそうでない者たちとに**どんな違いがあろうか**、ということである。

次の［経典］は、存在するものと存在しないものとの二つが認識の対象であるということを示す例である。即ち、「**あるものをあると知り、ないものをないと知る**」[204]と。

---

[200] AKBh 300, 12－13:「それでは［釈迦牟尼］菩薩が『世間に無いものを、私が知ったり見たりするようなことはありえない』と言われた［のはどうしてか。］」

[201] AKBh 300, 13-14:「『他の増上慢をもつ人々は存在しない表象さえも存在すると見るが、私は存在するものだけを存在すると見る』ということがその［経典］における趣旨である。」

[202] AKBh 300, 15:「もしそうでなくてすべての認識が存在するものを対象とするなら、この［菩薩］にどうして思案があろうか」

[203] AKBh 300, 15-16:「あるいは［菩薩とそうでない者たちとに］どんな違いがあろうか。」

[204] AKBh 300, 16-18:「そして、次のように別［の経典］に世尊によって説かれたことは、そのよう［に認識は存在するものと存在しないものとを対象とすると

V－3　第一理証批判　D 147b4-148a3; P 285a3-b3.

従って、「認識は［実］**在するものを対象とするから」ということも**［三世実有の］**理由にはならない。**[205]

サンガバドラ師は言う。「認識を生じさせる原因（＝対象）は＜存在するもの＞であるが、これに二種類がある。実在と仮象とである。あるもの（A）に依存することなく［そのもの（B）の］認識が生じる［とき、それ（B）］は実在である。あるもの（A）に依存して［そのもの（B）の］認識が生じる［とき、それ（B）］は仮象である。実在には二種類がある。特殊な作用をもつ［実体］と［作用をもたない］単なる実体とである。仮象にも二種類がある。実［在（A）］を根拠とするものと仮［象（A'）］を根拠とするものとである」[206]と。

［これに対して答えよう。］もし仮象を対象領域とするときの認識とは存在しないものを対象とすることであるなら、仮象は物（色）等の存在のようには本性をもたないから、それ（実・仮）を根拠とするものが［認識の］対象であることにはならない。［また、］もしそのように認識が仮象を対象とするものでないなら、それ（実・仮）を根拠とするものとは実在であるということになるから、認識が「壺」「布」等という［仮象の］形で物等［の実在］を対象とすることは不合理であるということになる。

いうことを示すもの］である。［即ち］『．．．（略）．．．あるものをあると知り、ないものをないと［知り］、中間のものを中間と［知り］、最上のものを最上のものと［知る］であろう』と。」

[205] AKBh 300, 18-19. cf. AK V $25b_2$.

[206] NA 621c20-622a2. 衆賢は、〈存在するもの〉である認識の対象を実在と仮象とに分けるのであるが、実在はさらに作用を契機として現在のものと過去・未来のものとに分けている。仮象については実在または仮象を根拠とするものの二種とするが、NA では喩例として「瓶」または「軍」を挙げる。瓶はそれ自体ダルマの集合体として仮象であるが、それを成立させているダルマ（五位の範疇中の「色」所属）が直接に集合したものであるから「実在を根拠とするもの」であり、軍はそれ自体を成立させている直接の要素は人であって、それもまたダルマの仮象であるから、「仮象を根拠とするもの」である。しかし、後者もまた最終的には実在に行き着くと考えていると思われる。Cox1988: 47-48（福田 1996: 33-34）参照。

［なぜなら、］物等はその［「壺」「布」等の］形象［と同じ］ではないから、その形象とは別のものであるのにその形象で把握されるということにはならない［からである］。［つまり、サンガバドラの説に依れば］原因であるというだけでは［或る］対象領域が［認識の］対象であるということにはならなくなる[207]。なぜなら、すべての原因（縁）が認識の対象であることになるからである。従って、［「壺」等の対象］自らと類似した知識を生じさせるものが原因であり、それこそが［認識の］対象である。即ち、対象こそが原因である。もし、そうではなくて、表象をもたない知識の対象は［それとは］別の形象であると認めるなら、その場合、過大適用の誤りということになるから、偉大な教えから逸脱することになってしまう。従って、杭を対象としていることには違いないが、そこに人は存在しないのであるから、［認識の］対象は＜存在しないもの＞に他ならないのである[208]。

V－4　第二理証批判

V－4－1　第二理証批判その一　D 148a3-5; P 285b3-5.

それ（過去の行為）を前提とする［心の］**特殊な連続体から**［結果は生じるのである］[209]とは［次のような］意味である。**それを前提とする**［連続体］とは、［過去の行為の］等流果を［次々と］もたらすような**連続体**である。**特殊な**という語は、異熟果をもたらす連続体［の一齣］を示しているから［「特殊な連続体」］である。「**自我の否定**」［章＝

[207] この議論は「壺等を原因として壺等の認識が生じるはずであるのに、サンガバドラによれば、仮象である壺等だけでなくその根拠としての物質的存在（実在）であることなども認識の対象であることになる」ということであろう。それは直後の本文の理由句の「すべての原因」につながる。

[208] 「杭と人」に関する議論は、NA 623b12~に出るが、これは譬喩師（NA 622a16-27）に対する反駁のなかで衆賢が持ち出す例である。

[209] AKBh 300, 19-21:「『［行為の］結果［がある］から』（AK V 25b3）と言われたことも［理由にならない］。なぜなら、経量部は『過去の行為からではなくて、それ（行為）を前提とする［心の］特殊な連続体から結果は生じる』と説くからである。そのことは自我の否定［の章（＝「破我品」］で我々は説明しよう。」

「破我品」］**で我々は説明しよう**とは、「［過去の行為の］**連続体の特殊な変化から**［結果は生じる］。**例えば、種子から結果が［生じる］ように**」云々[210]によってである。

V－4－2　第二理証批判その二　P 285b5-286b6; D 148a5-149a4

［ところで、］**或る**［存在要素］**の過去・未来のものが実在する**［即ち］仮象ではない**とき**[211]。**それに対する**とは、結果に対する、である。それ（原因）がないときそれ（結果）の存在することはないから、結果が生起させるものは原因の能力である。もし結果が恒常であるなら、**それ（結果）に対する行為（原因）の能力**はないということになる。従って、善悪の行為は無意味になってしまうから、偉大な方によって説かれたことを逸脱するということになる[212]。

［これに対して有部は、結果の］**生起に対する能力がある**と［言う］。ところで、この〈生起〉とは何か。もし結果の存在が〈生起〉であると言うなら、それはおかしい。なぜなら、［有部によれば、結果は恒常であるから］未来の［〈生起〉］も［今］実在するからである。もし〈生起〉とは、それ（結果）の存在そのものとは別の或る特殊なものを獲得することであると言うなら、**それなら、〈生起〉は前に無くて今存在する、ということが成立する**。その「特殊なもの」は、以前には存在しないからである。［しかも、それは］結果とは別なものであると説かれるべきではない。もし行為とその結果とには、それらとは別な［存在としての］能力が存在することはないが、それ（結果）に［新しい］状態が〈生起〉するのである［と言う］なら、それ（状態）は以前にも以後にも存在しないから、

---

210 『倶舎論』第 9 章「破我品」からの引用である（AKBh 477, 10）。テキスト註参照。

211 AKBh 300, 21-22: 「ところで、或る［ダルマ］の過去・未来のものが実在するとき、それ（ダルマ）の結果が恒常であるから、それ（結果）に対して行為にどんな能力があるのか。［有部：結果の］生起に対する能力がある。それなら、〈生起〉は前に無くて今存在する、ということが成立する。また、もしすべてが存在するなら、今、何の、何に対する能力があるのか。」

212 テキスト（TA[T]）ではこの後に、"āracito bhavati"という句が入る（文脈上の意味不明）。

有部は［自説を］捨てて、諸存在の各々が一つのものでありながら、恒常でもあり非恒常でもあると［主張する］ことになってしまう。また、一部［の存在］が恒常であると認めるなら、恒常な［存在］と恒常でない［存在］とがあるということになってしまう。［その状態は］仮象であるから、実在でないものが〈生起〉するのであると言うべきではない。なぜなら、その場合には諸々の行為のもつ［結果の生起に対する］能力［を説くこと自体］が不合理となるからである。

また、もしすべてが存在するならとは、行為とその結果と〈生起〉と[213]が［存在するなら］である。**今、**［何の、］**何に対する**と。〈生起〉か、結果に対する行為か、他のものか、**いずれの**原因**の**［いずれに対する］能力があると言うのか。なぜなら、［それらのすべてが］あらゆる時間に実在するからである。

次のようなヴァールシャガニヤ派（雨衆外道）の説が［云々］[214]と。

「それは認められない」とサンガバドラ師は［ヴァスバンドゥに対して］反論する。すなわち、「論理の消滅した人々（雨衆外道）は［誤った］方法で存在と非存在とを認めるからである[215]。［それに対し我々は］過去・未来のものは生[216]滅の性質をもち、認識の対象の本性であり、以前に生じたもの（過去）、［他の存在要素に］伴って生じるであろう結果を本性とするもの（未来）であるから、〈存在する〉［と言い］、現在のも

---

[213] テキスト（TA[T]）の"'bras bu skye ba'o"に"dang"を補って、"'bras bu dang skye ba'o"とする。cf. SA 476, 19-22. 本書第２章参照。

[214] AKBh 301, 1-3: 「次のようなヴァールシャガニヤ派の説が示されている［にすぎない］。［即ち、］『「存在するものは必ず存在する。存在しないものは決して存在しない。存在しないものが生起することはない。存在するものが消滅することはない』と。」なお、ヴァールシャガニヤ派（雨衆外道）はサーンキヤ学派の一派。村上 1982:133-148 参照。

[215] この一文は、NA 643a6-7 によって、TA の"rnam grangs kyis 'gags pa'i rigs rnams"は、"rnam grangs kyis 'gags pa dang ma skyes pa"と訂正すべきかもしれない。その場合、「［我々は、別の］方法で、既に滅したもの、未だ生じていないものについて［各々］存在と非存在とを認めるからである」と訳し得る。

[216] テキスト（TA[T]）に、skye ba を補った。

のの本性［をもたない］から、〈存在しない〉［とも言うのである］。［なぜなら、］作用[217]を明らかに起こしているものが現在のものであって、過去・未来のものはそのようではない［からである］。［従って、］どうしてヴァールシャガニヤ派の説と同様であろうか」と[218]。

［これに対して答えよう。］もし［過去・未来のものは］「あった」「あるであろう」［という形で］存在し、それが認識の対象であると認めるなら、ヴァールシャガニヤ派の説とは違って正しいことになる。また、もし現在のものと同様に本性をもって［存在し、それが］認識の対象であると認めるなら、その場合はすべてのときに［すべてのものが］存在することになるから、どうしてヴァールシャガニヤ派の説［と同じこと］にならないであろうか。

＜有部＞**それに対して、現在のものにする能力がある**［と言おう］[219]とは、例えば行為が結果の存在［をもたらす能力］のように、ということである。（ｉ）［＜有部＞〈現在のものにする〉とは］**他の場所へ引くことである**とは、未来のものはその場にないから、という意味で言われている。［結果は］**恒常であることになる**とは、それ（結果）を引く諸原因が常に存在しているからである。**非物質的なもの**即ち感受等**にどうしてそれがあろうか**。引くことという語を補うべきである。それら（感受等）が常に場所を占めないこと[220]は自明である。結果を**引くこと**即ち

---

[217] "rab tu sbyor ba"はふつう"prayoga"であろうが、文脈上から「作用」と訳す。

[218] =NA 634a6-11.テキスト（TA[T]）にはダヌダ（||）がないが、ここまでをサンガバドラ説の引用と解する。 テキスト註参照。

[219] AKBh 301, 3-5: 「［有部：］それに対して、現在のものにする能力がある［と言おう］。＜現在のものにする＞とはどういうことか。（ｉ）『別の場所に引くことである』と言うなら、［結果は］恒常であることになる。また、非物質的なもの（＝感受等）にどうしてそれ（引くこと）があろうか。また、＜引くこと＞は前に無くて今存在するものである。（ii）『［原因が結果の］本性を区別することである』と言うなら、［現在のものにする能力は］前に無くて今存在する、ということが成立する。」

[220] テキスト（TA[T]）の"yul na mi gnas pa"（adeśastha）は「［別の場所へ引くということに関しては］適用不可能である」というほどの意味か。cf. SA 476, 28. 本書第 2 章（秋本 1991: 95）参照。

作用と呼ばれるもの[221]**は、前に無くて今存在するものである**。なぜなら、それは以前には存在しなかったものであるからである。ここでも先[222]と同様に考察されるべきである。（ii）［＜有部＞〈現在のものにする〉とは］**本性を区別することである**と。現在のものにするということは、以前には現在のものでないもの（＝結果）を現在のものにするということである。［それが本性を区別することであると言うなら、］その場合、行為に［新たな］能力が成立することになるから、**前に無くて今存在する、ということが成立する**。即ち、その現在のものにする［能力］は、である。たとえ現在のものにする［能力］が以前には存在しないで後に生じると［言っても］、あるいは以前に存在したものであると言っても、いずれにしても［すべてのものが存在するという以上、その能力が］これ（結果の本性）を区別することはないから、行為の能力は依然として[223]存在しないということになるのである。

VI　結び　D 148a4; P 286b6.

「どうして名称は無を本性とするものであるか」と言うなら、「比喩的なもの（仮）と比喩的でないもの（実）とは、全く異なるものであるから、［前者としての名称は］無を本性としている」［と答えよう］[224]。また、「因と縁とが存在するとき、生じるものは何か」と言うなら、「それは以前に存在しないものである」と［答えよう］。「無の区別はどのように考察すべきであると説かれているか」と言うなら、「この存在の無は原因をもち、この［存在の無］は原因をもたないと説かれている」［と答えよう］。ある人々は「無の原因を構想すべきではない」［と言う］。また、

---

[221] SA 476, 29 に"kriyāsaṃjñakaṃ"とあるが、そのチベット語訳にはこの語句は現れない。

[222]「結果の生起に対する能力がある」とした有部に対する議論を指す。

[223] テキスト（TA[T]）の"so na ‘dug pa ñid do."は意味不明であるが、「依然として…に留まっている」というほどの意味か。

[224] この文で始まるこの段落はこれまでの議論を総括するものと思えるが、必ずしも文脈が明らかでない。

「［無ではなく］諸存在のみの原因を認めるのはどうしてか」と言うなら、それは以前には存在しない［が今存在する］ものの［原因を認めるから］であって、すべての［存在］に対するすべての［原因を認めるの］ではない［からである］。たとえば、以前に存在しない［で今存在するという］作用［などはもとより存在しないのであるから、それ］の原因（縁）は認められないのと同様である。「では、この作用に何の意味があろうか」と言うなら、［もとより存在しないものであるのに］以前に存在しない［で今存在するという］作用に対して諸縁は作用することはないから、あるとき、以前に存在しない作用［が生じてくること］は認められないのである。その場合に、作用が時間を確立すると言うべきではない。なぜなら、実在［する存在要素］と同様に作用もまた恒常であるからである。

「もし**十二処**[225]は存在するが、過去・未来のものは存在しないなら、過去の意処はどのようにして確立されるのか」と言うなら、答えよう。「現在の認識だけが他の認識に依拠して生じてくるのであって、過去の［認識］はそうではないから、この誤りはない」と。**三時も**［説かれたが[226]と］。「もし三時があると説かれたなら、過去・未来のもの［実在］が成立する」という反論に対して、［三時が］**ある通りに説かれたのである**と［ヴァスバンドゥは］答える。［すなわち、］以前にあったものが過去のものであり、原因があればあるであろうものが未来のものであり、生じてまだ消滅していないものが現在のものである、ということである。

どうして、それに対してそれと結びつくのか[227]とは、**どうして、それ**［即ち］過去・未来の事物**に対して**、それ［即ち］過去・未来の煩悩**と結びつくのか**ということである。**それから生じそれの原因である随眠**

[225] AKBH 301, 6-8:「しかし、経典に説かれているように『すべてがある』と言えば正しい。経典にはどのように『すべてがある』と説かれているか。『バラモンよ、すべてがあるとは十二処すべてが、である』と［説かれているのである］。」

[226] AKBh 301, 8:「三時も［説かれた］が、その［三時］がある通りに説かれたのである。」

[227] AKBh 301, 8-9:「また、もし過去・未来のものが［実在し］ないなら、どうしてそれに対してそれと結びつくのか。」

（＝種子）**があるから**云々[228]と。次に説明しよう。［すなわち、］過去の煩悩**から生じた随眠があるから**過去の煩悩**と結びつく**のであり、未来の**煩悩の原因である随眠があるから**未来の［煩悩］**と結びつく**のであり、過去・未来の事物**を対象とする煩悩の随眠があるから**その**事物に結びつく**のであるということである。

［これに対して］サンガバドラ師は「これは無意味である。過去の煩悩の随眠（＝種子）という存在要素が連続体に生起することはない［からである］。他の存在要素によって随眠が生起することはある」［と言う］[229]。

［しかし、］それは認められない。すなわち、消滅したかのような煩悩が未来時に生起するが、生起すべき煩悩をもった連続体［の一齣］から連続体［の一齣］に生起しながら伴うものが随眠である、ということである。それ（随眠）はまた過去の煩悩の結果であり、未来の煩悩の原因である。それら（過去・未来の煩悩）を離れて随眠が消滅することがないということが、過去・未来の煩悩と結びつくということである。なぜなら、随眠は［過去の煩悩の］結果として、また、［未来の煩悩の］原因としてあるからである。［随眠は］それら（過去・未来の煩悩）を離れてはないのである。

［これに対して有部はあくまで過去・未来の存在要素が実在すると主張する。］従って、**法性は深遠である**[230]と言われたのである。諸々の存在要素の本性が法性である。この議論に対してもサンガバドラ師は、過去・未来のもの［の実在］の論証を多く語るが、ここではこの書の増大することを恐れて逐一反証することはしない。事実上、すべて否定されると理解してよい。

---

[228] AKBh 301, 9-10:「それから生じそれの原因である随眠があるから、［過去・未来の］煩悩と結びつくのであり、それを対象とする煩悩の随眠ががあるから、［過去・未来の］事物に結びつくのである。」

[229] NA 634b17-19. TA は意を取ったものであり、必ずしも一致しない。

[230] AK V 27d:「実に法性は深遠である。」

物が生じ、物が消滅する[231]と。これの意味は同じ［物］が現在のものとなった後、過去のものとなるであろう、ということである。生起すると見て、**未来のものが生起する**[232]［と説かれ］、消滅すると見て、**現在のものが消滅する**［と説かれるのである］。**また、時間が生じる**［と説かれる］[233]とは「それら(存在要素)は時間であり、言葉の対象である」[234]と説かれているからである。**また、時間から**[235]と。［時間からも］**生じる**ということである。［未来時には］**多くの瞬間があるから**［そのうちの一］瞬間が［生じるからである］。

言葉の組み合わせがあるのである[236]。**生じたものが消滅する**と言った後、喩例を［以下に］言う。［例えば］**物が生じ、物が消滅する**［と］。実体として別のものでないからである。**あるもの（A）が生じ別のもの（B）が消滅する**［と］。［例えば］あるもの（A）が生起すると見て**未来のものが生じる**［と説かれ］、別のもの（B）が消滅すると見て**現在のものが消滅する**［と説かれる］。**また、時間が生じる**［と言える］のは、**生じてくる**存在要素**は時間に拘束されているからである**。時間を本性としているからである、という意味である。「それら（存在要素）は時間であり、言葉の対象である」[237]という定義に基づいている。**また、時間から**[238]［即ち］質料因［としての時間］から存在要素は生じる［と言える］。なぜかを［次に］言う。**未来時には多くの瞬間があるからで**

---

[231] AKBh 301, 13-14:「生じるものが消滅する［という］説き方がある。［例えば］物が生じ、物が消滅する［というように］。」

[232] AKBh 301, 14:「あるものが生じ、別なものが消滅する［という］説き方がある。［例えば］未来ものが生じ、現在のものが消滅する［というように］。」

[233] AKBh 301, 15:「また、時間が生じる［という説き方もある］。生じてくるものは時間に拘束されているからである。」

[234] AK I 7c.

[235] AKBh 301, 15-16:「また、時間から生じる［という説き方もある］。未来時には多くの瞬間があるからである。」

[236] この一文で始まる本段落は、SA 477, 13-23 とほぼ一致する（テキスト註参照）。本書第２章（秋本 1991a: 96）参照。なお、直前の註釈と重複するところもあるので、後で SA から付加したものと考えられるが、詳しい事情は不明である。

[237] AK I 7c.

[238] TA の"dus kyang"を"dus las kyang"に訂正する。

あると。［つまり、］山とある未来の多くの瞬間のうちのある一つの瞬間のみが生じるから、**時間からも生じる**と言われるのである。

付随して入った[239]とは、「しかし、［人は］残りのすべて［の煩悩］とすべて［の事物］に関して［結びつく］」[240]という［本論］に付随して入ったということである。

（TA 終）

[239] AKBh 301, 16:「付随して入った［考察］が終わった。」
[240] AK V 24c_2d.

第２節　校訂テキスト　TA[T] D 135a1-150b1; P 270a6-P288a4.

I　D 135a1-5; P 270a6-b3.

ci 'das pa dang ma 'ongs pa 'di rdzas su yod dam[241] zhes bya ba ni da ltar ba dang 'dra bar rang gi ngo bo dang rang gi mtshan nyid kyis[242] [D135a2] yod dam | **'on te med**[243] ces bya [P270a7] ba ni da ltar ba ltar rang gi ngo bos med ces bya ba'o || 'o na ma 'ongs pa ni rang gi ngo bos ma thob pa'i phyir dang | 'das pa ni rang gi ngo bo 'gags pa'i phyir[244] **dus thams cad du yod pa**[245] zhes bya ba ci | da ltar ba nyid [Pa8] 'das pa dang ma 'ongs pa'i gnas skabs [Da3] dag na yang yod na rtag pa nyid du thal bar 'gyur ro || **ji ltar de dang**[246] zhes bya ba ni 'das pa dang ma 'ongs pa'i dngos po dang[247] ngo || **des**[248] zhes bya na ni 'das pa dang ma [P270b1] 'ongs pa'i nyon mongs pas[249] so || **ldan pa 'am bral ba yin**[250] zhes bya ba la | med pa ni med pa dang ldan pa 'am [Da4] bral bar mi rung ste[251] | gnyi ga yang ci yang med pa'i phyir ro || **'dus byas kyi mtshan** [Pb2] **nyid dang ldan pa'i phyir 'dus byas rnams rtag pa nyid du dam mi 'cha'i**[252] zhes bya ba la 'dus byas kyi chos rnams ni 'dus byas kyi mtshan nyid kyi sgo nas dus su 'pho bar 'jug pa yin [Da5] la | dus dag la [Pb3] 'jug pa rnams ni rtag pa nyid du yang mi rung ngo ||[253]

---

241 AKBh 295, 2~: kiṃ punar idam atītānāgataṃ dravyato 'sti.
242 P: kyi. cf. LA P141a1: kyis.
243 AKBh 295, 3: atha na.
244 LA P141a2 になし。
245 AKBh 295, 3: sarvakālāsti-.
246 AKBh 295, 3~: kathaṃ tatra. cf. P279b6: ji ltar na de dang 'am.
247 =SA 468, 24: atītānāgate vastuni.
248 AKBh 295, 4: tena.
249 ≒SA 468, 25: atītānāgatenânuśayena.
250 AKBh 295, 4: saṃyukto bhavati visaṃyukto vā. P, D 共 "bral ba ma yin " とあるが、"ma"は不要。cf. AKBh P279b6: bral ba yin.
251 cf. SA 468, 25~: kathaṃ vâprahīṇaprahīṇāvasthāyāṃ vyavasthāpyante.
252 AKBh 295, 4~: na saṃskārāṇāṃ śāśvatatvaṃ pratijñāyate [Vaibhāṣikaiḥ] saṃskṛtalakṣaṇayogāt.
253 cf. SA 468, 26~: saṃskṛtalakṣaṇayogād iti. yasmāt saṃskṛtalakṣaṇāni jāty-ādīni saṃskārāṇām adhvasaṃcārāya pravartante. atas teṣāṃ na śāśvatatvaṃ

II D 135a5; P 270b3.

gsal ba dam cha'o[254] zhes bya ba ni da ltar ba ltar rang gi ngo bos yod pa nyid du'o ||

II – 1 D 135a5-8; P 270b3-6.

ci'i phyir[255] de rnams kyi de de ltar dam 'cha' ste | ci [Pb4] lung ngam rigs pa'am | gnyi ga la brten nas yin zhes bya ba ni [Da6] 'dri ba'i bsam pa'o || **gsungs phyir**[256] zhes bya bas re zhig lung ston pa ste | gang gi phyir 'das pa'i gzugs yod cing ma 'ongs pa'i [Pb5] gzugs yod pa zhes mgur nas 'das pa dang ma 'ongs pa yod pa nyid du gsungs so || ci'i phyir da ltar byung ba nye bar ma bkod ce na | [Da7] dge slong dag da ltar byung ba'i gzugs yod par ma gyur na [Pb6] 'phags pa nyan thos thos pa dang ltan pa dag yid 'byung ba dang 'dod chags dang bral ba dang 'gog pa'i phyir 'jug par mi 'gyur ro zhes gnyi ga la mi mthun pa smra ba med pa'i phyir ro[257] ||

II – 2 D 135a8-b2; P 270b6-271a1.

gnyis la [Pb7] **brten nas**[258] zhes bya ba [D135b1] rgyas par 'byung ba la | 'dir 'das pa dang ma 'ongs pa yod pa nyid du don gyis gsungs so zhes bya ba ni sngar dngos su gsungs pa las khyad par yin no[259] || 'dir ni mig dang

---

pratijñāyate. LA には以下の文が入る。P141a6-7: 'das pa la sogs par bstan pa'i phyir yang 'du byed rnams rtags nyid ma yin no || gal te rtag par 'gyur na ni dngos po la sogs pa'i tha snyad nyid du mi rung ste | nam mkha' la sogs pa bzhin no || cf. TSP 616, 20~: athâpi syād ākāśavat sadāvasthitatvād atītādivyavasthā tarhi kathaṃ（ity āha na câivam ityādi.）.

[254] AKBh 295, 4~: pratijñāyate tu viṣadaṃ.

[255] AKBh 295, 5: kiṃ kāraṇam.

[256] AK V 25a$_2$: uktatvāt.

[257] ≒SA 469, 8-10: pratyutpannaṃ ced bhikṣavo rūpaṃ nâbhaviṣyan na śrutavān āryaśrāvakaḥ pratyutpannasya rūpasya nirvide virāgāya nirodhāya pratipanno 'bhaviṣyad ity etan nôktam ubhayapakṣaprasiddhatvāt. cf. LA P141b1-2: da ltar byung ba ni nye bar ma bkod de | gnyi ga la mi mthun par smra ba med pa'i phyir ro ||

[258] AKBh 295, 14: dvayaṃ pratītya.

[259] ≒SA 469, 12-13: pūrvaṃ kaṇṭhata uktam iti pradarśitam. idānīm arthato na kaṇṭhata iti viśeṣaḥ.

[Pb8] gzugs la brten nas yid dang chos kyi bar la brten nas zhes rnam par shes pa drug gis rten dang [Db2] dmigs pa nges par brjod na | gal te khyad par med par brjod kyang | yul med par yang rnam par [P271a1] shes pa skye bar rtog na ni | de ltar na long ba la sogs pa rnams la rten med par yang rnam par shes pa skye bar ci ste mi rtog | khyad par gyi rgyu med pa'i phyir ro[260] ||

II – 3　D 135b2-4; P 271a1-4.

dngos po [Db3] med pa [Pa2] yul drug gi khongs su ma 'dus pas dngos po med pa'i yul can gyi blo yod pa ma yin no || **de bas na dmigs pa med pa'i phyir rnam par shes pa nyid du yang mi 'gyur ro**[261] zhes bya ba la | rnam par shes pa [Pa3] ni dngos po so sor rnam par rig pa yin na rnam par shes par [Db4] bya ba med na ni 'dis cung zad kyang rnam par mi shes pas des na rnam par shes pa nyid du yang mi 'gyur ro[262] || rang dang spyi'i mtshan nyid med na des [Pa4] ci zhig khong du chud par bya zhing rnam par shes par bya ba yin |

II – 4　D 135b4-6; P 271a4-5.

'bras bu skye ba'i tshe ni[263] zhes bya ba rgyas par 'byung ste | dge ba [Db5] dang mi dge ba'i las 'gags nas yun ring du lon pa'i phyir 'gags na ni [Pa5] yod pa ma yin la | de lta yin na rgyu med pa'i phyir rnam par smin

---

[260] cf. SA 469, 13~: na dvayaṃ pratītya manovijñānaṃ syāt. yad atītānāgatālaṃbanamiti viśeṣaḥ. TSP 616, 8-9: asati câtītānāgate tadālambanaṃ vijñānaṃ dvayaṃ pratītya na syād ity āgamavirodhaḥ.

[261] AKBh 295, 19: tato vijñānam eva na syād ālambanābhāvāt.

[262] =TSP 616, 5-6: (tathā hi) prativastu vijñaptyātmakaṃ vijñānam asati ca jñeye na kiñcid anena jñeyam ity avijñānam eva syāt. P116b5~: 'di ltar dngos po so sor nges pa rigs pa'i bdag nyid ni rnam par shes pa yin la | shes par bya ba med na 'discung zad kyang mi shes pa'i phyir rnam par shes pa nyid ma yin par 'gyur ro ||. cf. SA 469, 14-16: vijñeye sati vijñānam iti kṛtvā. sādhanaṃ câtra. sadālaṃbanam eva manovijñānam. upalabdhisvabhāvatvāt. cakṣurvijñānavad iti.

[263] AKBh 295, 21: phalotpattikāle.

pa'i 'bras bu mi skye ba zhig go || rgyu med pa ni skye bar mi 'gyur[264] te | ha cang thal bar 'gyur ba'i phyir ro[265] ||

II – 5 D 135b6-7; P 271a5-8.

gdon mi za bar 'di khas [Pa6; Db6] **blang bar bya ba dgos so zhes grag ste**[266] zhes bya ba rgyas par 'byung ste | thams cad yod par smra ba zhes bya ba'i sgra ni bya ba'i rgyu mtshan can yin pa'i phyir ro || de nyid kyi phyir | **de yod smra ba'i phyir thams cad** [Pa7] **yod par smra ba**[267] zhes bya ba smos so || dus gsum la thams cad kyi [Db7] sgra nges par bkod pa'i phyir thams cad kyi sgras dus gsum brjod do || sde pa gzhan 'bras[268] bu ma skyes pa yod pa nyid smra ba rnams ni rnam par phye ste [Pa8] smra ba'o || mdo sde pa rnams ni da ltar byung ba tsam smra ba'o ||

III – 1

III – 1 - 1 D 135b7-136a5; P 271a8-b6.

chos dus rnams su 'jug pa na dngos po gzhan du 'gyur gyi[269] zhes [D136a1] bya ba ni ma 'ongs pa la sogs pa'i dngos po gzhan du 'gyur ba ste | 'dir ma [P271b1] 'ongs pa'i dngos po 'dor zhing da ltar ba'i dngos por 'gyur la | da ltar byung ba'i dngos po 'dor zhing 'das pa'i dngos por 'gyur ro || **rdzas gzhan du 'gyur ba ni ma yin no**[270] zhes [Da2] bya ba ni rdzas kyi rang gi [Pb2] mtshan nyid gzhan du 'gyur ba ma yin pa ste | dngos po dus rnams su 'jug pa ni rang bzhin 'khrul ba med pa'i phyir ro || gzhan du gzhan nyid du ste | ma 'ongs pa las gzhan da ltar byung ba la sogs pa [Pb3] dang

---

264 LA 141b8: mi rung.

265 cf. TSP 616, 9-12: api câtītaṃ karma phaladaṃ na syād yadi tan niḥsattvaṃ sattāśūnyaṃ bhavet, phalotpattikāle vipākahetor abhāvāt. SA 469, 17-19: vidyamānasvalakṣaṇaṃ śubhāśubham atītaṃ karma. vipaktikāla utpadyamānaphalatvāt. vartamānadharmavad iti.

266 AKBh 296, 1~ : avaśyaṃ ca kilâitat (sarvāstivādena satā) 'byupagantavyam.

267 AK V cd_1: tadastivādāt sarvāstivādāḥ.

268 P: 'byas.

269 AKBh 296, 9~ : dharmasyâdhvasu pravartamānasya bhāvānyathātvaṃ bhavati.

270 AKBh 296, 10: na dravyānyathātvam.

'das pa zhes bya bar de thal bar 'gyur ro[271] || [Da3] yang ma 'ongs pa la sogs pa'i dngos po 'di ci zhig ce na | gang las 'das pa dang ma 'ongs pa dang da ltar byung ba'i shes pa dang brjod pa 'jug pa'i yon tan [Pb4] gyi khyad par ro[272] || **dper na gser gyi snod**[273] zhes bya ba ni de nyid la dpe gnyis po gser dang 'o ma ste |[274] 'di ltar gnyi [Da4] ga yang kha dog la sogs pa tshogs pa'i bdag nyid yin la | de la yang dpung rgyan dang gdu bu [Pb5] la sogs pa brjod pa'i rgyu mtshan yon tan dang dbyibs kyi bdag nyid tsam kho na zhig gzhan du 'gyur ba yin gyi kha dog ni ma yin no || de bshin du **'o ma dang zho** dang dar ba la sogs [Da5] pa'i brjod pa'i rgyu mtshan **ro** [Pb6] **dang nus pa dang smin par byed pa** dang | mthu rnams gzhan du 'gyur ba nyid yin gyi kha dog ni ma yin no[275] ||

III – 1 – 2　　D 136a6-b1; P 271b6-272a1.

mtshan nyid gzhan du 'gyur ba ni mtshan nyid 'jug pa la thob pa la bltos nas tha snyad 'dogs te[276] | **dper** [Pb7] **na skyes bu**[277] zhes bya ba la | de'i [Da6] rang bzhin gyi khyad par gyis 'dod chags dang bral ba'i 'jug pa thob pa dang ma thob pa ni khyad par ro[278] || gal te ma 'ongs pa dang 'das pa

---

[271] ≒TSP 614, 12-13: anyathânya evânāgato 'nyo varttamāno 'nyo 'tīta iti prasajyate.

[272] ≒TSP 614, 13-14: kaḥ punar bhāvas tenêṣṭaḥ, guṇaviśeṣaḥ yato 'tītādy-abhidhānajñānapravr̥ttiḥ.

[273] AKBh 296, 10: yathā suvarṇabhājanasya.

[274] LA P142a6 は、ここに以下の文が入る。"kha dog la sogs pa'i tshogs pa'i yon tan dbyibs dang ro la sogs pa bstan par bya ba'i phyir ro ||"（'yon tan'と'dbyi ba'とは「金」、'ro' は「牛乳」について述べている。）

[275] cf. TSP 614, 9-10: yathā suvarṇadravyasya kaṭakakeyūrakuṇḍalādy-abhidhānanimittasya guṇasyânyathātvaṃ na suvarṇasya tathā dharmasyânāgatādibhāvād anyathātvam. SA 469, 24~: suvarṇaṃ kṣīraṃ cêti dr̥ṣṭāntadvayaṃ yathākramam ākr̥tiguṇānyathātvajñāpanārthaṃ.

[276] =SA 469, 25: lakṣaṇānyathikasya lakṣaṇavr̥ttilābhāpekṣo vyavahāraḥ; P129a5: mtshan nyid gzhan du gyur pa ni mtshan nyid 'jug pa thob pa la bltos nas tha snyad brjod par byed do || ≒TSP 614, 18: asya hy atītādilakṣaṇavr̥ttilābhāpekṣo vyavahāra iti pūrvakād bhedaḥ.

[277] AKBh 296, 17~ :（tad） yathā puruṣa（ekasyāṃ striyāṃ raktaḥ śeṣāsv avirakta iti）.

[278] LA 142b1-2 =SA 469, 30-470, 3 にはこの文はない。

dang da ltar 'byung ba dag mi ldan par gyur pa de [Pb8] lta na ma 'ongs pa nyid 'byung ba ma yin zhing 'das par yang mi 'gyur ro || 'das [Da7] pa dang ma 'ongs pa da ltar byung ba mi ldan par gyur pas ma 'ongs pa dang da ltar byung ba dang 'das par yang mi 'gyur zhing | gal te da [P272a1] ltar byung ba dang 'das pa dang ma 'ongs pa dag mi ldan par gyur pas ma 'ongs pa nyid da ltar byung ba dang da ltar byung ba nyid 'das pa [D136b1] zhes bya bar mi 'gyur ro[279] ||

III – 1 – 3 D 136b1-4; P 272a1-6.

gnas skabs las [Pa2] **gnas skabs thob pa**[280] ste | ma 'ongs pa'i gnas skabs la ma 'ongs pa zhes bya ba'i de da ltar byung ba ma yin zhing 'das pa ma yin no || de zhin du da ltar byung ba dang 'das pa la yang brjod par [Pa3] bya'o || **rdzas gzhan** zhes bya ba [Db2] rdzas gzhan gyi sgo nas **ni ma yin te**[281] zhes bya ba ni rdzas ni dus gsum char du yang tha mi[282] dad pa'i phyir ro[283] || 'di gnas skabs la bltos nas tha snyad[284] brjod de[285] | [Pa4] de nyid kyi phyir **dper na ri lu gcig**[286] ces bya ba[287] smos te | sa'i ri [Db3] lu'o || gcig gi **shod mig**[288] tu zhes bya ba ni gcig gi gnas su'o || **brgya'i shod mi tu**[289] zhes

---

[279] =SA 469, 27-31: yady anāgatam atītapratyutpannābhyāṃ viyuktaṃ syāt. evaṃ satinânāgatam evôtpannam atītam vêti syāt. athâtītam anāgatapratyutpannābhyāṃ viyuktaṃ syāt. nânāgatam eva vartamānaṃ câtītaṃ syāt. vartamānam atītānāgatābhyāṃ viyuktaṃ syāt. nânāgatam eva vartamānam evâtītaṃ syāt. 但し、チベット語訳（P129a6-7）にはない。

[280] AKBh 296, 19~: avasthām avasthāṃ prāpya. P281a1-2: gnas skabs dang gnas skabs su phyin nas（=SA P129b1）.

[281] AKBh 296, 20: na dravyāntarataḥ. P280b3: rdzas gzhan du 'gyur ba ni ma yin te |

[282] P, D: omit "mi".

[283] =TSP 614, 20-21:（avasthāntarataḥ na dravyataḥ） dravyasya triṣv api kāleṣv abhinnatvāt. P115b7: rdzas ni dus（g） sum char du tha mi dad pa'i phyir ro ||

[284] P: bsnyad.

[285] ≒SA 470, 3: avasthānyathikasyâvasthāpekṣo vyavahāraḥ. ≒TSP 614, 23: asyâpy avasthāpekṣayā vyavahāraḥ. TSP P116a1: 'di yang gnas skabs la bltos nas tha snyad du bya ba yin te.

[286] AKBh 296, 20: yathâikā vartikā.

[287] P, D: ces bya ba la. 江島 1986: n.36 参照。

[288] AKBh 296, 20: ekāṅke.

bya ba ni brgya'i [Pa5] gnas su'o ‖ **stong gi shod mig tu**[290] zhes bya ba ni stong gi gnas su'o[291] ‖ de rang bzhin gzhan du 'gyur ba ni ma yin gyi | 'o na ci zhe na | gnas gyi khyad par dang 'brel pa las grangs ston par [Pa6] byed pa'i ming gzhan du 'byung [Db4] ngo[292] ‖

III－1－4　D 136b4-7; P 272a6-b2.

gzhan dang gzhan du 'gyur ba ni[293] zhes bya ba la sogs pa la | **snga ma dang phyi ma la bltos nas gzhan dang gzhan zhes brjod**[294] kyi | rang bzhin gzhan du 'gyur ba [Pa7] ma yin zhing | rdzas gzhan du 'gyur ba ni ma yin te | 'das pa dang da ltar ba la ltos nas phyi ma ma 'ongs [Db5] pa zhes bya ba la | da ltar ba dang ma 'ongs pa la bltos nas snga ma 'das pa zhes bya zhin | [Pa8] snga ma dang phyi ma ste 'das pa dang ma 'ongs pa la bltos nas da ltar ba zhes bya'o[295] | 'di ni snga ma dang phyi ma la ltos nas tha snyad brjod do[296] ‖ gang la snga ma kho nas yod kyi | phyi ma med [Db6] pa de ni ma 'ongs pa [P272b1] yin la | gang la phyi ma kho na yod kyi snga ma med pa de ni 'das pa yin zhin | gang la snga ma dang phyi ma yod pa de ni da

---

[289] AKBh 296, 21: śatāṅke.

[290] AKBh 296, 21: sahasrāṅke.

[291] ≒ SA 470, 9-11: yathâikā vartikêti vistaraḥ. yathâikā gulikâikānke nikṣiptâikasthāne sthapitâikam ity ucyate. evaṃ śatānke śataṃ sahasrānke sahasram ity ucyate.

[292] =TSP 614, 24-25: na hi tsyāḥ svabhāvānyathātvaṃ bhavati kiṃ tarhi sthāna-viśeṣasambandhāt saṅkhyābhidyotakaṃ saṃjñāntaram utpadyate. P116a1~: de'i rang bzhin gzhan du 'gyur ba nyid ni ma yin no ‖ 'o na ci zhe na | gnas skabs kyi khyad par dang 'brel pa'i phyir grangs gsal bar byed pa'i ming gzhan 'byung ba yin no ‖ ≒ SA 470, 11-13: na punas tasyāḥ svabhāvānyathātvaṃ. kiṃ tarhi. sthānāntaraviśeṣāt saṃkhyābhidyotakaṃ saṃjñāntaram utpadyata iti.

[293] AKBh 297, 1: anyathānyathikasya.

[294] AKBh 297, 1~ : pūrvāparam apekṣyânyo 'nya ucyate.

[295] ≒SA 470, 14-16: pūrvam evâtītaṃ vartamānaṃ vâpekṣyânāgata iti. pūrvaṃ vâtītamaparaṃ vânāgatam apekṣya vartamāna iti. aparam eva vartamānam anāgataṃ vâpekṣyâtīta iti.

[296] =TSP 615, 5: asya pūrvāparāpekṣo vyavahāraḥ. P116a3: 'di ni snga ma dang phyi mala bltos nas tha snyad du byed pa yin no ‖ ≒SA 470, 16-17: pūrvāparāpekṣo 'nyathānyathikasya vyavahāraḥ.

ltar ba yin no[297] || gzhan dag na re du tsam gyi snga ma dang phyi ma ni 'dis 'chad par 'dod pa [Pb2] ma yin no zhes zer ro || de nyid kyi phyir **bud med** [Db7] **gcig la ma zhes kyang bya bu mo zhes kyang bya ba bzhin no**[298] zhes bya ba brjod de | snga ma dang phyi ma la bltos nas yin gyi rdzas ni ma yin no[299] ||

III – 2

III – 2 – 1 D 136b7-137a5; P 272b2-273a2.

yongs [Pb3] **su 'gyur bar smra ba'i phyir**[300] zhes bya ba la sogs pa 'byung ste | grangs can gyi grub pa'i mtha' ni chos can rdzas nas bzhin du[301] 'o ma'i chos btang nas zho'i chos kyi [D137a1] bdag nyid du rnam par gnas par 'gyur la | zho'i chos yongs su btang nas dar [Pb4] ba la sogs pa'i bdag nyid du yongs su 'gyur ro zhes bya ba yin pa de bzhin du 'di'i yang rdzas ni ma 'ongs pa'i dngos po yongs su dor nas da ltar ba'i dngos por [Da2] 'gyur la | da ltar ba'i dngos po yongs su [Pb5] dor nas kyang 'das pa'i dngos por 'gyur zhing | ma 'ongs pa la sogs pa'i dngos po rnams rdzas las[302] don gzhan nyid kyang ma yin no zhes bya ba yin no || **grangs can gyi phyogs la bslan par bya'o**[303] zhes [Pb6] bya ba ni de'i dgag pa [Da3] gang yin[304] pa de ni 'di'i yang yin no[305] zhes bstan pa yin la | slob dpon 'dus bzang na re | mama tu nâitat pratibhāti（bdag mi gsal ba min no） zhes zer ro || ci'i phyir zhe na | 'dra ba rjes su 'jug pa la [Pb7] dgongs nas de ltar bshad do || gnas pa'i

---

[297] TSP 615, 5-6: yasya pūrvam evâsti nâparaḥ so 'nāgato yasya pūrvam asty aparaṃca sa varttamāno yasyâparam eva na pūrvaṃ so 'tīta iti.

[298] [yathā] ekā strī mātā vôcyate duhitā vêti（AKBh 297, 2~.）.

[299] ≒SA 470, 19: pūrvāparāpekṣayā na dravyāntarataḥ.

[300] AKBh 297, 4: pariṇāmavāditvāt.

[301] P, D: grangs can gyi bzhin du.

[302] P, D: rdzas la. 江島 1986:n.50.参照。

[303] AKBh 297, 4: Sāṃkhyapakṣe nikṣiptavyaḥ.

[304] D: yan.

[305] =TSP 615, 8-9: yas tasya pratiṣedhaḥ so 'syâpi draṣṭavyaḥ. P116a5: de'i gog pa gang yin pa 'di la yang lta bar bya ste | ≒SA 470, 19-20: yaḥ Sāṃkhyapakṣe pratiṣedhaḥ sa eva tatpakṣasya pratiṣedhaḥ.

chos gzhan ldog pa dang chos gzhan skye ba ni ma yin [Da4] no ‖ btsun pa dbyig bshes kyi 'dod pa'i rnam grangs 'di nyid gser dang 'o ma'i dpes [Pb8] bstan pa'i phyir 'di yongs su 'gyur ba smra ba ma yin[306] zhes bya ba tshig tsam mo ‖ btsun pa dbyig bshes[307] kyi phyogs las yang gal te snga ma'i chos kyi gnas [Da5] skabs btang nas phyi ma'i gnas skabs sgrub [P273a1] pa 'di yang yongs su 'gyur bar smra ba las tha dad pa ma yin no ‖ 'on te snga[308] ma'i gnas skabs yongs su ma[309] btang ba de lta na yang gnas skabs 'chol bas dus 'chol bar thal bar [Pa2] 'gyur ro ‖

III – 2 – 2　　D 137a5-b2; P 273a2-7.

ci ste da ltar byung ba cung zad kyang [Da6] 'byung ba dang ldog pa med pa de lta na yang ji ltar snga ma dang phyi mar khyad par rnam par gzhag[310] ces brjod par bya | **thams cad la mtshan nyid thams cad dang ldan pa'i phyir**[311] [Pa3] zhes bya ba ni | ldan pa dang mi ldan pa ma yin gyi[312] sgra dag don gcig pa'i phyir thams cad la mtshan nyid thams cad ldan [Da7] no ‖ ci ste thob pa'i 'jug pa ldan par brjod na | cig shos dang cig shos mi ldan pa zhes [Pa4] bya ba'i don mtshungs pa nyid med do ‖ de la kha cig la mtshang nyid cung zad kun tu spyod pa don gzhan du gyur pa med pas de ga la ldan te | cig shos la mi ldan no ‖ **skyes bu**[313] zhes bya ba [D137b1] rgyas par 'byung [Pa5] ste | skyes bu bud med kyi gong du gzhan la 'dod chags kun tu 'byung zhing shas che ba ni bud med la chags pa zhes bya la | ldan pa'i sgo nas ni 'dod chags dang ma[314] bral ba zhes bya na | chos la ni [Pa6] mtshan nyid kun tu 'byung ba'am mtshan nyid dang ldan

---

306 cf. NA 631b6-10.
307 P: shes.
308 P: sngan
309 P, D: omit “ma”. 江島 1986: n.55 参照。
310 P: bzhag.
311 AKBh 297, 5: sarvasya sarvalakṣaṇayogāt. 本書第１章（秋本 1978: n.11）参照。
312 P, D: mi ldan pa'i.
313 P: skyas bu. AKBh 297, 5: puruṣa(sya）.
314 P, D: omit “ma”.

pa[315] med de | chos [Db2] rnams kyi mtshan nyid dag ni dus rnams su 'khrul pa med pa'i phyir ro || de'i phyir 'dir dpe la dngos dang mtshungs pa ci [Pa7] zhig yod[316] |

III – 2 – 3, 4, 5 は欠落。

IV 作用説批判

IV – 1 D 137b2-138a5; P 273a7-274a4.

gang gi tshe chos de bya ba mi byed pa de'i tshe ni ma 'ongs pa yin la[317] zhes bya ba rgyas par 'byung ste | bya ba yang mig[318] la sogs pa rnams kyi ni lta ba [Db3] la sogs pa'o || rnam par shes pa'i ni rnam [Pa8] par shes pa'o || gzugs la sogs pa rnams kyis ni rang gi dbang po'i spyod yul nyid do[319] || **gal te 'das pa yang rdzas su yod la**[320] zhes bya ba rgyas par 'byung ste | gal te 'das pa dang ma 'ongs pa [P273b1] da ltar ba bzhin du [Da4] rang gi ngo bo kho[321] nas yod na ni | da ltar ba dang khyad par 'ga' yang yod pa ma yin pas de'i 'das pa dang ma 'ongs pa nyid 'das[322] par 'gyur ro snyam du dgongs so || yod kyang da ltar las khyad [Pb2] par yod par bstan pa'i phyir **bya ba yis**[323] **dus rnams rnam gzhag ces bshad pa ma** [Db5] **yin**

---

[315] P, D: mi ldan pa.

[316] ≒TSP 615, 12-15: puruṣas tv arthāntarabhūtarāgasamudācārād rakta ucyate 'viraktaś* ca samanvāgamamātreṇa na tu dharmasya lakṣaṇasamudācāro lakṣaṇa-samanvāgamo vā prāptilakṣaṇo 'sty anyatvaprasaṅgāl lakṣaṇasya prāptivad iti na sāmyaṃ dṛṣṭāntasya dārṣṭāntikena. *チベット語訳は 'virakta'（P116a7, D81b2: ma chags pa.）である。

[317] AKBh 297,12: yadā sa dharmaḥ kāritraṃ na karoti tadânāgataḥ.

[318] P, D: mi.

[319] =SA 471, 7-8: kāritraṃ punaḥ cakṣurādīnāṃ darśanādînîti. [vijñānasya vijñānam?] rūpādīnām api svendriyagocaratvaṃ kāritram. cf. TSP 617, 8-12: kiṃ punar atra kāritram abhipretam, yadi darśanādilakṣaṇo vyāpāraḥ yathā pañcānāṃ cakṣurādīnāṃ darśanādikaṃ yataś cakṣuḥ paśyati śrotraṃ śṛṇoti ghrāṇaṃ jighrati jihvā svādayatîtyādivijñānasyâpi vijñātṛtvam vijānātîti kṛtvā rūpādīnām indriyagocaratvaṃ evaṃ sati …

[320] AKBh 297, 13~ : yady atītam api dravyato 'sti.

[321] D: omit “kho”.

[322] LA 143b6: nyams.

[323] D: bya'i（P: bya ba yis）.

nam[324] zhes bya ba rgyas par smos[325]so || **gal te de lta na da ltar byung ba'i**[326] zhes[327] bya ba la sogs pa la |[328] mig gi bya ba ni lta ba yin [Pb3] na | de yang de dang mtshungs par byed pa ma yin pas de'i tshe da ltar ba yang ma 'ongs par 'gyur ba'i phyir bya ba'i phyir[329] dus rnam par gzhag pa mi rigs so zhes [Db6] bya ba ni dri ba'i bsam[330] pa'o[331] || **'bras bu 'byin pa dang** [Pb4] **'dzin pa yin no**[332] zhes bya bas ni | 'di skad du lta ba la sogs pa'i bya bas ni dus rnam par gzhag[333] pa ma yin gyi | 'o na ci zhe na | 'bras bu 'byin pa dang | 'dzin pa'i bdag nyid kyis yin te 'khrul ba med pa'i [Pb5] phyir [Db7] ro zhe na | bstan par 'gyur te lhan cig 'byung ba'i chos rnams ni de'i skyes bu byed pa'i 'bras bu yin la | de ma thag tu 'byung ba'i mig gi dbang po ni skyes bu byed pa'i 'bras bu dang | rgyu mthun[334] pa'i 'bras bu [Pb6] yin no || 'bras bu de yang 'byin pa dang | 'dzin pa na da ltar ba zhes [D138a1] bya'o[335] || **'o na ni skal ba mnyam pa'i rgyu la sogs pa**[336] zhes bya ba ni | skal ba mnyam pa dang | kun tu 'gro ba dang | rnam par smin

---

324 AKBh 297, 14~ : nanu côktam adhvānaḥ kāritreṇa vyavasthitā iti.
325 D: smras.
326 AKBh 297, 15: yadi evaṃ pratyutpannasya.
327 P: shes.
328 D, P: omit "|".
329 D: omit "phyir". cf. LA P143b8: omit ".
330 D: bsams.
331 ≒SA 471, 8-11: yady evam iti vistaraḥ. yadi kāritreṇa vyavasthāpitāḥ. tatsabhāgasya cakṣuṣaḥ kiṃ kāritram. yad dhi kāritralakṣaṇaṃ svakarma na karoti tat tatsabhāgaḥ. tasya ca nâsti kāritraṃ darśanalakṣaṇaṃ. kathaṃ tat pratyutpannam ity abhiprāyaḥ. cf. TSP 617, 12-13:（evaṃ sati） pratyutpannasya tatsabhāgasya cakṣuṣo nidrādyavasthāyāṃ kāritrābhāvād varttamānatā na syāt.
332 AKBh 297, 16: phaladānapratigrahaṇam.
333 P: bzhag.
334 P: 'thun.
335 =TSP 617, 14-17:（atha phaladānagrahaṇalakṣaṇaṃ kāritraṃ yathā） cakṣuṣā sahabhavā dharmā jātyādayaḥ puruṣākāraphalam, anantarotpannaṃ cakṣur-indriyaṃ puruṣakāraphalam adhipatiphalaṃ niṣyandaphalaṃ ca, etat phalaṃ jananāt prayacchad dhetubhāvāvasthānād gṛhṇac cakṣurvarttamānam ucyata（iti evaṃ tarhy …）但し、下線部は TA[T] にはない。≒SA 471, 11-15）: phaladānapratigraha iti. tac cakṣuḥ svaniṣyandaphalaṃ parigṛhṇāti ākṣipati. phalaṃ ca dadāti niṣyandaphalam ananyat tu phalaṃ karotîti. tasya phaladānaparigrahasadbhāvāt tat pratyutpannam iti vyavashtāpyate.
336 AKBh 297, 16 :（atītānām api） tarhy sabhāgahetvādīnāṃ.

[Pb7] pa'i rgyu rnams so || **'bras bu 'byin pa'i phyir**[337] dang[338] zhes bya ba la rgyu mthun[339] pa dang[340] | gal te bya ba so so[341] bar 'dod na[342] bya ba yod [Da2] par thal bar 'gyur la | de'i phyir 'das pa yang da ltar ba nyid du thal bar [Pb8] 'gyur ro[343] ||[344] **bya ba phyed du**[345] zhes bya ba la | gal te 'bras bu 'byin pa dang 'dzin pa mtha' dag bya bar 'dod na | de lta na bya ba yang snga ma bzhin du snga ma nyid du 'gyur ro[346] || slob dpon 'dus bzang na re | dngos [P274a1] po [Da3] rnams kyi bya ba'i 'bras bu 'phen pa'i nus pa ni 'bras bu 'byin pa ma yin pas mtshan nyid 'chol pa med do zhes zer ro || nus pa 'ba' zhig bya ba nyid ma yin te | 'o na ci zhe na | de [Pa2] las tha dad pa'i nus pa yang yod do || de bzhin du mun[347] pa la mig gi lta ba'i nus [Da4] pa[348] 'joms pa'i bya ba ni ma yin pas ||[349] gang yang 'gags pa skyes pa 'dus byas kyi chos rnams kyi mthu'i khyad par dngos [Pa3] po gzhan skyes pa la

---

[337] AKBh 297, 16 : phaladānāt.

[338] "dang "は意味不明。LA P144a4 もあり。AKBh P281b3 にはない。

[339] P: 'thun.

[340] "dang"は意味不明。LA P144a4 もあり。AKBh P281b3 にはない。

[341] P: sor.

[342] cf. LA P144a4: rnam par smin pa'i 'bras bu 'byin pa'i phyir (TA[T]: gal te bya ba so so bar 'dod na の部分に代わる).

[343] ≒TSP 617, 17-18: evaṃ tarhy atītānām api sabhāgasarvatragavipākahetūnāṃ phaladānābhyupagamād varttamānatvaprasaṅgaḥ. ≒SA 471, 15-20: atītānām api tarhi sabhāgahetvādīnām iti. ādiśabdena vipākahetvādīnāṃ parigrahaṇaṃ. teṣāṃ phaladānāt. vartamānābhyatītau dvāv eko 'tītaḥ prayacchatîti vacanāt. kāritraprasaṅgaḥ. kāritram astîti. tataś câiṣāṃ sabhāgahetvādīnām atītānāṃ vartamānatvaprasaṅgaḥ. vartamānavat kāritrasadbhāvād iti lakṣaṇasaṃkaraḥ.

[344] P: omit "||".

[345] AKBh 297, 16~: ardhakāritrasya.

[346] 'de lta na' 以下はこのままでは意味不明。 ≒TSP 617, 18-19: atha samastam eva phaladānagrahaṇaṃ kāritram iṣyate, evam atītasya sabhāgahetvāder ardhavarthamānatvaprasaṅgaḥ. ≒SA 471, 20-23: brūyās tvaṃ yeṣāṃ phalaparigrahaḥ phaladānaṃ côbhayam asti. te vartamānāḥ. yeṣāṃ tv ekataraṃ. na te vartamānā iti. tata idam ucyate. ardhakāritrasya vêti. prasaṅga ity adhikṛtaṃ. ardhakāritrasya vā prasaṅgaḥ. ardhavartamānā iti vā te 'tītāḥ prasajyante.

[347] P, D: min.

[348] P, D: mig las tha dad pa'i nus pa.

[349] P: omit "||".

rgyur gyur pa 'di dag gi nus pa nyid bya ba ma yin pa | da ltar ba'i gnas skabs kho na 'phangs pa'i phyir |[350] 'dus ma [Da5] byas rnams kyis 'bras bu 'phen pa mi 'thad pa'i phyir ro || [Pa4] 'bras bu 'phen pa'i bya ba nyid yin gyi 'bras bu 'byin pa'i bya ba ma yin no[351] ||

IV – 2　　D 138a5-139a7; P 274a4-275b1.

yang ci bya ba zhes bya ba'i nus pa de las gzhan pa'i dngos po rnams ma byung ba las byung zhing[352] byung [Da6] nas kyang 'jig pa'i phyir [Pa5] rdzas de rtag pa nyid yod pa ma yin no || gal te ma byung ba las byung zhing byung nas 'jig pa'i rdzas las gzhan ma yin pa'i rdzas su yod pa de skye ba dang 'jig pa nyid[353] skye ba dang[354] 'jig par khas blang bar [Pa6] bya na 'di nyid la skye ba dang mi skye ba [Da7] dang 'jig pa dang mi 'jig pa zhes bya ba dag mi rigs so || nus pa snga ma dang nus pa phyi ma yongs su 'gyur bar rtog pa la nus pa thams cad nges pa'i rgyu med pa'i phyir dang |

[Pa7] nus pa dang nus pa ma yin pa med pa de'i phyir gzhan nyid du khas blang bar byaste | [D138b1] 'das pa dang ma 'ongs pa'i gnas skabs kyi ngo bo med pa'i phyir ro || de bzhin du nus pa nyid 'das pa dang ma 'ongs pa dag [Pa8] tu 'gyur gyi rdzas ni ma yin pas 'gog pa bzhin rnam par 'gyur

---

[350] P: omit "|".

[351] NA 631c5-17: 諸法勢力総有二種。一名作用二謂功能。引果功能名為作用。非唯作用総摂功能。亦有功能異於作用。且闇中眼見色功能為闇所違非違作用。謂有闇障違見功能。故眼闇中不能見色。引果作用非闇所違。故眼闇中亦能引果。無現在位作用有欠。現在唯依作用立故。諸作用滅不至無為。於余性生能為因性。此非作用但是功能。唯現在時能引果故。無為不能引自果故。唯引自果名作用故。由此経主所挙釈中、与果功能亦是作用。良由未善対法所宗。以過去因雖能与果無作用故世相無雜。cf. TSP 617, 19-23: [ācāryaSaṃghabhadra āha] dharmāṇāṃ kāritram ucyate phalākṣepaśktir na tu palajananam. na cātītānāṃ sabhāgahetvādīnāṃ palākṣepo 'sti varttamānāvasthāyām evâkṣiptatvāt. na câkṣiptasyākṣepo yukto 'navasthā-prasaṅgāt. tasmād atītānaṃ na kāritrasambhava iti nâsti lakṣaṇasaṅkara iti.

[352] P, D: zhing |.

[353] D: nyid |.

[354] P: dang |.

ba med pa gzhan nus pa'i rgyu'o || de la yang nus pa gzhan khas blang bar bya ba ni gnas [Db2] skabs ma yin no ||

ci ste rdzas bzhin brtags[355] pa de lta na [P274b1] yang rdzas bzhin du bya ba rtag tu yod pas de'i phyir dus su rnam par gzhag pa mi rigs so || mtshan nyid tha mi dad pa'i rnam pa gcig nyid dus thams cad du bya ba byed pa la gegs mi srid do snyam ste | [Pb2] 'dri ba ni **'di yang** [Db3] **brjod par bya dgos te**[356] zhes bya ba'o || **de'i bdag nyid kho nar** zhes bya ba rgyas par 'byung ste |

sa la sogs pa mtshan nyid tha dad pa rnams kyang mig la sogs pas rnam pa tha dad pa [Pb3] mthong ba'i phyir 'di mtha' gcig tu ma yin zhes slob dpon 'dus bzang zer ro ||[357] der ni rdzas tha dad pa rnam pa tha dad pa bshad do || sa la sogs pa rdzas kyi sgo nas tha dad pa rnams kyi 'brel pa [Pb4] gang las brjod par bya zhe na | sa la sogs pa mtshan nyid tha mi dad pa rnams kyang rnam pa tha dad pa mthong bas so ||

gal te rkyen rnams ma tshogs pa yin no zhes bya ba la | 'das pa dang ma 'ongs [Pb5] pa'i gnas skabs dag tu rkyen rnams ma tshogs par bya ba byed na | de la gegs med par res 'ga' bya ba byed la res 'ga' mi byed do zhes bya ba med do || rtag tu yod pa nyid du khas blangs pa'i phyir ro || [Pb6] rkyen rnams kyang rkyen can [Db6] bzhin du khas blangs pa de dag gi yod pa rnams la ma tshogs pa mi rigs par bshad do ||

yad api uktam（gang yang bshad |） api ca[358] nâvagacchāmas（ma rtogs[359]） pa | tasyâyuṣmato（de'i tshe dang ldan pa |） bhava |;（dngos po

---

[355] P, D: rtag.

[356] AKBh 297, 17-19: idaṃ ca vaktavyam. tenâivâtmanā sato dharmasya nityaṃ kāritrakaraṇe kiṃ vighnaṃ yena kadācit kāritraṃ karoti kadācin nêti.

[357] NA 625a19-b2: 諸有為法歴三世時、体相無差有性寧別。豈不現見有法同時体相無差而有性別。如地界等内外性殊。受等自他楽等性別。此性與有理定無差。性既有殊有必有別。由是地等体相雖同、而可説為内外性別。受等領等体相雖同、而可説為楽等性別。又如眼等在一相続、清浄所造色体相同、而於其中有性類別。以見聞等功能別故。非於此中功能異有。可有性等功能差別。然見等功能即眼等有。由功能別故有性定別。故知諸法有同一時、体相無差有性類別。既現見有法体同時、体相無差有性類別。故知諸法歴三世時、体相無差有性類別。

[358] P, D: ci に見える。

|) katamasya (gang |) pratyutpannasya (da ltar byung ba) e[Pb7] tat ('di) tena (de yis) kāritraṃ (byed pa) gṛhītaḥ; yato (bzung ba gang las) 'nāgatasya (ma 'ongs pa) 'tītasya[360] ('das pa) kasmāt tan na bhavatîti[361] (ci las de med par) kalpayati (rtog[362] par byed) | de ni ma 'ongs pa'i chos yod pa [Db7] nyid khyad par gyis gnas pa'i khyad par de la da ltar [Pb8] byung ba zhes bya'o[363] zhe na ma yin te | rang bzhin de'i khyad par thal ba'i [D139a1] phyir ro || 'das pa zhes bya'o[364] zhe na | ma yin te rang bzhin dang bral ba'i [P275a1] phyir ro ||

don gyi sgo nas de nyid ni ma 'ongs pa'i chos kyi bya ba 'jug ste | 'jug pa'i bya ba ni de'i bya ba'o || ma 'ongs pa ni ma yin te zhig pa'i phyir 'das pa'o[365] || de'i phyir 'di [Pa2, Da2] skad brjod de | bya ba ni dus kyi[366] rnam par bzhag pas de'i phyir[367] shes par bya ba'i phyir[368] 'di lan ma yin no || rtag tu bya ba byed pa gegs med pa zhes bya ba ni | 'dir mdo las rnam par shes pa [Pa3] bya'o snyam du dgongs pa'o || 'bras bu 'phangs pa de'i dngos po ni da [Da3] ltar ba dang | de'i 'bras bu 'phen pa ni bya ba'o || da ni snga ma dang phyi ma khyad par med pa'i phyir ma 'ongs pa yang 'das pa der [Pa4] 'gyur ro zhes bya'o || gnas brtan rnams kyis ni dngos po shes pa ma yin no ||

da ltar[369] byung ba zhes bya'i khyad par 'di ci | khyad par bcas pa de [Da4] rnam par dbye ba'i rang bzhin | parityāgena bhavaty athâpa-

---

[359] P, D: rnyog.
[360] P, D: 'nāgata tasya tasya.
[361] P, D: bhavatī.
[362] P: rnyog.
[363] NA(632b13-18)：又我未了具寿所言。意欲取何名為作用。而今徴詰過去未来何礙令其作用非有。即未来法衆縁合時、起勝功能名為作用。此有作用名為現在。…
[364] P: bya'o ||.
[365] このままでは意味不明。
[366] P, D: kyis.
[367] 不要か？（和訳では省いた。）
[368] NA 632b18-23: 此義意言即未来法、衆縁合位有作用起。作用起已不 D 名未来、此於爾時名已来故。作用息位不名現在、此於爾時已過去故。若作用猶在未得過去名。此法爾時名現在故。由此約作用弁三世差別。（但し、この文の最後の語”phyir”は不要？）
[369] P: lta |

[Pa5]rityāgena[370] na parityāgena (dngos po yongs su gtong bas ci ste yongs su mi gtong min gal te yongs su gtong) | de ltar yod na gzhan nyid ma 'ongs pa las skyes pa zhes bya bar 'gyur ro || ma 'ongs pa yang ma skyes pa kho nar 'jig pa zhes bya ba rang bzhin med pa'i dngos pos yod[371] pa ma yin [Pa6] no || [Da5] ji ltar yongs su btang ba de bzhin dngos po'i rang bzhin las khyad par gzhan du 'gyur ro || dus gsum du yang gang zhig 'khrul pa de'i ngo bo'i [Pa7] rang bzhin ni ma skyes pa'i ngo bo yin pa'i phyir dang dngos po [Da6] gzhan yin pa'i dngos po gzhan bzhin no || res 'ga' 'di dman pa de'i phyir dus gsum gyi dngos po[372] || de bzhin du 'das[373] pa la yang brjod [Pa8] par bya'o || res 'ga' ba nyid kyis dngos po thams cad yod pa smra ba'o || gal te khyad par yod pa las skyes pa de nyid [Da7] khyad par zhes bya ba de lta na | dngos po thams cad gcig pa nyid du 'gyur te [P275b1] khyad par yod pa las yang khyad par yod pa'i phyir ro ||

IV – 3 D 139a7-b5; P 275b1-8.

bya ba 'das pa dang[374] zhes bya ba rgyas par 'byung ba la | 'di skad bstan par 'gyur te | gal te bya ba la bya ba gzhan med par ma 'ongs pa la [Pb2, D139b1] sogs pa nyid du 'dod na | de lta na bya bas dus rnam par bzhag[375] pa zhes brjod par mi bya ste | 'khrul pa'i phyir ro || ji ltar bya ba ni ma 'ongs pa la sogs pa nyid kyi rang gi ngo bo'i yod pa[376] la [Pb3] bltos nas rnam par 'jog pas dngos po rnams kyang de ltar ma 'ongs pa la sogs par [Db2] 'gyur te | bya ba brtags[377] pas ci zhes bya ba[378] | ji ste 'khrul pa'i skyon du 'gyur

---

[370] P, D: aparityāga. cf. TSP(615, 9-11) :tathā hi pūrvasvabhāvāparityāgena vā pari-ṇāmo bhavet parityāgena vā. yady aparityāgena tadâdhvasaṅkaraprasaṅgaḥ. atha parityāgena tadā sadāstitvavirodhaḥ.

[371] D: med.

[372] この文は意味不明のため訳出していない。

[373] P: 'dus.

[374] AKBh 297, 20-298, 1: yac ca tat kāritram atītam anāgataṃ pratyutpannaṃ côcyate **tat kathaṃ** (AK V 27a$_2$) kiṃ kāritrasyâpy anyad asti kāritram.

[375] D: gzhag.

[376] P, D: rgyud.

[377] P, D: btags.

du 'ong bas bya ba la yang bya ba gzhan [Pb4] 'dod na ni | de lta na yang thug pa med par thal bar 'gyur ro[379] ||[380]

de yang 'das pa dang ma 'ongs pa dang da ltar byung ba zhes bya ba la | slob dpon 'dus bzang [Db3] na re | de yang bya ba gzhan gyis [Pb5] 'gyur pa yin na de yang gzhan gyis so zhes zer ro || 'das pa dang ma 'ongs pa'i bya ba khyed cag gis brjod pa ni[381] ma yin no || 'o na ci zhe na | byung ba'i khyad par ma 'ongs pa'i chos ni da ltar gyur [Pb6] ba zhes bya'o || khyad par grub zin pa ni 'das pa [Db4] yin no ||[382] ma skyes pa skyes pa grub zin pa'i gnas skabs kyi dbye ba khas blangs pa'i phyir khyad par ni ci ltar 'das pa dang ma 'ongs pa dang da ltar [Pb7] ba'i bya ba ma bshad do || de'i phyir phyogs su ltung[383] ba'i mun pa zhes legs par brjod do ||

---

[378] P: omit.

[379] D: te.

[380] =TSP 619, 23-620, 10:（kiṃ ca） yadi kāritrasya kāritram antareṇânāgatāditvam iṣyate na tarhi vaktavyam adhvānaḥ kāritreṇa vyavasthitā iti vyabhicārāt. yathā kāritrasya svarūpasattāpeksayânāgatāditvaṃ vyavasthāpyate evaṃ bhāvānām apy anāgatāditvaṃ bhaviṣyatîti kiṃ kāritrakalpanayā. atha mā bhūd vyatirekādicintayā tulyaḥ paryanuyogo 'navasthādoṣash ca.（P118b7-119a2, D83b7-84a2:（gzhan yang） bya ba gzhan gyis ma 'ongs pa la sogs pa nyid du 'dod na | 'o na bya ba'i sgo nas dus rnams rnam par gzhag go zhes brjod par mi bya ste | 'khrul pa'i phyir ro || ci stebya ba rang gi ngo bo yod pa la ltos nas ma 'ongs pa la sogs pa yod pa nyid du rnam par 'jog pa de bzhin du dngos po rnams kyang ma 'ongs pa la sogs pa nyid du 'gyur pa'i phyir | bya ba brtags pas ci zhig bya | yang 'khrul pa'i skyon du 'gyur na mi rung ngo snyam pas bya ba la yang bya ba khas len par byed pa de'i tshe | de la yang tha dad pa la sogs pa bsam pa'i brgal zhing brtag pa mtshungs pa dang | thug pa med pa'i nyes pa yod do ||）（下線部のみ相違する。TSP のチベット語訳の冒頭(gzhan gyis）は誤り。）.

[381] D: omit.

[382] NA 632b24-c4: …対法諸師豈亦曾有成立作用為去来耶而汝今時責非無理。即未来法作用已生名為現在。即現在法作用已息名為過去。…

[383] D: lhung.

'on te de ni 'das pa yang ma [Db5]] **yin**[384] zhes bya ba rgyas par 'byung ngo || **gang gi tshe bya ba mi byed de**[385] zhes bya ba la | [Pb8] thams cad kyi tshe 'di bya ba mi byed pas de 'dus ma byas yin pa'i phyir thams cad kyi tshe yod par thal bar 'gyur ro ||

IV – 4

IV – 4 – 1 D 139b5-140b3; P 275b8-276b8.

skyon der yang 'gyur pa zhig na[386] zhes bya ba ni bya ba la yang bya ba yod par [Db6] thal ba dang [P276a1] 'dus ma byas nyid do || **gal te chos las bya ba gzhan zhig yin na ni**[387] zhes bya ba la | chos las gzhan ma yin pa'i phyir na ni bya ba chos bzhin du 'dus ma byas ma yin la | chos [Pa2] ltar de la bya ba gzhan yod pa ma yin pas thug pa med pa yang ma yin [Db7] no ||

de lta na ni 'o na[388] | dus su mi rung ba nyid du 'gyur te | **de nyid**[389] ni de nyid kyis dus rnam par gzhag pa'i rgyur mi rung ba'i phyir ro || [Pa3] de nyid bstan pa'i phyir **gal te chos kho na bya ba yin na**[390] | zhes bya ba rgyas par smos so || **mi 'grub pa ci zhig yod**[391] ces bya ba 'byung ste | dngos po'i [D140a1] rang gi ngo bo nyid ni dus rnam par gzhag pa'i rgyu nyid du mi [Pa4] 'dod do || 'o na ci zhe na | skyes pa dang ma skyes pa zhig

---

[384] AKBh 298, 1-3: atha tan nâivātītaṃ nâpy anāgataṃ na pratyutpannam asti ca. tenâsaṃskr̥tatvānnityam astîti prāptam. ato na vaktavyaṃ yadā kāritraṃ na karoti dharmas tadânāgata iti.

[385] P: do. AKBh 298, 3: yadā kāritraṃ na karoti (dharmas) . cf. AKBh P281-b7: gang gi tshe chos bya ba mi byed pa.

[386] AKBh 298, 4: syād eṣa doṣo.

[387] AKBh 298, 4: yadi dharmāt kāritram anyat syāt.

[388] AKBh 298, 6-7: evaṃ tarhi sa eva **adhvāyogaḥ**(AK V $27b_1$) .

[389] AKBh 298, 6: sa eva.

[390] AKBh 298, 8-9 : yadi dharma eva kāritraṃ kasmāt sa eva dharmas tenâivâtmanā vidyamānaḥ kadācid atīta ity ucyate kadācid anāgata ity adhvanāṃ vyavasthā na sidhyati.

[391] AKBh 298, 9-10 : kim atra na sidhyati. yo hy ajāto dharmaḥ so 'nāgataḥ. yo jāto bhavati na ca vinaṣṭaḥ sa varttamānaḥ. yo vinaṣṭaḥ so 'tīta iti.

pa'i gnas skabs dag dus rnam par bzhag[392] pa'i rgyu nyid du khas len no || slob dpon 'dus bzang na re | ji ltar khyad par gyi rgyus [Da2] 'phangs [Pa5] pa khyad par gyi 'bras bu bskyed pa'i rgyu mtshan du gyur pa chos gzhan nyid kyi khyad par du 'dod pa de bzhin du | 'dir yang chos gzhan nyid bya ba'i khyad par du 'gyur ro[393] zhes zer ro || 'di yang rang gi phyogs [Pa6] la dga' ba nyid kyis lhag par sgro btags te bshad kyi | [Da3] nus pa'i khyad par gyi chos 'ga' zhig gzhan du bsgrub pa ma yin no || de'i phyir 'bras bu bskyed pa btags par yod pa 'di yang [Pa7] kho bo cag gis mdzod kyi gnas gnyis pa nyid du bstan zin to ||

yang de nyid kyis[394] smras pa | bya ba chos las gzhan de las tha dad pa ma [Da4] yin pa | rang bzhin med pa'i phyir |[395] chos tsam ma [Pa8] yin no || rang bzhin yod pa nyid la yang res 'ga' med pa'i phyir |[396] bya ba'i khyad par snga na med pa'i rgyud bzhin ma yin no[397] || dper na bar chad[398] med par skye ba'i chos la rgyud ces brjod pa bzhin no || [P276b1] 'di ni de'i las[399] de las tha dad [Da5] pa ma yin te | de'i rang bzhin yin pa'i phyir ro || chos tsam yang ma yin te[400] skad cig ma gcig[401] kyang rgyud du thal ba yin[402] pa'i phyir dang |[403] de'i bya ba yod pa'i phyirmed pa ma yin no[404] ||

---

392 D:gzhag.

393 NA 632c4-633a16:…如何汝宗於善心内、有不善等差別類諸法。所引差別種子功能、非異善心而有差別…. cf. TS 1803abc$_1$ & TSP 620, 12-15.

394 P, D: la. TSP P119b4; D84b4 に従う。

395 P, D: omit.

396 P, D: omit.

397 意味不明。cf. TSP 621, 12-13: na ca nâsty aviśeṣāt kāritrasya prāg-abhāvāt santānavat. P119b5, D84b4-5: med pa yang med yin te | khyad par med(P: yin) pa'i phyir rang bya ba yang sngar med pa'i phyir rgyun bzhin no ||.

398 P, D: omit.

399 不要か？ 和訳では省いた。

400 P, D: chos tsam gyi. TSP P119b5; D84b4 に従う。

401 P: cig.

402 P, D: ma yin.

403 P, D: omit.

404 NA 633a24-b2: 差別作用与所附体、不可説異。如法相続。如有為法刹那刹那無間而生名為相続、此非異法、無別体故。亦非即法、勿一刹那有相続故。不可無、

[Pb2] yang smras pa | rgyud kyi las dang tha snyad 'ga' zhig de ltar rdzas kyi sgo nas yod pa rtogs pa ma yin pas [Da6] rigs pa'i byed pas dus rnams grub bo zhe na[405] |

de'i phyir kho bo cag gis 'das pa gzhan [Pb3] nyid kyi bdag nyid dang ma 'ongs pa gzhan dang da ltar byung ba gzhan nyid dus rnam par bzhag[406] pas gang 'di cung zad |[407] rgyud las ni yod pa nyid la sogs pa rnams de nyid dang gzhan [Da7] nyid du brjod par bya ba ma [Pb4] yin pa'i phyir rang bzhin med de | gang zag bzhin no || rang bzhin yod pa de nyid dang gzhan

---

見於相続有所作故。如是現在差別作用非異於法、無別体故。亦非即法、有有体時作用無故。不可説無、作用起已能引果故。 =TSP 621, 11-15: punaḥ sa evâha na kāritraṃ dharmād anyat tadvyatirekeṇa svabhāvānupalabdheḥ. nâpi dharmamātram svabhāvāstitve 'pi kadācidabhāvāt. na ca nâsty aviśeṣāt kāritrasya prāgabhāvāt santānavat. yathā dharmanairantaryotpattiḥ santāna ity ucyate na câsau dharmavyatiriktas tadavibhāgena gṛhyamāṇatvāt. na ca dharmamātram ekakṣaṇasyâpi santānatvaprasaṅgāt. na ca nâsti tatkāryasadbhāvād iti. P119b4-7, D84b4-6: yang denyid kyis smras pa | bya ba chos las gzhan ma yin te | des tha dad du rang bzhin mi(P, D: omit) dmigs pa'i phyir ro || chos tsam yang ma yin te | rang bzhin yod na yang res 'ga' med pa'i phyir ro || med pa yang med yin te | khyad par med(P:yin) pa'i phyir rang bya ba yang sngar med pa'i phyir rgyun bzhin no || dper na chos par med par 'byung ba ni rgyun zhes bya la | 'di chos las tha dad pa yang ma yin te | de dang ma phye bar bzung bar bya ba'i phyir ro || chos tsam yang ma yin te | skad ciggcig nyid kyang rgyun nyid du thal bar 'gyur ba'i phyir ro || med pa yang ma yin te 'bras bu yod pa'i phyir ro zhes bya ba lta bu'o ||（下線部は相違する。但し、その初めの部分は、TA を訂正すべきであろう。）

[405] 意味不明。NA 633b3-4: 相続無異体、許別有所作、作用理亦然、故世義成立。cf. TSP 621, 16-17: āha ca, santatikāryaṃ cêṣṭaṃ na vidyate sâpi santatiḥ kācit, tadvad avagaccha yuktyā kāritreṇâdhvasaṃsiddhim. P119b7, D84b6: yang bshad pa | 'bras bu 'an rgyun la mngon 'dod cing || rgyun de 'an 'ga' yang yod ma yin || bya ba'i sgo nas dus grub pa || de ltar rigs pas rtogs par gyis || zhes pa'o ||

[406] D: gzhag.

[407] P, D: omit.

nyid du mthong ba ste 'byung bar 'gyur ba rang bzhin med pa'i las[408] su 'dod do ||[409] bya ba yang btags par [Pb5] yod pa'i phyir sdon bzhin du phyis kyang de bzhin te | [D140b1] gang med pa de ci ltar khyad par du 'gyur | de'i phyir de ltar 'das pa dang ma 'ongs pa dang da ltar byung ba rnams bdag nyid tha dad par med[410] do|| [Pb6] bdag nyid tha dad par med na dus rnams su rnam par bzhag[411] pa mi grub bo ||[412]

gang gsungs pa yang sna tshogs sdug bsngal rnams [Db2] kyis ni | sdug bsngal gzugs sogs ji lta bar || gang gi tha dad [Pb7] yod de bzhin | skyes sogs yod pa ma yin brjod |[413] 'dir yang dpe dang dpe can mtshungs pa ma yin pas skyes pa'i rang bzhin 'jigs pa la ltos[414] nas[415] sdug bsngal nyid du rnam par bzhag[416] [Db3] go | ma skyes[417] [Pb8] pa la sogs pa rnams la de'i khyad par yod pa ma yin yang du mar[418] btags pa la 'gal ba med do ||[419]

IV – 4 – 2　　D 140b3-7; P 276b8-277a5.

'das pa dang ma 'ongs pa rdzas kyi sgo nas yod pa nyid du khas blangs pa la da ltar byung ba bzhin [P277a1] 'das pa dang ma 'ongs pa nyid mi grub bo || khyad par khas [Db4] blangs pa nyid kyis ma 'ongs pa nyid da

---

408 D: lus.

409 意味不明。

410 P, D: yod.

411 D: gshag.

412 ≒TSP 621, 19-622, 14: yathā santānibhyas tattvānyatvenâvācyatvāt pudgalavat santāno niḥsvabhāvaḥ tadvat kāritram api niḥsvabhāvaṃ syāt. svabhāve hi sati tattvam anyatvam tataś ca tat kāritraṃ kalpitatvān na kvacit kārye santativad upayujyeta. na hi kalpitasya santānasya kvacit kārye 'sty upayogaḥ tasya niḥsvabhāvatvāt. svabhāva-pratibaddhatvāt kāryodayasya. tasmād vastv eva santānisvabhāvam arthakriyākṣamam na santānaḥ kalpitaḥ. tataś ca kāritrasya prajñaptisattvāt prāgvat paścād api na paramārthataḥ sannidhānam astîti tadvaśād adhvatrayavyavasthānam api kalpitam eva syāt na bhāvikam.

413 NA 633c4-5: 如色等皆苦、許多苦性異、三世有亦然、未生有差別。

414 D: bltos.

415 意味不明。

416 D: gzhag.

417 P, D: skyes.

418 D: de ming.

419 D: de |

ltar byung ba dang da ltar byung ba yang 'das pa yin no zhes mi rung ste | de ltar 'di ni rgyas par [Pa2] bstan zin to || **tshig gi tshul**[420] **'di ni sngon ma byung ba yin no**[421] zhes bya ba la | snga ma dang 'gal ba'i phyir ram | sngon ma thos pas sngon med pa'i [Db5] rang bzhin no || gzugs la sogs pa'i rang gi mtshan nyid gang [Pa3] yin pa de ni dus thams cad na yod par 'dod do || de lta na 'o na gzugs la sogs pa'i dngos po thams cad kyi tshe yod pa'i phyir rtag par thal bar 'gyur ro zhe na | de'i phyir smras pa | **dngos po yang ni**[422] **rtag** [Pa4] **mi 'dod** |[423] de lta na yang rang bzhin las dngos po gzhan du thal lo zhe na | de'i phyir **rang bzhin las kyang dngos mi gzhan**[424] zhes bya ba smras so || **dbang phyug tha snyad yin par gsal**[425] zhes bya ba ni | 'jig [Pa5] rten na rigs pa la mi bltos par 'dod rgyal tsam du [Db7] zad pa'i phyir ro[426]127） ||

V

V – 1 – 1　　D 140b7-142a3; P 277a5-278b4.

sngon byung ba gang yin pa ni 'das pa yin[427] gyi | rang gi mtshan nyid kyis gnas pa ni ma yin no zhes ston to || **rkyen yod na 'byung** [Pa6] **bar 'gyur ba ni ma 'ongs pa** ste | yod pa ma yin yang snyam du bsam[428] pa'o ||

---

[420] cf. AKBh P282a6: lugs.
[421] AKBh 298, 19 : apūrvâiṣā vāco yuktiḥ.
[422] D: mi.
[423] AKBh 298, 21 : bhāvo nityaś ca nêṣyate. この句は以下の偈の一部（298, 21-22） : svabhāvaḥ sarvadā câsti bhāvo nityaś ca nêṣyate | na ca svabhāvād bhāvo 'nyo vyaktam īśvaraceṣṭitam ||
[424] AKBh 298, 22: na ca svabhāvād bhāvo 'nyo.
[425] AKBh 298, 22 : vyaktam īśvaraceṣṭitam.
[426] ≒SA 472, 31-33: tad idam icchāmātratvād vyaktam īśvaraceṣṭitam. nâtra yuktir asti. D116b5: de lta bas na 'di ni 'dod rgyal tsam du zad pa'i phyir | dbang phyug tha snyad yin par gsal te rigs pa ni med do || 本書第２章（秋本 1991a: 89）参照。
[427] P, D: ma yin. AKBh 299, 1~ : atītam tu yad bhūtapūrvam. anāgataṃ yat sati hetau bhaviṣyati. evaṃ ca kṛtvâstîty ucyate na tu punar dravyataḥ.
[428] D: bsams.

de ltar byas nas yod do [D141a1] **zhes bya'i** zhes bya ba ni sngon byung ba dang 'byung bar 'gyur ro ||

slob dpon 'dus bzang na re | mdo [Pa7] sde pas da ltar byung ba'i rnam grangs gzhan yod pa nyid du smra bar blta ste | 'das pa dang ma 'ongs pa ma yin[429] zhes bya bas so || 'dir da ltar byung ba'i snga na med pa [Da2] dang zhig nas med pa las 'das pa [Pa8] dang ma 'ongs pa rnam par gzhag ste | de dag kyang da ltar byung ba la ma ltos[430] par bstan pa med pa'i phyir ro || da ltar byung ba la btags par yod pa nyid snga na med pa dang zhig nas med par shes par [P277b1] bya ba'i phyir 'das pa yod do ma [Da3] 'ongs pa yod do zhes bshad do || gal te de ma 'ongs pa 'am 'das par ma gyur na rtag tu da ltar ba nyid du 'gyur bas de bye brag tu rtogs pa'i phyir **yang brjod do** || **sngon byung ba** [Pb2] **gang yin pa ni 'das pa yin la** zhes bya ba rgyas[431] par 'byung ste | yod pa de dang de sngon byung bar gyur [Da4] pa dang phyis 'byung bar 'gyur ba de yis te | de lta na ma yin na rtag par 'gyur bas so ||

'das pa dang ma [Pb3] **'ongs pa'i bdag nyid du yod mod**[432] ces bya ba ni | 'das pa dang ma 'ongs pa'i rang bzhin gyis so ||

yang de nyid **rgyu dang 'bras bu la skur pa 'debs pa'i lta ba** [Da5] **dgag pa'i phyir**[433] de ltar **yod par gsungs** te | [Pb4] 'das pa ni rgyu dang ma 'ongs pa ni 'bras bu ste | de med par **lta ba** ni **rgyu dang 'bras bu la skur pa 'debs par** 'gyur ro || med pa nyid de dag gi rgyu dang 'bras bu dag la'o || gal te yang med pa nyid med [Pb5] pa'i sgo nas lta bar byed pa [Da6] de la skur pa 'debs pa dgag par bya ba'i phyir 'das pa yod do ma 'ongs pa yod do zhes bcom ldan 'das kyis gsungs pa ci zhe na | gang 'das pa dang ma 'ongs

---

[429] NA 626c2-6: 雖言過去曾有名有、未来当有、有果因故、而実方便矯以異門説。現在有何関過未。故彼所言、我等亦説有去来者、但有虚言、竟不能伸去来有義。cf. NA 626c27-28: 又我先説曾当有言、但以異門説現在有非関過未。

[430] D: bltos.

[431] D: brgyas.

[432] AKBh 299, 3: atītānāgatātmanā.

[433] AKBh 299, 5-6: ...hetuphalāpavādadṛṣṭipratiṣedhārtham uktaṃ bhagvatā "asty atītam asty anāgatam iti.

pa [Pb6] dag gi rgyu dang 'bras bu dag ma nges pa'i phyir rgyu dang 'bras bu la skur pa 'debs pas dgag[434] pa'i phyir 'das pa [Da7] yod pa ni rgyu'i ngo bos des 'phangs pa'i nus pa'i khyad par las 'bras bu skyed pa'o ||

[Pb7] ma 'ongs pa yod pa ni 'bras bu'i ngo bos des 'phangs pa'i nus pa'i khyad par las byung bar 'gyur ro zhe na | de dag bshad do || gal te yang 'das pa dang ma 'ongs pa rdzas kyi sgo nas [D141b1] yod pa de [Pb8] lta na da[435] ltar byung ba bzhin 'das pa dang ma 'ongs pa nyid du mi 'gyur ba de'i phyir bcom ldan 'das kyis 'das pa yod do ma 'ongs pa yod zhes bya ba'i gsung skabs 'byed[436] par mi 'gyur ro || gang [P278a1] gsungs pa | rgyus 'phangs pa'i 'bras bu 'byin pa nus pa la gus pas [Db2] rnam par dpyad par mi dmigs so || de la 'di ni yang dag par rnam par dpyad pa la gus pas de'i phyir gnas [Pa2] brtan rnams kyis rtogs pa ma yin no || nus pa med par dngos po so sor nges pa rgyu dang 'bras bu'i 'brel pa mi rung ngo || de yang nus pa med na dngos po [Db3] rnams kyi rang bzhin thams cad la thams cad nus par [Pa3] thal bar de'i phyir rgyu nyid las 'bras bu bzhin du de'i khyad par khas blang bar bya'o[437] || de'i phyir **yod**[438] **ces bya ba'i sgra ni tshig gi phrad yin pa'i phyir**[439] te zhes bya ba smos te | tshig phrad smos pa ni brjod pa'i ngo bo [Pa4] dgag [Db4] pa'i phyir te | dus gsum gyi yul can nyid du shes par bya ba'i phyir ro[440] || gal te 'di brjod pa yin na ni 'dir 'di'i 'das pa yod do || ma 'ongs pa yod do zhes bya ba'i sbyor ba nyid du mi 'gyur te | [Pa5] da ltar gyi dus yin pa'i phyir ro ||

---

434 P, D: de dag.
435 D: de.
436 P: skabs 'byad.
437 cf. TS1837: niyamārthakriyāśktir bhāvānāṃ pratyayodbhvā | ahetutve samaṃ sarvam upayujyeta sarvataḥ || & TSP 628, 16-20.
438 P, D: yid.
439 AKBh 299, 6: astiśabdasya nipātatvāt.
440 ≒SA 473, 6-7: trikālaviṣayo hi nipātaḥ. P132a7-8, D117a1-2: tshig gi phrad ni dus gsum pa'i yul can yin pas byung bar gyur to ||

mar me snga na med pa yod do[441] shes bya ba [Db5] rgyas par 'byung ste | mar me snga na med pa dang zhig nas med pa dang rdzas su yod pa ma yin mod kyi | 'on kyang yod par smra'o || [Pa6] 'di ni de lta ma yin te | ma skyes pa dang zhig pa'i mar me ni snga na med pa dang zhig nas med par smra'o || de lta yin na mar me nyid mar me'i [Db6] snga na med pa dang zhig nas med pa ste | da ltar ba las yang thal bar 'gyur [Pa7] ro || da ltar ba'i gnas skabs na ma skyes pa dang 'das pa'i gnas skabs snga na med pa dang zhig nas med pa'o || 'di la skyon med de | gcig gis[442] snga ma'i gnas skabs nyams nas gnas [Db7] skabs gzhan sgrub pa [Pa8] mi rigs pas snga ma kho na | nirloṭhita[443] |de'i phyir snga na med pa dang zhig nas med pa'i dngos po'i rang bzhin yang yin no zhes smra ba 'dis mi gyo'o || **ji ltar 'gags**[444] **pa yod**[445] zhes bya ba la sogs pa la 'gags [P278b1] pa'i mar me yod do zhes bya ba bye brag tu [D142a1] smra ba'i ma yin nam zhe na[446] ma yin te | de la 'dir 'di'i don ni mar me 'gags pa yod do zhes bya bar rtogs so || 'o na ci bden par 'gog ce na de'i phyir yod do zhes [Pb2] bya ba'i sgra ni don med pa can 'ba' zhig tu ma zad do zhes bya bar rtogs so || **de lta ma yin** [Da2] **na**[447] zhes bya ba la gal te byung ba ni 'das pa yin la | rkyen yod na 'byung bar 'gyur ba ma 'ongs pa yin zhes bya ba de ltar [Pb3] yod pa'i sgra brjod par mi 'dod par gyur na'o || byung bar gyur pa 'das pa de yod la gang rgyu yod na 'byung bar 'gyur ba ma 'ongs pa de yang yod do zhes bya'o || [Da3] de nyid kyi phyir **'das pa dang ma 'ongs pa mi** [Pb4] **'grub pa kho nar 'gyur ro** zhes bya ba smos so || da ltar ba bzhin du thams cad kyi tshe rang gi mtshan nyid kyis yod pa'i phyir ro ||

---

441 AKBh 299, 6~ : yathâsti dīpasya prāgabhāvo 'sti paścādabhava iti vaktāro bhavanti yathā câsti niruddhaḥ sa dīpo na tu mayā nirodhita iti. evam atītānāgatam apy astîty uktam.

442 D: gi.

443 P: nirlothatiṃ, D: nirlothitaṃ に見える。>nir√luṭh(?) .

444 P: 'gag.

445 AKBh P282b4, D241b1: yan dper na mar me shi ba ni yod mod kyi...

446 ≒SA 473, 10-11: nanu ca Vaibhāṣikasya niruddho 'py asāv astîti. P132b2, D117a3: bye brag tu smra ba'i ltar na 'gags pa yang yod pa ma yin nam zhe na |

447 AKBh 299, 8: anyathā hy atītānāgatabhāva eva na sidhyet.

V – 1 – 2　　D 142a3-b3; P 278b4-279a5.

'o na bcom ldan 'das kyis[448] shes bya ba rgyas par 'byung ste | 'di ltar mdo [Pb5] las[449] sh'ari'ibu [Da4] gang dag gis las spangs pa dang zad pa dang | 'gags pa dang | bral ba dang rnam par gyur pa gang yin pa de ni med do zhes de skad du smras pa'i tshig de'i rang bzhin ma yin pa[450] de ni byis pa [Pb6] blun pa mi gsal ba mi dge ba rnams ji lta ba bzhin du kun tu rgyu dbyug thogs thor [Da5] tshugs can rnams kyis bab col[451] du so sor ma brtags par smras pa yin zhes bya ba rgyas par gsungs nas | de ci'i phyir [Pb7] zhe na | sh'a ri'i bu **las 'das pa dang zad pa dang 'gags pa dang bral ba dang | rnam par 'gyur ba gang yin pa de ni yod do zhes gsungs na | ci** [Da6] **de dag las de sngon byung ba nyid du mi 'dod par gyur tam** | de dag [Pb8] gis ni las sngon byung ba nyid du rtogs pa kho na yin gyi | de'i rnam par smin pas 'jigs pas 'gags pa ni rdzas su yod pa nyid du ma rtogs so || de'i phyir bcom ldan 'das kyis yod pa nyid du bstan [Da7] pa'i [P279a1] phyir de ni yod do zhes gsungs te | de lta ma yin na bstan pa don med pa nyid du 'gyur ro zhes bya ba 'di ni re zhig bye brag tu smra ba'i mdo'i don bstan pa'o ||

slob dpon gyis rnam pa gzhan du [Pa2] bstan pa'i phyir **de las ni**[452] zhes bya ba rgyas par smos so || **de la**[453] zhes [D142b1] bya ba ni las de **rgyud** gang du gtogs pa'o || **des kun tu drangs pa** ni las des kun tu drangs shing

---

[448] AKBh 299, 8~ : yat tarhi lagḍaśikhīyakān paribrājakān adhikṛtyôktaṃ bhagavatā "yat karmâbhyatītaṃ kṣīṇaṇ niruddhaṇ vigataṃ vipariṇataṃ tad asti" iti. kiṃ te tasya karmaṇo bh'tap'rvatvaṃ nêcchanti sma.

[449] cf. Up 19a1~: sha'ri'ibu bram ze kun tu rgyu thor tshugs can de dag gis ma bsams shing rjes su mi mthun pa so sor brtags pa'i tshig smras te | byis pa rmongs pa mi gsal ba mi mkhas par 'di skad du las gang 'das pa zad pa 'gags pa bral ba yongs su gyur pa de dag ni med do || …

[450] この部分、意味不明。

[451] P, D: chol.

[452] AKBh 299, 10~ : tatra punas tadāhitaṃ tasyāṃ saṃtatau phaladānasāmarthyaṃ saṃdhāyôktam.

[453] P, D: de las ni. cf. AKBh P282b7: de las ni rgyud de la（tasyāṃ saṃtatau）des kun tu drangs pa..., D241b3: rgyud de las...

skyed pa'o || de yang gang zhe na | **'bras** [Pa3] **bu skyed pa'i mthu yod pa'o** || 'di ltar las des rgyud 'bras bu khyad par can bskyed par nus par byed de | de'i phyir bcom ldan 'das kyis [Db2] las de 'gags kyang des kun tu drangs pa 'bras bu skyed pa'i mthu yod pa nyid [Pa4] du bstan pa'i phyir de ni yod do zhes gsungs so || **de lta ma yin te**[454] zhes bya ba ni gal te 'das pa yod pa nyid du ston[455] na'o || **rang gi ngo bo kho nar yod na** zhes bya ba la sogs pa la | las de rang gi mtshan [Db3] nyid kyis [Pa5] yod na ni de ltar byung ba ji lta ba bzhin yin pas 'das pa 'grub par mi 'gyur ro || de'i phyir 'di las don du bzhed kyi snga ma ni ma yin no ||

V－1－3　　D 142b3-143b7; P 279a5-280b4.

de ni gdon mi za bar de lta bu yin par[456] zhes bya ba la | gang gi phyir [Pa6] bcom ldan 'das kyis[457] mgur nyid nas 'das pa dang ma 'ongs [Db4] pa med do zhes gsungs pa de'i phyir mdo 'di'i don ni 'di kho na yin gyi bye brag tu smra bas yongs su brtags[458] pa ni ma yin no zhes bya bar shes so || [Pa7] **gal te da ltar gyi**[459] **dus su**[460] zhes bya ba ni | da ltar gyi[461] dus su da ltar gyi dngos por **ma byung ba las byung ngo** zhes bya ba'i don to || **mi** [Db5] **rung ste dus ni dngos po las don gzhan ma yin pa'i phyir ro** || gang da[462] ltar byung [Pa8] ba'i dus 'di mig la sogs pa rnams las don gzhan du gyur pa ma yin par yod ced bya'o || ji ltar de'i bdag nyid du ma byung ba

---

[454] AKBh 299, 11: anyathā hi svena bhāvena vidyamānam atītaṃ na sidhyet.
[455] P: bston.
[456] AKBh 299, 12~ : itthaṃ câitad evaṃ yat paramārthaśūnyatāyām uktaṃ bhagavatā...
[457] D: kyi.
[458] D: btags.
[459] P: gyis.
[460] AKBh 299, 14-15: varttamāne 'dhvany abhūtvā bhavatîti cet na. adhvano bhāvād anarthāntaratvāt.
[461] P: gyis |
[462] D: de.

las 'byung bar 'gyur zhe na | de las gzhan ma yin [Db6] pa'i phyir ro[463] || de skad du [P279b1] **de dag nyid dus gtam gzhi dang**[464] zhes bshad do || **ma 'ongs pa'i mig med do zhes bya ba 'di grub pa yin no**[465] zhes bya ba la | gal te rang gi bdag nyid la ma byung ba las byung na ni da[466] ltar na mig ma byung ba [Pb1] las byung ngo zhes bya bar 'gyur la | de'i [Db7] phyir ma 'ongs pa'i mig med do zhes bya bar grub pa yin no ||

slob dpon 'dus bzang na re | gang zag la sogs pa bzhin 'ga' zhig tu ma bkag pas [Pb3] 'das pa dang ma 'ongs pa yod pa nyid kyi lung 'di ni nges pa'i don to[467] zhe na | nges pa'i don ni rnam pa gzhan du brtag [D143a1] par mi rigs la | gang zag yod pa zhes bya ba de dang der gsungs pa ni manuṣyaka[468] mi can[469] [Pb4] gyis mdo la sogs pa rnams su yod pa nyid bkag pa'i phyir de yod pa nyid brjod par byed pa'i lung rnams ni drang ba'i don nyid du rigs so || de bzhin du pha dang ma ni [Da2] bsad[470] bya zhing zhes bya ba la sogs [Pb5] pa yang drang ba'i don nyid rigs te | gzhan du mtshams med pa'i byed pa rnams de ma thag tu dmyal bar skye bar gsungs pa'i phyir | de ltar yang ma yin no || rang gis gsal bar 'das pa dang ma 'ongs [Pb6] pa yod pa nyid smras pa dang | [Da3] kha cig gis de bzhin kho nar gsal bar bkag pa dmigs pas | gang zhig 'das pa dang ma 'ongs pa yod pa

---

[463] ≒SA 474, 6-7: ya eva vartamāno 'dhvā sa eva bhāvaḥ. tat kathaṃ sa eva vartamānaḥ svātmany adhvany abhūtvā bhaviṣyati.（P133a7, D117b6: da ltar gyi dus gang yin pa de nyid dngos po yin na de ji ltar da ltar de nyid rang gi bdag nyid du ma byung ba las 'byung bar 'gyur te）.

[464] AK I 7c: ta evâdhvā kathāvastu. SA 474, 8 にも引用される。本書第２章（秋本 1991a: 91）参照。SA P133a7, D117b6-7:（'di ltar） de nyid dus dang gtam gzhi dang（zhes bshad do ||）.

[465] AKBh 299, 15-16: atha svātmany abhūtvā bhavati. siddham idam anā-gataṃ cakṣur nâstîti.

[466] D: de.

[467] NA 625c14-16: 此所引契経説有去来、定是了義。曾無餘処決定遮止猶如補特伽羅等故。

[468] P: manuśyaka.

[469] "mi can"は意味不明（直前の manuṣyaka を蔵訳したものか？）。

[470] D: gsad.

nyid du sgrub pa'i lung 'di ni drang ba'i don to[471] || 'dir smras [Pb7] pa ci rnam pa gzhan du na 'das pa dang ma 'ongs pa'i dngos po nyid mi grub ste | 'das pa dang ma 'ongs [Da4pa'i 'du byed kyi dngos po skye ba med do || sdug bsngal dang kun 'byung ba'i bden pa'i dngos po de [Pb8] med pa'i phyir dang | 'gog pa dang lam dag kyang de bzhin te bden pa bzhi med pa'i phyir yongs su shes pa dang spangs pa dang mngon du bya ba dang bsgom pa dag kyang mi rung la | de [Da5] med pa'i phyir 'bras bu la [P280a1] [472] gnas pa dang zhugs pa'i gang zag rnams kyang med do || de ltar sgra ji bzhin pa'i don yongs su brtags pas 'das pa dang ma 'ongs pa yod pa nyid du sgrub pa'i lung rnams mtha' dag gsung rab dang 'gal lo[473] || de'i phyir lung 'di ni drang ba'i [Da6] don te nges pa'i don ma yin zhes bya bar nges so ||

gzhan yang don dam pa stong pa nyid kyi mdo las 'das pa dang ma 'ongs pa de nyid rdzas kyi sgo nas bkag go || **mig ma byung ba las byung zhing byung nas 'jig pa**[474] zhes bya ba la | de'i phyir gang gnas brtan rnams kyis sgrub [Da7] byed smras pa de 'brel pa med pas gzhung mangs pa'i 'jigs pas dgag pa rgyas par ma byas so ||　'ga' zhig 'di skad du | mig me'i rang bzhin yin pa'i phyir nyi ma'i dkyil 'khor las 'byung zhing yang de nyid du thim par 'gyur ro[475] || de bzhin du gzhan yang rig par bya ste | [D143b1] ma 'ongs pa'i dus kyi mig ni da ltar byung ba'i dus su 'gyur zhing | da ltar

---

[471] NA 625c16-25: 謂雖処処説有補特伽羅。而可説為實無有體人。契経等分明遮故由此説有。補特伽羅所有契経皆非了義。又如経説応害父母。理亦応是不了義経。以餘経言是無間業。無間必堕奈落伽故。…如是等類随応當知非*此分明決定説有去来世。已復於餘処分明決定遮有去来。可以准知此非了義。*非は不要。

[472] P280a には P282a が入り込んでいるため、デルゲ版（D143a5-b3）のみをテキストとする。

[473] =TSP 632, 11-15: api ca sadâvasthitatve saṃskārāṇāṃ hetuphalayor abhāvād duḥkhasamudayabhāvaḥ. Tadabhāvān nirodhamārgayor api, tataś ca satyacatuṣṭayābhāvāt parijñāprahāṇasākṣātkriyābhāvanā na yujyante, tad-abhāvāc ca phalasthānāṃ pratipannakānāṃ ca pudgalānām abhāva iti sakalam eva pravacanaṃ niruddhyata iti nâtītādivastujātakalpanā sādhvī. なお、一重下線部以外ほぼ一致する。二重下線部と同内容の文が TA では先頭にある。

[474] AKBh 299, 13-14: cakṣur abhūtvā bhavati bhūtvā ca pratigacchati.

[475] cf. NA 626a12～：以世間有邪論者、説眼根生位従火輪来。眼根滅時還造集彼。（…或遮眼根出従自性、没還帰彼。…或遮眼根自在所作。…）

byung ba las 'das par 'gyur te | de'i phyir gzhan gyi dngos po gzhan rtogs pa'i phyir gzhan la yang zhugs pa'i rang bzhin las mig 'byung zhing yang de nyid du thim mo zhes zer ro || de dgag pa'i [Db2] phyir **mig ni skye ba na gang nas kyang mi 'ong la | 'gag pa ni**[476] **gang du yang sogs par mi 'gyur ro**[477] zhes smos so || rang gi lugs bstan pa'i phyir | **de lta bas na dge slong dag mig ni ma byung ba las byung zhing byung nas kyang slar 'jig par 'gyur ro zhes gsungs te**[478] | zin pa'i rang [Db3] bzhin yongs su btang nas zhes bya ba de ltar mdo'i don rnam par gzhag go ||

slob dpon 'dus bzang na re | gzhan du brjod pa ma byung ba las byung zhes bya ba ni | ma byung ba dang 'ga' zhig tu sogs pa ni rang gi rgyu dang rkyen rnams las 'byung ngo zhes bya [P280b1] ba'i don te |[479] 'ga' zhig [Db4] ni lus kyi dkyil rgyur 'dod pas de'i phyir ma byung ba ni rgyu la brjod de | de'i rgyu can gzhan nyid las de skye'o zhes bya'o || ma byung ba las byung ba ni | gnas skabs snga ma ma thob pa[480] thob bo [Pb2] zhes bya ba'i don to || byung nas kyang 'jig ces bya ba ni snga ma bzhin du 'bras bu 'phangs pa bya ba med [Db5] pa'i gnas skabs thob bo zhes bya bar bsams pa[481] zhes zer ro || 'di dag kyang mdo'i don bstan pa [Pb3] mtha' dag gi don dang 'gal ba'i phyir dang rigs[482] pa dang 'gal ba'i phyir mi 'thad do || gang bshad pa | byung ba las ma byung zhes ma bshad pa'i phyir 'di'i don rtogs so zhe na | 'di [Db6] yang mi rigs te | 'dir [Pb4] dngos po rnams kyi ma

---

476 AKBh P283a1, D241b4: 'gag pa na yang.
477 AKBh 299, 12-13: cakṣur utpadyamānaṃ na kutaścid agacchati nirudhyamānaṃ na kvacit saṃnicayaṃ gacchati.
478 AKBh 299, 13~ : iti hi bhikṣavaś...
479 D: to ||
480 P, D: omit "ma thob pa."
481 NA 626a18-24: 謂此中所言本無今有者、顕本無集処、従自因縁生。或有欲令因是果蔵。故佛説果因中本無。但由彼因有別果起。或此為顕眼根生時、能至本来所未至位。依此義説本無今有。此経文意理必応然。故次復言有已還去。此顕起作用牽自果、已還去至如本無作用位。
482 D: rig |

byung ba ni rang bzhin sgrub pa dang zin pa'i rang bzhin yongs su btang bar 'chad par 'dod pas de nyid kyi phyir de ltar bshad do ||

V－2　D 143b6-144a2; P 280b4-8.

re zhig 'dir[483] zhes bya ba rgyas par 'byung ngo || mig [Pb5] gi rnam par shes pa la sogs pa rnams ni yul da [Db7] ltar ba yin pa'i phyir rten ltar dmigs pa yang skyed par byed pa nyid kyi yid kyi rnam par shes pa kho nar nye bar bkod do || **yid** da ltar ba kho na de'i rkyen [Pb6] nyid du gnas pas **skyed**[484] **par byed pa'i rkyen yin pa ltar chos rnams kyang de dang 'dra 'am** zhe na | de lta na 'das pa dang [D144a1] ma 'ongs pa rdzas su yod par 'grub po ||[485] de ltar 'das pa dang ma 'ongs pa rdzas su [Pb7] yod na de la dmigs pa'i rnam par shes pa skye ba'i phyir | rdzas ny bskyed pa po 'dod do ||

'on te rdzas ma yin gyi **dmigs pa tsam yin na**[486] | skyed par byed pa'i rkyen ma yin [Da2] no[487] || de ltar 'das pa [Pb8] dang ma 'ongs pa rdzas kyi sgo nas yod pa ma yin pa nyid kyang dmigs pa'i dngos por mi 'gal lo ||

V－2－1　D 144a2-3; P 280b8-281a1.

bskal pa stong na 'byung ba[488] zhes bya ba ni ma 'ongs pa nye ba yang skyed par byed pa'i rkyen du mi 'dond na | shin [P281a1] tu bskal ba lta

---

[483] AKBh 299, 16-18: yad apy uktaṃ "dvayaṃ pratītya vijñānasyôtpādād" itîdaṃ **tāvad iha** saṃpradhāryam. yan manah; prati: tya dharmāṃś côtpadyate manovijñānaṃ kiṃ tasya **yathā mano janakah; pratyaya evaṃ dharmāh; āhosvid ālaṃbanamātraṃ** dharmā iti.

[484] P: bskyed.

[485] P: omit "||".

[486] AKBh P238a5: zhig yin.

[487] ≒SA 474, 10: ālambanamātram iti. mātraśabdo janakatvavyāvartanārthah.

[488] AKBh 299, 18-20: yadi tāvad janakah; pratyayo dharmāh; kathaṃ yad anāgataṃ kalpasahasreṇa bhaviṣyati vā na vā tad idānīṃ vijñānaṃ janayiṣyati. nirvāṇaṃ ca sarvapravṛttinirodhāj janakaṃ nôpapadyate.

smos kyang ci dgos snyam du dgongs [Da3] te | 'bras bu snga la rgyu phy-i'o snyam du rtog pa ni rig pa dang ldan pa ma yin no[489] ||

V – 2 – 2   D144a3-145a6; P281a1-282a7.

gal te med pa ji ltar dmigs pa yin zhe na[490] | skyed par [Pa2] byed pa ma 'ongs pa'i rdzas kyi sgo nas 'dod pa ma yin no || 'o na ci zhe na | dmigs pa nyid kyi phyir yod pa ma yin pa ni nye bar ma bshad pas [Da4] dmigs pa'i dngos por mi rung ngo || gzugs 'das pa dang [Pa3] ma 'ongs pa zhes bya ba ni gzugs 'das pa dang ma 'ongs pa ma yin pa med pa'o || **da ni 'dir ji ltar dmigs pa**[491] zhes rgyas par 'byung ba la | kho bo cag gis de dmigs pa smras pa ji lta ba de ltar med pa [Pa4] ma yin no || [Da5] 'o na ci zhe na | khyed cag rnams kyis rdzas kyi sgo nas[492] brtags[493] pa ji lta ba de ltar med ces bya'o ||

byung[494] zhes bya ba ni 'das pa la dmigs pa yin no || de bzhin du de yod pa nyid **'byung bar** [Pa5] **'gyur ro** zhes bya ba ni ma 'ongs pa la dmigs pa yin no || de yang de bzhin du yod pa nyid [Da6] yin na | ci ltar yang 'di shes par bya zhe na | **byung ba dang 'byung**[495] **bar 'gyur ro** zhes bya ba la dmigs par byed do || yang [Pa6] yod pa ma yin pa de'i phyir **'das pa'i gzugs sam tshor ba**[496] zhes bya ba rgyas par gsungs te | **yang ji ltar da ltar gyi gzugs nyams su myong ba** ni mig gis so || [Da7] rna ba dang sna dang lce

---

[489] ≒SA 474, 11-12: yad anāgataṃ sahasreṇa iti saṃnikr̥ṣṭam apy anāgataṃ janakaṃ na yujyate. kim aṅgâticireṇa kālena yad bhaviṣyati. na hi pūrvakālīnasya phalasya paścātkālino hetur yujyata iti.

[490] AKBh 299, 20-21: athâlaṃbanamātraṃ dharmā bhavanti. atītānāgatam apy ālaṃbanaṃ bhavati: ti brūmah; yadi nāsti kathaṃ ālaṃbanam.

[491] AKBh 299, 21-22: atrêdānīm brūmah; yathā tad ālambanaṃ tathâsti.

[492] P: sgo na.

[493] D: btags.

[494] AKBh P283a8, D242a3: byung bar gyur. AKBh 299, 22: kathaṃ tad ālaṃbanam. abhūd bhaviṣyati cêti.

[495] P: byung.

[496] AKBh 299, 22-24: na hi kaścid atītaṃ rūpaṃ vedanāṃ vā smarann astîti paśyati. kiṃ tarhi. abhūd iti yathā khalv api vartamānaṃ rūpam anubhūtaṃ tathā tad atītaṃ smaryate.

dang lus dang rnam par shes [Pa7] pa rnams kyis **de ltar 'das pa**[497] **dran no** || de nyid du nye bar bsags pa las gzhan de ni ji ltar nyams su myong ba de nyid kyis bdag nyid 'das so zhes bya ba dang byung bar gyur to zhes 'dzin no || nyams su myong ba [Pa8] dang 'thun par dran bar byed [144Db1] do || **de lta bu ni sangs rgyas rnams kyis ma khyen to** ||[498] zhes bya ba ni | thams cad du thogs pa med pa'i ye shes dang ldan pa'i phyir gzhan dang gzhan 'byung bar 'gyur ro zhes bya ba de ltar [P281b1] mkhyen to ||

gal te yang[499]'das pa dang ma 'ongs pa **de de bzhin du yod do zhe na** | ji ltar [Db2]nyams su myong ba de ltar 'byung bar 'gyur bas **da ltar byung bar 'gyur te** | 'das pa dang ma 'ongs pa dang da ltar byung ba dag la khyad par [Pb2] med pa'i phyir ro || **'on te med do** zhe na | ji ltar nyams su myong ba ji ltar 'byung bar 'gyur ba de bzhin du yod pas jin pa'i [Db3] gzugs kyi rang bzhin yongs su btang ba'i phyir 'das pa dang ma 'ongs pa'i gzugs yod pa [Pb3] ma yin pas | de ltar na **med pa yang dmigs pa yin no zhes bya ba grub pa yin no** ||

slob dpon 'dus bzang na re | rdzas dang btags pa nye bar len pa'i yul nyid [Db4] shes pa ni yul med pa ma yin te | med pa gnyis [Pb4] smos pa med pa'i phyir ro || de'i phyir ma sbrel bar[500] smras so || 'das pa dang ma 'ongs pa yang dmigs zhes bya ba ni | gnyi ga yid kyi rnam par shes pa skyed par byed pa'i rkyen te | yid ni rten gyi ngo bo dang chos ni [Db5] dmigs [Pb5] pa'i ngo bo yin te | de ltar rten med par yang skye ba mi 'thad par de bzhin du dmigs pa med par yang ste bya ba med pa'i phyir ro[501] || chos thams cad

[497] AKBh P283b1: pa yang.

[498] AKBh 299, 24: yathā cânāgataṃ vartamānaṃ bhaviṣyati tathā buddhyā gṛhyate. "sangs rgyas rnams kyis"は"buddhyā"の訳であろうが、"blos"等と訳すべきであろう。

[499] AKBh 299, 24-25: yadi ca tat tathâivâsti vartamānaṃ prāpnoti. atha nâsti. asad apy ālaṃbanaṃ bhavati: ti siddham.

[500] NA 627c26-29: 「佛説二縁能生於識。此則唯説実及仮依、為根為境方能生識。二唯用彼為自性故。非無可為二縁所摂。由此知佛巳方便。遮無為所縁識亦得起。既縁過未識亦得生。故知去来体是実有、宗承既爾。」

[501] NA 628a5-9: 「意為意識所依生縁。法為所縁能生意識。所依縁別生縁義同。佛説二縁能生識故。如所依闕識定不生。所縁若無識亦不起。二種倶是識生縁故。」

thams cad nyid la dmigs pa tsam gyis 'ga' zhig tu cung zad skyed [Pb6] par byed pa tsam gyi[502] sgra smos pa don med [Db6] do ‖ shes bya'i thibs po rnams la 'jig rten pa'i tshad ma ni shin tu rnam par dag pa'i blo ma yin pa'i phyir de dag nyams su myong ba nyid dang dran pas ji ltar dus rnam par 'byed [Pb7] par byed | 'di ni 'di ltar gang nams su myong ba ma 'ongs pa ni yul can du mi 'gyur la | [Db7] blo rnam par dag pa'i yul ni 'gyur ro[503] ‖

de'i rnam pa gzhan nyid kyis 'das pa dang ma 'ongs pa la dmso ‖ rnam [Pb8] pa gzhan du de yod pa nyid kyis snga nas med pa dang zhig nas med pa dag brtags par yod pa ste | de'i ngo bo dngos po la ma bltos par brtags pa ste | [D145a1] bum pa la sogs pa bzhin no ‖ de'i phyir gnyis kyi [P282a1] khongs su 'dus par grub bo ‖ de bas na 'das pa dang ma 'ongs pa la dmigs so zhes bya ba 'di ni ma 'brel ba'o ‖

gal te ma 'ongs pa'i chos da ltar byung ba'i rnam par shes pa yid bzhin du [Pa2] skyed par [Da2] byed par 'dod pa de lta na | skye bu byed pa med pa'i phyir ma 'ongs pa ma gzung ba kho nar 'bras bu 'byin par 'gyur ro ‖ rnam par shes pa ma skyes pa yang ma 'ongs pa'i chos kyi bdag po 'bras bu [Pa3] rung gi | skyes bu byed pa ni ma yin no ‖ bdag po'i 'bras bu ni | sngar byung [Da3] las gzhan 'dus byas chos | 'dus byas kyi ni bdag po'i 'bras bu[504] zhes bshad pa'i phyir ro ‖ skyes bu byed pa'i 'bras bu yang [Pa4] rgyu las sngar skyes pa nyid du mi 'dod do ‖ de'i phyir ma 'ongs pa'i chos kyis daltar ba'i rnam par shes pa skyed par byed pa ni rang gi [Da4] grub pa'i mtha' la gnod pas | skyed par byed pa ma yin la bskyed par [Pa5] bya ba yang mi

---

502 cf. AKBh 299, 20-21: athâlambanamātraṃ dharmā bhavanti. atītānāgtam apy ālambanaṃ bhavati: ti brūmah.

503 NA 628b5-11: 「譬喩師徒情参世俗。所有慧解倶麁浅故。非如是類爾焔稠林。可以世間浅智為量。唯是成就清浄覚者。称境妙覚所観境故。若諸世間覚不浄者。要曾領受方能追憶。因此尋思去来世異理必應爾。彼於未来由未領納観極闇昧。清浄覚者観於去来。脱未領納観極明了。」

504 cf. AK II 58cd: apūrvah; saṃskr̥tasyâivasaṃskr̥to 'dhipateh; phalam.（P Gu 112a4-5: sngon byung ma yin 'dus byas ni ‖ 'dus byas kho na'i bdag pa'i 'bras ‖）; AKBh 96, 7: pūrvotpannād anyah; saṃskr̥to dahrmah; saṃskr̥tasyâiva sarvasyâdhipatiphalam. P Gu 112a5: sngar byung ba las gz: an pa'i 'dus byas kyi chos ni 'dus byas thams cad kyi bdag po'i 'bras bu yin no ‖

'gyur ro zhes rigs so || dmigs pa tsam khas blangs pa la ni grub pa'i mtha' dang 'gal ba yod pa ma yin no || chos thams cadf byed pa med pa yin pas 'dis bya ba gang ci yang [Da5] rung [Pa6] ba dgag pa ni rgyu'i ngo bo dgag pa ma yin no ||

gal te 'das pa dang ma 'ongs pa rnams gzhan du dmigs shing gzhan du yod pa nyid na | da ltar byung ba kho nar 'gyur te | byung ba dang 'byung bar 'gyur ba [Pa7] 'ga' yang med do || de'i phyir rnam pa gzhan du shes pa [Da6] 'byung bar 'gyur ro zhes kha blang so ||

V－2－3　　D 145a6-146a1; P 282a7-283a3.

de nyid sil bu yin no zhe na[505] | gang da ltar byung ba de nyid sil bu ste | 'das pa dang ma 'ongs pa dag [Pa8] ni **ma yin te sil bu**[506] **mi 'dzin pa'i phyir ro**[507] || gal te de sil bu nyid 'dzin cing da ltar byung ba [Da7] nyams su myong bas dran pa ma yin nam zhe na | byung ba zhes bya ba la | dper na da ltar byung [P282b1] ba'i gnas skabs kyi tshogs pa ni sil bu yin la | tshogs pa'i gnas skabs la ma bltos par sil bu 'dzin pa nyid bzhin no[508] ||

gal te de[509] **yang de**[510] 'das pa dang ma 'ons pa [D145b1] dang da ltar byung ba'i ngo bo de [Pb2] ni **rdul phra rab**[511] **gyes pa** las'das pa dang ma 'ongs par brjod par zad kyi chos gang yang skye ba 'am 'gag pa med do zhe na | **de ltar na yin na**[512] | **rdul phra rab rnams rtag par 'gyur te** | dus gsum du yang [Pb3] rnam par 'gyur ba med pa'i rang bzhin yin [Db2] pa'i phyir ro ||

---

505 AKBh 299, 25: tad eva tadvikīrṇam iti cet. na. vikīrṇasyâgragaṇāt. cf. AKBh P283b2-3; D242a5: gal te de nyid sil bu yin no zhe na.

506 cf. AKBh P283b3; D242a5: bu la.

507 AKBh 300, 1: na. vikīrṇasyâgragaṇāt.

508 cf. SA 474, 25-26: pūrvaṃ na vikīrṇam idānīṃ vikīrṇam etad rūpam ity evam asyâgrahaṇāt.

509 cf. AKBh P283b3; D242a5: omit de.

510 AKBh 300, 1-2: yadi ca tat tad eva rūpaṃ kevalaṃ paramāṇuśo vibhaktam. evaṃ sati paramāṇavo nityāḥ prāpnuvanti. paramāṇusaṃcaya-vibhāgamātraṃ câivaṃ sati prāpnoti.

511 AKBh P283b3; D242a5: rab tu.

512 cf. AKBh P283b3; D242a5: de lta na ni.

bsags pa dang gyes pa tsam las[513] **'gyur** ba rjes su 'jug pas gang da ltar byung ba'i gnas skabs na rdul phra rab[514] bsags pa dang gyes pa [Pb4] tsam 'das pa dang ma 'ongs par 'gyur ro || de lta na rtag tu rdul phra rab bsags pa dang gyes pa tsam 'di 'das pa dang [Db3] ma 'ongs par 'gyur ro || rdul phra rab bsags pa tsam kho na la da ltar byung ba [Pb5] zhes bya'i | 'ga' yang skye ba med do || de gyes pa tsam la 'das pa zhes bya'i | 'ga' yang 'gag' pa[515] med do ||

de ltar na **'tsho byed kyi rtsod pa blangs pa yin te**[516] 'di ltar smra ste'o || **mdo yang bor** [Db4] **bar** [Pb3] **'gyur ro**[517] zhes bya ba ni 'gal bar byas pa yin no || ji ltar 'gal bar byas she na | mig gi dbang po'i rdul phra rab rnams ma 'ons pa'i dus na sil bu dang da ltar byung ba'i dus na bsags pa yin no [Pb7] zhes bya ba 'dis ni | **mig ni**[518] **skye ba na**[519] **gang nas kyang mi** [Db5] **'ons**[520] zhes bya ba 'di dang 'gal bar byas pa yin no || de bzhin du mig gi dbang po'i rdul phra rabs rnams bsags pa dang gyes pa tsam du khas [Pb8] blang bas **'gag pa na**[521] **gang du yang sogs par mi 'gyur ro**[522] zhes bya ba de dang 'gal bar byas pa yin no || **'gag**[523] [Db6] **pa med pa'i phyir**[524] zhes bya bas mig ma byung ba las byung zhing byung nas kyang 'jig[525] ces bya [P283a1] ba 'di dang 'gal bar byas pa yin te | mig gi dbang po'i rdul

---

513 cf. AKBh P283b4; D242a6: du.
514 P: rabs.
515 P, D: skye ba.
516 AKBh 300, 2-3: na tu kiṃcid utpadyate nâpi nirudhyata ity ājīvikavāda ālambito bhavati. cf. AKBh P283b4; D242a6:...yin no
517 AKBh 300, 4: sūtraṃ câpaviddhaṃ bhavati "cakṣur utpadyamānaṃ na kutaścid āgacchatîti vistaraḥ.
518 cf. AKBh D242a5: ni nam.
519 cf. AKBh P283b4; D242a6: na yang.
520 AKBh 299, 12-13 に出る。
521 cf. AKBh P283a1; D241b4: na yang.
522 AKBh 299, 13: nirudhyamānaṃ na kvacit saṃcayaṃ gacchati.
523 D: 'gags.
524 AKBh 300, 3: nâpi nirudhyata iti. cf. AKBh P283b4; D242a6: 'gag pa yang med pas.
525 AKBh 299, 13-14: cakṣur abhūtvā bhavati bhūtvā ca pratigacchati. cf. AKBh P283a1; D241b5: mig ni ma byung ba las 'byung zhing byung nas kyang slar 'jig par 'gyur ro.

phra rab rnams rtag pa'i phyir dang bsags pa de rnams kyang dngos po ma yin pa'i phyir ro ||

rdul phra rab bsags [Pa2; Db7] **pa ma yin pa rnams kyang**[526] zhes bya ba ni rdul phra rab rnams kyis bsags pa ma yin pa rnams zhes bya ba'i don to || **ci ltar**[527] **sil bu nyid yin** ce na | yul na mi gnas pa'i phyir sil bu nyid de yod pa [Pa3] ma yin pa nyid do zhes bya bar dgongs pa'o || **de dag kyang** zhes bya ba [D146a1] ni tshor ba la sogs pa rnams so ||

V – 2 – 4　　D 146a1-147a7; P 283a3-284-b6.

skye mched bcu gsum pa yang dmigs pa yin par 'gyur ro[528] zhes bya ba ni | gal te yid kyi rnam [Pa4] par shes pa'i dmigs pa yod pa de bzhin du skye mched bcu gsum pa yod pa ma yin pas 'das pa dang ma 'ongs pa [Da2] bzhin du de yang dmigs pa ma yin no || de'i phyir dmigs pa yod pa ma yin [Pa5] pa'i rnam par shes pa med do zhes bya bar nges so ||

'on te[529] **skye mched bcu gsum pa**[530] zhes bya ba rgyas par 'byung ba la | skye mched bcu gsum pa med do snyam pa'i shes pa 'di'i dmigs pa dngos [Da3] por mi [Pa6] rung ste | skye mched bcu gsum pa mig la sogs pa ldur du med pa'i phyir ro || de'i phyir med pa las tha dad pa 'di'i dmigs pa ci zhig yin zhes brjod par bya'o ||

ming de nyid dmigs pa yin no[531] [Pa7] zhes bya ba la | Bye brag tu smra ba rnams na re | don med pa'i phyir ro [Da4] zhes zer ro || Slob dpon 'dus bzang na re | 'dir yod pa ma yin zhes bya ba 'di mngon par brjod pa'i rnam grangs yod pas 'di mngon [Pa8] par brjod pa de'i phyir yod pa ma yin

---

[526] AKBh 300, 5-6: aparamāṇusaṃcitānāṃ vedanādīnāṃ kathaṃ vikīrṇatvam. te 'pi ca yathôtpannānubhūtāḥ smaryante. yadi ca te tatâiva santi nityāḥ prāpnuvanti. atha na santi. asad apy ālambanam iti siddham.

[527] cf. AKBh P283b5; D242a7: ji ltar na.

[528] AKBh 300, 7: yady asad apy ālambanaṃ syāt trayodaśam apy āyatanaṃ syāt.

[529] cf. AKBh P283b7, D242b1: 'o na.

[530] AKBh 300, 7-8: atha trayodaśam āyatanaṃ nâstîty asya vijñānasya kim ālambanam.

[531] AKBh 300, 8: etad eva nāmâlambanam.

pa zhes bya ba 'di bshad de'i rnam grangs kyang brjod pa'i blo skye 'o[532] zhes zer ro | med pa nyid [Da5] yin na |[533] **de lta na ni 'o na ming nyid med do zhes bya bar rtog par 'gyur ro** ||[534] de [P283b1] don med de ming yang rna ba'i rnam par shes pa'i nyams su myong ba nyid med pas ci ltar rtog par 'gyur |[535]

slob dpon 'dus bzang na re | de la nges pa med do snyam pa'i blo skye ba ma yin no || 'o na ci zhe na | [Da6] yod [Pb6] do snyam pa'i blo skyes pas de'i dngos po dgag pa'i yul rnams dngos po'i yul can te | dngos po dgag pa'o || med ces[536] brjod pa de'i phyir brjod pa'i yul gyi blo'o || gang la yul med par 'byung bar 'os [Pb3] pa ma yin pas dgag pa'i don to || de la don brjod[537] par byed [Da7] pa dang blo ni dper na bram ze rtag go zhes gang brjod pa brjod bya ma yin pa ji lta bar yod pa[538] ma yin no ||[539]

de la don med pa'i phyir yod pa ma yin [Pb4] zhes brjod[540] par byed pa nyid kyi blo las | gal te med pa brjod byar gyur na sgra gang yang rung ba don med pa can du 'gyur ro || gal [D146b1] te dngos po dgag pa'i yul yod pa ma yin pa'i blo las ming gi yul du mi 'gyur [Pb5] ro || yang na ming med pa'i rang bzhin du thal bar 'gyur ba'i phyir ro || gal te dngos po dgag pa'i

---

[532] NA 623c28-624a3: 「於非有了知為無、此覚以何為所縁者、此縁遮有能詮而生、非即以無為所縁境。謂遮於有能詮名言、即是説無能詮差別。故於非有能詮名言、若了覚生便作無解。是故此覚非縁無生。」

[533] D: omit |.

[534] AKBh 300, 8: evaṃ tarhi nāmâiva nâstîti pratīyeta. P: omit ||.

[535] P: omit |.

[536] P: zhes.

[537] P: rjod.

[538] D: ma に見える。

[539] NA 624a4-20: 「非了覚生撥名言体、但能了彼所詮為無。謂了覚生縁遮有境、不以非有為境而生。何等名為能遮有境。謂於非有所起能詮。此覚既縁能詮為境。不應執此縁無境生、理必應爾。如世間説非婆羅門及無常等性。雖遮余有而体非無。此中智生縁遮梵志及常等性能詮所詮。即此能詮能遮梵志及常等性、於自所詮刹帝利身諸行等転。然諸所有遮詮名言、或有有所詮有無所詮者、有所詮者如非梵志無常等言、無所詮者如説非有無物等言。（後略）」

[540] D: rjod.

yul yang dngos po nyid du dmig na | bram ze la sogs pa dgag pa'i [Db2] yul yang bram ze nyid du [Pb6] dmigs par thal bar 'gyur ro ||

gang bshad pa dngos po dgag pa med par bshad pas 'dir dngos po med pa'i rang bzhin gyi phyir ram brjod bya ma yin pa'i phyir dngos po dgag pa brjod par brtag ce na | [Pb7] gnyi ga ltar yang skye ba med de | de'i [Db3] bdag nyid yin pa'i phyir ro || 'on te dngos po'i sgra ni yod pa'i sgrar brjod do zhe na de lta na yang mi rigs te | 'dir yod pa ma yin zhes bya ba'i sgra'i ngo bos 'chad par [Pb8] 'dod pa ma yin no || 'o na ci zhe na | skye mched bcu gsum pa'i sgra'i don no || bram ze ma yin zhes [Db4] bya bas kyang bram ze dang 'dra bar gzhan rtogs te | gzhan thams cad ma yin pa nyid ces bya ba 'dir [P284a1] bram ze ma yin pa zhes bya ba ste | sgra la shes pa yod pa ma yin no || skye mched bcu gsum pa yod pa ma yin zhes bya ba 'di yang skye mched bcu gsum pa'i sgra'i [Db5] don nyid yod pa [Pa2] ma yin par sgrub par byed do || med pa'i sgra'i rang bzhin gang yin pa 'di gnyis brjod byar 'dod pas de'i phyir dngos po dang dngos po med pa brjod par byed pa'i sgra don med pa can du 'dod do || gang bshad [Pa3] pa dngos po ci yang med pa ni shes bya[541] ma yin zhing [Db6] brjod bya ma yin no zhe na | de lta na bum pa dang snam bu la sogs pa yang shes bya ma yin pa dang brjod bya ma yin par thal bar 'gyur ro || dngos po ci yang [Pa4] med pa dag kyang snga na med pa la sogs pa'i dbye bas tha dad pa'i mi 'gal te | bltos pas tha dad pa'i bum pa dang [Db7] snam bu la sogs pa bzhin no ||

sgra'i snga na med pa la dmigs pa gang yin pa[542] zhes [Pa5] bya ba ni ma skyes pa la dmigs pa'o | **de la dmigs pa ci**[543] zhe na | skye ba dgag pa ma gtogs pa gzhan ma yin pas sgra'i ma skyes pa yod do zhes dgongs pa'o || bye brag tu smra ba [D147a1] rnams ni **sgra kho na** 'o [Pa6] zhes zer ro ||

---

[541] D: ba.

[542] AKBh 300, 9-10: yaś ca śabdasya prāgabhāvam ālambate kiṃ tasyâlambanam. śabda eva. evaṃ tarhi yaḥ śabdābhāvaṃ prārthayate tasy śabda eva kartavyaḥ syāt. cf. AKBh P283b8; D242b2: gang zhig sgra'i snga na med pa la dmigs pa.

[543] cf. AKBh P283b8; D242b2: de'i dmigs pa yang ci zhig yin.

dus gsum du yang sgra'i rang bzhin khyad par med pa'i phyir ro || **de lta na**[544] **'o na** zhes rgyas pa 'byung ba la | gal te gang zhig sgra'i snga na med pa la dmigs na des sgra kho na dmigs pas dgag pa [Pa7] tsam thob kyi [Da2] gzhan ma yin no || de lta yin na **gang zhig sgra med pa don du gnyer ba de la sgra dbyung dgos pa kho nar 'gyur ro** || des sgra don du gnyer bar 'gyur gyi sgra med pa ni ma yin no ||

gal te ma 'ongs pa'i [Pa8] **gnas skabs yin no zhe na ni**[545] | ma skyes pa'i gnas skabs zhes bya ba [Da3] sgra kho na'i sgra snga na med pa'o || gang zhig sgra med pa don du gnyer ba ni ma skyes pa'i gnas skabs kyi sgra de nyid don du gnyer ba yin la [P284b1] de'i bya ba 'byung ba ma yin no || **yod na ji ltar**[546] **med pa'i blor 'gyur** zhes bya ba ni | sngar skyes pa'i sgra med pa ste da ltar ba'i sgra gzung nas [Da4] med do snyam pa'i blo 'byung ba ma yin no || **da ltar byung ba med do**[547] [Pb2] zhes bya ba la 'di da ltar byung ba med do[548] snyam pa'i de lta bur de la med do[549] snyam pa'i blo 'jug gi | yang med pa la dmigs pa ma yin no || **gcig pa'i phyir ro** zhes bya ba ni | gang kho na ma 'ongs [Pb3] pa de nyid da ltar [Da5] byung ba yin na | ci ltar da ltar byung ba med ces bya ba dang da ltar byung yang ma 'ongs pa med pas de la yang med pa'i blo yod par 'gyur te khyad par med pa'i phyir ro ||

yang na[550] **bye brag gang** [Pb4] **yin**[551] zhes bya ba ni | da ltar byung ba'i gnas skabs na gang med pa de ni da ltar byung ba la med [Da6] pa zhes bya'o || **de ma byung ba las byung bar grub ste** zhes bya ba ni | ma 'ongs

---

[544] cf. AKBh P283b8; D242b2: na ni.
[545] AKBh 300, 10-11: anāgatāvatha iti cet. sati kathaṃ nâstibuddhiḥ. vartamāno nâstîti cet. na. ekatvāt.
[546] cf. AKBh P284a1; D242b3: ltar na.
[547] AKBh P284a1-2; D242b3: pa yin no.
[548] P: do ||
[549] P: do ||
[550] cf. AKBh P284a2; D242b3: yang na de'i.
[551] AKBh 300, 11-12: yo vā tasya viśeṣas tasyâbhūtvābhāvasiddhiḥ. tasmād ubhayaṃ vijnyānasyâlambanaṃ bhāvaś câbhāvaś ca.

pa'i gnas skabs su ma byung ba ninlas da ltar byung ba'i gnas skabs su byung ba'i phyir ro || **yod pa dang med pa gnyi ga** zhes bya ba la da ltar byung pa'i gnas skabs na ni yod pa dmigs pa yin la ma [Da7] 'ongs pa'i gnas skabs na ni [Pb6] med pa dmigs pa yin no ||

V – 2 – 5　　D 147a7-b4; P 284b6-285a3.

gal te med pa dmigs pa yin na **'o na byang chub sems dpa'**[552] zhes gsung ba ji ltar drang | gang 'jig rten na med pa gang yin pa zhes bya ba rgyas par 'byung [Pb7] ste | de las ni de'i dmigs pa med pa nyid yin pa [D147b1] bkag pa yin no ||

mngon pa'i nga rgyal can gzhan[553] zhes bya ba rgyas par 'byung ste | 'dir mdo'i dgongs pa ni ting nge 'dzin yongs su ma dag pa [Pb8] rnams[554] **snang ba med bzhin du ste | sbyor ba'i gnas skabs na lha'i mig gi snang ba med bzhin du yod par lta'i**[555] **bdag ni** lha'i [Db2] mig gi snang ba gsal ba'i ngo bor yod pa kho na yod par **lta'o**[556] zhes bya ba 'di [P285a1] yin no ||

rtog par yang ga la 'gyur[557] zhes bya ba ni yod dam med ces the tshom du ste | blo rnams yod pa dang med pa'i yul can nyid yin na ni | gnyis ka la lta ba'i dgos pa grub kyi | yod pa'i [Pa2; Db3] yul can nyid yin na mi grub bo ||

yang na khyad par ci zhig yod[558] ces bya ba la | gal te de dag kyang yod pa'i snang ba kho na lta'i med pa ma yin na ni gzhan dag las byang chub sems dpa' la khyad par ci zhig yod ||[559]

---

552 AKBh 300, 12-13: yat tarhi bodhisattvenôktam "yat tat loke nâsti tad ahaṃ jñāsyāmi vā drakṣyāmi vā nêdaṃ sthānaṃ vidyata" iti.

553 AKBh 300, 13-14: apare ābhimānikā bhavanty asantam apy avabhāsaṃ santaṃ paśyanti, ahaṃ tu santam evâstîti paśyāmîty ayaṃ tatrâbhiprāyaḥ.

554 P: dag.

555 P: lta ba'i. cf. AKBh（P284a4; D242b4）: lta'i.

556 P, D: lta'i.

557 AKBh 300, 15: itarathā hi sarvabuddhīnāṃ sadālambanatve kuto'sya vimarśaḥ syāt.

558 AKBh 300, 15-16: ko vā viśeṣaḥ.

559 P, D: omit.

'di [Pa3] yod pa dang med pa gnyis blo'i yul yin pa nyid la [Db4] dper[560] brjod pa ni **yod pa la yang yod par shes la | med pa la yang med par shes so**[561] zhes bya ba 'di yin no ||

V – 3　　D 147b4-148a3; P 285a3-b3.

de'i phyir rnam par shes pa ni yod pa la dmigs [Pa4] **pa'i phyir ro zhes bya ba de** yang gtan tshigs su mi rung ngo[562] ||

slob dpon 'dus bzang na re | blo skye ba'i rgyu [Db5] yod pa de yang rnam pa gnyis te | rdzas su yod pa dang btags[563] par yod pa'o || gang la bltos pa med par [Pa5] blo skye ba de ni rdzas su yod pa'o || gang la bltos pas blo skye ba de ni btags par yod pa'o || rdzas su yod pa yang rnam pa gnyis te | bya ba'i khyad par dang[564] dngos [Db6] po tsam mo || btags par yod pa de yang [Pa6] rnam pa gnyis te rdzas nye bar len pa dang | btags pa nye bar len pa'o || [565]

gal te btags par yod pa'i yul la yang rnam par shes pa dngos po ma yin pa dmigs na | btags par yod pa'i dngos [Pa7] po gzugs la sogs pa [Db7] dang 'dra bar rang bzhin med pa'i phyir de[566] nye bar len pa la dmigs pa ma yin no || gal te de ltar rnam par shes pa la btags par yod pa'i dmigs pa med

---

[560] D: dpar.

[561] AKBh 300, 16-18: itthaṃ câitad evam. yad anyatra Bhagavatôktam "etu bhikṣur mama śrāvako yāvat sa mayā kālyam avoditaḥ sāyaṃ viśeṣāya paraiṣyati. sāyam avoditaḥ kālyaṃ viśeṣāya paraiṣyati. sac ca sato jñāsyati asac câsataḥ sottaraṃ ca sottarataḥ anuttaraṃ cânuttarata" iti.

[562] AKBh 300, 18-19: tasmād ayam apy ahetuḥ sadālambanatvād vijñāna-syêti. cf. AK V $25b_2$: sadviṣayāt.

[563] P: brtags.

[564] D: dang |

[565] =NA 621c20-622a2: 「我於此中作如是說。為境生覚是真有相。此総有二。一者実有。二者仮有。以依世俗及勝義諦而安立故。若無所待於中生覚、是実有相。如色受等。若有所待於中生覚、是仮有相。如瓶軍等。…実有復二。其二者何。一唯有体。二有作用。（此有作用復有二種。一有功能。二功能欠。由此已釈唯有体者。）仮有亦二。其二者何。一者依実。二者依仮。此二如次如瓶如軍。」

[566] P, D: te.

pa nyid yin na | de nye bar len pa rdzas su [Pa8] yod pa'i phyir | rnam[567] par shes pa la bum pa dang snam bu la sogs pa'i [D148a1] rnam pa gzugs la sogs pa yul du mi rung ngo || gzugs la sogs pa de'i rnam pa ma yin pa'i phyir de'i rnam pa so so ba nyid kyang de'i rnam par [P285b1] gzungs[568] par thal ba ma yin no || rgyu tsam nyid kyis yul dmigs par thal ba ma yin te | [Da2] rkyen thams cad dmigs pa nyid du thal ba'i phyir ro || de'i phyir rang dang mthun pa'i shes pa skyed pa ni rgyu yin la | de [Pb2] nyid dmigs pa ni rgyu rkyen yin no || de ltar ma yin par gal te snang ba med pa'i shes pa'i dmigs pa rnam pa gzhan yin par 'dod pa de lta na | ha cang [Da3] thal ba'i phyir bstan pa chen po las nye bar 'khyam par [Pb3] 'gyur ro || de'i phyir gang zhig ka ba la skyes bu'i rnam par shes pa de ni ka ba la dmigs pa las gzhan ma yin pa'i phyir dang der yang skyes bu med pa'i phyir yul med pa kho na yin no ||

V－4　第二理証批判

V－4－1　D 148a3-5; P 285b3-5.

de sngon du 'gro ba'i rgyud [Pb4] **gyi khyad par** [Da4] **las**[569] zhes bya ba'i don ni | **de sngon du 'gro ba** ni rgyu mthun pa'i 'bras bu dang rjes su mthun pa'i **rgyud** yin no || **khyad par** smos pa ni rnam par smin pa'i 'bras bu dang rjes su mthun pa'i rgyud bstan pa'i phyir ro || [Pb5] **bdag tu smra ba dgag pa nas bshad par bya'o** zhes bya ba ni[570] **rgyud yongs** [Da5] **su 'gyur ba'i khyad par las te | sa bon dang 'bras bu bzhin no**[571] zhes bya ba la sogs pas so ||

V－4－2　D 148a5-149a4; P 285b5-286b6.

---

[567] P: rnas.

[568] D: gzugs la sogs.

[569] AKBh 300, 19-21: yad apy uktaṃ phalād（AK V 25b3） iti. nâiva hi sautrāntikā atītāt karmaṇaḥ phalotpattiṃ varṇayanti kiṃ tarhi tatpūrvakāt saṃtānaviśeṣād ity ātmavādapratiṣedhe saṃpravedayiṣyāmaḥ.

[570] P: ni |

[571] AKBh 477, 10: tatsaṃtatipariṇāmaviśeṣād bījaphalavat.

gang zhig 'das pa dang ma 'ongs pa rdzas su yod [Pb6] **pa**[572] ni btags par ma yin no || de la zhes bya ba ni 'bras bu la'o || de med par de yod pa med pa'i phyir 'bras bu'i [Da6] yod pa skye bar bya ba la rgyu'i nus pa yin pas so || gal te 'bras bu rtag tu yod na ni **de la las kyi** [Pb7] **nus pa** med de | de'i phyir dge ba dang mi dge ba'i las don med par thal bar 'gyur bas chen pos bstan pa las nyams so || (āracito bhavati |) [573]

skyed par nus [Da7] **so**[574] zhes bya ba la | yang 'di skyed pa ci |[575] gal te[576] [Pb8] 'bras bu yod pa skyed ce na ma yin te | 'o na ma 'ongs pas rdzas su yod par 'gyur ro || gal te skyed pa de yod pa nyid las tha dad pa'i 'ga' zhig khyad par 'dzin no zhe na | **'o na ni skye ba ma byung ba las byung ba zhes bya ba** [P286a1] **grub**[577] [D148b1] **pa yin**[578] te | khyad par de sngar med pa'i phyir ro || 'bras bu las gzhan du brjod par mi bya ste | gal te 'di las gzhan pa las dang 'bras bu'i nus pa med pas de'i gnas skabs kho na skyed na | [Pa2] snga na med pa'i phyir dang phyis kyang thams cad yod par smra bas yongs su btang [Db2] bas dngos po rere ba gzhan ma yin pas de[579] dag kyang rtag pa 'am mi rtag par thal bar 'gyur ro || yang cha shas kyi rtag pa nyid [Pa3] du khas len na gzhan nyid rtag la gzhan mi rtag go zhes bya bar thal bar 'gyur ro || btags par yod pa'i phyir dngos po med pa nyid skye bar brjod par [Db3] mi bya ste | de la las rnams kyi nus pa mi rigs so ||

yang [Pa4] **thams cad yod pa kho na**[580] zhes bya ba ni las de dang 'bras bu dang[581] skye ba'o || **da ni gang la** zhes bya ba ste | skye ba 'am 'bras bu

---

[572] AKBh 300, 21-22: yasya tv atītānāgataṃ dravyato 'sti tasya phalaṃ nityam evâstîti kiṃ tatra karmaṇaḥ sāmarthyam.

[573] 意味不明。

[574] AKBh 300, 22: utpādane sāmarthyam.

[575] P, D: omit.

[576] P, D: te |

[577] D: bgrub.

[578] AKBh 300, 22: utpādas tarhy abhūtvā bhavatîti siddham.

[579] P: omit.

[580] AKBh 301, 1: atha sarvam eva câsti kasyêdānīṃ kva sāmarthyam.

[581] P, D: omit.

la las sam gzhan yang rung ste rgyu **gang zhig nus te** | thams cad kyi tshe rdzas su yod pa nyid [Db4] kyi [Pa5] phyir ro ||

de lta na lo rtsis pa rnams kyi rtsod pa skad du[582] zhes bya ba la | 'di nye bar mi dmigs so zhes slob dpon 'dus bzang zer ro || rnam grangs kyis 'gag[583] pa'i rigs rnams yod pa dang med par khas blangs [Pa6] pa'i phyir |[584] yod pa'o[585] 'das pa dang ma 'ongs pa skye ba[586] dang [Db5] 'jig pa'i chos can shes bya'i bdag nyid sngar skyes pa rnams dang lhan cig spyod pa 'bras bu'i bdag nyid ni |[587] med pa'o[588] da ltar byung ba'i bdag nyid |[589] rab tu sbyor ba [Pa7] la mngon par 'jug pa ni da ltar byung ba ste | 'das pa dang ma 'ongs pa ni de ltar ma yin no || ji[590] ltar [Db6] lo rtsis pa rnams kyi rtsod pa skad du ||[591] byung ba dang 'byung bar 'gyur ba yod pa'o[592] gal te shes bya'i[593] bdag nyid du 'dod [Pa8] na | lo rtsis pa rnams kyi rtsod pa med pa bden no || 'on te yang da ltar byung ba bzhin rang gi ngo bos shes bya'i bdag nyid du 'dod na | de lta [Db7] na thams cad kyi tshe yod pa'i phyir ji ltar lo rtsis pa rnams kyi rtsod [P286b1] par thal bar mi 'gyur |

---

[582] AKBh 301, 1-3: Vārṣagaṇyavādaś câivaṃ dyotito bhavati, "yad asty asty eva tat. yan nâsti nâsty eva tat. asato nâsti saṃbhavaḥ. sato nâsti vinâśa" iti.

[583] P: 'gag.

[584] P, D: omit.

[585] P, D: pa'o ||

[586] P, D: omit.

[587] P, D: omit.

[588] P, D: pa'o ||

[589] P, D: omit.

[590] P, D: de.

[591] P, D: omit "||". =NA 634a6-11: 「此亦非処置貶斥言。已滅未生約異門説、倶許通有及非有故。謂去来世色等諸法有有生滅所知法性及有前生俱行果性、而無現在能引果性。有引果用名為現在。過去未来無如是性。此豈同彼雨衆所説。」

[592] D: pa'o ||

[593] D: pa'i.

'o na da ltar du byed nus pa yin no[594] zhes bya ba ni las dang 'bras bu yod bzhin du'o || **yul gzhan du 'dren pa yin** no zhes bya ba ni ma 'ongs pa yul na mi gnas pas zhes [D149a1] bya ba'i bsam pa 'dis smras [Pb2] pa'o || **rtag par thal bar 'gyur ro** zhes bya ba ni de 'dren pa'i rkyen rnams rtag tu nye ba'i phyir ro || **gzugs can ma yin pa** de tshor ba la sogs pa **rnams la de ji ltar ste**[595] | 'dren zhes bya ba dang sbyar te | de rnams ni rtag tu [Pb3; Da2] yul na mi gnas pas dris pa yin no || 'bras bu'i **'dren pa** bya ba'i ming can[596] **gang yin pa de yang ma byung ba las byung ba yin te** | de ni sngar yod pa ma yin pa'i phyir ro || 'dir yang snga ma bzhin dpyad par bya ste | **gal** [Pb4] **te rang gi ngo bo'i khyad par zhig** ces bya ba la | da ltar [Da3] ba byed pa'i rang bzhin sngar da ltar byung bama yin pa da ltar byung bar byed pa yin pa de lta na las kyis nus pa grub pas | **ma byung ba las byung ba zhes bya ba grub po**[597] || [Pb5] de ltar de yang da ltar byung bar byas pa yin no || gal te sngar ma byung ba las phyis byung ba nyid dam | 'on te [Da4] sngar yod pa kho na'o zhe na | da ltar bar byas pas 'di la khyad par yod pa[598] ma yin pas las kyis nus [Pb6] pa med pa so na 'dug pa nyid[599] do ||

VI D 148a4-149b2; P 286b6-287a4.

ji ltar ming med pa'i ngo bo 'byung bar 'gyur zhe na | btags pa dang bcas pa dang btags pa med pa nyid kyis shin tutha dad pa'i phyir [Da5] med pa'i ngo bor 'gyur ba yin no || 'o na [Pb7] rgyu'i rkyen yod pa rnams la dngos

---

[594] AKBh 301, 3-5: vartamānīkaraṇe tarhi sāmarthyam. kim idaṃ vartamānīkaraṇaṃ nāma. deśāntarākarṣaṇaṃ cet. nityaṃ prasaktam. arūpiṇāṃ ca kathaṃ tat. yac ca tad ākarṣaṇaṃ tad abhūtvābhūtam. svabhāvaviśeṣaṇaṃ cet. siddham abhūtvābhavanam.

[595] AKBh P284b4; D243a4: lta bu.

[596] SA 476, 29: kriyāsaṃjñakaṃ. 但し、チベット語訳にはこの語句はない（P136a6-7, D120a7）。

[597] AKBh P284b5; D243a4: pa yin no.

[598] P: pas.

[599] この部分は意味不明。

por 'gyur ba ci zhe na | de ni snga na yod pa ma yin pa zhes[600] bya ste | gang bshad pa ci ltar med pa'i khyad par yongs su brtag ce na | 'di dngos po med pa rgyu dang bcas pa dang 'di [Pb8] rgyu med [Da6] pa can zhes de ltar bshad do || kha cig med pa'i rgyu yongs su rtogs par byed pa ma yin no || 'o na dngos po rnams kho na'i rgyu khas len pa ci zhe na | de ni sngar byung ba ma yin pa rnams kyi ste | de yang [P287a1] thams cad la thams cad ma yin no || 'o na ci zhe na 'dir yod [Da7] pa gang yin pa de nyid gzhan ma yin te | dper na bya ba snga na med pa'i rkyen mi 'dod pa bzhin no || 'o na bya ba nyid kyi ci zhe na | [Pa2] bya ba snga na med pa la rkyen rnams kyis bya ba mi byed pas dus dang bya ba snga na med pa mi 'dod do || de'i tshe dus dang bya ba'i rnam par bzhag[601] pa [D149b1] 'di brjod par mi bya ste | rdzas bzhin[602] du bya ba yang rtag pa'i phyir [Pa3] ro ||

gal te **skye mched bcu gnyis**[603] yod kyi | 'das pa dang ma'ongs pa med na | yid kyi skye mched 'das par ji ltar gzhag ce na smras pa | rnam par shes pa da ltar ba kho na rnam par shes pa gzhan [Pa4] gyi rten [Db2] gyi dngos por rnam par gnas kyi 'das pa ni ma yin pas skyon 'di med do || **yang na dus gsum ste**[604] | gal te dus gsum yod do zhes brjod na | 'o na ni 'das pa dang ma 'ongs pa grub po zhe na | de'i phyir **ji** [Pa5] **ltar yod pa de bzhin du bshad zin to** zhes bya ba smos te | [Db3] sngon byung ba gang yin pa de ni 'das pa yin no || rgyu yod na 'byung bar 'gyur ba gang yin pa de ni ma 'ongs pa yin no || byung nas ma zhig pa gang yin pa de ni [Pa5] da ltar ba yin no zhes bya bar ro ||

ji ltar na des der ldan pa yin[605] zhes bya ba ni **ji ltar** 'das pa dang ma 'ongs pa'i nyon [Db4] mongs pa'i nyon mongs pa **des sam** 'das pa dang ma

---

[600] D: las.

[601] D: gzhag.

[602] P: gzhin.

[603] AKBh 301, 6-8: evaṃ tu sādhur bhavati, yathā sūtre sarvam astîty uktaṃ tathā vadati. kathaṃ ca sūtre sarvam astîty uktam. sarvam astîti brāhmaṇa yāvad eva dvādaśâyatanānîti.

[604] AKBh 301, 8: adhvatrayaṃ vā. yathā tu tad asti tathôktam.

[605] AKBh 301, 8-9: athâsaty atītānāgate kathaṃ tena tasmin vā saṃyukto bhavati.

'ongs pa'i dngos por **der ldan pa yin** [Pa7] zhes bya ba yin no || **de las skyes pa de'i rgyu'i phra rgyas yod pa'i phyir**[606] zhes bya ba rgyas par 'byung bas | 'di skad bshad par 'gyur te | 'das pa'i nyon mongs pa **las skyes pa'i** [Db5] **phra rgyas yod pa'i phyir** 'das [Pa8] pa'i nyon mongs pa **dang ldan no** || ma 'ongs pa'i nyon mongs pa'i **rgyu'i phra rgyas yod pa'i phyir** ma 'ongs pa **dang ldan no** || 'das pa dang ma 'ongs pa'i dngos po **la dmigs pa'i nyon mongs pa'i phra rgyas yod** [P287b1] **pa'i phyir** de'i **dngos po dang ldan no** zhes bya'o ||

[Db6] slob dpon 'dus bzang na re | don 'di ni gsog ste 'das pa'i nyon mongs pa dang phra rgyas zhes bya ba'i chos 'ga' yang rgyud las skye ba med do || chos gzhan gyis phra [Pb2] rgyas skye ba ni yod do ||[607]

'dod pa yang ma yin no || 'o na ci zhe na | 'gag bzhin pa'i nyon [Db7] mongs pa dang ma 'ongs pa na | de skye ba nyon mongs pa skye ba dang mthun pa'i rgyud kyi ngo bo las rgyud de la skye ba dang rjes su [Pb3] mthun pa ni phra rgyas zhes bya'o || de yang 'das pa dang ma 'ongs pa'i nyon mongs pa dag gi 'bras bu dang rgyu yin no || de la spangs pas phra rgyas bcom [D150a1] pa ma yin pa ni 'das pa dang ma 'ongs pa'i nyon mongs pa [Pb4] dag dang ldan zhes bya ste | 'bras bu yod pa'i phyir dang rgyu yod pa'i phyir ro || de spangs pa ni ma yin no ||

de'i phyir **chos nyid dag ni zab pa yin**[608] zhes smos te | śrāntottaram ata prāśanakābā[609] | chos [Da2] rnams [Pb5] kyi rang bzhin ni chos nyid do || skabs 'dir slob dpon 'dus bzang gis[610] 'das pa dang ma 'ongs pa gtan la dbab pa mang du bshad mod kyi | 'dir ni gzhung mangs pa'i 'jigs pas tshig [Pb6]

---

[606] AKBh 301, 9-10: tajjataddhetvanuśayabhāvāt kleśena tadālambanakleśānuśayabhāvād vastuni saṃyukto bhavati.

[607] NA 634b17-19: 「如是一切皆無義言。以相続中過去煩悩所生現在煩悩随眠理実都無如前已弁*、如何由彼可得説言成就過去能繫煩悩。」 * NA 596c22~などに見られる。

[608] AK V 27d: gambhīrā khalu dharmatā.

[609] チベット語の添え書き(snyag lung rgya dper mut) があるも、この部分は意味不明。

[610] D: gis |

so so la bshad pa ni ma byas so ‖ don gyi[611] [Da3] sgo nas ni dgag pa thams cad rtogs par bya'o ‖

gzugs skye la[612] **gzugs 'gag go**[613] zhes bya ba'i don ni de nyid da ltar ba gyur nas 'das pa nyid du 'gyur ro zhes bya'o ‖ [Pb7] skye ba la mngon du phyogs pa'i phyir **ma 'ongs pa skye la**[614] | 'gag pa la mngon du phyogs pa'i **da ltar** [Da4] **gyi 'gag go** ‖ **dus kyang skye ste**[615] zhes bya ba ni **de dag nyid dus gtam gzhi**[616] **dang**[617] zhes 'byung ba'i phyir ro ‖ **dus las** [Pb8] **kyang ste**[618] zhes bya ba ni **skye** zhes bya'o ‖ **skad cig ma du ma yin pa'i phyir** skad cig go ‖

yod[619] pa'i tshig gi rim pa ‖[620] **gang skye ba de 'gag go** zhes bshad de dpe [Da5] smos te | **gzugs skye la**[621] **gzugs 'gag go** ‖ rdzas gzhan [P288a1]

---

[611] P: gyis.

[612] D: 'o.

[613] AKBh 301, 13-14: asti paryāyo yad utpadyate tan nirudhyate. rūpam utpadyate rūpaṃ nirudhyate.

[614] AKBh 301, 14: asti paryāyo 'nyad utpadyate 'nyan nirudhyate. anāgatam utpadyate varttamānaṃ nirudhyate.

[615] AKBh 301, 15: adhvâpy utpadyate. utpadyamānasyâdhvasaṃgr̥hītatvāt.

[616] P: bzhi.

[617] AK I 7c: ta evâdhvā kathāvastu.

[618] AKBh 301, 15-16: adhvano 'py utpadyate. anekakṣaṇikatvād anāgatasyâdhvanaḥ.

[619] “yod” 以下のこの段落は、SA とほぼ一致する。SA 477, 13-23: （...asti paryāya ityādi.） asti vacanakramaḥ. yad utpadyate tan nirudhyate ity uktvā dr̥ṣṭāṃtam āha. rūpam utpadyate rūpaṃ nirudhyuate dravyānanyatvāt. anyad utpadyate 'nyan nirudhyate. anāgatam utpadyate 'nyadutpādābhimukhatvāt. vartamānaṃ; nirudhyate 'nyannirodhābhimukhatvāt. adhvā 'py utpdyate utpadyamānasya dharmasyâdhvasaṃgr̥hītatvād adhvasvabhāvatvād ity arthaḥ. "ta evâdhvā kathāvastv" iti lakṣaṇāt. adhvano 'py upādānarūpād utpadyate dharmaḥ. kasmād ity āha. anekakṣaṇikatvād anāgatasyâdhvana iti. yasmād anekeṣāṃ kṣaṇānām anāgatānāṃ rāśirūpāṇāṃ kaścid eva kṣaṇa utpadyate. ato 'dhvano 'py utpadyata ity ucyate. P136b7-137a3; D120b6-121a2: （...rnam grangs kyang yod ces bya ba la sogs pa smos te） go rims kyi tshad yod do ‖ gang skyes pa de 'gags shes smras nas dpe bstan pa'i phyir gzugs skye la gzugs 'gag go zhes bya ba smos te. rdzas gzhan ni ma yin pa'i phyir ro ‖ gzhan skye la gzhan 'gag ste skye ba la mngon du phyogs pa'i phyir gzhan ma 'ongs pa skye la 'gag pa la mngon du phyogs pa'i phyir gzhan da ltar gyi 'gag go ‖ dus kyang skye ste | chos skye ba dus kyis bsdus pa'i phyir ro ‖ dus kyi ngo bo nyid yin pa'i phyir ro zhes bya ba'i tha tshig ste | de dag nyid dus gtam gzhi dang zhes mtshan nyid 'byung ba'i phyir ro ‖ dus las kyang chos skye'o ‖ ci'i phyir zhe na | ma 'ongs pa'i dus skad cig ma du ma yin pa'i phyir

ma yin pa'i phyir ||[622] **gzhan skye'o gzhan 'gag go** zhes pa lta bu'o || gzhan skye ba la mngon du phyogs pa'i phyir **ma 'ongs pa skye'o** || gzhan 'gag pa la mngon du phyogs pa'i phyir **da ltar byung ba** [Pa2] **'gag go** || [Da6] **dus kyang skye ste** zhes bya ba **dus ni skye ba'i** chos kyi[623] **bsdus pa'i phyir** te | dus kyi rang bzhin las so zhes bya ba'i don to || **de dag nyid dus gtam gzhi dang**[624] zhes pa'i mtshan nyid las ||[625] **dus las**[626] **kyang** [Pa3] ste | 'byung khungs kyi ngo bo las chos **skye ba'o** ||[627] ci'i phyir zhe na |[628] **ma 'ongs** [Da7] **pa'i dus skad cig ma du ma yin pa'i phyir ro** zhes bya ba smos te | gang gi phyir ma 'ongs pa'i skad cig ma du ma spungs pa'i rang bzhin [Pa4] rnams las skad cig ma 'ga' zhig skye ba de'phyir dus las kyang skye'o zhes brjod do ||

zhar la[629] **'ongs pa**[630] zhes bya ba ni **lhag ma** [D150b1] **kun gyi kun dang ldan**[631] zhes bya ba 'di'i **zhar la**[632] **'ongs** pa yin no ||

（TA 終）

---

ro zhes bya ba smos te| gang gi phyir ma 'ongs pa'i skad cig ma'i tshogs kyi ngo bo du ma zhig las skad cig ma 'ga' zhig skye ba de'i phyir dus las kyang skye'o zhes bya'o ||]

[620] P, D: omit.

[621] P, D: bo.

[622] P, D: omit.

[623] D: kyis.

[624] AK I 7c: ta evâdhvā kathāvastu.

[625] P, D: omit.

[626] P, D: omit.

[627] P: omit "||".この句は SA のチベット語訳にない。

[628] D: omit.

[629] D: las.

[630] AKBh 301, 16: gatam etat yat prasaṅgenâgatam.

[631] AK V 24c$_2$d: śeṣais tu sarvaiḥ sarvatra saṃyutaḥ.

[632] D: las.

第４章　ADV『アビダルマ灯論』（作者不詳）

ADV 256, 8-282, 8 ad AD k. 299-324

第１節　和訳

（１）構成

I　序（256, 8-11）
I－1　導入
I－2　仏教の四種の存在論（256,8-259,2）
II　説一切有部と四大論師の異説（259,3-259,9）
II－1　四大論師の異説（259,10-260,13）
II－1－1　第一説［ダルマトラータ（法救）説］とその批判
II－1－2　第二説［ゴーシャカ（妙音）説］とその批判
II－1－3　第三説［ヴァスミトラ（世友）説］
II－1－4　第四説［ブッダデーヴァ（覚天）説］とその批判
II－2　四異説中の第三説が有部の正統説（260,14-261,1）
III　作用説（261,1-13）
IV　存在の四種の特徴（261,13-263,6）
V　教証・理証（263,7-264,2）
V－1　第一教証の正当性（264,3-268,21）
V－1－1　「“asti”は不変化詞」の否定
V－1－2　種子説の否定
V－1－3　経の意図は『ヴェーダ』批判・サーンキヤ批判であること
V－1－4　「本無今有」の意味
V－1－4－1　作用の有無であること
V－1－4－2　サーンキヤ批判であること
V－1－4－3　別の場所から来るのでないこと
V－2　第一理証・第二教証の正当性（268,22-277,24）

V－2－1　第一理証（認識は実在を対象とする）
V－2－2　第二教証（非存在を対象とする認識はない）
V－2－3　敷衍的論証
V－2－3－1　兎の角
V－2－3－2　第十三処
V－2－3－3　五蘊と我
V－2－3－4　認識の対象は否定辞 “na” によって否定されない
V－2－3－5　想起の対象
V－2－3－6　歓喜・恐怖等の想起
V－2－3－7　原因をもつもの
V－2－3－8　存在の六種の変化（文法学の援用）
V－2－3－9　三種の行為対象（文法学の援用）
V－2－3－10　サーンキヤ派の因中有果論の否定
V－2－3－11　ヴァイシェーシカ派の因中無果論の否定
V－2－3－12　譬喩師批判
V－2－3－13　大乗批判
V－3　第二理証の正当性（278,1-279,6）
VI　作用説に関する世親の批判への応答（279,7-282,8）

（2）和訳

I　序（256, 8-11）

I－1　導入

[256,8] まず、［以下の］ことが理に適う。因と縁に基づいて縁起したもの[1]は、各自で知られ得るものであるから、真実として存在し、それを対象とした貪等は実体として存在すると既に答えられた[2]こと、また、［人（プドガラ）は］過去・未来のものに対して［過去・未来・現在の］三時の随眠と結びついていると言われたこと、これらは早計でただ誇示するだけのものである［から、以下に過・未・現の三時のものの実在について詳論しよう］。

I－2　仏教の四種の存在論[3]（256, 8-259, 2）

[256,11] ところで、誰がこの過去・未来等のものを実在と主張するのかと、アビダルマ論師たち［は問う］。[257] この論説に関してまさに四種の論者がいる。四種とは誰々か。それを示して［以下に］言う。

> ［過去・未来・現在の三時の］**すべてのものがある**［と説く論者］、**一部のものがある**［と説く論者］、**すべてのものがないと**［説く］**他の**［論者］、**無記のものがあると説く論者、以上四種の論者が伝承されている。**‖ 299 ‖

[257,4] そのうち、説一切有部は、三時［の有為］と恒常なる三［無為］とがあると［主張する］。分別説部と譬喩師とは、一部のもの［即ち］現

---

[1] ADV 298, 8: vastuhetupratyayāt を vastu hetupratyayāt と訂正して読む。

[2] 三友 2007, 582, n.136 参照。

[3] この議論は『倶舎論』及び諸註釈には見られない。但し、NA 630c9-14 には「説一切有宗」「増益論者」（＝犢子部、正量部等のプドガラ論者）「分別論者」（＝分別説部）「刹那滅論者」（＝経量部）「仮有論者」「都無論者」等の記述がある。cf. 吉元 1982: 85 以下参照。

在時と呼ばれるものがあると［主張する］[4]。不整合な [258] 空性を説く論者であるヴァイトゥリカ[5]は、すべてのものがないと［主張する］。無記のものを説く論者であるプドガラ論者[6]は、［三時の有為と三無為以外に］プドガラもあると［主張する］。

[258,3] また、これについて

> **これらのうち第一の論者**（＝説一切有部）**は正当性をもつが、他**［の論者］**達は論理に関して高慢であり、**［正しい］**論理と聖典とから逸脱する者である。**‖300‖

[258,6] 実にこの第一の論者［即ち］説一切有部と呼ばれる者は、論理と聖典とに適うことを説くから、正しい論者である。その他の論者達［即ち］譬喩師・ヴァイトゥリカ・プドガラ論者[7]は、論理と聖典と［に適う

---

[4] ここでは説一切有部等五学派が出るが、分別説部と譬喩師とは現在のものの実在を説くという点で一種とされるから、上には「四種」と言われているのであろう。但し、分別説部は「現在のものと結果を与えていない過去の業とは存在する」と言う。cf. AKBh 296, 4-6. また、現在のものの実在を説くという譬喩師とは、ここでは『倶舎論』における経量部に相当するのであろう。

[5] この語（vaitulika）は、本来“vaipulya”（方広）が正しい語形であるかもしれないが、大乗を表わすのに”vaitulika”等が、使われるようである。吉元 1982: 289-301 等参照。アビダルマから大乗の唯識学派に転向したとされる世親を指すこともある。cf. AD 33, 7-10; 282, 1-2. 吉元 1982: 94, 291 以下参照.。

なお、“ayogaśūnyatā”は ADV 33, 10 にも出る。その箇所は「眼が見る」のか、「眼識が見る」のかという論争の最後の部分であり、『倶舎論』では経量部の発言として出る内容が世親（Kośakāra の発言として引用されている。AD 33, 9-10:「［世親は］アビダルマに対する迷妄という烙印を押すことによって、自らも［迷妄の］烙印を押されている。［つまり、因果関係と］不整合な空性［という崖下］に落ちようとしていることが［世親の前言によって示されたのである」（...abhidharmasaṃmohāṅkasthānenâtmâpy aṅkito bhavaty ayogaśūnyatāprapātābhimukhyatvam pradarśitam iti ‖）. なお、Jaini は Introduction（ADV 124)で、”ayoga”を「因果関係の否定」を意味するとしている。今はそれを採った。

[6] 犢子部（Vātsīputrīya)、正量部（Sammitīya)を指すのであろう。周知のとおり、『倶舎論』の「破我品」に出るのは犢子部である。また、「無記のもの」とはプドガラを指し、「不可説」（avaktavya)とも言われる。つまり、犢子部は有為即ち三時のもの、三無為、及び不可説（五蘊との同異を説き得ないもの）としてのプドガラの実在（五法蔵）を主張するという。cf. 櫻部 1959 参照。

[7] ここでは分別説部が欠落している。

こと］を説くものではなく、論理に関して高慢である。誤謬性等の理由で、これらは［各々］ローカーヤタ派（順世外道）、[259] 虚無論者[8]、ジャイナ教空衣派[9] の側に含めてよいものである。以上のようなことから、［以下に］すべてに亘って一切を説明しよう。

II　説一切有部・四大論師の異説（259,3-259,6）[10]

[259,3] ところで、この説一切有部のどの［論者］が正当性をもつのか。そのことに答えて言う。実に、この［説一切有部の］論者は、

> **有為としての[11]三時のものと恒常な三**［無為］**と**［の実在］**を認めるから、説一切有部と言われるのである。**［この］**第一**［の論者＝説一切有部］**は四種である。** ‖ 301 ‖

II－1　四大論師の異説（259, 7-9）

[259,7] 実に、この説一切有部は四種に区別されている。どのようにかがまず述べられる。

---

[8] 『中論』等では"nāstika"で出る。

[9] ふつう"digambara"で出る。ここでは、プドガラを五蘊と同じとも異なるとも言えない、あるいは、プドガラを実在とも非実在とも言えないとする犢子部と、「瓶がある」とも「瓶がない」とも言えないとするジャイナ教空衣派の相対説（syādvāda とを比定しているのであろう。cf. 櫻部 1959, 55 以下・櫻部 1972, 471 以下参照。村上 1991, 271・274 以下参照。

[10] 『倶舎論』では、先に教証・理証（II）が、その後に四大論師説（III）・作用説批判（IV）が来るが、ここでは逆に四大論師説（II）と作用説（III）が先、教証・理証（V）が後となっている。

[11] "kr̥tyatas"は「作用に基づいて［区別される］」という意味とも取れるが、「作られるべきもの（=有為）として」と読むほうが、"dhruvatraya"との対比が明確になるように思われる。三友（2007: 585. cf. n.150）は、「作用」として読んでおられる。

二者は［各々］様態・特徴の違いによるとする者である。他は位態の違いによるとする者、また別の者は見方の違いによるとする者である。このうち、第三の者が合理を論じる者である。
|| 302 ||

II－1－1　第一説［ダルマトラータ（法救）説］とその批判

[259,10] そのなかで、様態の違いによるとする者は大徳法救である。彼は実に次のように述べた。「存在要素は［三］時に起こるとき、［それの］未来等の様態だけが変化する。実体の変化はない。例えば、金が腕輪等の別の形に工作されると前の形を失うが、金［であること］を失うことはないように。また、牛乳がヨーグルトに変化するとき、［元の］味・効力・熟成度を失うが、色を［失わない］ように」と。以上［の説］はヴァールシャガニヤ（雨衆外道）の主張に沿うものであるから、排除されると見るべきである[12]。なぜなら、これ（法救説）は、存続する実体が生起という特徴や集合という性質をもちながら、別々の仕方で存続するというような転変を認めているからである[13]。

II－1－2　第二説［ゴーシャカ（妙音）説］とその批判

[12]『倶舎論』では、これはサーンキヤ派の説として批判されている。cf. AKBh 297, 4. ヴァールシャガニヤ（サーンキヤ派の古師）は理証２（業の結果があるから）を批判する箇所に出る（301, 2-3)。なお、転変説はヨーガ派で詳論される。村上 1991, 70 以下参照。

[13] 衆賢はこの法救説とサーンキヤの転変説とが合致しないことを述べ、むしろ法救説は世友説に近いと言う。cf. NA 631b 7-10. つまり、サーンキヤ派は、変化しない有法に対して属性たる一つの法が顕われると別の法が隠れる、即ち、様々な属性たる法の顕隠を転変と言う（村上 1991, 70 以下参照）のに対して、衆賢によれば、法救は本性（体相）不変の法があるいは顕われあるいは隠れるのではなく、つまり、その状態または状況（性類）が変化していると説く。

[259,17] 特徴の違いによるとする大徳妙音は、これについて、彼は「存在要素は過去の特徴と結びつくとき、未来・現在の特徴と離れているわけではない。未来・現在［の各存在要素について］も同様に［考えるべきである］。例えば、男が [260] 一人の女を愛しているとき、他［の女］を愛していないわけではないように」と見る。彼［の説］にも時間の混乱が起こる。一つの存在要素に三つの特徴が認められるからである。彼もまた、傲慢[14]の網に入れるべきである。

II－1－3　第三説［ヴァスミトラ（世友）説］

[260,3] 位態の違いによるとする者は大徳世友である。実に、彼は言った。「存在要素は［三］時に起こるとき、それぞれの位態に達してそれぞれ（＝未来・現在・過去）と呼ばれる。［存在要素は］個別の位態を変えるが、本性を失うことがないからである。例えば、配置玉が一の位に置かれると一と言われ、同一の［玉］が十の位に［置かれると］十、百の位に［置かれると］百、千の位に［置かれると］千と［言われる］ように」と。

II－1－4　第四説［ブッダデーヴァ（覚天）説］とその批判

[260,7] 見方の違いによるとする者は大徳覚天である。彼は言った。「存在要素は［三］時に起こるとき、前後に相対してそれぞれ［未来・現在・過去］と呼ばれる。これ（存在要素）の状態の違いあるいは実体の違いは全くない。例えば、一人の女がその前後に相対して母と呼ばれたり、娘と［呼ばれたりする］ように、存在要素は未来・現在から見て過去と呼ばれるのである。それぞれ別の二つから見て同様に［考えるべきである］」と。［この説も誤りである。なぜなら、］同一の過去時［の存在要素の場合、それ］の前後の二瞬間を見て、［過去のそれら三瞬間が］三時であるということになってしまうからである。

---

[14] ADV 260, 2: puruṣakārāṇi（?）とあるが、”puruṣakāra-“と訂正して読む。

II－2　四異説中の第三説が有部の正統説（260, 14-261, 1）

[260,14] 以上の四種の説一切有部のうち、第三の上座世友は、［サーンキヤ派の］二十五原理を否定し、原子の集合体［としての五境を実在としない］説を揺るがす人である[15]。従って、彼こそ論理と聖典とに適うから、信頼できる人であり、権威者であると判断されるべきである。

[260,17] また、大徳覚天［の説］は外道の立場にあるから採用されないのである。

[260,18] また、大徳妙音［の説］は時間の混乱を説くから、それぞれの時間に三時の特徴が備わることになる。

[261] 従って、第三［の世友の説］だけが誤りないものである。

III　作用説（261, 1-13）

理由は［以下の通りである］。

> ［世友は］**作用によって三時の確立があると言う。**［即ち、存在要素は］**それ**（作用）**をするとき現在時のものであり、**［作用］**し**［終え］**たとき過去であり、まだ**［作用］**していないとき別**（＝未来）**である。**‖303‖

[261,4] 三時即ち過去・未来・現在の存在要素は本性をもって成立していると世尊によって説かれたが、この師（世友）はそれら（存在要素）の位置の違いを作用[16]［の有無］によって認める。［つまり、師は、存在要

---

[15] この "paramāṇusaṃcayavāda-" とは、例えば十八界中の五境について、有部は原子の集合体としてのそれらを実在とするのに対して、原子の実在のみを認めその集合体としての五境の実在を認めなかった「上座」の説であるのかもしれない。加藤 1989: 176-180 参照。

[16] 直前の偈では伝統的な "kāritra" を用い、ここでは"kriyā"を用い、直後にはそれを "śakti" としている。それは、"kāritra" をおそらくは最初に衆賢が "śakti" と

素は］本性を失わず、原因の集合体が近接することによってその力［即ち作用］が呼び覚まされる、とするのである。実に、有為［の存在要素］は作用をもつとき現在と言われる。まさにそれが作用を失ったとき過去、まだ作用を得ないとき未来と［言われる］。またそのようなとき、三時の［それぞれの］ものは同一基体性をもつということ、及び、同一の基盤にありながら機能（＝作用）によって区別されるべきであるということが妥当である。そうでないなら、［即ち］同一の実体が［この］類であると知る徴表がないとき［換言すれば］同一基体性がないとき、［その実体の］三時との結びつきは存在しないことになってしまうのである。

[261,10] これに対して反論者[17]は言う、「そうではない。過去・未来のものは仮象として表現されることが成立するからである」と。［答論：］そうではない。［過去・未来のものが］真実の実体として存在しないなら、基盤をもたないもの［ということになるが、そのようなもの］が仮象として表現されることは妥当でないからである[18]。［反論：］「その［過去・未来のものが仮象だという］表現は、現在のものに依拠している」と言うなら、［答論：］そうではない。現在のものであること自体を確立するための力という作用が［認められ］ないなら、［現在のものが］存在することはありえないからであり、また、存在するものと存在しないものとの間に［一方が他方に］依拠して［一方が存在し他方は存在しない等の］関係はないからである[19]。

したことと関係しているのであろう。後代の TS & TSP でも”kriyā” が用いられている。なお、衆賢の ”śakti” から後代の ”arthakriyā” への発展に関する概観は、秋本 2002（本書下巻に掲載予定）参照。

[17] これは現在のもののみを実在とする経量部（または本テキストでは譬喩師）であろう。

[18] 有部では仮象としての存在はすべて実在に依拠していると考えているからであろう。cf. NA 621c27-622a2 等（『自我と無我』所収の櫻部前掲論文 p.468 参照）。

[19] この議論は『倶舎論』にはない。但し、これはは NA 624c5-18 の議論と重なるのではないかと思われる。

IV　存在の四種の特徴[20]（261,13-263,6）

[261,13]［そこで］今まさに過去等のものの存在の特徴が示される。

> [262]［存在の］**特徴が認識によって考察されるが、それは四種であると知るべきである。**［即ち］**真実（勝義）**としての［存在］、**仮象**（世俗）としての［存在］、**両様**としての［存在］、**相対**としての［存在］**である。**‖304‖

[262,3] 実に、本性としてそれ自体が成立した存在（arthavastu）の特徴は、その形象を転倒して捉えることなく存在要素を観察することによって判別されるが、それが存在するもの［即ち］実体と呼ばれる。また、その存在するものは分析されて四種である[21]。

[263] 真実（勝義）としては常に本性として把握され、どんなときも自体を捨てず、勝れた者の知とそれを表わす言葉［との関係、または、］対象と対象知との非人為的な関係[22]、それが真実在（勝義有）であると言われる。

---

[20]『倶舎論』第六章（AK VI 4 以下）に傍論として論じられている。櫻部・小谷 1999: 61 以下参照。三友 2007: n.156.

[21] 四種の在り方があるが、すべて実体が元となっているということであろう。

[22] ADV268, 25; 271, 1 にある「知るものと知られるもの、表示するもの（言葉）と表示されるものとの関係はまさに作られたものではない。」と関係する。特にADV 268, 25 のこの文の直前にある説明* から、言葉とその表示対象または対象知とそれを表わす言葉との関係とはブッダ（又はそれに類する勝れた者）の教説について言われているのであって、世俗有に関する言葉とその表示対象との関係（言語協約）を想定しているのではないと考えられる。また、対象と対象知との関係も同様である。

*「まさにそれ（過去・未来のもの）を形象とする認識によって対象の自［相（svalakṣaṇa）］と共相（sāmānyalakṣaṇa）とが判別され［るような対象であり］、ブッダによって説かれた名身（単語の集まり）と法身（教説の集まり）とによって示される［対象］は真実（＝勝義）として存在するのである。［例えば］どのようにしてか。現在の眼と色形（＝色）等のように、である。［即ち、眼と色形等のように］知るものと知られるもの、［それを］表示するものと表示されるものとの関係はまさに作られたものではないと、勝れた者たちは理解する。」（ADV 268 22-24）

[263,3] しかるに、多くの真実在の後のものとしてあり、世間的表現の対象であり、仮設の形で示されるもの、それが仮象的存在（世俗有）である。例えば、瓶・布・森・プドガラ等のように。

[263,5]［また、］あるものは、［勝義・世俗の］両様に［存在するものである］。例えば、地等である[23]。［また、］あるものは、存在のあり方が相対してあるものである。例えば、父と息子・師と弟子・作用主体と作用等である[24]。

V　教証・理証（263,7-264,2）

[263,7] また、この過去・未来の位態にある諸存在要素は実在すると言われたことは経典と論理とによって説かれていることではないから、ただ［恣意的に］説いているに過ぎない［という反論があろう］。従って、経

なお、この箇所は、榎本 1988: 416-417 では、”-viṣayi-”の前に”viṣaya”が［　］に補われている。また、三友 2007: 589 にも、-viṣayi-の直前に viṣaya が見える。いずれも写本に基づくと思われるので、今はこれを踏まえて読んだ。

Jaini 本（ADV）のまま読めば、「勝れた知を表わす［言葉］と非人為的な対象知との関係」となろう。

また、以下に、別の三訳を参考までに挙げておく。傍点部分がその複合語の訳に当たると考えられる。

吉元 1982: 129-130「勝義有とは、勝義として、常に自性を意味するものは、決して自らの本性を捨てることなく、客体主体という相関々係をもつものである。」

那須 2004: 61「勝義的立場から、常に固有の本質を有するものとして、把握されるものは、決して自己の本体を捨てない。非人為的な対象を有する限定された知識や名称と、結合しているそれが、勝義的な存在するものと言われる。」

三友 2007: 589「勝義〔諦〕によって、常に自性としてとらえられたものは、決して自己の本体を捨てない。勝慧をもつものが人為的でない名前〔によって示す〕対象と主観との関係が、それが勝義有であるといわれる。」

[23] 地等がなぜ両様であるのかは説明されないが、おそらく色法が四大所造であるという場合の四大種としての地・水・火・風は真実在であり、世間での呼び名としての地や水等を仮象と考えているのであろう。cf. AK I 13; VI 4. この「両様」の分類は AD&ADV の作者独自のものであるのかもしれない。

[24] これは NA 621c25-27 に「有余」の説として挙げられる「相対有」に相当するのであろう。衆賢はこれを前の二諦に含まれると言う。

典と論理に沿ってこのことが確立されるべきであるから、以下のことが主張される。

> [264] **仏説に基づいて、過去・未来のものは、現在のものと同様にして存在する。また、認識は**［必ず］**対象をもつから、それ**（過去・未来のもの）**は、現在のものと同様にして存在する。**
> ‖ 305 ‖

V－1　第一教証の正当性（264,3-268,21）

V－1－1　「"asti"は不変化詞」の否定

[264,3] 実に、世尊によって、「比丘らよ、過去の物質[25]はある。もし過去の物質がなかったなら、これら衆生は、過去の物質に執着しなかったであろう。なぜなら、過去の物質があるから、これら衆生は過去の物質に執着するからである。」[26]と説かれている。未来のものと現在のものも同様であると説かれるべきである。「これ（asti）は、［動詞の］活用形に似た不変化詞である」と言うなら、そうではない。現在のものに関してもそうなってしまうからである[27]。また、先の、動作を表す語（asti）は、後の、動作を表す語（atītam）と同一対象指示の関係をもつからである[28]。

V－1－2　種子説の否定

[265] また、世尊によって、「過去・未来の物質は無常である、現在の［物質］についても［無常と言うほかに］何をか言わんや、このように

---

[25] "rūpa" は「物質的存在」と訳す方がより良いと思われるが、紙面の都合等によりここでは「物質」と訳す。

[26] ADV 264, n.1 は MN sutta109; 132; 133 を挙げる。本庄 2014: 671-672 [5016] 参照。

[27] "asti" が不変化詞であるなら、現在のものも「あった」または「あるだろう」という意味にもなってしまうということ。cf. AKBh 299, 1-8（第 1 章第 1 節 V-1-1）参照。

[28] "atītam"（<ati+√i）は動詞から派生した語の主格で、"asti" は主格に呼応した 3 人称単数現在形の動詞であり、この二つの語は同一の対象を指しているということ。よって、「過ぎ去ったものはある（実在する）」という意味を形成している、ということになろう。

見る声聞の聖弟子は、過去の物質に無関心となり、未来の物質を期待することなく、現在の物質を断念し離貪し滅尽することへと向かうのである。もし過去の物質がなかったなら、声聞の聖弟子は過去の物質に無関心とはならないであろう。過去の物質があるから、声聞の聖弟子は過去の物質に無関心となるのである」[29]云々と説かれた。

[265,7] 同様に、「舎利弗よ、行為は過ぎ去り、衰え、滅び、消え、変化して［もなお］存在する。もしその行為が存在しなかったら、舎利弗よ、この世の或る者がそ［の行為］を因とし、そ［の行為］を縁として、死んで悪趣に堕ちて、身体を離れて地獄に達することはないであろう。」[30]云々と説かれた。

[265,9] もし「そ［の行為］によって置かれた心の [266] 薫習を意図（密意）して説かれているから誤りはない」と［反論する］なら、そうではない。すでに答は述べられたからである。実に、この主張はすでに答えられた[31]。あなたは、ゴマ擂り器のように［ぐるぐる回して同じ議論を］繰り返すのか。また、薫習と薫習した心とには［各々別のそれ］自体の力による作用があるとは言えないからである。十分に香りの滲み込んだ油と同様に［両者を分けることはできないからである］。また、［両者が］別のものか・別のものでないか等に［ついて検討する際に］後で述べるような誤りがあるからである。

V－1－3　経の意図は『ヴェーダ』批判・サーンキヤ批判であること

---

[29] ADV 265, n.1 は、SN IV 5; 97 を挙げる。本庄 2014: 671-672 [5016]参照。

[30] この過去の業を説く経典を根拠としているが、これを第一教証その二としておく。『倶舎論』の第二理証は、この業（行為とその結果）を根拠とするが、結局、この第一教証その二と連動している。その点では、第一教証と第二理証、第二教証と第一理証とは密接に連関していると言える。

なお、経については、本庄 2014: 673-676 [5018]参照。

[31] Jaini は、経量部の「この主張」について ADV 266, n.2 で AK II 55 の註釈（AKBh 90, 20-94, 15）の中に見える有部と経量部との長い議論に言及しており、そこに見られる経量部の「種子」説（AKBh 92, 25-93, 4）に対する批判が ADV の第 2 章にあった可能性を推測しているが、ADV 第 2 章は欠落が多いため残念ながら不明であるとも言う。

[266,5] 『勝義空性経』に基づいて［過去・未来のものは］存在しないと言うならば、そうではない。その意味はよく知られているからである。また、そ［の経］に基づいてこそ、未来のもの等が存在することが成立するからである。

これに対して次の［反論］があろう。「『勝義空性経』で、世尊によって、[267] 未来のもの等が存在しないことが明らかに示されたのである。なぜなら、そ［の経］で、「眼は生じるときどこからもやって来ない。滅するときどこにも集まっていかない。」[32]云々と説かれているからである［と］。それは違う。なぜか。［世親は］この意味がよくわかっていないからである。また、こ［の経］に基づいてこそ、未来のもの等が存在することが成立するからである。

[267,6] まず、経の意味は以下の通りである。「眼は生じるときどこからもやって来ない。滅するときどこにも集まっていかない」と言われたことは、ヴェーダに説かれた説明の定式を否定するためであり、サーンキヤ派の見解を除外するためである。

[267,9] 実に、ヴェーダには、「生じてくるものは五つ[33]である。［即ち］眼は太陽からやって来て、再びそ［の太陽］へ帰る、耳は空へ［帰る］、鼻は地へ［帰る］、舌は水へ［帰る］。身は風へ［帰る］。意はソーマ液へ［帰る］、という意味である。」と説かれている。それを否定するために、世尊は、「眼は生じてくるとき、どこからもやって来ない」云々と説かれたのである。

---

[32] この経は世親が有部批判として持ち出したものであるが、世親以後の有部批判に際してはこの経の「本無今有」が主たる根拠として用いられることになる。ADV 267, n.1 は、Vm（XIX23, XX96）を挙げる。本庄 2014: 676-677 [5019] 参照。

[33] 地水火風空の 5 つを指すのであろう。ADV 267, n.3 には参考として、*Bṛhadāraṇyakopaniṣad*, III.2.13 の文が挙げられている。Yājñavalkyêti hovāca yatrâsya puruṣasya mṛtasyâgnim vāg apy eti vātaṃ prāṇaś cakṣur ādityaṃ manaś candraṃ diśaḥ śrotraṃ pṛthivīṃ śarīram ākāśam ātmā...nidhīyate...（…この死者の言葉も火へ行く。息は風へ、眼は太陽へ、意は月へ、耳は方角へ、身は地へ、我（アートマン）は空へ…帰する。）

[268] サーンキヤ派もまさに、「眼は根本原因からやって来て、再びそ［の根本原因］へ帰る」と説いている。そして、それを排除するために世尊は、「眼は生じてくるとき、どこからもやって来ない」云々と説かれたのである。過去のもの・未来のもの・原子（極微）・無表（avijñapti）と名付けられた存在要素は、まさに［空間的な］場でない所にあるから、それが［場所から場所へ］来たり行ったりすることはありえないのである。

V－1－4　「本無今有」の意味

V－1－4－1　作用の有無であること

[268,5] では、「前に無くて今存在し、存在し終えて消滅する」[34]という文の意味は何なのか。実に、二種類の眼が実在する。真実（＝勝義）として存在する［眼］には二つあり、覚めていないもの[35]と［それとは］別の、作用を得て覚めているものとである。前者（覚めていない眼）はそ［の眼が覚める］諸原因に縁って作用を得て覚める、ということである[36]。後者は作用を得たものである。実に、それ（後者）が作用を捨てつつあることが「消滅する」と説かれたのである。

V－1－4－2　サーンキヤ批判であること

[268,10] あるいは、サーンキヤ派の［以下の］見解を否定するためである。まさに、サーンキヤ派の［説くところの］単一で恒常な原因は、［それ］自身の固有性を捨てずに、それぞれ特殊な変化を本性として生じ、生じては別々の特殊な結果を本性として変化していく（＝転変する）と［の見解である］。それを否定するために、世尊は、「眼は生じるときどこからもやって来ない。滅するときどこへも集まっていかない」と説かれたのである。眼は前に無くて、現在時に一瞬間のみ作用性を得てのち、捨てて、再び見えなくなるのである。

---

[34] ADV 268, n. 1 は、MN Sutta111, Yogasūtra IV, 12 等を挙げている。

[35] ADV 268, 6: yad aprabuddham の”yad”は”’nyad”であろう（後の”anyat”と呼応）。

[36] これは『彼同分の眼』の議論を前提にしていると考えられる。

V－1－4－3　別の場所から来るのでないこと

[268,15] さらにまた、別の［見方］がある。これによってこそ、未来のものが存在することが成立するからである。同じこの経で「眼は生じつつあるときどこからもやって来ない」と説かれたところで以下のことが示されている。存在するこの眼は、主要な［原因］や副次的原因の集合が現存するという条件下で、作用を獲得しつつあるのであって、「どこからもやって来ることはない」のである。では、どうしてそ［の未来の眼］は存在するのかと言うなら、［以下のように答えよう］。「第一義的な存在となった作用主体（眼）に対して［「生じつつある（utpadyamāna-）」というように］現在分詞の接尾辞（-māna or -āna）が適用されるからである。それは「消滅しつつある（nirudhyamāna-）」と同様である」。［以上が我々の答である。］従って、悪運をもつ悪霊を登場させるように[37]、経量部は自説を壊すためにこの経を根拠としている［に等しい］。

以上のように、まず経典に基づいて、三時の存在することが証明された。

V－2　第一理証・第二教証の正当性[38]（268,22-277,24）

V－2－1　第一理証（認識は実在を対象とする）

[268,22] 論理に基づいても［過去・未来のものは存在する］。［即ち、］「**認識は**［必ず］**対象をもつから[39]、それ**（過去・未来のもの）**は現在のものと同様にして存在する。**」（305cd）

[268,23] まさにそれ（過去・未来のもの）を形象とする認識によって対象の自［相（svalakṣaṇa）］と共相（sāmānyalakṣaṇa）[40]とが判別され、

---

[37] 三友 2007: 594, n.170 参照。

[38] 『倶舎論』においても、第二教証と第一理証は結局同じ趣旨となる。いずれも、認識の対象は存在のみである（有部）のか、存在と非存在の両者である（世親または経量部）のかが論点になっている。

なお、第二理証については、本章和訳註 30 参照。

[39] ADV 268, 22: dhīnām agocaratvāc を” dhīnāṃ sagocaratvāc”と訂正する。

[40] 有部アビダルマにおける自相（＝自性 svabhāva）とは、例えば、四念住のうちの「身」の自相は「大種及び大種所造」である。また、共相とは、有為法にと

［また、］ブッダによって説かれた名身（単語の集まり）と法身（教説の集まり）とによって示される［ような対象］は真実（＝勝義）として存在するのである。［例えば］どのようにしてか。現在の眼と色形（＝色）等のように、である。［即ち、眼と色形等のように］知るものと知られるもの、表示するものと表示されるもの[41]との関係はまさに作られたものではない[42]と、賢者たちは[43]理解する。

V－2－2　第二教証（非存在を対象とする認識はない）

[268,27] 存在しないものを対象とする認識もあると言うなら、それに対して［以下の様に］答えられる。

> [269] **存在しないものを対象とする認識はない。経典に基づいて、**
> ［また、］**証明**（論理）**に基づいて。**｜306ab｜

[269,2] まず、［以下のように説く］経典がある。「眼と色形とに依拠して眼識が、乃至、意と観念とに依拠して意識が生じる。この限りのすべてが存在する。」[44]と世尊によって説かれている。そのうち、意識は三時の［因果的存在（＝有為）］と因果的存在でない存在要素（＝無為法）とを対象とする。五つの知識の集まり（＝眼識から身識までの五識身）は現在の五つのもの（＝色から触までの五境）を対象とする。［このように説かれてはいる］が、存在しない対象はどこにも説かれていない。そして、

っての「無常性」、有漏法にとっての「苦性」、一切法にとっての「空性と無我性」である。cf. AKBh 341,11-13: svabhāva evâiṣāṃ svalakṣaṇam | sāmānyalakṣaṇaṃ tu anityatā saṃskṛtānāṃ duḥkhatā sāsravānāṃ śūnyatānātmate sarvadharmānām | kāyasya punaḥ kaḥ svabhāvaḥ | bhūtabhautikatvam |

[41] 以下、認識と認識の対象（jñānajñeya）、言葉とその表示対象（abhidhānābhidheya）と訳すこともある。後者は言葉に限らない（身体による表現等もある）が、便宜上そのように訳す。

[42] 本章和訳註 22 参照。cf. ADV 263, 2; 271, 1 参照。

[43] ADV 268, 25-26: śiṣṭāt. Jaini は"śiṣṭāḥ"と修正。

[44] ADV 269 n.1 は SN IV 15, II 72 等を挙げる。本庄 2014: 673 [5017] 参照。

それ（＝存在しない対象）はないから、それを対象とする認識もないのである。

[269,7] 同様に［以下の様に］説かれている。「この世にないものを私は［知る、または］見る［ということはありえない］[45]」云々と。

[270] 同様に［以下の様に説かれている］。「［眼と色と眼識の］三者の結合が「触」[46]である。受は［触と］共に生じる。」[47]云々と。これによって、言葉とその表示対象との関係も答えられた［に等しい］。

そこで、以上の様であるとき、この経では中道が示されているのである。つまり、或る在り方では、因果的諸存在は空である。［即ち］誤って構想されたもの［即ち］プルシャ[48]・アーラヤ識・その他の虚妄分別等としては［空である］。或る［別の在り方］では空ではない。つまり、自相・共相[49]としては［空ではない］と［示されている］。例えば『迦旃延経』（Kātyāyanasūtra）に、「この世の生起を知ってこの世にないものはない（＝一切有）、［また、］この世の消滅を知ってこの世にあるものはない（＝一切無）と、この二つの極端を捨てて中道によって如来は真実（＝法）を示される」[50]［と説かれている］。存在と非存在というこの両方［の極端］は［互いに］矛盾するから、同一基体をもつことはありえない。［かといって］全く根拠をもたないわけではない。［また、］空華におけるような空性[51]に根拠を置いているのでもない。

V－2－3　敷衍的論証

---

[45] AKBh 300, 13: …jñāsyāmi vā（drakṣyāmi）vā nêdaṃ sthānaṃ vidyate の句が省かれている。
これはまた別の教証とも言えるが、ここでは第二教証その二とする。本庄 2014: 677-679 [5020] 参照。

[46] 触（sparśa）は、大地法に分類される心所（caitta）の一つである。cf. AK II 24. AKBh 54, 21: sparśa indriyaviṣayavijñānasannipātajā spṛṣṭiḥ（「触とは感官（根）と対象（境）と認識（識）の結合から生じる［三者の］接触である。」）.

[47] ADV 270, n.1 は、MN sutta18 を挙げる。本庄 2014: 673 [5017]参照 。.

[48] サーンキヤ派の説くプルシャ（純粋精神）であろう。

[49] 本章和訳註 40 参照

[50] ADV 270, n.3 は、SN II 17 を挙げる。cf. 三友 2007: 596, n.176.

[51] 三友（2007, 596, n.177）は ”śūnyatā”（写本）を取る。ここはそれに従う。

V－2－3－1　兎の角を巡って

[271]［以下のような］論理もある。

［反論：］「知るものと知られるもの、表示するものと表示されるものとの関係は作られたものではない[52]から、「兎の角はない」というこの知るもの（認識）と表示するもの（言葉）とは存在しないものを対象としている」と言うなら、これに対して我々は［次の様に］言う。

また、他の依拠されるべきもの（空界等）**に対して、馬と角との関係が否定されるのである。**‖306cd‖

[271,5]［反論：］　もし存在しないものを対象とする認識がないなら、あるいは、表示対象をもたない言葉が［ないなら］、兎の角等に、［存在しないという］この否定がない［ことになるが、その］とき、この［存在しないという否定］にとって否定されるものは何か。こ［の反論］に対して、「**他の依拠されるべき**（空界等）**に対して、**［兎と角との］**関係が否定されるのである**」と示される。この牛と角等について先に見られた因果［関係］等の三種の関係が、兎と角等については否定されるのである。なぜなら兎の頭のみと空界との関係を見ているからである。もし兎の頭にも角がある[53]ならそのようにこそ認識されるはずであるが、認識されない。従って、［兎と角との］或る関係に依拠した「兎の角」という余計な言葉の言い回し[54]のみが否定辞（na）によって示されるのであるが、［それは実は兎の頭と］関係をもつ別のもの（＝空界等）との関係を知ることに依拠して［示されるの］である。そのようであって、どんな言葉とその表示対象も、否定されるべきもの（＝例では「角」）自体と依存関係にあるのではない[55]。よって、すべての認識は存在するものを対象とすることが成立する。

---

[52] cf. ADV 263, 2; 268, 25.

[53] ADV 271, 9: viṣānama viṣyat を viṣānam abhaviṣyat と訂正。

[54] “śabdagaḍu” は直訳すると「言葉の瘤」。

[55] 兎の角という言葉によって表されるのは兎の頭と空界との関係だけであって、存在しない角は認識の対象にはならないということであろう。

[271,13] 以上のことから、まだ生えていない、または、すでに消失した牛の角［の場合］は答えられた［に等しい］。［即ち、］空界によって覆われた牛の頭だけを見て、牛の角はこれから生えるだろう、または、すでに消失したと見るべきである。

V－2－3－2　第十三処を巡って

[271,16] 第十三処を［「ない」と］否定する認識の対象（＝存在しないもの）に基づいて［その認識は］あるから、存在しないものを対象とする認識はあると［反論］するなら、そうではない。他ならぬ世尊によって、これは「言葉（vāc）に過ぎないもの」であると教示されているからである[56]。実に、世尊によって『合手声譬経』(Hastatāḍopamasūtra)[57]に、「このすべてとは、つまり眼と色形ないし意と観念である。ある人がこの［眼と色形等の各］二つを否定して、［十二処以外の］他の二つ［即ち］認識の対象または言葉の表示対象を [272] 構想するとき、この人にとって［それは］まさに言葉というものに過ぎないであろう。問われてもよくわからないであろうし、あるいは、後で［答えようとしても］混乱に至るであろう。どのようであれ、それ（第十二処以外のもの）は［真の］対象でないからである。」と説かれている。また、「兎の角」という言葉とその表示対象のように、「存在しない」という言い方もある。言葉に過ぎないものは、角と呼ばれる表示対象との結合関係を欠いている。これによって、第六蘊も答えられた［に等しい］。

V－2－3－3　五蘊と我

---

[56] AKBh 300, 7-8: atha trayodaśam āyatanaṃ nâstîti asya vijñānasya kim ālambanam | etad eva nāmâlambanam. cf. SA 475, 15-16.

[57] 経名については、Jaini は"Hastatālopama-"と修正しているが、" Hastatāḍopamasūtra"でよい。" Hastatāḍopamasūtra"の名は、Skilling 2002: 327, 343 に出る（この情報は本庄良文氏より賜った）。経文については、ADV 272, n.1 は、パーリ文（SN VI 15）を挙げている。平行経は『雑阿含』巻 11 第 273 経『合手声譬経』（大正 2 72c, 28-29）である。本庄 2014: 84【対応資料】及び【補説】参照。

[272,4] さらに、五蘊を対象とする転倒した知識（＝五蘊を「我」とする知識）の否定に基づいて［、存在しないものを対象とする認識はないと言える］。旋火輪の認識の否定と同様であり、二つの月の認識の否定と同様である。実に、世尊によって、「誰でも［自身を］見ながら我（ātman）であると見るが、そのすべての人はこの五取蘊をこそ見ながら［我であると］見る」[58]と説かれ、［そこには、五］蘊という対象について恒常な我という実在とみる迷乱がある、と示されるのである。

V－2－3－4　認識の対象は否定辞 "na" によって否定されない

[272,9] また、否定辞（na）によって、存在するもの・存在しないものが否定の対象になることは不合理であるから［、非存在を対象とする認識はないと言える］。まず、存在するものを［「ない」と］否定することはできない。なぜなら、もし存在するものを［「ない」と］否定できるなら、王様は「象・馬を守らないでよい。泥棒はいない」と言うはずである。そのように言うなら、［いるはずの］泥棒がいないことになってしまうが、そういうことはない。また、もし存在しないものを否定するなら、それによって非存在を否定するから、［存在しないものが］存在することになってしまう。従って、否定辞（na）によって牛の角等は［否定され］ないし、兎の角等も否定されない。ではどうか。兎と空界との関係の認識に依拠して、牛の角等の実在とは無関係であるとの認識が示されるのである。［以上から、］認識は存在するものを対象とすることが成立した。

V－2－3－5　想起の対象

他所（＝次偈以降）でも同様に［説かれる］。

> **物質等の存在が既に消失したものとしてあるとき、**［それへの］**思いが生じる。無知な者にとっては、そ**［の思い］**は存在しないものを**［知の］**形象として**［生じる］**。教師**（＝世尊）**には、そ**

---

[58] ADV 272, n.2 は、SN III 46 を挙げる。 n

> **のように**（＝正しく）［思いは生じる］。**他心**［を知る］**ように。**［故に、過去・未来のものは存在する。］‖307‖

[272,18] まさに物質等の存在がすでに過ぎ去ったものとしてあるとき、［それについての］認識が生じる。なぜなら、存在しないものを対象とする認識はないからである。認識は存在するものを対象とすると、すでに論証された。なおかつ、実在は消滅しないわけではないと述べられた。この物質等の実在は以前に体験されたが、全く同じものがその記憶によって把握されるのである。以上のことは、この後から証明しよう。

[272,22] そこで、死滅したデーヴァダッタの思い出または［消滅した］壺の思い出はどのようにして生じるのか。過去・未来の、デーヴァダッタや壺の知の獲得について［の問い］である。これについて［以下の様に］答えよう。—まさにその思い出は、無明をもつ者には、存在しないものを［知の］形象として生じる。杭を人等と［みる］認識のように。これに対して、無明を離れた教師（＝世尊）には、真実を［知の］形象とした、物質等の存在要素そのものの認識こそが生じる。[273] 例えば、他心智［という神通］をもつ者には、自相を［知の］形象とする認識が生じるが、［その者は］その能力の特性によって別様にも知るように、そのように、［教師は］その能力によって、これから生じるであろう、また、既に生じたデーヴァダッタや壺の表象を物質等［の存在要素］に対して理解するのである。—と。

V－2－3－6　歓喜・恐怖等の想起

[273,4] また以下のことからも、過去・未来のものは存在する。

> **歓喜の生起や恐怖・不安の想起の原因として存在するから**［、過去・未来のものは存在する］。|308ab|

[273,6] 実に、過去・未来の友や敵を心に抱いて**歓喜の生起や恐怖**等が生じる。そして、それらは原因なしに生じ得ない。どのようにして［生じ

るの］か。現在のもののように［生じる］。例えば、今いる友や敵に対して歓喜・恐怖等が生じるのであって、存在しないものに対して［歓喜・恐怖等が生じるのでは］ないように。［過去・未来のものに対しても］同様である。

V－2－3－7　原因をもつもの

[273,9] さらに、

> ［未来のものは存在する。］**原因をもつものが能力を露わにするから。灯りを伴う壺という物のように。**‖ 308cd ‖

[273,11] 過去と現在との共働因の集合体によって捉えられた現存する未来のものにこそ、一定の力が露わになる。どのようにしてか。**灯りを伴う壺という物のように。**例えば、暗闇にある壺という物のもつそれ自身を顕わす力は、灯り等の原因の集合体が揃うときに生じるように、である。

V－2－3－8　存在の六種の変化（文法学の援用）

[273,14] また以下のことからも、未来のものは存在する。

> ［未来のものは存在する。］**生じようとする[59]作用主体によって証明されるから。存在の五つの変化のように。**‖ 309ab ‖

[273,16] 例えば、「存在する」、「変化する」、「成長する」、「衰える」、「消滅する」という存在の五種の変化［の様態］[60]は、活動主体が

---

[59] ADV 273, 15: ”janīhākartr̥を“janīhakartr̥-“と訂正し、”janīha-”を”jani＋īha”として読む。なお、三友（2007: 601, n）は、”janīha kartr̥”とする。

[60] 古来、『ニルクタ』（Nir）・『マハーバーシャ』（MBhṣ I）・『ヴァーキヤパディーヤ』（VP）等に、「存在の六種の変化」（ṣaḍbhāvavikāra）が説かれている。Nir 29, 6~: ṣaḍbhāvavi-kārā bhavantîti Vārṣyāyaṇiḥ. jāyata iti pūrva-bhāvasyâdim ācaṣṭe. nâparabhāvam ācaṣṭe na pratiṣedhati. astîty utpannasya satt-vasyâvadhāraṇam. vipariṇamata ity apracyavamānasya tattvād vikāram. vardhata iti svāṅgābhyuccayam. sāṃyaugikānāṃ vârthānām. vardhate vijayenêti vā. vardhate

第一義的存在性にあるときに起こる[61]ように、「生起する」というこの第六の存在の変化[62]は、活動主体が第一義的存在性[63]にあるときに起こり得る。また、生起してくること、存在していること、消滅していくこと[64]は、同一基体性がないときには［起こり得］ない。［生起し存在し消滅するものは］別物ではないということに関して混乱という過失に陥るからである。［つまり、］基体を異にすることが認められるときには、［各々は］無関係であるから、或る単一のものに対してそれ（＝生起し存在し消滅すること）を説くことは不可能である[65]。さらに、生起してくること等の活動がないときには、存在すること［自体］がありえないから［生起等の活動は起こり得ない］。どのようにか。兎の角のように。

比喩としての存在性（＝二義的存在性）があると［反論］するなら、そうではない。第一義的存在性があるとき［にはじめて］比喩としての存在性もあるからである。そして、これから述べる誤り［がある］からである。

V－2－3－9　三種の行為対象（文法学の援用）

[273,23] また、以下のことからも、［未来のものは］存在する。

śrīreṇêti vâpakṣīyata ity etenâiva vyākhyātaḥ pratilomam vinaśyatîty aparabhāvasyâdim ācaṣṭe. na pūrvabhāvam ācaṣṭe na pratiṣedhati.（和訳は、赤松 1998, 301, n.36 参照）. MBh 258, 13-14. VP については、赤松 1998, 23-24 参照（300, n.37 によれば、六種の変化の議論は VP III 1.36 にあるという）。

有部の言う「有為の四相＝生住異滅」に影響を与えたものであるかもしれない。

[61] 何であれ生じて滅する主体が示す五種の変化はすべて実在レベルでの在り方であるからそのような変化をする主体はどの変化においても実在するということであろう。

[62] ADV は、「生起する」（jāyate）を第六としている。

[63] ADV 273, 18: mukhyāviṣṭe を mukhyasattāviṣṭe と訂正する。三友 2007: 601, n.186 参照（写本では、"mukhyasattāviṣṭe"とある）。

[64] ADV 273, 18: naśyatā を naśyattā と訂正する。

[65] この辺の議論は、三世において、同一のものに「生じてきて存在し消滅する」という一連の変化が起こるが、変化の様態をもつそのすべては同一のもの（＝同一基体性にあるもの）である。故に一切のものが三世に実在しているとの主張になろう。

［未来のものは存在する。］**存在するものは活動の原因であることが見られるから。変化させられるべき行為対象・到達されるべき行為対象のように。**‖ 309cd ‖

[273,25] 例えば、カーシャ草から敷物を作る[66]［というように、］変化させられるべき行為対象[67]に対して〈作る〉ことが見られ、また、到達されるべき行為対象について「デーヴァダッタは村へ行く」、「［デーヴァダッタは］太陽を見る」［というように］〈行く〉・〈見る〉という活動は［到達されるべき］行為対象に対して起こるように、そのように、生み出されるべき行為があるときには第一義的実在性が［生じるであろうし、それが］あるとき、デーヴァダッタを活動主体とする壺の作成が可能になるのである[68]。

V－2－3－10　サーンキヤ派の因中有果論の否定

[273,29] サーンキヤ派は［次のように］見る。存在しているものそのものが生じる。ヨーグルトはミルクに存在しているように。原因と結果とは同一であるから［と］。それを否定して言う。

---

[66]「敷物を作る」はふつう"kaṭaṃ karoti"であろう。ここは、"kaṭīkaroti"でその意味と解するのであろう。

[67] "karman"は文法用語としての「行為対象」を意味する。パーニニの以下の規定がある。A 1. 4. 49: kartur īpsitatamaṃ karma（行為主体にとって［成し遂げたいと］最も望まれたものが行為対象である）．さらに、パーニニ文法学派の伝統において、行為主体に最も望まれたものとしての行為対象は三種に分類されている。例えば、バルトリハリは『ヴァーキヤパディーヤ』（VP 3. 7. 45）で次のように述べている。

nirvatyaṃ ca vikāryaṃ ca prāpyaṃ cêti tridhā matam /
tatrêpsitatamaṃ karma, caturdhânyat tu kalpitam // 45 //

和訳：「そのうち、［行為者にとって］最も望まれたものである行為対象は、生み出されるべきもの・変化させられるべきもの・到達されるべきものの三種であると考えられる。一方で、［次詩節 VP 3.7.46 で述べるように］別の［行為対象］が四種に想定されている。」

また、『カーシカー・ヴリッティ』（KV 266）には VP の上記の偈が注釈されている。

[68] 未来の壺も実在するという主張であろう。

[274] 既に生じたものが再生することはありえない。‖ 310ab ‖

[274,2] もしミルクにヨーグルト等の変化［したもの］が、また、種に芽等が、純粋な血液にカララ等［の諸段階］の胎児が存在するなら、既に生じたそれら［ヨーグルト等］がミルク等と同様に再生することは不合理である。そして、いかにして不合理であるかは先に既に明らかにした[69]。

V－2－3－11　ヴァイシェーシカ派の因中無果論の否定

[274,5] ヴァイシェーシカ派は［次のように］考える。——椀型（＝壺の半分）[70]には存在しない壺という実体、また、糸（＝布の属性）には存在しない布という実体は、椀型または糸の結合によって生じ、そして、［壺または布へと］変化した状態を対象とした二次的な構想によって[71]、〈生起する主体〉の存在することが示される——と[72]。これについても、諸部分を伴う〈全体〉という実体は［存在しないという］答えが既に［我々によって］なされた。

[274,8] ところで、〈生起する主体〉は、比喩的（＝二義的）存在として示されると言われる[73]［なら、それ］に対して、我々は［以下の様に］答えよう。

第一義的存在性は、属性が存在しないから、二義的存在性としてあることはない。‖ 310cd ‖

[274,10] 実に、第一義的存在性においては、属性がない、または、部分がない［から、その］場合、諸原因（糸）または［諸原因に］先行して生

[69] ADV ad 309ab 中の同一基体性の議論を指すのであろう。
[70] 服部 1970: 68 参照。
[71] ADV 274, 6-7: -vasthāviṣayā を-vasthāviṣayayā と訂正する。
[72] ヴァイシェーシカは、椀型や糸という部分または属性とは別に、それが結合した壺または布という「全体」もまた実在すると言う。
[73] cf. ADV 273, 21: upacārasattêti.

じることのない［（糸同士の）結合］に対して、結果の存在を比喩表現することは不合理である。

[274,12] なぜか。

> **同類性があるときそれ**（＝比喩表現）**は起こるからである。**［その場合には比喩］**表現はある。「甘い言葉」のように。**
> **‖311ab‖**

[274,14] 例えば、「デーヴァダッタは甘い言葉で語る」という言葉には、甘さという属性を備えた砂糖という実体または蜜［という実体］の［言葉との］同類性［即ち］望ましさがあるということから、言葉に対して「甘い」という語が用いられるように、また、少女の顔に月の可愛さとの類似性を見て「月」という語が用いられるように、また、ヴァーヒーカ人に対して、愚鈍という同類性から「このヴァーヒーカ人は牛だ」等と「牛」という語が用いられるように[74]。しかし、本性を欠いた（＝まだ生じていない）結果にとっては、糸や［糸に］先行して生じることのないそれ（＝糸同士）の結合において、属性・部分・香りが［上の例と］同じように存在することは決してない。［従って、まだ生じていない結果に対する比喩表現はありえない。］また、どんな結果もほんの少しだけもたらされるということはありえない。完全な形での［結果の］存在が一時［に起こる］と認められるからである。「［生じる］前には、表現しようのない単なる〈もの〉が変化して生じる」と言うなら、そうではない。答えは既に述べたからである[75]。ただし、私には月輪の光という喩例がある[76]。

---

[74] 稲見（2013: 108, n.32）は「ヴァーヒーカ人に対する牛の転義的表現はバルトリハリの『ヴァーキヤパディーヤ』（VP II 252. 255 等）やスティラマティの『唯識三十論釈』（v.1 a-c に対する注）でも言及されるものである」とする。

[75] ADV ad AD 309ab 中の同一基体性の議論のことを指すのであろう。

[76] この一文の意味は定かではないが、月の光は夜に輝くが、月自体は昼も夜も存在していることを意味しているのであろう。

> ［元々の］**性は変わらない第一義的なものの誕生が認められる。息子等のように。‖ 311cd ‖**

[274,23] 実に、この生起［という語］は「出現」等を表わし、存在しないものが現れることを表わすことはない。どのように、か。**息子等のように**。例えば、息子は、第一義的存在性にあって母親の胎内から現れ出るときに「誕生する」と言われるように、ここでも同様に［第一義的存在性における生起とは存在しないものの生起ではない］。

V－2－3－12　**譬喩師批判**

[274,26] 譬喩師は言う。原因の［結果を生みだす］力に対して、本性を欠いてはいるが〈生起する主体〉と比喩表現することが起こる、［と］。これに対して我々は言おう。

> **もし諸存在の本性は前に無くて生じてくるなら、虚空は空華に満ち、蛙は巻き毛を結うであろう。‖ 312 ‖**

[274,30] 実に、存在しない兎の角等は生じることはない。［もし生じるなら、］本性を持たないという点では異ならない[77]すべての非 [275] 存在なるものが生じることになってしまうからである。また、［非存在なるものが生じるなら、］それら（＝存在しないもの）を原因とするものが、〈生じてくる〉・〈生じてある〉・〈消滅していく〉時間において、「本性があること」という〈住〉[78]の力をもつことは不可能だからである。また、［非存在なるものが生じるなら、］諸原因は、結果を本性とする［ことになる］から、［諸原因は結果より］前に存在することはなく、［因が果より前に］存在しないから、［因果関係］不可能という誤りに至ってしまう。また、どうして非存在が生じてくることになるのか［、生じてはこない］。［非存在は］〈住〉の力の作用と結びつかないからである。

---

[77] "nairātmyāviśeṣa-".

[78] 生・住・異・滅という有為の四相の「住」

[275,5] どうして結びつかないのかと言うなら、それを［次に］明らかにしよう。

〈住〉の力を失い〈滅〉へと続くものとして生じた諸存在要素に縁って、存在しないもの（avastu）が存在するものとなるのはどうしてかを語れ、ご立派な方よ。‖ 313 ‖

[275,8] まさにここで、あなた方にとって、生起するすべてのものの〈滅〉は原因をもたず、常に近接する。それ（＝滅）があるとき、〈生〉・〈住〉の力の作用はない。［滅と］矛盾するから。それら（作用）がないとき、原因も必ず滅している。だから、それ（＝原因）がないとき、何に縁って、本性を欠いた存在しないもの（vastu）が存在するものとなるのかを述べよ。汝にとって、どのようにして結果または原因はあり得るのか。実に、名と名付けられたもの、知と知の対象、作用とその原因、因と果等が存在していて、［それら各両者が］相互依存していると知られるから［因と果とはあるのである］。また、汝にとって、もし非存在は存在と全く矛盾しないのなら、どうしてその存在が消滅すると言うのか。従って、あなたのこ［の考え］は言葉に過ぎない。しかし、私にとっては、存在する両者間の支え合う[79]関係が理に適う。

[275,15] なぜなら、

[276] 世間では、存在する両者間に互いに助け合うことが見られ、それと全く同様に（＝逆に）、［互いに］害し合うことも［見られる］。馬と角、蛇と足には［どちらも］ない。‖ 314 ‖

[276,3] 助け合いと害し合いにおいて結果と原因との関係が比喩表現［されているが、それ］は、存在する両者にこそある。このことは、乳児

[79] ADV 275, 14: evôpakāryupakāra[ka]bhāvo を-upakāryabhāvo と訂正して読む。

［のとき］から当たり前に知られている。［この関係は］存在しない両者にはないし、存在するものと存在しないものとの両者にもない。

V－2－3－13　大乗批判

[276,5] ヴァイトゥリカは［以下の様に］構想する[80]。

縁起するものは、それ自体としては存在しない。| 315ab |

[276,7] まさに本性を欠いたもの、無我なるものは、諸因に縁って生じるが、まさにそれには本性はない。なぜなら、その諸原因についても各々［本性を欠いたものであって］存在しない。部分的にもないし、他のどこにもない。諸因の集合体にもない。その性質（rūpa）がないからである。また、［それ自体として］どこにもないものがどの本性をもって生じるであろうか。よって、［どんなものにも］本性はないのである。また、本性のないものがどうして存在すると言われるのか。従って、旋火輪のように、本性を欠いたものであるから、すべての存在要素は無我なるものである、と。

[276,12] それに対して［以下に］批判する。

[277] **それ自体として存在するものは、それとは別な仕方で存在することはない。|| 315cd ||**

[277,2] 以下は、謎かけ論議（brahmodya）[81]である。「［集合体として］縁起したものは世俗［諦］というものとして存在する。森・団体のように。勝義［諦］として存在するもの（＝存在要素）は、様態・力・形態・作用等のみが縁起する」と。

---

[80] ADV276, n.1 は、Madhyamika-kārikā I 6-7 及び Catuḥśataka 36 を挙げる。cf. 三友 2007: 607, n.196.

[81] 本文の以下の有部の主張を理解できない者としてヴァイトゥリカを揶揄しているのであろう。

[277,5] その場合、その存在しているもの（＝存在要素）にとって諸因はどんな援助を行うのか。これに対して答えられる。実体に本性があるということに関しては、［諸因は］どんな援助も行わない。また、［何かに］拠って本性が仮設されることはない。

ではどうか。

存在するものにとって諸因は［或る］**状態だけを作り出す。大臣達が尊い王子の王としての尊厳を**［作り出す］**ように**[82]。
|| 316 ||

[277,11] 例えば、軍隊をもつ大臣達は、現に存在している気高い王子の傍にいてひたすら世話することによって援護しながら、王としての尊厳を作り出すように、存在している未来のものに因縁が集まって、現在と呼ばれる自在性・主宰性という特徴だけを作り出すと知るべきである。

[277,15] しかし、他の人々[83]は［次の様に］述べる。

集積した諸原子の本性を認識するときのように、諸存在要素の集合があるとき、能力が生じる。|| 317 ||

[277,18] 例えば、諸原子の集積が眼によって把握されるが、諸原子の一つ一つは把握されないのと全く同様に、諸原因の集合があるとき諸存在要素の作用能力[84]が生じるとみるべきである。

[277,21] 大徳クマーララータ[85]は［次の様に］見る。

窓から入っている［光線］の中にも両側にも微塵（埃）は存在する。しかし、光線［の中］にあるこの微塵は見えるが、光線の［両］側にある

---

[82] ADV 277, 10: sātmakasyâiva を sātmakasyêva と訂正する。

[83] 三友（2007: 609, n.198）は、本文の以下の偈の説は『順正理論』（大正 29, 350c5-351a6）の上座の説に一致するとする。

[84] サンガバドラの言う「引果力」（phalākṣepaśakti）を指すと考えられる。

[85] クマーララータは経量部に関係ありと言われるが、本文の以下の主張から見る限り、有部の人であるように思われる。cf. 加藤 1989: 47-52.

［微塵］は［その存在が］推理される。これによって、諸存在要素は［過去・未来の］両時にあることが説明された。尊者ら（muni）は優れた知に到達して見るが、その知はこの世では［過去・現在・未来の］三時のものから生じる。

V－3　第二理証の正当性（278,1-279,6）

[278] 他方、過去の行為（業）は［既に］存在しなくなっているし、未来の［行為］は存在しないと考える人に対して、［以下の様な］批判がなされる。

> **或る人にとっては、存在しない過去の行為が存在しない未来の結果を作るが、その人にとって、石女の息子が幽霊の子から生まれる。‖318‖**

[278,4] 実に、あなたにとって、現在時が存在することは不可能である。過去・未来の因果がないから。石女［の子］が幽霊の子から生まれるように[86]。

[278,6] これに対して、譬喩師達は反論する。我々は、どんな場合にも過去のものが存在しないと言っているのではなくて、「過去のものは実体として存在するのではなく、仮象として存在する」[87]ということである。

それに対して［以下の様に］批判される。

> [279] **名称として**［のみ］**存在するという特徴がないから、実在するという徴表が成立する。故に、未来のもの・過去のものが仮象的存在であるということはない。‖319‖**

[279,3] 実に、名付けられる［だけの］もの[88]はすべて仮象的存在である。そして、現在のものが名付けられる［だけ］ということはあり得ない。

---

[86] 宗（主張）・因（根拠）・喩（例示）の形になっている。

[87] ADV 278, n.2 は DN IX 45-53 と指示する。

よって［同様に］名付けられる［だけの］ものでない未来・過去のものは仮象として存在しないから、こ［の過去・未来のものは］実在する[89]。

その場合、もし未来の眼等の実体が存在するなら、どうして［その眼は］見たり、見られたり、認識したりしないのか［と問うなら］、明らかに、［未来の眼には］作用（**kāritra**）がないから［見たりすることが］ないと［答えよう］。

VI　作用説に関する世親の批判への応答（279,7-282,8）

[279,7] そこで、これに対して世親（**Kośakāra**）は問う。

どんな妨げがあるのか。 | 320a$_1$ |[90]

[279,9] もし眼が存在するなら［その眼は］どうして見ないのか［ということである］。［これに対して］我々は答えよう。

補助因の欠如［が妨げ］**である。** | 320a$_2$ |

[279,11] 灯り等の補助因が欠如するときには現在の眼でも色形を見ないことが認められるからである。

[279,12] 彼（世親）は反論する。すべてのものが常にあるとき、どうして補助因の欠如があろうか［、と］。［これに対して］我々は答えよう。

その「すべてがある」ということが常にあるわけではない。
| 320b |

---

[88] “sopādāna-”は偈の”nāmasat”の言い換えと取る。

[89] ADV 279, 4: asad etat を dravyasad etat と訂正する。

[90] Jaini も指摘するように、AK V 27a$_1$ の議論に対応していると考えられる。ただし、ここでは倶舎論とは違って、眼の「見る」作用として論じられている。

[279,14] こ［の b 句］では、まさに三時の補助因が意図されている。［即ち］そこでは一部［の補助因］は近接しない。それら［補助因］の欠如の故に、［未来の眼等は］作用をしないのであると。

[279,16] 彼（世親）は反論する。

それ（作用）**はどのようにあるのか。**| 320c1 |

[280] 作用は定義として何なのか。または［作用は］それ（定義）として実体と別のものなのか、別でないものなのか。それに対して我々は応答しよう。

［それは］**賢者達から聞かれるがよい。**| 320c2 |

[280,4] 実に、どんな世人も、弟子の席に座って、一切智者の言葉の優れた深遠性を誤った論理だけで覚ることはできないのである。なぜなら、ご立派な方よ、

法性（真実の在り方）**はまさに覚り難い。**|| 320d ||

[280,7] しかし、そうではあっても聞かれるべきである。

[281] **現在時に起こってくることから、**［また、諸原因の］**集合という補助因を捕捉することから得られる力をもつものが果を引くこと**［、それ］**が作用**（kāritra）**であると言われる。**|| 321 ||

[281,3] まさに未来の存在要素が現在時に起こってくるから、［また、］外的・内的［諸原因の］集合という補助因を捕捉することから得られる能力をもつ存在要素が果を引くことが、作用と言われる。そして、現在時のその働きが作用と説かれる。それに対して、作用は［存在要素と］別のも

のではないという人（世親）にとって、実在の本性を放棄することになってしまう。

[281,7] しかし、本論書にはまさに［以下のように説かれる］。

> **現在であるという本性（rūpa）、また、過去・未来である**［という本性］**はないから、**［存在要素が］**時間を移動する**［だけであること］**から、本性自体（rūpātma）の変化は認められない。**
> ‖ 322 ‖

[281,10] もし実在自体の変化がないなら、その場合、どうして諸因に縁って生じるのか。我々は［次の様に］答えよう。

> **存在するものには或る様態が生じるのである。**［それは］**力であり、時間であり、存在性であり、作用である。**‖ 323 ‖

[281,13]　そのうち、**様態**（avasthā）とは力の集積の作用に依存し、実体に付属するものである。**力**（śakti）とは**作用**（kriyā）への依存によって作り出される能力（sāmarthya）である。**作用**とは未来に結果を生み出すことであり、実体の機能である。**時間**（velā）とは現在という時間（kāla）である。形態とは原子の特殊な集積である[91]。**存在性**（sattā）とは認知と呼ばれるもので、仮象的存在性である。以上のこの［様態等の］すべては、内的・外的原因の集合体の近接に依って［実在］自体として執着されたものである。

[282] これに対して、説一切有部から落伍したヴァイトゥリカ（＝世親）は主張する。我々も三自性を構想する［、と］。［以下に］それに応答しよう。

---

[91] 偈にはないが、形態（mūrti)という物質的存在の様態を特に説明したものであろう。

愚かな心に染められた構想によって、世間は覆われている。他方、賢明な意思によって把握された構想は得難い。‖ 324 ‖

[282,5] あなたによって構想されたまさにこの三自性[92]は、先に反論された。同様に、他の不正な構想も斥けられるべきである。以上は、世親の〈時間に関する迷妄〉という烙印を押すこと［というべき議論］である。

[282,8]［本論に］付随して入った議論は終わった。本論こそが続けられるべきである。

（ADV 終）

[92] 唯識派の三自性、遍計所執性・依他起性・円成実性を指すのであろう。ADV 282, n.1 は、*Trisvabhāvanirdeśa* の１～３偈を挙げる。

第２節　校訂テキスト　AD k. 299-324 & ADV 256, 8-282, 8

I

I－1

[256, 8] yuktaṃ tāvad idam | yad idaṃ pratyuktaṃ vastu hetupratyayāt[93] pratītyotpannaṃ paramārthato vidyate pratyātmavedanīyatvāt, tadālambanāś ca rāgādayaḥ dravyataḥ santîti | yat punar idam uktam atītānāgate vastuni traiyadhvikair anuśayaiḥ saṃyukta iti tad etat sāhasam āhopuruṣikamātram |

kaḥ punar etad atītānagatādi dravyato 'bhivāñchatîty[94] Ābhidhārmikāḥ[95] |

I－2

[257] catvāraḥ khalv iha pravacane vādinaḥ | katame catvāraḥ, tad apadiśyate

sarvam asti pradeśo 'sti sarvaṃ nâstîti câparaḥ |
avyākṛtāstivādîti catvāro vādinaḥ smṛtāḥ || 299 ||

tatra Sarvāstivādasyâdhvatrayam[96] asti sadhruvatrayam[97] iti | Vibhajyavādinas tu Dārṣṭāntikasya ca pradeśo vartamānādhvasaṃjñakaḥ | Vaitulikasyâyoga-[258]śūnyatāvādinaḥ[98] sarvaṃ nâstîti | Paudgalikasyâpy avyākṛtavastuvādinaḥ pudgalo 'pi dravyato 'stîti |

---

[93] ADV 256, 8: vastuhetupratyayāt を vastu hetupratyayāt と訂正する。

[94] ADV 256, 11-12: 'bhivāñcchati を'bhivāñchati と訂正する。cf. 三友 2007: 583, n.137.

[95] ADV 256, 12: āhābhidhārmikāḥ を ābhidhārmikāḥ と訂正する。cf. 三友 2007: 583, n.138.

[96] Jaini の訂正による。ADV 297, 4: sarvāstivādā-.

[97] ADV 257, 4: sa dhruvatrayam. cf. 三友（2007: 583, n.141）は、sa を ca と訂正する。

[98] ADV 257, 5: vaitulikasyāyoga-.

atra punaḥ

ebhyo yaḥ prathamo vādī bhajate sādhutām asau |
tarkābhimāninas tv anye yuktyāgamabahiṣkṛtāḥ || 300 ||

yaḥ khalv eṣa prathamo vādī Sarvāstivādākhyaḥ, eṣa khalu yuktyāgamopapannābhidhāyitvāt sadvadī | tadanye vādino Dārṣṭāntika-Vaitulika-Paudgalikāḥ na yuktyāgamābhidhāyinaḥ tarkābhimāninas te | mithyāvāditvād ete Lokāyatika-[259]Vaināśika-Nagnāṭapakṣe prakṣeptavyaḥ ity ataś ca sarvaṃ sarvagatam upadarśayiṣyāmîti[99] |

II

[259,3] kaḥ punar ayaṃ Sarvāstivādī sādhutāṃ[100] bhajate, tad idam avadyotyate | eṣa khalu vādī

icchaty adhvatrayaṃ yasmāt[101] kṛtyataś ca dhruvatrayam |
Sarvāstivāda ity uktas tasmād ādyaś caturvidhaḥ || 301 ||

II – 1

[259,7] khalv eṣa Sarvāstivādaś caturdhā bhedaṃ pratipannaḥ | katham, tad ārabhyate,

bhāvāṅkānyathikākhyau[102] dvav avasthānyathiko[103] paraḥ |
anyathānyathikaś cânyah **tṛtīyo yuktivādy ataḥ** || 302 ||

II – 1 – 1

---

[99] Jaini の修正による。ADV 259, 1: upadarṣa-.
[100] Jaini の修正による。ADV 259, 3: sādhutā.
[101] Jaini の修正による。ADV 259, 3: yasmā.
[102] Jaini の修正による。ADV 259, 8: bhānyathikākhyau.
[103] Jaini の修正による。ADV 259, 8: dvavasthānyathiko.

[259,10] tatra bhāvānyathiko[104] bhadanta-Dharmatrātaḥ | sa hy evam āha dharmasyâdhvasu pravartamānasyânāgatādibhāvamātram anyathā bhavati | na dravyānyathātvam | yathā suvarṇasya kaṭakādisaṃsthā-nāntareṇa kriyamāṇasya[105] pūrvasaṃsthānanāśe na suvarṇanāśaḥ | kṣīrasya vā dadhitvena pariṇamato yathā rasavīryavipākaparityāgo na varṇasyêti | tad eṣa Vārṣagaṇyapakṣabhajamānatvāt vargya[106] eva draṣṭavyaḥ | yasmāt eṣo 'vasthitasya dravyasya jātilakṣaṇasya samudāyarūpasya vânyathānyathāvasthānalakṣaṇaṃ pariṇāmam icchati |

II－1－2

[259,17] lakṣaṇānyathiko bhadanta-Ghoṣaka iha paśyaty atīto dharmo 'tītalakṣaṇena yukto 'nāgatapratyutpannalakṣaṇābhyām aviyuktaḥ, evam anāgatapratyutpannāv api | yathā puruṣaḥ [260] ekasyāṃ striyāṃ rakto 'nyāsv aviraktaḥ | tad asyâpy adhvasaṃkaro bhavaty ekasya dharmasya trilakṣaṇayogābhyupagamāt | eṣo 'pi puruṣakāravāgurāyāṃ[107] praveśayitavyaḥ |

II－1－3

[260,3] avasthānyathiko bhadanta-Vasumitraḥ | sa khalv āha dharmo 'dhvasu pravartamāno 'vasthām avasthāṃ prāpyânyathānyathâstîti nirdiśyate | avasthāntaraviśeṣavikārāt svabhāvāparityāgāc ca | yathā ni-kṣepavartikâikāṅkavinyastâikêty ucyate, sâiva śatāṅke śataṃ sahasrāṅke sahasram iti |

II－1－4

[104] Jaini の修正による。ADV 259, 10: bhāvānyāthiko.
[105] Jaini の修正による。ADV 259, 12: kr̥yamānasya.
[106] ADV 259, 14: -tvāt tadvargya を-tvād vargya と訂正する。
[107] ADV 260, 2: puruṣakāraṇi（?).

[260,7] anyathānyathiko bhadanta-Buddhadevaḥ | sa brūte | dharmo 'dhvasu pravartamānaḥ pūrvāparam apekṣyânyathā[108] cânyathā côcyate | nâivâsya bhāvānyathātvaṃ bhavati dravyānyathātvaṃ vā | yathâikā[109] strī pūrvāparam apekṣya mātā côcyate duhitā ca | tadvad dharmo 'nāgatapraty-utpannam apekṣyâtīta ity ucyate | tathêtaro 'pîtaradvayam apekṣyêti | asyâpy ekasyâtītasyâdhvanaḥ pūrvottarakṣanadvayam [110] apekṣyâdh-vatritvāpattidoṣaprasaṅgaḥ |

II – 2（260,14-261,1）

tad ebhyaś caturbhyaḥ Sarvāstivādebhyas tṛtīyaḥ sthavira-Vasumitraḥ pañcaviṃśatitattvanirāsī paramāṇusaṃcayavādonmāthī[111] ca ity ato 'sāv eva yuktyāgamānusāritvād āptaḥ prāmāṇika ity adhyavaseyam |

bhadantaBuddhadevo 'pi tīrthyapakṣyabhajamānatvān na parigṛhyate |

bhadantaGhoṣako 'py adhvasaṃkaravāditvād ekaikasyâdhvano 'dhva-trayalakṣaṇabhāg bhavati [261] ity atas tṛtīya evâpadoṣaḥ |

III（261,1-13）

yasmāt

kāritreṇâdhvanām eva[112] **vyavasthām abhivāñchati** |
tat kurvan vartamāno 'dhvā kṛte 'tīto 'kṛte paraḥ || 303 ||

ye khalu Bhagavatôktāḥ svabhāvasiddhās traiyādhvikā dharmā atītānāgatapratyutpannās teṣām ayam ācāryaḥ kriyādvāreṇâvasthābhedam icchaty ajahatsvarūpo hetusāmagrīsannidhānaprabodhitaśaktiḥ | kriyāvān[113]

---

[108] ADV 260, 8: aveksya-を apeksya-と訂正する。
[109] ADV 260, 9: athaikā を yathaikā と訂正する。
[110] Jaini の修正による。ADV 260, 12: -kṣaṇatrayam.
[111] Jaini の修正による。ADV 260, 15: paramānu-.
[112] ADV 261, 2: epa を eva と訂正する。
[113] Jaini の修正による。ADV 261, 6: kriyāvā.

hi saṃskāro vartamāna ity ucyate | sa eva tyaktakriyo 'tīto 'nupāttakriyo 'nāgataḥ ity evaṃ ca sati kālatrayasyâikādhikaraṇyam ekādhiṣṭhāna-vyāpāraparicchedyatvaṃ côpapannam | anyathâikadravyajātinimittā-bhāve[114] vaiyadhikaraṇye sati kālatrayasaṃbandhābhāvaḥ prāpnuyād iti |

atrâha codakaḥ nātītānāgatasyârthasya prajñaptyā vyapadeśasiddheḥ | na, paramārthadravyābhāve niradhiṣṭhānaprajñaptivyapadeśānupapatteḥ | vartamānāpekṣyas tadvyapadeśa ity cet | na | vartamānasvarūpasthiti-śaktikriyābhāve sattvānupapatteḥ, sadasator apekṣāsaṃbandhābhavāc ca |

IV（261,13-263,6）

sattvalakṣaṇam idānīm eva dyotyate atītādīnāṃ padārthānām

> [262] **buddhyā yasyêkṣyate cihnaṃ tat saṃjñeyaṃ caturvidham** |
> **paramārthena saṃvṛtyā dvayenâpekṣayâpi ca** || 304 ||

yasya khalv arthavastunaḥ[115] svabhavāsiddhasvarūpasyâviparītākārayā dharmopalakṣaṇayā paricchinnaṃ lakṣaṇam upalakṣyate tat sad[116] dravyam ity ucyate | tat punaḥ sat pratibhidyamānaṃ[117] caturvidhaṃ bhavati |

[263] paramārthena yan nityaṃ svabhāvena saṃgṛhītaṃ na kadācit svam ātmānaṃ jahāti, viśiṣṭajñānābhidhānāpauruṣeyaviṣayaviṣayi-saṃbandhaṃ[118] tat paramārthasad ity ucyate |

yat punar anekaparamārthasatyapṛṣṭhena[119] vyavahārārthaṃ prajñapti-rūpatayā nirdiśyate tat saṃvṛtisat | tad yathā ghaṭapaṭavanapudgalādikam[120] |

---

[114] Jaini の修正による。ADV 261, 8: anyathaikaḥ.
[115] Jaini の修正による。ADV 262, 3: arthavastuna.
[116] Jaini の修正による。ADV 262, 4: sa.
[117] Jaini の修正による。ADV 262, 5: pratibhidyamāna.
[118] ADV 263, 2: -āpauruṣeyaviṣayisaṃbandhaṃ.（viṣayi の前に viṣaya を加える）
[119] Jaini の修正による。ADV 263, 3: aṇeka-.
[120] Jaini の修正による。ADV 263, 4: -ādika.

kiñcid ubhayathā pṛthivyādi |

kiñcit sattvāpekṣayā[121] pitṛputraguruśiṣyakartṛkriyādi |

V (263,7-264,2)

atha yad idam uktaṃ dravyasanto 'tītānāgatādhvasthā dharmā iti tad āgamayuktyanabhidhānād abhidhānamātram | tasmād āgamayuktibhyām upapādyo 'yam artha ity ata idaṃ pratijñāyate,

[264] **sad atītāsamutpannaṃ buddhokter vartamānavat |**
dhīnāṃ sagocaratvāc[122] ca tat sattvaṃ vartamānavat || 305 ||

V – 1 (264,3-268,21)

V – 1 – 1

uktaṃ hi Bhagavatā, "asti bhikṣavo 'tītaṃ rūpaṃ no ced atītaṃ rūpam abhaviṣyan nême sattvā atīte rūpe samarañjyanta[123] | yasmāt tarhy asty atītaṃ rūpaṃ tasmād ime sattvātīte rūpe saṃrañjyante" | evam anāgataṃ pratyutpannaṃ[124] cêti vācyam | vibhaktipratirūpako 'yaṃ nipāta iti cet | na | vartamāne 'pi tatprasaṅgāt | kriyāvacanena côttarapadena pūrvasya kriyāvacanasyâiva padasya sāmānādhikaraṇyāt |

V – 1 – 2

[265] punaś côktaṃ Bhagavatā, "rūpam anityam atītānāgatam kaḥ punar vādaḥ pratyutpannasya evaṃdarśī śrutavān āryaśrāvako 'tīte rūpe 'napekṣo bhavaty anāgataṃ rūpaṃ nâbhinandati | pratyutpannasya rūpasya nirvide virāgāya nirodhāya pratipanno bhavati | atītaṃ ced rūpaṃ nâbhaviṣyan na śrutavān āryaśrāvako 'tīte rūpe 'napekṣo 'bhaviṣyat,

---

[121] Jaini の修正による。ADV 263, 5: sattvapekṣayā.
[122] AD 305c: dhīnām agocaratvac ca.
[123] ADV 264, 4: samarañjyantaḥ.
[124] Jaini の修正による。ADV 264, 5: anāgatapratyutpanna.

yasmāt tarhy asty atītaṃ rūpaṃ tasmāc churutavān āryaśrāvako 'tīte rūpe 'napekṣo bhavatî" ti vistaraḥ |

tathôktam, "yac Chāriputra karmâbhyatītaṃ kṣīṇaṃ niruddhaṃ vigataṃ vipariṇataṃ tad astîti | tac cet karma Śāriputra nâbhiviṣyan nêhâikatīyas taddhetoḥ tatpratyayād apāyadurgativinipātaṃ kāyasya bhedān narakeṣûpapatsyate" iti vistaraḥ |

tadāhitacitta-[266]bhāvanāṃ sandhāyavacanād adoṣa ity cet | na | uktottaratvāt | uktottaro hy eṣa vādaḥ | kiṃ tilapīḍakavat punar āvartase | kiñca bhāvanābhāvyamānacittayoḥ svarūpaśaktikriyānupapatteḥ puṣṭavāsitatailavat, anyānanyatvādivakṣyamānadoṣāc ca |

V－1－3

[266,5] Paramārthaśūnyatāsūtrād asad iti cet | na | tadarthaparijñānāt | tata evânāgatādyastitvasiddheś ca |

tatrâitat syāt, paramārthaśūnyatāsūtre Bhagavatā [267] vispaṣṭam anāgatādināstitvaṃ pradarśitam | tatra hy uktam, "cakṣur utpadyamānaṃ na kutaścid āgacchati, nirudhyamānaṃ na kvacit saṃnicayaṃ gacchati" iti vistaraḥ | atītānāgatasadbhāve câgatigatidoṣābhyupagamaḥ prāpnotîti | etac ca na | kutaḥ | sūtrārthāparijñānāt | ata evânāgatādyastitvasiddheś ca |

sūtrasya tāvad ayam arthaḥ | yad uktam, "cakśur utpadyamānaṃ na kutaścid āgacchati nirudhyamānaṃ na kvacit saṃnichayaṃ gacchati" iti tad vedoktavādavidhipratiṣedhārthaṃ sāṃkhyamatavyudāsārthaṃ ca |

vede hy uktam, "pañcatvam āpadyamānasya cakṣur ādityād āgataṃ punas tatrâiva prativigachati |śrotram ākāśam | ghrāṇaṃ pṛthivīm | jihvā āpaḥ | kāyo vāyus | manaḥ salilaṃ somam ity arthaḥ |" tatpratiṣedhārthaṃ Bhagavān avocet, "cakṣur utpadyamānaṃ na kutaścid āgacchati" iti vistaraḥ |

[268] Sāṃkhyāḥ khalv apy ācakṣate, "cakṣuṣ pradhānād āgacchati tatrâiva ca punar vigacchati" iti | tannirāsārthaṃ ca Bhagavān avocet,

“cakṣur utpadyamānaṃ na kutaścid āgacchati” iti[125] | adeśapradeśasthāḥ khalv anāgatātītaparamāṇvavijñaptisaṃjñitā dharmā iti tadāgamanagamanānupapattiḥ |

V－1－4

V－1－4－1

[268,5] kas tarhi vākyārthaḥ, “abhūtvā bhavati[126] bhūtvā ca prativigacchati” iti | dvividhaṃ hi cakṣur dravyasad eva paramārthasato ‘nyad[127] aprabuddham ubhayam |anyat prabuddham upāttakriyaṃ[128] | pūrvaṃ taddhetūn pratītya kriyām upādatte prabudhyata ity arthaḥ | upāttakriyaṃ ca dvitīyam | tad dhi kriyām ujjhat prativigacchatîty uktaṃ bhavati |

V－1－4－2

[268,10] Sāṃkhyamataniṣedhārthaṃ vā | Sāṃkhyānāṃ khalv ekaṃ kāraṇaṃ nityaṃ svāṃ jātim ajahat tena tena vikāraviśeṣātmanā bhūtvā bhūtvā ‘nyenânyena kāryaviśeṣātmanā pariṇamatîti | tatpratiṣedhārthaṃ Bhagavān avocat, cakṣur utpadyamānaṃ na kutaścid āgacchati nirudhyamānaṃ na kvacit saṃnichayaṃ gacchati” iti | cakṣur abhūtvā vartamāne ‘dhvani kṣaṇamātraṃ kriyārūpam ādāya tyaktvā punar adarśanaṃ gacchati |

V－1－4－3

[268,15] kiñcânyat, ata evānāgatāstitvasiddheḥ | yad uktam asminn eva sūtre cakṣur utpadyamānaṃ na kutaścid āgacchati” ity atrâitad ādarśitam | sad idaṃ cakṣur antaraṅgabahiraṅgakāraṇasāmagrīsannidhānopādhivaśena kriyām upādadānaṃ na kutaścid āgacchati | kutaḥ punas tatsattvam iti cet |

---

125 ADV: omit “iti”.
126 この後に daṇḍa が入っているが不要であろう。
127 ADV 268, 6: yad.
128 ADV 268, 7: anupāttakriyaṃ. Jaini は”upāttakriyaṃ”の可能性を示唆している。

mukhyasattāviṣṭe kartari śānaco vidhānān nirudhyamānavad iti ｜ tasmād durvihitavetālotthāpanavat[129] Sautrāntikaiḥ svapakṣopaghātāya sūtram etad āśrīyate ｜

evaṃ tāvad āgamāt siddham adhvatrayāstitvam ｜

V－2（268,22-277,24）

V－2－1

[268,22] yuktito 'pi, "**dhīnāṃ sagocaratvāc**[130] **ca tatsattvaṃ vartamānavat**" (305cd) ｜ tadākārayā khalu buddhyā yasyârthasya svasāmānyalakṣaṇaṃ paricchidyate, yaś ca Buddhôktanāmakāyadharmakāyābhyām[131] abhidyotyate sa paramārthato vidyate ｜ katham ｜ vartamānacakṣūrūpādivat ｜ jñānajñeyābhidhānābhidheyasaṃbandhaḥ[132] khalv akṛtaka iti śiṣṭāḥ[133] pratipadyante ‖

V－2－2

[268,27] asadālambanâpi buddhir astîti cet ｜ atrâpadiśyate

nâsadālambanā buddhir āgamād upapattitaḥ ｜ 306ab

āgamas tāvat "cakṣuḥ pratītya rūpaṃ côtpadyate cakṣurvijñānaṃ yāvan manaḥ pratītya dharmāś côtpadyate manovijñānam ｜ etāvac câitat sarvam asti" ity uktaṃ Bhagavatā ｜ tatra manovijñānaṃ traiyadhvikāsaṃskṛtadharmaviṣayā[yam] [134] , pañcavijñānakāyāḥ pratyutpanna-

---

[129] ADV 268, 19: durvihitavetāḍotthānavat. 三友 2007: 594, n.170 参照（写本は、"-ottāpanavat"とのこと）。

[130] ADV 268, 22: dhīnām agocaratvāc.

[131] Jaini の修正による。ADV 268, 24: -kāyābhyāṃ mabhidyotyate.

[132] Jaini の修正による。ADV 268, 25: -saṃbandha.

[133] Jaini の修正による。ADV 268, 26: śiṣṭāt.

[134] Jaini の修正による。ADV 269, 4: -viṣayā.

pañcaviṣayālambanāḥ | na tu kvacid asadālambanam[135] uktaṃ, nâpi tad astîti tadviṣayabuddhyabhāvaḥ |

tathôktam "yad uta[136] loke nâsti tad ahaṃ drakṣyāmi" iti vistaraḥ | [270] tathā "trayāṇāṃ sannipātaḥ sparśaḥ | sahajātā vedanā" iti vistaraḥ | etenâbhidhānābhidheyasaṃbandhaḥ pratyuktaḥ | tad evaṃ sati sūtre 'smin madhyamā pratipat pradarśitā | yad uta kenacit prakāreṇa śūnyāḥ saṃskārāḥ mithyāparikalpitena puruṣālayavijñānābhūtaparikalpādinā | kenacid aśūnyāḥ, yad uta svalakṣaṇasāmānyalakṣaṇābhyām iti | yathā Kātyāyanasūtre[137] "lokasamudayaṃ jñātvā yā loke nâsti tā sā na bhavati | lokanirodhaṃ jñātvā yā loke 'sti tā sā na bhavati itîmau dvāv antau parityajya madhyamayā pratipadā Tathāgato dharmaṃ deśayati" | na câitad dvayam astināstitvākhyam ekādhikaraṇaṃ virodhād upapadyate na ca niradhiṣṭhānam | nâpi khapuṣpaśūnyatâdhiṣṭhitam[138] |

V－2－3　敷衍的論証

V－2－3－1　兎の角

[271] yuktir api | jñānajñeyābhidhānābhidheyasaṃbandhasyâkṛtakatvāt | nâsti śaśaviṣāṇam[139] ity asya jñānasyâbhidhānasya câsadviṣayatvam iti cet | tatra brūmaḥ,

anyāpekṣye 'tha saṃbandhapratiṣedho 'śvaśṛṅgayoḥ || 306cd ||

yo 'yaṃ nâsti śaśaviṣāṇādipratiṣedho 'sya tarhi kiṃ pratiṣedhyam yady asadālambanā buddhir nâsty abhidhānaṃ vā nirabhidheyam iti | atrâpadiśyate **anyāpekṣye 'tha saṃbandhapratiṣedhaḥ** | kāryakāraṇādis trividhaḥ saṃbandho 'tra goviṣāṇādiṣu pūrvadṛṣṭaḥ śaśaviṣāṇādiṣu

---

[135] Jaini の修正による。ADV 269, 5: asālambanam.
[136] Jaini の修正による。ADV 269, 7: yadvata.
[137] Jaini の修正による。ADV 270, 5: kātyāyatana-.
[138] 三友（2007, 596, n.177）による。ADV 270, 9: khapuṣpaśūnyâdhi-.
[139] Jaini の修正による。ADV 271, 2: śaśaviṣānam.

pratiṣiddhyate | śaśaśiromātrakākāśadhātusaṃbandhadarśanād [140] | yadi śaśaśirasy api [141] viṣāṇam abhaviṣyat [142] tadvad evôpalapsyate [143] | na côpalabhyate | tasmāt saṃbandhāntarāpekṣaṃ śaśaviṣāṇaśabdagaḍumātraṃ nañā saṃbandhyantarasaṃbandhabuddhyapekṣeṇâvadyotyate, na tu kiñcid abhidhānam abhidheyaṃ vā pratiṣedhyātmanâśrīyata[144] iti siddhaṃ sarvā buddhiḥ sadviṣayêti |

etenâjātaṃ dhvastaṃ ca goviṣāṇaṃ pratyuktam | gośiromātram [145] ākāśadhātuveṣṭitaṃ [146] dṛṣṭvā [147] janiṣyate dhvastaṃ vā goviṣāṇam iti draṣṭavyam |

V－2－3－2

[271,16] trayodaśāyatanapratiṣedhabuddhiviṣayād astitvād asadālambanā buddhir astîti cet | na | Bhagavatâiva vāgvastumātram etad iti nirṇītatvāt | uktaṃ hi Bhagavatā Hastatāḍopame[148] sūtre "etāvat sarvaṃ yad uta cakṣū rūpaṃ ca yāvan mano dharmāṃś ca | yaḥ kaścid etad dvayaṃ pratyākhyāyânyad [149] dvayaṃ jñeyam abhidheyaṃ vā [272] kalpayet vāgvastumātram evâsya syāt | pṛṣṭo vā na saṃprajānīyād uttare vā saṃmoham āpadyeta | yathâpi tadaviṣayatvāt" iti | kiñca asti śaśaviṣāṇābhidhānābhidheyavan nâstyuktir api vāgvastumātraṃ viṣāṇākhyābhidheyārthasaṃbandhavihīnam | etena ṣaṣṭhaḥ skandhaḥ pratyuktaḥ |

V－2－3－3

---

[140] Jaini の修正による。ADV 271, 8-9: śaśaṣiro---darśaṇād.
[141] Jaini の修正による。ADV 271, 9: śaśaśirasyāpi.
[142] ADV 271, 9: viṣāṇama viṣyat を viṣāṇam abhaviṣyat と訂正する。
[143] ADV 271, 9: -lapsyata を-lapsyate と訂正する。
[144] Jaini の修正による。ADV 271, 11: pratiṣedhyātmanaḥ śrīyate.
[145] Jaini の修正による。ADV 271, 13: gośirasāmātram.
[146] Jaini の修正による。ADV 271, 13-14: ākāśadhātuveṣṭita.
[147] Jaini の修正による。ADV 271, 14: dṛṣṭvāḥ.
[148] Jaini は hastatāḍopame（ADV 271, 18）を hastatālopame と修正しているが、その必要はないであろう。
[149] Jaini の修正による。ADV 271, 19: pratyākhyāyād.

[272,4] kiñca pañcaskandhaviṣayaviparītajñānapratiṣedhāt | alātacakrabuddhipratiṣedhavat dvicandrabuddhipratiṣedhavac ca | uktaṃ hi Bhagavatā "ye kecid ātmêti samanupaśyantaḥ samanupaśyanti sarve ta imān eva pañcopādānaskandhān samanupaśyantaḥ samanupaśyanti" iti skandhaviṣaye câiṣā nityātmadravyabhrāntir ity avadyotyate |

V – 2 – 3 – 4

[272,9] kiñca nañaḥ sadasatpratiṣedhyaviṣayatvānupatteś ca | santaṃ tāvad arthaṃ na pratiṣeddhum[150] samarthaḥ | yadi hi santam arthaṃ śaknuyāt pratiṣeddhuṃ na rājāno hastyaśvaṃ bibhṛyur na[151] santi dasyava ity evaṃ brūyuḥ | ity ukte dasyūnām abhāvaḥ[152] syāt | na câitad asti | athâsantaṃ pratiṣedhayati, tenâbhāvapratiṣedhād bhava eva syād iti | tasmān naño na goviṣāṇādiḥ[153] nâpi śaśaviṣāṇādiḥ[154] pratiṣidhyate | kiṃ tarhi | śaśākāśadhātusaṃbandhabuddhyapekṣeṇa goviṣāṇādidravyāsaṃbandhabuddayo 'vadyotyante | siddhā sadālambanâiva buddhiḥ |

V – 2 – 3 – 5

[272,15] evam anyatrâpi ||

rūpādau vastuni kṣīṇe saty evôtpadyate matiḥ |
sâjñānasyâsadākārā[155] **śāstus tathānyacittavat** || 307 ||

[272,18] rūpādau khalv api vastuny abhyatīte saty eva buddhir utpadyate | na hy asadālambanā buddhir utpadyate | sadālambanā buddhir astîty

---

[150] Jaini の修正による。ADV 272, 10: pratiṣeddhuma.
[151] Jaini の修正による。ADV 272, 11: vibhṛyur ṇa.
[152] Jaini の修正による。ADV 272, 11: abhāva.
[153] Jaini の修正による。ADV 272, 13: goviṣāṇādi.
[154] Jaini の修正による。ADV 272, 13: śaśaḥ.
[155] ADV 272, 17: sā jñānasyāsanākārā.

upapāditam | na ca no dravyaṃ vinaśyatîty uktam | yad etad rūpādidravyaṃ pūrvānubhūtaṃ tad eva tatsmṛtyā gṛhyata ity upariṣṭād api sādhayiṣyāmaḥ |

yā tarhi niruddhadevadattānusmṛtir ghaṭānusmṛtir vā sā kathaṃ jāyate atītānāgatayor devadattaghaṭaprajñaptyupādānayor iti | atra brūmaḥ | sâpi khalu sāvidyasyâsadākārôtpadyate [156] sthāṇvādau [157] puruṣādibuddhivat | niravidyasya tu śāstus tattvākārā bhavati rūpādidharmamātrabuddhir eva | [273] tad yathā paracittavidaḥ svalakṣaṇākārā buddhir utpadyate | tatsāmarthyopādhivaśenânyathâpi [158] jānīte | tadvat tatsāmarthyena bhāvinīṃ bhūtāṃ ca saṃjñāṃ [159] rūpādiṣu devadattaghaṭalakṣaṇāṃ pratipadyata iti ||

V－2－3－6

[273,4] itaś ca sad atītānāgatam

harṣotpādabhayodvegasmṛtyutpattyaṅgabhāvataḥ[160] | 308ab

atītānāgataṃ hi mitram amitraṃ [161] vā manasi kṛtvā harṣotpādabhayādayo 'bhyupajāyante | te cânimittā na bhavitum arhanti | katham vartamānavat | tad yathā sati vartamāne mitre 'mitre vā harṣabhayādayo bhavanti nâsatîti tadvat |

V－2－3－7

kiñca

sāṅgasya śaktyabhivyakteḥ sadīpaghaṭarūpavat || 308cd ||

---

[156] ADV 272, 24: sāvidyāsyâ-.
[157] Jaini の修正による。ADV 272, 24: sthānvādau.
[158] Jaini の修正による。ADV 273, 1: tatsāmarthyopādhiśenâ-.
[159] Jaini の修正による。ADV 273, 2: saṃjñā.
[160] Jaini の修正による。ADV 273, 5: -utpatyaṅgabhāvataḥ.
[161] Jaini の修正による。ADV 273, 6: mitram amitrau.

[273,11] vidyamānasya khalv anāgatasya vastuno 'tītapratyutpannasahakārikāraṇasāmagrīgṛhītasya śaktimātram āvirbhavati | katham | sadīpaghaṭarūpavat | tad yathā tamasi vidyamānasya ghaṭarūpasya svātmodbhāvanaśaktiḥ pradīpādikāraṇasāmagrīsannidhāne sati bhavati tadvad iti |

V – 2 – 3 – 8

[273,14] itaś câsty anāgatam ||

janīhakartṛsādhyatvāt[162] **pañcabhāvavikāravat** | 309ab |

tad yathâsti[163] vipariṇamate vardhate kṣīyate vinaśyatîti sati mukhyasattāviṣṭe kartary ete[164] pañca bhāvavikārā bhavanti | tadvaj jāyata ity ayam api ṣaṣṭhaḥ bhāvavikāraḥ sati mukhysattāviṣṭe[165] kartari bhavitum arhatîti | kiñca jāyamānatā sattā naśyatā nâsāmānādhikaraṇye saty ananyatāpattisaṅkaradoṣaprasaṅgāt | vaiyadhikaraṇyābhyupagame saṃbandhābhāvād ekatra tadvyapadeśānupapattiḥ | kiñca jāyamānatādikriyābhāve 'stitvāyogāt | katham śaśaviṣāṇavad iti | upacārasattêti cet | na | mukhyasattāyāṃ satyām upacārasadbhāvāt vakṣyamāṇadoṣāc[166] ca |

V – 2 – 3 – 9

[273,23] itaś câsti

[162] ADV 273, 15: janīhākartṛ. 和訳註参照。
[163] ADV 273, 16: tad yathā asti.
[164] ADV 273,17: kartari ete.
[165] ADV 273, 18: mukhyāviṣṭe. 三友 2007: 601, n.186 によれば、写本は、"mukhyasattāviṣṭe"。
[166] Jaini の修正による。ADV 273, 22: vakṣyamāna-.

sataḥ kriyāṅgatādṛṣṭer[167] **vikāryaprāpyakarmavat** ‖ 309cd ‖

tad yathā vikārye karmaṇi sati karaṇaṃ dṛṣṭaṃ kāśāt kaṭīkaroti | prāpye ca karmaṇi sati grāmaṃ gacchati devadattaḥ sūryaṃ ca paśyatîti gamanadṛśikriye sati karmaṇi bhavataḥ | tadvan nirvartye 'pi karmaṇi mukhyadravyāstitve sati Devadattakartṛkā ghaṭakriyopapadyata iti ‖

V－2－3－10

[273,29] Sāṃkhyaḥ paśyati vidyamānam eva jāyate | tad yathā kṣīre vidyamānaṃ dadhi, kāryakāraṇayor ekatvāt | taṃ praty apadiśyate

[274] **dvitīyaṃ janma jātasya vastuno nôpapadyate** | 310ab |

yadi khalu kṣīre dadhyādayo vikārāḥ santi bīje câṅkurādayaḥ śukraśoṇite[168] ca kalalādayaḥ, teṣāṃ jātānāṃ kṣīrādivaj janma punar na[169] yujyate | yathā ca na yujyate tathā pūrvam evâviṣkṛtam |

V－2－3－11

[274,5] Vaiśeṣiko manyate kapāleṣv avidyamānaṃ ghaṭadravyaṃ tantuṣu câvidyamānaṃ paṭadravyaṃ kapālatantusaṃyogād utpadyate | gauṇyā ca kalpanayā viprakṛtāvasthāviṣayayā [170] janikartṛsattā vyapadiśyata iti | asyâpy avayavidravyaṃ sahâvayavaiḥ pūrvam eva vihitottaram | yat punar uktam upacārasattayā janikartôpadiśyata[171] ity atra brūmaḥ

---

[167] Jaini の修正による。ADV 273, 24: kṛyā-.
[168] Jaini の修正による。ADV 274, 3: śukraśonite.
[169] Jaini の修正による。ADV 274, 3: ṇa.
[170] ADV 274, 6-7: viprakṛtā(ṣṭā?)vasthāviṣayā.
[171] ADV 274, 8: janikarttôpadiśyata

mukhyasattā guṇābhāvād gauṇī[172] **sattā na vidyate** || 310cd ||

na hi mukhyasattāyāṃ[173] guṇābhāve 'vayavābhāve vā kāraṇeṣu prāg-utpattyabhāve vā kāryasattopacāro yujyate ||

kasmāt

sādharmye sati tadvṛtter vyāhāraṃ madhuroktivat | 311ab |

tad yathā madhuravāg devadatta[174] iti vāci mādhuryaguṇayuktasya guḍadravyasya madhuno vā sādharmyam abhilaṣaṇīyatā vidyate ity ato vāci mādhuryaśabdaḥ prayujyate | kanyāmukhe ca candrakāntisādṛśyaṃ dṛṣṭvā candraśabdaḥ prayujyate | vāhīke ca jāḍyasādharmyād gośabdaḥ prayujyate gaur ayaṃ vāhīka ity evamādi | na ca tathā kaścid guṇāvayava-gandho 'pi tantuṣu tatsaṃyoge vā prāgutpattyabhāve nirātmanaḥ kāryasyâstîti | na ca kāryaṃ kiñcid īṣatkṛtam upapadyate | niṣṭhāsa-ttaikakālābhyupagamāt | prāgavyapadeśyaṃ vastumātraṃ viprakṛtaṃ jāyata iti cet | na | uktottaratvāt | mama tu candrakoṭīprakāśalakṣaṇo dṛṣṭānto vidyate |

āviṣṭaliṅgamukhyasya janmêṣṭaṃ dārakādivat || 311cd ||

ayaṃ hi janir abhiniṣkramaṇādivacano nâsatprādurbhāvavacanaḥ | katham **dārakādivat** [175] | tad yathā dārako mukhyasattāviṣṭo mātṛkurkṣeniṣkramaṇe[176] jāyata ity ucyate | tadvat atrâpîti |

---

[172] Jaini の修正による。ADV 274, 9: gaunī.
[173] Jaini の修正による。ADV 274, 10: mukhyasattā.
[174] ADV 274, 14: madhuravāgdevadatta.
[175] Jaini の修正による。ADV 274, 24: dārikādivat.
[176] ADV 274, 24: -niṣkramane.

[274,26] Dārṣṭāntikaḥ khalu brūte kāraṇaśaktiṣu nirātmakajanikartrupacāraḥ pravartate | taṃ prati brūmaḥ

syāt khapuṣpaiḥ kham utphullaṃ syāñ jaṭālaś ca darduraḥ |
svabhāvo yadi bhāvanāṃ prāg abhūtvā samudbhavet || 312 ||

na hy asataḥ kasyacic chaśaviṣāṇāder utpādo bhavati nairātmyāviśeṣasarvā-[275]sadutpattiprasaṅgāt | taddhetukānāṃ ca jāyamānajātanaśyatkāleṣv ātmāstitvasthitaśaktīnām anupapatteḥ | kāraṇānāṃ ca kāryātmakatvāt[177] prāg utpatter asattvam, asattvād anupapattidoṣāpattiḥ | kutaś ca nâbhāvo bhāvībhavati, sthitiśaktikriyāyogāt[178] ||

katham ayoga iti cet | tad āviṣkriyate

sthitiśaktiparityaktān dharmān nāśānvitodayāt |
vada somya kathaṃ yāti pratītyā vastu vastutām || 313 ||

iha khalu bhavatām ahetuko vināśaḥ sarvotpattimatāṃ nityasaṃnihitaḥ | tasmiṃś ca sati janmasthitiśaktikriyā na vidyante, virodhāt | tāsv asatīṣu kāraṇam api caiva[179] vinaṣṭam | tad asminn asati kiṃ pratītyâsan nirātmakaṃ vastu vastutāṃ yātîty ācakṣva | kathaṃ te kāryaṃ kāraṇaṃ vôpapadyate, satāṃ hi saṃjñāsaṃjñijñānajñeyakriyākāraṇahetuphalādīnām anyonyāpekṣaprajñapteḥ | atha tavâbhāvo na kaścid asti bhāvavirodhī, kathaṃ tarhi sa bhāvo naṣṭa ity ucyate, tasmād bhavato vāṅmātram etat, mama tu vidyamānayor evôpakāryupakāryabhāvo[180] yuktaḥ ||

yasmāt

---

[177] Jaini の修正による。ADV 275, 2: kāryātmakatvā.
[178] ADV 275, 4: -kriyā[']yogāt.
[179] Jaini の修正による。ADV 275, 10: ceva.
[180] ADV 275, 14: -pakāryupakāra[ka]bhāvo を-pakāryupakāryabhāvo と訂正する。

[276] **loke dṛṣṭaḥ sator eva parasparam anugrahaḥ |**
tadvad evôpaghāto ‘pi nâśvaśṛṅgāhipādayoḥ || 314 ||

anugrahopaghātayoś ca kāryakāraṇasaṃbandhopacāraś ca sator eva bhavatîty ā stanandhayebhyaḥ prasiddham etat, nâsatoḥ na ca sadasator iti ||

V – 2 – 3 – 13

[276,5] Vaitulikaḥ kalpayati

yat pratītyasamutpannaṃ tat svabhāvān na vidyate | 315ab |

yat khalu niḥsvabhāvaṃ[181] nirātmakaṃ hetūn pratītya jāyate tasya khalu svabhāvo nâsti | na hi tatkāraṇeṣu pratyekam avasthitaṃ nâpi bhāgaśo nâpy anyatra kvacit | nâpi hetusamudāye tadrūpābhāvāt | yac ca na kvacid asti tat katamena svabhāvenôtpatsyata iti nâsti svabhāvaḥ | yasya ca nâsti svabhāvaḥ tat katham astîty ucyate, tasmād alātacakravan niḥsvabhāvatvāt sarvadharmā nirātmāna iti |

taṃ praty apadiśyate

[277] **na vidyate svabhāvād yad vidyate tat tato ‘nyathā**
|| 315cd ||

brahmodyam etat, yat pratītyasamutpannaṃ tat saṃvṛtyātmanā vidyate vanasaṃghādivat | yat paramārthato vidyate tasya pratītyâvasthāśaktimūrti-kriyādimātram utpadyata iti ||

---

[181] ADV 276, 7: nisvabhāvaṃ を niḥsvabhāvaṃ と訂正する。

tasya tarhi hetavo vidyamānasya kam upakāraṃ kurvantîti, atrâbhidhīyate | na khalu dravyasvabhāvāstitvaṃ prati kañcid upakāraṃ kurvanti | na ca svabhāvasyâpekṣya prajñaptiḥ | kiṃ tarhi

prakurvanti daśāmātraṃ hetavo vastunaḥ sataḥ |
rājatvaṃ rājaputrasya sātmakasyâiva mantriṇaḥ || 316 ||

tad yathâbhijātasya rājaputrasya vidyamānasya mantriṇaḥ sabala-samudayāḥ parigrahānugrahamātreṇôpakurvanto rājatvaṃ kurvanty evam anāgatasya vastunaḥ sato hetupratyayāḥ sametya lakṣaṇamātraṃ[182] varta-mānākhyam[183] aiśvaryādhipatyaṃ kurvantîty avaboddhavyam ||

anye punar varṇayanti

dharmāṇāṃ sati sāmagrye sāmarthyam upajāyate |
citānāṃ paramāṇūnāṃ[184] yadvad ātmopalambhane || 317 ||

yathā khalu paramāṇusaṃcayaś [185] cakṣuṣā gr̥hyate, pratyekaṃ paramāṇavo[186] na gr̥hyante, tathā kāraṇasāmagrye sati dharmāṇāṃ kri-yāsāmarthyam upajāyata iti draṣṭavyam |

bhadanta-Kumāralātaḥ paśyati, vātāyanapraviṣṭasyântaḥpārśvadvaye[187] ‘pi truṭayaḥ santi | raśmigatasya tu darśanam asya truṭe raśmipārśvagās tv anumeyāḥ | etena vyākhyātaṃ dharmāṇām adhvayor dvayor astitvam | prāpya jñānātiśayaṃ munayaḥ paśyanti, sā[188] tu dhīr hi trikajā ||

---

[182] Jaini の訂正による。ADV 277, 12: lakṣaṇamātra.
[183] Jaini の訂正による。ADV 277, 12: mānākhyam.
[184] Jaini の訂正による。ADV 277, 16: paramānūnāṃ.
[185] Jaini の訂正による。ADV 277, 17: paramānu-.
[186] Jaini の訂正による。ADV 277, 17: paramānavo.
[187] Jaini の訂正による。ADV 277, 20: -praviṣṭasyāṃntaḥ-.
[188] ADV 277 24: tās を sā と訂正する。

V－ 3 (278,1-279,6)

[278] yas tu manyate ‘tītaṃ karmâbhāvībhavaty anāgataṃ ca na vidyate taṃ praty apadiśyate

karmâtītam asad yasya phalaṃ bhāvi karoty asat |
vyaktaṃ vandhyāsutas tasya jāyate vyantarātmajāt || 318 ||

na hi bhavato vartamānakālāstitvam upapadyate, atītānāgata-hetuphalābhāvāt, vandhyāvyantaraputrajanmavat ||

atra pratyavatiṣṭante Dārṣṭāntikāḥ, na brūmaḥ sarvathâtītaṃ na vidyate | kiṃ tarhi dravyātmanā na vidyate prajñaptyātmanā tu sad iti | tatra prati-samādhīyate

[279] **nāmasallakṣaṇābhāvād dravyasatyāṅkasiddhitaḥ** |
anāgatābhyatītasya nâsti prajñaptisatyatā || 319 ||

sopādānaṃ hi sarvaṃ prajñaptisat | na ca vartamānam upādānam upapadyate | anāgatābhyatītasya tasmān nirupādānasya prajñaptyabhāvād dravyasad[189] etat |

yadi tarhy anāgataṃ cakṣurādidravyaṃ vidyate kasmān na paśyati na dṛśyate na vijānāti, na vyaktaṃ kāritrābhāvād iti[190] ||

VI (279,7-282,8)

tad atra kośakāraḥ praśnayati

ko vighnaḥ | 320a1|

yadi cakṣur vidyate kiṃ na paśyati, vayaṃ brūmaḥ

---

[189] ADV 279, 4: asad を dravyasad と訂正する。
[190] Jaini の訂正による。ADV 279, 6: kāritrābhāvādīti.

aṅgavaikalyam | 320a2 |

dṛṣṭaṃ hi pradīpādyaṅgavaikalye vartamānasyâpi cakṣuṣo rūpādarśanam |

sa pratyācaṣṭe sarvasya sadāstitve kuto 'ṅgavaikalyam, vayam ācakṣmahe

na tatsarvāstitā sadā | 320b |

traiyadhvikāni khalv atrâṅgāni vivakṣitāni | tatra keṣāñcid asāṃnidhyaṃ bhavati tadvaikalyāt kāritraṃ na karotîti |

sa pratyācaṣṭe

tat kathaṃ | 320c1 |

[280] kiṃ lakṣaṇāt kāritraṃ tato vā dravyāt, kim anyad āhosvid ananyad iti,

tatra vayaṃ prativadmaḥ

śrūyatāṃ sadbhyaḥ | 320c2 |

chāttrāsanam[191] adhyāsya na hi sarvajñapravacanagāmbhīryaṃ sad eva kenâpi lokena śakyaṃ tarkamātreṇâvaboddhum |yasmāt somya

durbodhā khalu dharmatā || 320d ||

tathâpi tu śrūyatām ||

---

191 ADV280, 4: chātra を chāttra と訂正する。三友 2007: 613, n.298 参照。

[281] **vartamānādhvasampātāt sāmagryāṅgaparigrahāt |**
labdhaśakteḥ phalākṣepaḥ kāritram abhidhīyate || 321 ||

anāgatasya khalu dharmasya vartamānādhvasampātād antaraṅgabahir-aṅgasāmagryāṅgaparigrahāt labdhasāmarthyasya dharmasya yaḥ phalākṣepas tat kāritram ity ucyate | sā ca vartamānakālā vṛttiḥ kāritram ity ākhyāyate | tatra yo brūte 'nanyat kāritram iti tasya dravyasvabhāvaparityāgaḥ prasajyate ||

śāstre tu khalu

na vartamānatā rūpam atītājātatā[192] **na ca |**
yato 'to nâdhvasaṃcārād rūpātmānyathatêṣyate || 322 ||

yadi dravyātmano nânyathātvaṃ kiṃ tarhi hetūn[193] pratītya jāyate, brūmaḥ

avasthā jāyate kācid vidyamānasya vastunaḥ |
tathā śaktis tathā velā tathā sattā tathā kriyā || 323 ||

tatrâvasthā śaktipracayakriyāpekṣā dravyavaśā śaktiḥ kriyāpekṣākṛtaṃ sāmarthyam | kriyânāgataphalā [194] dravyavṛttivelā [195] kālo vartamānākhyaḥ[196] | mūrtiḥ paramāṇupracayaviśeṣaḥ[197] | sattā prabodhā-

---

[192] Jaini の訂正による。ADV 281, 8: -jānatā.
[193] Jaini の訂正による。ADV 281, 10: hetū.
[194] Jaini の訂正による。ADV 281, 14: kriyāṇāgataphalā. なお、この後にダヌダがあるが削除する。
[195] Jaini の訂正による。ADV 281, 14: dravyavṛttivelā.
[196] Jaini の訂正による。ADV 281, 15: -khye.
[197] Jaini の訂正による。ADV 281, 15: paramānu-.

khyaṃ prajñaptisatyam | iti sarvam etad antaraṅgabahiraṅgakāraṇa-sāmagrīsannidhānāpekṣāsaktasvarūpam ||

[282] atra sarvāstivādavibhraṣṭir Vaituliko nirāha[198], vayam api trīn svabhāvān kalpayiṣyāmaḥ | tasmai prativaktavyam

parikalpair jagad vyāptaṃ mūrkhacittānurañjibhiḥ |
yas tu vidvanmanogrāhī parikalpaḥ sa durlabhaḥ || 324 ||

te khalv ete bhavatkalpitās trayaḥ svabhāvāḥ pūrvam eva pratyūḍhāḥ | evam anye 'py asatparikalpāḥ protsārayitavyāḥ | ity etad aparam adhva-saṃmohāṅkanāsthānaṃ[199] kośakārakasyêti |

gatam etat prāsaṅgikaṃ prakaraṇam | śāstram evânuvartatām ||

（ADV 終）

[198] Jaini の訂正による。ADV 282, 1: nirāhaḥ.
[199] Jaini の訂正による。ADV 282, 6: adhvasamoha-.

第５章 TS『真実集成』(寂護)・TSP『真実集成釈』(蓮華戒)

TSP 613, 20-633, 12 ad TS 1785-1855 (ch. 21: Traikākyaparīkṣā)

第１節　和訳[1]　―第 21 章「三時の考察」―

（１）構成

I	序　TS1785
II	三世実有説と二教証・二理証　TS1786-1789
II－1	説一切有部の四論師説
II－1－1	ダルマトラータ説
II－1－2	ゴーシャカ説
II－1－3	ヴァスミトラ説
II－1－4	ブッダデーヴァ説
II－2－1	ダルマトラータ説批判
II－2－2	ゴーシャカ説批判
II－2－3	ヴァスミトラ説は後述
II－2－4	ブッダデーヴァ説批判
II－2－5	補足説明
II－3－1	第一理証　TS1787ab
II－3－2	第二教証　TS1787cd
II－3－3	第二理証　TS1788ab
II－3－4	第三理証　TS1788cd
II－3－5	第一教証　TS1789
III	作用説とその批判　TS1790-1841
III－1	説一切有部の作用説　TS1790-1792
III－2	作用説批判　TS1793-1841

[1] B を底本とした。なお、B, G, J の当該章は次の通りである。B 613, 20 - 633, 12 ad TS 1785-1855. G 503, 20 - 519, 24 ad TS 1786-1856. J 191b6-196a7 ad TS J 90b3-94a3.

III – 2 – 1	存在要素と作用との異同	TS1793-1802
III – 2 – 1 – 1	存在要素と作用とが別ものである場合	TS1793-1797
III – 2 – 1 – 1a		
III – 2 – 1 – 2	作用と存在要素とが別ものでない場合	TS1798-1800
III – 2 – 1 – 2 a		
III – 2 – 1 – 2 b		
III – 2 – 1 – 3	結論	TS1801-1802
III – 2 – 2	サンガバドラ説とその批判	TS1803-1819
III – 2 – 2 – 1	牴触性をめぐって	TS1803-1805
III – 2 – 2 – 2	連続体をめぐって	TS1806-1808
III – 2 – 2 – 3	有部の立場—引果力と位態—	TS1809-1814
III – 2 – 2 – 4	有部批判 —位態と「本無今有」—	TS1815-1819
IV	因果効力をもつものが真の実在	TS1820
IV – 1	過去の同類因等、有為の四相	TS1821-1827
IV – 1– 1	過去の同類因等	TS1821-1822
IV – 1– 2	有為の四相	TS1823
IV – 1– 2 – 1	〈生〉と存在要素の特性	TS182-1827
IV – 1– 2 – 2	〈生〉と存在要素	TS1828-1829
IV – 2	過去・未来のものと瞬間的存在	TS1830-1833
IV – 2– 1	瞬間的存在であるとき	TS1830-1831
IV – 2– 2	瞬間的存在でないとき	TS1832
IV – 2– 3	推論式	TS1833
IV – 3	過去・未来のものと効果的作用能力	TS1834-1841
IV – 3– 1	効果的作用能力をもつとき	TS1834-1840
IV – 3– 2	効果的作用能力をもたないとき	TS1841
V	教証・理証批判	TS1842
V– 1	第一教証批判	TS1843-44
V– 2	第二教証・第一理証批判	TS1845-1848
V– 3	第二理証批判	TS1849-1851
V– 4	第三理証批判	TS1852-1855

（２）和訳

I　序　TS1785

［613,20］「［三時に］わたって［実在すること］なき［縁起］」[2] ということを立証するために、「**金**」云々と［シャーンタラクシタ師は[3]］言う。

金の存続（anugama）と同様に、［過去・未来・現在の三］
時に存続しながら様相（avasthā）[4]は相違するような存在が、

---

[2] よく知られているように、TS の各章はすべて一切智者（世尊）が説いた縁起を各観点から解説するという形になっている。そのことは TS の序章で述べられるが、第 21 章（三時の考察）については、TS 4a に──［過去・現在・未来の三時に］わたって［実在すること］なき［縁起を説く一切智者に敬礼して…］──とある。

これに対するカマラシーラの註釈 TSP（G 17, 13-20）は以下の通りである。──また、［三時に］わたる［蘊等の実在］を主張する一部の［仏教徒達、即ち］説一切有部が言うように、蘊等（＝蘊・処・界）は、その本性が［相互に］混合することはなくとも、［過去・現在・未来の三］時においてその本性を捨てずにあるということがあろうか。［この問いに対して］そのようなことはないと［言おうとして、序章で］「**［三時］にわたって［実在すること］なき［縁起…］**」と［シャーンタラクシタ師は］言ったのである。その意味は、「他方、もし［三時に］わたって［実在すること］があるなら、［常に］一切の本性をもって存在することになるから、何かを生ぜしめるものは全く何もないということになってしまう。従って、縁起そのものが不合理ということになってしまう」ということである。［TS 4a を］語義分析すれば、「［三時に］わたって［実在すること］即ち、蘊等が三時を［本性をもったまま未来から現在へ現在から過去へ］移行することはそこには存在しないような［縁起］」ということである。そして、世尊は次のように説かれた。『眼は生じるときどこからもやってはこないし、消滅するときどこにも集まってはいかないように、比丘らよ、眼は前に無くて今有り、有り終わって消滅するのである』と（本書第２章参照）。以上が「三時の考察」（第 21 章）の主旨である。」

[3] 以下、シャーンタラクシタを指すときは、単に「師」と表記する。

[4] この avasthā（様相）は後出のヴァスミトラ（世友）説にある avasthā ではなく、『倶舎論』のダルマトラータ（法救）説にある bhāva（様態）と同義であると考えられる。

一部の仏教徒達[5]によっても認められているのではないのか[6]。
‖ 1785 ‖

［613,21］「しかし、どんなものにも持続性（avasthāna）はない」[7]という［師の言説］に対して、次のような論難がなされる。［即ち］「ダルマトラータ（法救）等の一部の仏教徒達によっても、**金の存続と同様に、**様相（avasthā）の違いに基づいて、［過去・未来・現在の］三時に持続する（avasthita）存在が認められるのに、『しかし、どんなものにも持続性はない』とどうして言われるのか」と。［1785］

II　三世実有説と二教証・二理証　TS1786-1789

［614,7］同じことを第 2 のシュローカ（詩句）[8]で示す。

様態の違いはあっても、金は［その］**色**（いろ）[9]**を**［三］**時において棄てないように、この存在は**［三時において］**実在性を捨てない**[10]**。‖ 1786 ‖**

さもなければ、過去のもの・未来のものに関する認識は対象をもたないことになってしまう[11]**。また、**［さもなければ、

[5] 『倶舎論』に見える説一切有部を指すが、「金」の比喩は『倶舎論』に見える四大論師のうちのダルマトラータ（法救）のものである。

[6] G 503, 20: hemno ‘nugamasāmyena <u>sthiratvaṃ manyate tadā</u>. 下線部の b 句は TS 1783d に一致。J 190b3-4: <u>hemānugamasāmānyena</u> trikārānugato nanu. 下線部の a 句は 9 音節ある。本章第 2 節該当箇所参照。

[7] この句は、TS 1782d （第 20 章） の引用で、直前の第 20 章のシャーンタラクシタの主張である。B 613, 21 では 1780 の引用とするが誤り。

[8] TS 1786 を指す。

[9] varṇyaṃ を varṇaṃ と訂正。

[10] 註 3, 4 参照。

[11] 『倶舎論』の第一理証に当たる。

その過去、未来のものの］**二つに依拠する認識がどうして守護者（世尊）によって説かれたのか**[12]**。**‖**1787**‖

また、［さもなければ、］**全く存在しない過去の行為がどうして結果を与えると認められようか**[13]**。また、**［さもなければ、］**過去・未来のものについて判別された認識が瑜伽行者達にあろうか**[14]**。**‖**1788**‖

従って、過去・未来のものは、実体の排除の対象となるものではない。なぜなら、［過去・未来のものは］**現在のものと同様に、時間によって包摂された物質**[15]**等**［の五蘊］**の存在等であるからである**[16]**。**‖**1789**‖

II－1　説一切有部の四論師説

II－1－1　ダルマトラータ説

［614,7］そのうち、大徳ダルマトラータ（法救）は様態（bhāva）の違いを主張する。彼は「存在要素が［三］時にあるとき、［存在要素の］様態の違いがあるだけであって、実体に［違いがあるわけでは］ない」と説いたという。例えば、金という実体のもつ、腕輪・腕環・耳輪等と表現される根拠となる形質に違いはあるが、金に［違い］はないように、未来等の様態によって存在要素に違いがある［という］。即ち、存在要素は未来の様態を捨てて現在の様態を得、現在の様態を捨てて過去の様態を得るが、実体［としての存在要素］に違いはない。どんなときにも実体は［実体で

---

[12] 『倶舎論』の第二教証に当たる。
[13] 『倶舎論』の第二理証に当たる。
[14] 『倶舎論』にはこの瑜伽行者の認識に関する議論は出ない。そこで、ここでは第三理証と考えておく。但し、『倶舎論』で第一教証として引用される経典は TS 1789 の註釈（TSP）に現れることから、この瑜伽行者の認識は第一教証の内容を敷衍したものと解することもできる。
[15] 五蘊のうちの色（しき）は物質的存在全般を意味するが、冗長を避けるため「物質」と訳す。
[16] 推論式である。TSP ad 1789 参照。

あることを］逸脱しないからである。さもなければ、過去・現在・未来のものは各々別のものということになってしまおう。ところで、彼によっては様態とは何であると認められているか。それによって過去等であるという表現や認識が生じるような特定の形質である。

II－1－2　ゴーシャカ説

［614,15］大徳ゴーシャカ（妙音）は特徴の違いを主張する。彼は「存在要素が［三］時にあるとき、過去［の存在要素］は過去という特徴と結合しているが、未来・現在という特徴と乖離しているわけではない。例えば、男が一人の女に愛着しているとき他の女に愛着がないとはいえないように[17]。同様に、未来・現在［の存在要素］についても同様に語られるべきである」［と］説いたという。実に彼の説明は、過去等という特徴の生起[18]に拠っているから、先［の説］とは異なる。

II－1－3　ヴァスミトラ説

［614,19］大徳ヴァスミトラは位態[19]の違いを主張する。彼は「存在要素は［三］時にあるとき、各々の位態に達して各々別のものと指し示される。別の位態に拠るものであって、実体［の違い］に拠るものではない。実体は三時において区別されないからである。」と説いたという。例えば、土玉[20]が一の位に置かれると一と呼ばれ、十の位では十、千の位では千と［呼ばれる］ように、作用中の存在は現在であり、作用し終えた［存在］は過去であり、未作用の［存在］は未来［と呼ばれる］。実に[21]彼の説明は、土玉に関する［説明］と同様に、位態に拠るものである。なぜなら、

---

[17] cf. SA 470, 2-3.

[18] 様態（形質）の変化ではなく、各々の特徴の生起という点で見解が異なるということ。cf. SA 469, 25; 469, 31-32.

[19] 訳語としては、他に「況位」「境位」「位置」などが考えられる。

[20] AKBh 296, 20 では vartikā（玉）。

[21] TSP 614, 23: asya vyavasthā-...を asya hy avasthā-...と訂正する。cf. TSP 614, 18: asya hy atītādilakṣaṇavṛttilābhāpekṣo vyavahāra... なお、チベット語訳によると、前者（614, 23）は'di yang...、後者（614, 18）は'di ni...であることから、ここは、"asyāpy avasthā-..." かもしれない。

土玉に本性の違いがあるからではなく、特定の場所と結合することから数を示す別の名称が生じるからである[22]。

II－1－4　ブッダデーヴァ説

［615,3］大徳ブッダデーヴァ（覚天）は見方の違いを主張する。彼は「存在要素は［三］時にあるとき、［時間的］前後に拠って各々別のものと言われる」と説いたという。例えば、一人の女が［その娘から見て］母と言われ、［母から見て］娘と呼ばれるように、と。彼の説明は［時間的］前後に拠るものである。或るものに前のものだけ（過去・現在）があって後のものがないとき、それは未来であり、或るものに前のもの（過去）と後のもの（未来）とがあるとき、それは現在であり、或るものに後のものだけ（現在・未来）があって前のものがないとき、それは過去である。

［615,7］以上が、様態・特徴・位態・見方の違いとする［主張］と名付けられた四種の説一切有部［の説］である。

II－2－1　ダルマトラータ説批判

［615,8］そのうち、最初［の主張者（ダルマトラータ）］は〈転変〉を説くからサーンキヤ派の見解[23]と異ならない。それ（転変）の否定はこれ（最初の主張者）の［否定］でもあると見るべきである。即ち、転変は前の本性を捨てずに起こるか、捨てて起こるかのいずれかである。もし捨てずに［起こる］なら時間の混同に陥る。また、もし捨てて［起こる］なら［本性は］常にあるということと矛盾する。[24]

II－2－2　ゴーシャカ説批判

［615,12］第二の主張者（ゴーシャカ）にもこれと同じ［時間の］混同がある。すべて　［の存在要素］がすべての特徴と結合するからである。

---

[22] cf. SA 470, 3

[23] サーンキヤ派批判は、TS & TSP の第１章　(Prakṛtiparīkṣā)　で行われる。

[24] 様態　(bhāva)　の変化を伴う存在要素がもし前の本性を捨てずに起こるなら時間の混同に陥る。また、もし捨てて起こるなら本性は常にあるということと矛盾する、ということ。

ただし、［喩例で］男[25]には［それとは］別ものである愛着が［或る女に］現に起こっているから「［男は］愛着している」と言われ、［別の女には］ただ愛着の具備があるから愛着がないわけではない［と言いうる］が、存在要素には、特徴が現に起こることがあるとか特徴の具備［即ち］〈得〉という［別の存在要素］があるとかということはない[26]。特徴が［存在要素とは］別ものであるという過失となるからである。〈得〉と同様に[27]。喩例（男と愛着）と喩えられるもの（存在要素と特徴）とには一致がない。

II－2－3　ヴァスミトラ説批判は後述

［615,16］第三［の主張者（ヴァスミトラ）］には作用による時間の確立[28]があるから、それ（作用）の批判を［後に］詳しく述べられる。

II－2－4　ブッダデーヴァ説批判

［615,17］第四［の主張者（ブッダデーヴァ）］にも、同一の時間に三時があるという過失となる。即ち、過去時において前後の瞬間が過去・未来であり、真中の瞬間が現在と。以上、これら［第一、二、四説］の批判の行先は明示された。

II－2－5　補足説明

［615,20］［そこで、以下には］第三［説］から、広く三時の考察が始められる。

ただし、［TS1786 では第一説のみが取り上げられているかのようであるが、それは］金の喩例によって［有部の］定説［の一つだけ］が取り上げられただけであって、ダルマトラータの見解だけが［有部の定説として］想定されているわけではない。また、［この後の TS1790 では］次のように「作用によってこの三時の区別が構想されるが、…」と説かれており、

---

[25] ruṣas を puruṣas と訂正する。cf. G 505, 4: puruṣas.
[26] cf. SA 469, 25; 469, 31-32
[27] 推論式。なお、「愛着」(raga)・「得」(prāpti) はいずれも七十五法の一つである（前者は心所、後者は心不相応行）。
[28] adhvasv avasthêti を adhvavyavasthêti と訂正する。cf. G 505, 7.

作用による時間の確立はダルマトラータではなくヴァスミトラのものである。［1786］

II－3－1　第一理証[29]　TS1787ab

［615,24］そこでもし過去・未来のものがなければ、「大平等王が出現した」「転輪聖王シャンカが出現するであろう」という、**過去・未来のものの**認識は対象のないものになってしまう。また、それゆえに認識そのものもないということになろう。対象がないから、という意味である。即ち、認識は実在（vastu）について知らしめることを本性とするが、知られるものが存在しないときはこれ（認識）によって何物も知られないから無認識ということになってしまう。［**1787ab**］

II－3－2　第二教証　TS1787cd

［616,6］また、「認識は二に依拠して生じる。二とは何か。眼と色ないし意と法とである」[30]と世尊によって説かれたが、もし過去・未来のものがなければ、それらを対象とする認識は二に依拠して生じることはないから、経典と矛盾することになる。［**1787cd**］

II－3－3　第二理証　TS1788ab

［616,9］また、過去の行為（＝業）がもし**全く存在しない**［即ち］存在性を欠いているなら、それは結果を与えないであろう。なぜなら、結果が生じるときに異熟因が存在しないことになるからである。また、存在しないものには結果を生起させる能力はない。存在しないものは一切の能力を欠いているからである。［1788ab］

II－3－4　第三理証[31]　TS1788cd

---

[29] 第一教証から第二理証まで『倶舎論』での呼称をここでも用いる。順序は、ここでは第一理証、第二教証、第二理証、第一教証となっている。なお、第一理証と第二教証とは趣旨は結局同一である。

[30] AKBh 295, 14.

[31] 本章和訳註 14 参照。

[616,12] また、[もし過去・未来のものがなければ]「マーンダートリ王が出現した」「ブラフマダッタ王が出現した」「転輪聖王シャンカが出現するであろう」「弥勒如来が出現するであろう」等と識別して、過去・未来等のものを対象とする**区別された**認識が**瑜伽行者に**生じることはないであろう。なぜなら、存在しないものを識別することはないからである。[1788cd]

II－3－5　第一教証　TS1789

[616,14] 従って[32]、シュリーハルシャ王等の過去・未来の諸存在はその実体を否定されるものではない。[1789ab]

[616,15] なぜなら、**時間によって包摂された物質等**[の五蘊](TS1789c)として説かれたからである。現在のものと同様に。実に、世尊によって「比丘らよ、もし過去の色がなかったなら、[教えを]聞いた聖声聞は過去の色に対する関心を捨てるということがないであろう。過去の色があるからこそ[教えを]聞いた聖声聞は過去の色に対する関心を捨てるのである」[33]云々と説かれた。同様に、「過去・未来等の[34][物質]であれおよそ物質(色)であるものはすべてまとめて色蘊として数えられる」云々と[も説かれた][35]。「時間による包摂があるもの」というのが「**時間によって包摂された**」であり、[そのような]「**物質等**」ということである。「**等**」という語によって感受(受)等[36]が把握される。それら[五蘊]の「**存在**」とは「物質等[の五蘊]であること」、である。ここ(＝「存在」という語)にも[付随している]「**等**」という語によって、[物質等の五蘊は]苦・集・無常・無我等であると[も]説かれたからであることが把握される。[1789cd]

---

[32] yasmād を tasmād と訂正する。TS 1789b の tataḥ の言い換えである。G 505, 23; J 192b3: tasmād. P117a2; D82a4: de lta bas na.

[33] cf. AKBh 295, 9-12. 本庄 2014: 671-672 参照。

[34] atītam anāgatādi を atītānāgatādi と訂正。

[35] この句は上の経中には見えない。

[36] 「感受等」とは、vedanā(受＝感受)・saṃjñā(想＝表象)・saṃskāra(行＝意欲)・vijñāna(識＝認識)の rūpa(色＝物質)以外の四蘊。

III　作用説とその批判　TS1790-1841

III－1　説一切有部の作用説[37]　TS1790-1792

［616,23］また、「［有部によれば、存在要素は］虚空と同様に常に存在するのであるから、その場合に未来等のものはどのようにして確立されようか」と［いう問いが想定］されよう。［これに対して、有部の立場から］「**また、ここで**」云々と言う。

また、ここで、この時間の区別は一体どうしてあろうかというように考えてはならない。なぜなら[38]**、**［三］**時のこの区別は作用によって構想されるからである。‖ 1790 ‖**

実に、［存在要素は］**作用しているとき現在のものと**［言われ］**、作用が消滅したとき過去のものと［言われ］、他方、それ（作用）を得ていないとき未来のものと言われる。‖ 1791 ‖**

また、作用とは諸々の存在要素の結果を引くことであって、［それらを］**生じさせるものではない。また、過去の**［存在要素］**には［結果を］引くことはないから、**［それらには］**作用は起こりえない**[39]**。‖ 1792 ‖**

［616,24］なぜなら、作用を得たものは**現在のもの**であり、作用が止滅したものが**過去のもの**であり、作用をまだ**得ていない**ものが**未来のもの**

---

[37] 但し、以下の有部説は『倶舎論』段階のものではなく、サンガバドラ（衆賢）の説を指している。

[38] TS 1790d の yat は TSP で yasmāt と言い換えられている。

[39] ここでは、『倶舎論』及び『順正理論』の議論を踏まえて、作用は与果を含まず取果のみとしていると考えられる。なお、ここでは取果を phalākṣepa（果を引くこと）、与果を janaka（生じさせるもの）という。

であると言われる。このように時間は作用によって確立される。［1790-91］

［617,8］ところで、ここで作用とは何であると認められているのか。もし［作用とは］例えば眼等の五［感官］の〈見る〉等のような機能である[40]とするなら、―つまり、「眼が見る」「耳が聴く」「鼻が嗅ぐ」「舌が味わう」［「身が触れる」］等の知覚が知覚主体であるが、［その各感官が］知覚するとして色等は［各］感官の対象であるから―そのような場合に、現在の彼同分[41]の眼は睡眠等の状況にあるときには作用はないことになるから現在のものではなくなる。

［617,14］また、例えば眼と共にある生等の存在要素[42]は士用果[43]であり、直後に生じた眼という感官は士用果・増上果・等流果[44]であるが、この、［結果を］生じさせるものであるから結果を与え、原因であるという局面からみれば［結果を］取るような眼が現在のものと言われるように、もし作用とは与果・取果[45]であるとするなら、その場合には過去の［存在要素で］同類因・遍行因・異熟因[46]も与果することが認められるから現在のものであることになってしまう。あるいは、もし作用はすべて与果・取果［の両方］であると認められるなら、過去の同類因等は半分現在のものであることになってしまう。

---

[40] 知覚の主体は根か識か（眼が見るのか識が見るのか等）の議論は『倶舎論』第1章（AKBh 31, 1-31, 16）及び櫻部 1975: 218-222 参照。

[41] 同分、彼同分については AKBh 27,15-28,22 及び櫻部 1975: 212-215 参照。

[42] 生・住・異・滅（jāti/sthiti/jarā/maraṇa）の四相。AKBh 75, 17-80, 10 及び櫻部 1975: 334-346 参照。

[43] puruṣākāraphalam を puruṣakāraphalam と訂正する。眼と四相との関係は相互に因となり果となる倶有因・士用果の関係である。なお、各因果の関係は、櫻部 1969: 68 参照。本書第3章和訳註では図で示した。

[44] 能作因・増上果の関係は広義の因果関係であり、どの存在要素も他のすべてのものを因とし果としていることをいう。

[45] 与果・取果については AKBh 96, 10-97, 9 及び櫻部 1975: 387-390 参照。

[46] 同類因・等流果は同類の存在要素の因果の連続であり、特に遍行因・等流果は強い煩悩が他の煩悩を引き起こす場合をいう。また、異熟因の与果はほとんど完全過去と言ってよい。作用に取果と与果を含むとすると、作用によって必ずしも現在と確定できないという議論である。

［617,19］以上のような過誤を恐れて、サンガバドラ（衆賢）は「存在要素の作用とは引果力（結果を引く力）[47]であって、［後に］結果を生じさせること（与果）ではない。また、過去の同類因等が結果を引くことはない。現在の位態において［結果は］引かれるからである。さらに、引かれたものをまた引くということは不合理である。無限遡及となってしまうからである。従って、過去の［存在要素］には**作用は起こりえない**から［三時の］特徴の混同はない」と言う[48]。［1792］

III－2　作用説批判　TS1793-1841

III－2－1　存在要素と作用との異同　TS1793-1802

［617,24］「**彼らによって**」云々によって［作用に関する議論をシャーンタラクシタ師は］批判する。

> **彼ら**［有部］**によって、この作用**（引果力）**は存在要素と別のものか、それとも、それと全く同じものかが認定されなければならない。それ以外の実在の在り方はない**［からである］。‖**1793**‖

> ［作用と存在要素とが］**別のものであるなら、現在のものの前後では**［**存在要素は**］**本性をもたないということが**［有部によって］**理解されるべきである。原因であるこ**

[47] 従来の「取果」を意味するであろう。この取果の「取」を表す grahaṇa をサンガバドラは ākṣepa と言い換えていると考えられる。

[48] サンガバドラは、結局、作用とは与果を含まず、取果ないし引果であると主張する。NA 631c5-17: 諸法勢力総有二種。一名作用二謂功能。引果功能名為作用。非唯作用総摂功能。亦有功能異於作用。且闇中眼見色功能為闇所違非違作用。謂有闇障違見功能。故眼闇中不能見色。引果作用非闇所違。故眼闇中亦能引果。無現在位作用有欠。現在唯依作用立故。諸作用滅不至無為。於余性生能為因性。此非作用但是功能。唯現在時能引果故。無為不能引自果故。唯引自果名作用故。由此経主所挙釈中、与果功能亦是作用。良由未善対法所宗。以過去因雖能与果無作用故世相無雑。

と・因果的存在であること等［の証因］**の故に。作用と同様に**[49]**。** || **1794** ||

そうでないなら（＝前後で本性をもたないなら）**、常に本性が持続していることになるから、**［すべての存在要素は］**恒常であることになってしまう。恒常ということはこの**［常に本性が持続するという］**形以外にないからである。**
|| **1795** ||

その**作用は**［存在要素と］**別のものか**別のものでないか［のいずれか］が**彼らによって**認定されるべきである。別のものか別のものでないかは相互に排除［する関係］にあるからであり、一方の否定は他方の肯定と不可離の関係にあるからである。実在には他の在り方はない。［1793］

III－2－1－1　存在要素と作用とが別ものである場合　TS1793-1797

［618,11］そのうち、［作用と存在要素とが］別のものであるなら、**現在のものの**前後の位態（未来時と過去時）では［存在要素は］本性を欠いたものとなってしまう。**原因であること・因果的存在**（＝原因によって結果したもの）**であること等**の証因**の故に**。作用と同様に。「**等**」という語によって実在であること等が把握される。［1794］

［618,13］**そうでないなら、**［即ち］もし前と後とで本性を欠くことにならないとするなら、すべての因果的存在は**恒常であること**になってしまう。本性が常に確立することになるからである。また、常に［本性が］存在するということ以外に恒常性の特徴はないからである。［ダルマキールティ師は］「賢者達は、本性が消滅しないときそれ（本性）を恒常であると言う」[50]と言った。［1795］

[49] 推論式。「［主張：］存在要素は過去時・未来時において本性をもたない。［理由：］存在要素は原因であるから・因果的存在であるから。［喩例：］作用と同様に。」

[50] PV Pramāṇasiddhi k.206cd.

III – 2 – 1 – 1a

［618,18］次のような反論があろう。「恒常性とは力である[51]とすれば、原因であること・因果的存在であること等の証因と所証の異類[52]との矛盾がどうして起こるであろうか」と。［これに対して、］**「恒常なものが」**云々と［師は］言う。

> **恒常なものが原因となることは、継時的にも同時的にも矛盾が起こるという理由から、先に否定されている[53]。実に、恒常なものに因果的存在性があるということは明らかにありえない。‖ 1796 ‖**

> **また、蘊等とは別の**［存在としての］**作用を説くなら[54]、**［有部］**自らの定説との矛盾は避けがたいことになろう。‖ 1797 ‖**

［618,19］**先に**とは「恒常的存在に関する考察」（TS 第８章）の中で、である。すべての因果的存在は無常であると認められるから、恒常なものには因果的存在性はありえないことが明らかに決定されている。［1796］

［618,21］さらにまた、**蘊・処・界とは別の［存在としての］作用を説くなら、**［有部自らの］**定説との矛盾**が起こる。即ち、世尊によって

---

[51] Schayer（1938: 40）は "nityasya śaktiḥ" と読み替え、"śakti" を "kāritra" として、「恒常なものには［作用という］力が備わる」と訳している。意味的にはこの方が良いようにも思われるが、G, J とも nityatā であることから訂正しない。cf., D 83a6, P 118a5: gal te rtag pa dang nus pa dang…

[52] 所証は「過去・未来時において本性をもたないこと」であるから、その異類とは「過去・未来時において本性をもつこと」である。反論は要するに「本性をもつものが原因であったり因果的存在であったりしてもよい」ということ。これは想定反論であろう。

[53] 梶山 1974、赤松 1984 参照。

[54] -opavarṇam を -opavarṇane と訂正する。cf. TSP 618, 21, G, J とも -opavarṇane.

「ありとあらゆるものとは、バラモンよ、つまり五蘊・十二処・十八界である」と説かれた[55]。［1797］

III－2－1－2　存在要素と作用とが別ものでない場合　TS1798-1800
III－2－1－2a

また、作用は、［存在要素と］**別のものでないなら、すべての時間に存在するものとなってしまう。存在要素と区別されないから。存在要素それ自体と同様に。‖1798‖**

従って、この時間の区別はそれ（作用）によって構想されることはない［ことになる］**。なぜなら、**［作用の］**区別によって**［起こるはずの］**それ（作用）の消失・獲得・未獲得がないからである**[56]**。‖1799‖**

［619,10］また、もし**作用**は［存在要素とは］別のものでないと認められるなら、存在要素それ自体と同様に、それ（存在要素）と区別されないから、それ（作用）もまた**すべての時間に存在するものと**なってしまう。［1798］

［619,11］**従って、**作用から離脱した［存在要素］は過去のもの、それ（作用）を獲得したものは現在のもの、それを未だ獲得していないものは未来のものというように、作用によるこの時間の区別はないことになる。なぜなら、この作用の消失・獲得・未獲得が区別されて起こるなら、［作用による］この時間の区別があることになるが、それら[57]（作用の消失等）

---

[55] cf. AKBh 301, 7-8.

[56] B 1799cd: vā vibhāgataḥ を vâvibhāgataḥ とすれば、「［作用が］区別されないため、それ（作用）の消失・獲得・未獲得もなくなるからである。」と読むことができる。

[57] B, G ともに tāni であるが、J は tā or tāḥ と見える。ここは cyutiprāptyaprāptayaḥ を受けるので、J (tā)が正しい。本章第２節註参照

は区別されて起こることはありえないからである。常に存続する同一のものは区別されないから。［1799］

III－2－1－2b

あるいは、存在要素は、作用と区別されないから、作用と同様に、前後と断絶した真中（現在）だけの存在（存在性をもつもの）[58]**ということになろう。‖1800‖**

［619,16］さらにまた、［存在要素は］作用と区別されないから、存在要素も作用と同様に前後の［両］端を欠いたものとなってしまう。「**前後と断絶した**」とは、「前後の［両］端を欠いた」である。そして**真中だけ**であるそのような**存在性**（sattva-）、というのが語義分析である。それ（存在性）がこれにある、というのがそれを「**もつもの**（-vān）」である。［1800］

III－2－1－3　**結論**　1801-1802

［619,19］「**作用は**」云々によって、相互に矛盾した［有部の］見解をあげつらって嘲笑する。

作用は常にあるわけではないが、存在要素は常に［ある］**。しかも、作用は存在要素と別のものではない、と説かれる。**［それは］**明らかに神々のなせる業である**[59]**。‖1801‖**

また、もしそこ（＝存在要素と別でない作用）**にも、別の作用に依拠した時間の確立がある**［と言う］**なら、**［作用と存在要素と

[58] 直訳すると「前後と断絶した真中だけの存在性をもつ」である。

[59] 以下の AKBh 298, 21-22 の偈と本偈とは趣旨は同様である。

svabhāvaḥ sarvadā câsti bhāvo nityaś ca nêṣyate |
na ca svabhāvād bhāvo 'nyo vyaktam Īśvaraceṣṭitam ‖

が別のものであるときと］**同じ論難**[60]**が至る所で起こるのではないか。**‖**1802**‖

［619,19］その場合（＝作用は常にあるわけではない場合）、色等の存在要素は、作用と区別されないから、常にあることはなくなってしまうと言えば、「**存在要素は常に［ある］**」と言う。それなら、作用は存在要素とは別のものになってしまうと言えば、「**作用は存在要素と別のものではない**」と言う。「**神々**」とは「自在神等」である。実に、彼らは合理・不合理のことを無視してただ恣意的に振る舞うから、彼らの行動は思いのままに合理性に依拠せず恣意的に［起こるので］あるが、これ（有部の主張）もそれと同様である、という意味である。［1801］

［619,23］また、もし作用が未来等のものであるということは作用がなくとも認められる［と言う］なら、「作用によって時間は確立される」と言うべきではない。［作用だけが諸存在から］逸脱するからである。［むしろ］作用が未来等のものであるということはそれ自身が存在［するかしないか］に拠って確立されるのであり、諸存在が未来等のものであるということもそれと同様であろうから、作用を構想することに何の意味があろうか。

［620,9］また、もし逸脱の過失があってはならないから［諸存在と別のものでない］作用にもまた作用が認められる［と言う］なら、その場合にも、逸脱等が想定されるから**同じ論難**と無限遡及の過失[61]が［起こることになる］。［1802］

III－2－2　サンガバドラ説とその批判　TS1803-1819

III－2－2－1　牴触性を巡って　TS1803-1805

［620,11］「［作用と存在要素とは］別のものでないなら、作用はすべての時間にあることになってしまう。存在要素と同様に。［時間を］限定

---

[60] 1798～1801 の議論のこと。cf. TS1836a: tulyaparyanuyogāś ca.

[61] 作用にもまた別の作用があるとすれば、またその別の作用にさらにまた別の作用が、というように無限に遡及する過失があるということ。

するものがないから。」と言われたことに対して、大徳（尊者）サンガバドラ（衆賢）[62]は「**自体と**」云々と言う。

> 「［存在要素（＝実在）］**自体と別でないものも**[63]**、牴触性と同様に、**［時間を］**区別するもの　と認められる**」[64]**と**［**サンガバドラは**］**言うなら、それは**［目下の議論の］**文脈に資するものでは決してない。**‖ **1803** ‖
>
> **なぜなら、存続する実在**（padārtha）**のもつ牴触性等**［の属性］**はどれも、随時**　（＝縁起的）**に現れるものとは考えられないからである。**［これに対して］**実在**（bhāva）**のみがそのように**[65]**生じるから**[66]**である。**‖ **1804** ‖

［620,12］［サンガバドラは次のように言う、］「［存在要素=実在］**自体と別でないものも**[67]、区別する属性である**と認められる**。例えば、地等のもつ牴触性等［の属性］のように。なぜなら、それら[68]は実在としては区別されないとしても、［或るものは］牴触性をもち［他のものは］牴触性をもたず、また［或るものは］眼に見えるものであり［他のものは］眼に見えないものである[69]から、［実在］自体とは別でない[70]属性によっ

---

[62] TSP では、Saṃhatabhadra と出るが、Saṃghabhadra である。

[63] B 620, 1: svarūpād vyatirikto 'pi を svarūpāvyatirikto 'pi と訂正。第２節註参照。

[64] NA 625a19-b2 参照。但し、NA では「地等の牴触性等」ではなく「地界等内外性殊」である。櫻部 1975: 93ff.（=「3. 色法」）参照。

[65] 「随時に」という意味にとれるが、TSP 620, 22 では、sajātīyavijātīyavyāvṛtta-sya と言い換えている。

[66] "-udbhavāt"は、チベット語訳（D 66a3, P 79b7-8）では、"brjod phyir ro"（述べられるから）となっている。

[67] B 620, 12-13: svarūpād vyatirikto 'pi を svarūpāvyatirikto 'pi と訂正。第２節註参照。

[68] この「それら」（te）は、「地等」（pṛthivyādi）であるが、それは五蘊のうちの色法としての地等だけでなく、受等を含む五蘊即ち有為法のすべてを指していると考えられる。

[69] AKBh 19, 3-20, 3（ad AK I 29bc）参照。櫻部 1975: 190-91 参照。

て区別されると理解されるからである。それと同様に、存在要素は作用によって［区別される］」と。

［620,15］それは［目下の議論の］文脈に**資するもの**ではない。即ち、ここ（目下の議論）での文脈はこうである。「作用は実在と区別されないと認められているとき、同一の実在の本性である作用には区別することがないから、それ（作用）によるこの時間の区別は相応しくない」ということである。［1803］

［620,18］ところが、地等[71]は互いに別々の特徴の違い[72]と結びつかなければ区別されない（＝結びついて初めて区別される）[73]から、或るものには牴触性があり、［また別の］或るもの、例えば受等には牴触性がないということが合理であるが、牴触性のないものがそのまま牴触性をもつということはない。なぜなら、存続する或る一つの実在自身があって、それ（実在自身）[74]に地等のもつ牴触性等の属性が**随時に起こる**ということは決してないからである。むしろ、部分を持たない実在（bhāva）は**そのように**［即ち］同類からも異類からも排除されたものとして生じるから[75]、［実在］自体と別でない属性が一つのものを区別するということは不合理である。［1804］

［620,24］「もし、［実在］自体とは別でない属性が［同一の実在を］区別しないのなら、どうして〈色の牴触性〉というようにまるで［同一の

---

[70] B 620, 14-15: svarūpād vyatiriktair を svarūpāvyatiriktair と訂正。第２節註参照。

[71] 前の註にも述べた通り、この「地等」は五蘊のうちの色法としての地等だけでなく、受等を含む五蘊即ち有為法のすべてを指していると考えられる。

[72] 見えるもの・見えないもの、牴触性をもつもの・もたないもの等の違いを意味していると考えられる。AK I 29 以下の分類（櫻部 1975: 190～）参照。

[73] B 620 18, G 509, 8: -bhedāsaṅgābhinnā iti とあるが、J 193b3 では、-bh-の上に”d”らしきものが書き添えられているようにも見える。もしそのように、-bheda+ā-saṅgād bhinnā iti として読めば、「違いと結びつくことによって区別されるから」となろう。但し、意味内容は同じである。

[74] yat（TSP 620, 19）は padārthātmā （TSP 620, 18） を受ける。或るもののもつ属性

[75] “udbhava iti”は、チベット語訳（D 84b1, P 119b1）では、”bstan pa yin te”（説かれる）となっている。

実在を］区別するかのような説明が［有部によって行われたの］か」［という問い］に対して、**「他の区別を考慮せずに」**云々と［師は］言う。

> **他の区別**［の仕方］**を考慮せずに、〈色（物質）のそれ**（牴触性）〉[76]**という言葉によって、同一の実在がそのように（まるで区別されるかのように）**［有部によって］**説かれるのである。**［例えば］〈**心の薫習**〉**と同様に。**
> ‖ **1805** ‖

［620,25］「**他の区別**［の仕方］**を考慮せずに**」とは「他の区別［の仕方］を捨てて」という意味である。「**そのように説かれる**」とは「まるで区別されるかのように［説かれる］」である。「**それ**」とは「牴触性」である。「**言葉によって**」とは「〈色（物質）の牴触性〉というこの［言葉］によって」である。これに対する喩例を「〈**心の薫習**〉**と同様に**[77]」と［師は］言った。"api ca"（「また〜と」）という［二語の］集合である不変化詞は、"iva"（「〜のように」）の意味で［用いられていると］見るべきである。［1805］

III－2－2－2　連続体を巡って　TS1806-1808

［621,11］しかしながら、彼（サンガバドラ）は言う。「作用は存在要素とは別のものではない。それ（作用）とは別に［存在要素の］本性は認識されないからである。また、［作用は］存在要素そのものでもない。［存在要素の］本性は［常に］あっても［作用は］存在しないときがあるからである。また、作用は［存在要素と］異ならないからといって、［全く］存在しないということもない[78]。作用は前には存在しない［で現在時

---

[76] TS 1805c: sad rūpasyêti を tad rūpasyêti と訂正。G , J とも tad rūpasyêti. 第２節註参照。

[77] ここでいう「心の薫習」は、「色（物質）の牴触性」がすべての色のもつ属性であるのと同様に、すべての心がもつ属性であるという意味であろう。

[78] B 621, 12-13: na ca na viśeṣaḥ を na ca nâsty aviśeṣāt と訂正して読む。訂正せず読むと、「［作用と存在要素とに全く］相違がないことはない」となろう。し

に存在し引果する］からである。連続体[79]と同様に。例えば[80]、存在要素が次々と生じてくることを連続体と呼ぶが、それは存在要素と別のものではない。それ（存在要素）と区別して把握されないからである。また、［連続体は］存在要素そのものでもない。［そうでなければ］一瞬間も連続体であることになってしまうからである。また、［連続体は］存在しないわけでもない。それ（連続体）という結果は存在するからである。そして、［サンガバドラは、偈で、］

「連続体という結果は認められるが、その連続体は［存在要素とは別のものとして］存在することは決してない。それと同様に、作用による時間の成立も論理によって理解せよ。」[81]

と言った。

［621,18］これに対して、［師は］「［**また、もし**…］**同じである、または、別である**」云々と［批判して］言う。

> **また、もし「作用は、連続体等と同様に、**［存在要素と］**同じであるとか別であるとかという類**［の議論］**によっては語れない」と言うなら、**［作用は］**そのように**（＝連続体と同様に）**世俗的存在**（=無自性）**になってしまうのではないか。** ‖ **1806** ‖

かし、今は、後の連続体（saṃtāna）の説明に合わせた解釈を取っておく。『順正理論』の相当箇所も「不可説無」とあり、na ca nâsty であった可能性が高いであろう。NA 633a24-b2: 「差別作用与所附体不可説異。如法相続如有為法。刹那刹那無間而生名為相続。此非異法。無別体故。亦非即法。勿一刹那有相続故。不可説無。見於相続有所作故。如是現在差別作用非異。於法無別体故。亦非即法。有有体時作用無故。不可説無。作用起已能引果故。」本書第 3 章参照。なお、チベット語訳（D）はこれを支持しているが、それ自体、〈連続体〉の説明と合わせた訳なのかもしれない。cf. D 84b4, P 119b5: med pa yang med yin te | khyad par med* pa'i phyir dang bya ba yang sngar med pa'i phyir rgyun bshin no ‖ * P: yin.

[79] AKBh 64, 6: kā cêyaṃ santatiḥ. hetuphalabhūtās traiyadhvikāḥ saṃskārāḥ.

[80] tathā を yathā と訂正。

[81] NA 633b3-4: 「相続無異体、許別有所作、作用理亦然、故世義成立。」

> **従って、それ**（作用）**は構想されたものであるという点で、連続体と同様に、どんな結果に対しても有効ではない**［ことになろう］**。というのは、実在だけが因果効力をもつからである。** ‖ **1807** ‖

> **また、それ**（作用）**の近接は真実在ではないから、それによってなされた三時の確立は真実であるということも不合理である。** ‖ **1808** ‖

連続体等と同様に、と。「**等**」という語によって、集合体等[82]が把握される。連続体は、連続体にあるもの[83]と**同じものである、または、別のものである**と言えないから、プドガラと同様に、本性を欠いたもの（=無自性）である。それと同様に、作用もまた本性を欠いたものということになろう。なぜなら、本性があるときに、［実在と］同じものである、または、別のものであるということが必ずあるからである[84]。［1806］

［621,21］従って、**それ**［即ち］作用は**構想されたものである**から、**連続体と同様に、どんな結果に対しても**有効ではないことになろう。実に、構想された連続体はどんな結果に対する有効性もない。それ（連続体）は本性を欠いたものであるからであり、結果が生起するのは［その結果が原因の］本性と結合関係にあるからである[85]。というのは[86]、連続体をもつ

---

[82] ディグナーガは、saṃtāna, samūha, avasthāviśeśa を説く。

[83] 相続を構成する各刹那の実在を指す。

[84] B 621, 21 のみ"vâvaśyaṃ bhāvi"の句を欠くが、G 510, 9 は "tattvam anyat-vam **vâvaśyaṃ bhāvi"** で、J 194a1 もチベット語訳（P, D）も G と一致することから、G を取る。D 85a1, P 120a1: rang bshin shig yin na ni gdon mi za bar de nyid dam gshan du 'gyur ba yin te.

[85] 福田洋一（1987）は、"pratibandha" を「制約されること」とする。それに従えば、ここは「結果の生起は［原因］の本性によって制約されるからである」と訳すことができる。

[86] B 621, 23: tasmād を yasmād と訂正（TS 1807c: yasmād に拠る。G も同様）。G 510, 11; J 194a1: tasmād. チベット語訳も同様である（D 85a3, P 120b2: de lta bas na）。

［各瞬間の］ものである**実在だけが因果効力をもつ**のであって、構想された連続体は［そうでは］ない**からである**。［1807］

［622,12］また、従って、作用は仮象的存在であるから、先にも後にも真実在としての**近接**もない。よって、それ（作用）に基づく**三時の確立**も構想されたものにすぎず真実ではない。［1808］

III－2－2－3　有部の立場─引果力と位態─　TS1809-1814

［622,15］また、［次のような反論が］あろう。「作用は仮象的存在であり、それによってなされた時間の確立も仮象的存在であるとして、どんな過失があろうか」と。［これに対して、］「**作用と呼ばれる**」云々と言う。

> **作用と呼ばれる引果力**（＝結果を引く力）[87]**は言葉の対象ではない**[88]**。力こそ実在に他ならないからである。どうしてそれ**（力）**が仮象的存在であろうか**[89]**。‖1809‖**
>
> **〈焼く〉・〈煮る〉等の作用を**［現在時に］**行うこの**［火等の］**物質が見られるが、その同じ**［火等］**が過去・未来の位態に**［も］**あると認められるのか。‖1810‖**
>
> **もし同じ**［火等］**が**［過去・未来の位態にもある］**と言うなら、その同一の存在に未作用であること、作用があること、作用が止滅したことが一体どうしてあろうか。‖1811‖**

---

[87] TS 1792 & TSP ad 1792 参照。
[88] TS 1809b: yā śabdagocarā を yâśabdagocarā と訂正。G 1910b は B に同じ。J91b5: yā'śabdagocaraḥ. D 80a3, P 66a5: nus gsang sgra yi sbyod yul min.
[89] この偈はサンガバドラの立場を表現したものであると考えられるが、ダルマキールティのい「因果効力」（arthakriyāśakti）と重ね合わせているとも考えられる。

相互に矛盾するようなこれら［未作用であること等］**の在り方が、この一つの区別されない実在に一体どうして結びつくのか。‖1812‖**

「一つの位態を捨てて他の位態を取るから、この実在は［三］**時において区別されないものでは決してないと考えられる」と言うなら、‖1813‖**

位態は存在（実在）とは別のものなのか。［有部はこの問いに答える。］「［別のものでは］**ない。**［もし別のものなら、存在は、結果を生み出す］**作用の主体でないことになるからである。というのは、それら**［位態］**が実在するからこそ**［作用が生み出す］**結果の存在も認められるからである」と。‖1814‖**

［622,17］実に、**引果力**が諸々の存在要素の作用であると［あなた（=サンガバドラ）によって[90]］言われた[91]。引果力というものは実在の独自相と別のものではなく、［独自相］そのものである。それゆえにこそ、それは言葉の対象ではない。なぜなら、［引果力は同類にも異類にもない］共通しないものであるゆえに、［引果力たる］独自相に対して言葉は起こらないからである。従って、力こそが他でもなく実在であるから、**どうしてそれ**［即ち］力が**仮象的存在であろうか**。決して［仮象的存在では］ない、という意味である[92]。従って、それ（力）による時間の確立は真実であるとあなた（サンガバドラ）によって[93]認められている、ということである。［1809］

[90] G 511, 1; J 194a2: bhavatā. ⇒この語は B 622, 17 にはない。
[91] TS 1792 & TSP ad 1792 参照。
[92] G 511, 2; J 194a2: yāvat. ⇒この語は B 622, 20 にはない。
[93] G 511, 3: bhavatîti.

［622,21］また、この〈**焼く**〉・〈**煮る**〉**等**の効果的作用[94]を［現在時に］なす火等の物質が見られるが、**その同じ**［火等］が**過去・未来の位態に［も］ある**のか、それとも別のものが［過去・未来の位態にあるの］か。［1810］

［623,9］もし「**同じ［火等］が**」ということなら、それ（A）によって順に未来・現在・過去の確立があるような未作用等の相互に矛盾する属性（A）が、どうしてこの一つの区別されない[95]物質等の実在に結びつくのか。［1811］

［623,10］もし、［各々の基体に］矛盾した属性が占有する[96]としても、［矛盾した属性をもつ基体同士が］同一であるとするなら、［三時の］区別の確立は崩壊することになろう。従って、［区別の確立がないなら、多様な存在が集まった］世界全体は単一であることになり、単一であるとき［世界全体が］同時に生起することにもなってしまう。［1812］

［623,12］また、もし「位態を捨てたり取ったりする違いによって区別されるから、［三］時において実在は区別されないわけではない」と考えるなら、［1813］

［623, 13］それでも、その**位態**は、存在（＝実在）とは別のものなのか同じものなのかを述べるべきである。［これに対して］相手（有部）は「［別のものでは］**ない**」と言う。「存在と別のものでは［ない］」という［文の］繋がりである。どうしてか。［もし別のものなら］存在は［結果を生み出す］**作用の主体ではないことになる**[97]［即ち、］作用の

---

[94] 「因果効力」（arthakriyāśakti）の二側面（引果力と実用的効用）の後者を論じる。

[95] B 623, 9: niviśiṣṭo を nirviśiṣṭo と訂正。G 511, 5: nirviśiṣṭo.

[96] ダルマキールティの　”bheda”　の定義は、“viruddhadharmādhyāsa”並びに”kāraṇabheda”によって行われる。PVSV 20, 21-23: ayam eva khalu bhedo bheda-hetur vā bhāvānāṃ viruddhadharmādhyāsaḥ kāraṇabhedaś ca. なお、江崎 2004 では、“viruddhadharmādhyāsa”の意味は、従来の理解とは異なって「矛盾する［二つの］属性が［それぞれの基体に］存立すること」と解されている。

[97] B 623, 15: bhāvasyâkartr̥tvāptiḥ を bhāvasyâkartr̥tāptitaḥ と訂正。cf. G 511, 11: -âkartr̥tāptitaḥ（-to）; J 194a5: -âkartr̥tvāptitaḥ（-to）.

主体[98]でないことになってしまうからである。［別のものでないことにより］肯定的相伴と否定的排除[99]によって、それら位態には結果に対する能力が成立するからである［と］。［1814］

III－2－2－4　有部批判　—位態と「本無今有」—　TS1815-1819

［623,17］以上［の議論］に対して、「［**時について…**］**別のものでない**」云々と［師は、有部を］批判する。

> ［三］**時**［の全位態］**について**、［有部は］**どうして実在とは別のものでないと推量するのか。**［即ち］**前に無くて今存在し**、［存在し終わって］**消滅するそれら**（**位態**）**は**［すべて］**それ**（実在）**を本性とする**［と］[100]。‖ **1815** ‖
>
> **それ**（実在）**が真中の位態**（**現在**）**においてそれ自体として作用する**（＝結果を生みだす）［とすれば］、**その自体こそが他の二つの時間**（＝過去・未来の位態）**においても**［作用するはずである］。‖ **1816** ‖
>
> **よって、これ**（実在）**に二つ**［の位態］**における未作用と作用滅とが**［あると］**どうして考えられようか。他体として作用するなら、これ**（実在）**は作用の主体**（＝結果を生み出すもの）**ではないということに再び帰結する**[101]。

---

[98] 「作用」とはサンガバドラによれば「引果力」（phalākṣepaśakti）であり、換言すれば「結果を生み出すこと」である。これ以降、シャーンタラクシタの意味する「作用」はこの「結果を生み出すこと」の意味であると取る（TSP 参照）。「引果力」は、ダルマキールティ以来の「因果効力」（arthakriyāśakti）に発展する素地となった可能性も考えられる。

[99] 「位態があるから結果がある」と「位態がないなら結果もない」ということである。

[100] TS 1815cd: bhavantyaś ca tadātmikāḥ を bhavantyo vinaśyantyaś ca tadātmikāḥ と訂正。B は 12 シラブルしかない。B 623, 22: 訂正した通りの文が見える。cf. G 511, 15: bhavantyaś ca naśyantyaś ca tadātmikāḥ.

[101] TS 1814 参照。

‖ **1817** ‖

別の火等が過去・未来の位置にあると言うなら、この主張には、それら［〈作用と未作用〉等］**の混在等の誤りは存在しない。** ‖ **1818** ‖

結果を生み出す効力をもつそれ（実在）は、前に無くて今存在し、存在し終わって消滅するから、今や、これ（恒常的存在）**には**［原因によって結果が］**次々と起こってくることはないということが成立する。** ‖ **1819** ‖

［623,17］［有部は、三時の］位態についてどうして**実在とは別のものでないと推量するのか**［即ち］理解するのか。決して［別のものでないことは］ない。なぜなら、位態は前に無くて今存在し、存在し終わって消滅するからである。しかし［有部によっては］実在はそのようであると認められていない。常にあると認められているからである。従って［有部の主張は正しくないから］、**前に無くて今存在し、［存在し終って］消滅するそれら**（位態）**は**［すべて］**それ**（実在）**を本性とする**ということがどうして合理であろうか。決して［合理では］ない。［〈前に無くて今存在し、存在し終わって消滅する位態〉と〈そのすべての位態が実在を本性とすること〉とは］どこまでも相容れないからである[102]。なぜなら、さもなければ、これら（位態）もまた、それ（実在）を本性としている点で

[102] “yogakṣema”は、「安全性」「安寧」「固有性」等を意味すると考えられるが、”bhinnayogakṣema”は、二者の間での両立の不可能性（一方の成立は必ず他方の不成立となるという関係性を意味している。cf. 岩田 1983（: 45—abhinna-yogokṣematva は、「一方の生ずる（乃至感受される）時は他方も［必ず］生ずる（乃至感受される）、逆に一方が滅する（乃至感受されない）時は他方も必ず滅する（乃至感受されない）」と解される。—）参照。なお、後藤敏文氏からは以下のようなご教示（但しここにはその一部のみ紹介）をいただいた—Böhtlingk-Roth では「獲得された所産と財産の保持。財力，生活財。安全，安寧」Graßmann は「労働と休息，獲得と所有」とする。いずれにしても，*yóga-*「繋ぐこと，移住移動期」（戦時をも含む）と *kṣemá-*「定住期，安住期」（戦時行動無し）との複合語に源を発する。—等々（後藤氏に深く謝意を表す）。

それ（実在）と異ならないから、常に、実在自体と同様に存在することになってしまうからである。あるいは、実在は、位態自体と同様に「前に無くて今存在し」云々となってしまうからである。［1815］

［623,23］また、［各］位態が［実在とは］別のものでないと構想するとしても、［同一の実在に］矛盾した属性を想定する［誤謬］は決して斥けられない。即ち、実在は真中の位態において**それ自体として作用する**のか、それとも他体として［作用するの］か。もし、自体として［作用する］なら、**その自体こそが他の二つの時間においても**［即ち］過去・未来の位態においても［作用することになるはず］である。［1816］

［624,9］だから（iti）、**どうして**作用することを本性とする**これ**（実在）**に未作用と作用滅と**があろうか[103]。また、もし他体として［作用する］なら、**これ**（実在）**は作用の主体ではないということに再び帰結する**から、［それは現在においても］実在ではないことになってしまう。こうして、まず、その［現在の］火等の物質が過去・未来の位態にあることは不合理である。［1817］

［624,12］また、もし別の［火等が過去・未来の位置にあると言う］なら、**この主張には、**同一のものに〈作用と非作用〉等の相互に排除される属性の**混在等の誤り**は存在しない。［属性が異なれば］実在も異なるからである。［1818］

［624,13］これに対して、〈焼く〉・〈煮る〉等の**結果を生み出す能力をもつ**火等の**それ**［即ち］実在は、**もと無くて**存在し**存在し終わって**消滅するから、［そのことと］恒常的存在性を［有部のように］認めることとに矛盾があろう。［恒常的存在には、原因から結果が］次々に生じてくることがないからである。［1819］

IV　因果効力のあるものが真の実在　TS1820

［624,16］次のような反論があろう、「たとえ結果を生み出す能力をもつものは前に無くて今存在し、存在し終わって消滅するとしても、過

---

[103] kārakasvabhāvasya kriyākriyābhraṃśau を kārakasvabhāvasyâkriyākriyābhraṃśau と訂正。cf. TS 1817a.

去・未来の位態においては結果を生み出す能力をもたない実在が存在するのである。従って、常に有ると認めることに矛盾はない」と。これに対して、「［**因果効力のあるもの、**］**それこそが**」云々と言う。

> **因果効力のあるもの**[104]**、それこそが真の存在である**[105]**。そして、それ**（＝因果効力のあるもの）**が両方**（＝過去・未来）**にはない。そのような**（＝結果を生み出す能力をもたない）**ものから結果が生じるはずもない。**‖**1820**‖

［624,18］「**それこそが**」とは、「**因果効力のあるもの**［こそが］」である。「**両方には**」とは「過去・未来の位態には」である。「**そのようなもの**（yo 'sti）」とは「結果を生み出す能力をもたないもの」である。［1820］

IV－1　過去の同類因等、有為の四相を巡って　TS1821-1827

［624,20］また、次のような反論があろう、「過去の同類因等には結果を生み出す能力[106]が必ず認められる。従って、『そのようなものから結果が生じるはずもない』（TS1820d）ということは成立しない」と。

これに対して、「［**また、**］**この過去の**」云々と［師は］言う。

> **また、この過去のものは**［それがもし結果を生み出す能力があるなら］**前に無くて今存在するから、なおかつ、**［因縁が揃えば］**随時に起こるものであるから、他**（＝現在のもの）**と同様に、明らかに現在のものであるということになってしまう。**‖**1821**‖

[104] cf. G 512, 14: evāyam kriyākṣamaḥ.

[105] cf. PVin II 28, 24-25.

[106] 過去の同類因等の「結果を生み出す能力」とは、本来、有部では取果・与果のうちの与果を意味している。

［或るもの（A）が］**原因をもたないとき**［それ（A）は］**常に存在するか全く存在しないかのいずれかである。他**[107]**に依存することがないからである。原因によって存在性の確定したもの**[108]**が現在のものであると言われる。**
‖ **1822** ‖

また、色等［の五蘊］**は、択滅等**［の三無為］[109]**とは異なり、生・住等**［の有為の四相］[110]**と結びつくから有為**[111]**である、と他の人々**（＝有部）**は考える。**‖ **1823** ‖

そのうち、〈生〉**はどんな特性**[112]**を生じさせるからこの**［色等］**を生じさせるものであると言うのか。まだ生じていないその色**［等］**と別でない**［特性］**をなのか、**［それとも］**別の**［特性］**をなのか。**‖ **1824** ‖

まず、それ（＝色等）**と別でない特性が**［〈生〉によって色等に］**生じさせられることはありえない。**［未来のものの実在を主張する有部にとって、特殊性は〈生〉の］**存在より以前**（＝未来）**にすでに完成しているからである**[113]**。完成後の時間**（＝過去）**と同様に**[114]**。**‖ **1825** ‖

---

107 TS 1822b: asyâ-を anyâ-と訂正。G 512, 22: anyâ-. J 92b1: asyâ-. cf. D 66b4, P 80b3: rgyu med gshan la mi ltos* phyir. *P: bltos.

108 「存在性が限定されたもの」という訳も可能である。

109 三種の無為（AK I 5c~6d）：虚空・択滅・非択滅。

110 有為の四相（AK II 45cd）：生・住・異・滅。

111 有為（AK I 7）

112 生じていないものが生じてくるときどのような変化が起こるかを「どんな特性が生じるか」として論じている。即ち、未来時と現在時（あるいは未生時と生起時との二瞬間）の色等の違いを問うている。シャーンタラクシタは因果効力を想定して特性と言っているとも考えられる。

113 三世実有から言えば、未来のものもすでに実在しているという前提での議論。

114 推論式。

他方、［色等とは］**別の特性が**［〈生〉によって色等に生じさせられること］**もない。**［特性は色等とは］**別のものであることから、**［〈この色等のこの特性〉という］**関係はないからである。また、それ**（＝特性）**は**［色等とは別のものであることから、］**以前には存在しないから、結果**［としての特性］**も**［色等に］**存在しないことになろう**[115]**。**
‖**1826**‖

［〈異〉による］**変異、**［〈住〉による］**維持、**［〈滅〉による］**消滅に関して**［も］、［色等と］**別か別でないかの選択肢において、〈異〉等を対象とした**［〈生〉と］**同じ過失が付き纏うのである。**‖**1827**‖

IV－1－1　過去の同類因等を巡って　TS1821-1822

［624,22］「**他と同様に**」とは「今論争の対象でない『現在のもの』と同様に」である。「**なおかつ、随時に起こるものであるから**」とは、「［随時におこるものであるから］**他と同様に**現在のものとなってしまう」という文脈である。［1821］

［624,23］また、この証因は肯定的必然関係をもたないことはない。即ち、因と縁とによって生じたものが現在のものと言われる。そして、随時に起こるものは必ず因と縁とを根拠とする。なぜなら、原因をもたないものの在り方は二通りだけである。つまり、**常に存在するか全く存在しないかのいずれかである。**他に依存することがないからである。従って、随時に起こるものとは必ず因と縁とによって生起するものであり、因と縁とによって生起するものは[116]必ず現在のものに他ならないことが成立する。

---

[115] あくまで特性は色等に生じて来るものであるから特性が色等とは別に単独で生じて来ることはないということであろう。なお、“asatkārya-“はヴァイシェーシカ派の「因中無果」論に使う言葉であり、ここでもそれを想定していると思われる。

[116] B 625, 10: so ‘vaśyaṃ の前に、”yaś ca hetupratyayanirmitasattvaḥ”の句を欠くが、ここはG 513, 11 に従って、この句を入れて読む。

〈現在のものであること〉によって〈随時に起こるものであること〉は遍充されるのである。［1822］

IV－1－2　　有為の四相を巡って　TS1823

［625,11］また、もし過去・未来のものが実在するなら、すべての因果的存在は恒常的存在であることになってしまう。従って、色等には択滅等［の三無為］との違いがないことになってしまう。［そこで、］もし**色等は**有為の特徴（＝四相）と結びつくから**有為である**が虚空等［の三無為］は［有為］ではないから**色等は択滅等**［の三無為］とは**異なる**と**他の人々**（＝有部）**が考える**なら、それは正しくない。即ち、生・住・異・滅の四つが有為の特徴であり、そのうち〈生〉は「生じさせる」、〈住〉は「維持する」、〈異〉は「衰退させる」、〈滅〉は「消滅させる」というようにこれら［有為の四相］には〈生じさせる〉等の機能が認められている。［1823］

IV－1－2－1　〈生〉と存在要素の特性　TS1824-1827

［625,18］**そのうち**、まず〈生〉**はどんな特性を生じさせるときにこの**［三世に実有の］色等**を生じさせるものであると言うのか**。その色等とは**別の**［即ち］相違する［特性を生じさせるときなのか］あるいは別でない［即ち］相違しない［特性］を**生じさせるときなのか**という二つの選言肢である。［1824］

［625,20］そのうち、**まず**［色等と］相違しない［特性を生じさせるとき］ではない。なぜなら、その特性は、［色等と同様に］〈生〉の機能する**より以前**（＝未来）**にすでに完成しているから**、［その特性を］作り出すことはできないからである。**完成後の時間**（＝過去）**と同様に**。

実に、完成したものを作り出すことは不合理である。無限遡及の誤りとなるからである。［1825］

［625,22］［色等と］相違するような［色等の］**特性**が作られることもない。なぜなら、［色等と特性とが］相違するとき、「この色等のこの特性」という関係は成立しないからである。

即ち、まず［この両者には］同一性の関係はない。相違が認められているからである。あるいは、［相違が］認められないと言うなら、前と同じ誤りに陥るからである[117]。

［また、色等と特性とには］因果性の関係もない。［むしろ］〈生〉にこそ［色等との］因果性があるからである。そして、［実在にはこの同一性と因果性の二つの関係以外の］他の関係はない。維持するものと維持されるもの[118]との関係性等は因果性の関係に含まれるからである。また、もし因果性の関係が認められると言うなら、［色等と相違する］特性はそれ（色等）だけから生じるのであって、［そのような特性は色等と同様に］常に生じることになってしまうから、今や〈生〉は何をなすのであろうか。［それでも］もし〈生〉に依拠して［特性を］生じさせると言うなら、［特性の生起に］資することのない〈生〉については、［それに］依拠するということ自体不合理である。過大適用になるからである。あるいは、［それでも〈生〉は特性の生起に］資するとするなら、［色等と］特性［の場合の議論］と同様に、その資するもの［である〈生〉］は［特性と］同じか別かの考察をすることになって、無限遡及の誤りとなるからである。

従って、［色等と特性とが］相違するとき［両者にはどんな］関係も証明されないのである。［1826ab］

また、**それ**［即ち］特性は［色等とは違って］**以前には存在しないから、結果**［としての特性］**も存在しない**こと[119]が認められたことになろう。［1826cd］

［626,16］同様に、〈異〉によって**変異**させられるとき、〈住〉によって留まるとき、〈滅〉によって**消滅**させられるとき、これら変異等に関して［色等と特性とが］**別か別でないかの選択肢**がある際の**過失**が、

---

[117] TS 1825 の議論に戻ることになる。

[118] "ādhāra-ādheya"の関係はヴァイシェーシカ派では"samavāya"（和合）の関係にあるとされる。金倉 1973

[119] ヴァイシェーシカ派の因中無果論（asatkārya）になぞらえていると思われる。TS1826 の註参照。

〈異〉等についても、〈生〉と同じように論じられるべきである。［1827］

IV－1－2－2　〈生〉と存在要素　TS1828-1829

> **これら〈生〉等が自らなすべき事を遂行するのは、**［〈生じさせる〉等の］**能力に限定されているからである。**［有部によれば、］**その**［限定された能力をもつという］**性質は前（＝未来）にも後（＝過去）にもある。‖1828‖**
>
> **そして、能力をもつという性質が**［前にも後にも］**あるから、**［それら〈生〉等は］**そのとき**（＝前にも後にも）**自らに見合う事を遂行しないか**［、する］**。そして、それ**（なずべき事）**を遂行するなら、**［各位態に］**限りない時間があることになる。‖1829‖**

［626,20］また、〈生〉等が**自らの仕事を遂行する**ということ、それは［〈生じさせる〉等の］能力をもつという本性が確定していることから認められるのである。［1828］

［626,21］そして、能力をもつというその本性は、それら［〈生〉等に］常にあるから、常に自らの仕事を遂行するということになってしまう。また、［遂行のための］因縁の欠如はない。それら［因縁］も常に存在するからである。従って、過去・未来の位態において、〈生〉等は〈生じさせる〉等の自らのなすべきことをするから、同一の位態において限りない時間がある[120]ことになってしまうのである。［1829］

IV－2　過去・未来のものと瞬間的存在　TS1830-1833

IV－2－1　瞬間的存在であるとき　TS1830-1831

---

[120] 過去にも未来にも、過去・現在・未来があるということ。

さらにまた、過去等の存在は瞬間的存在（刹那滅）**である
のか、そうでないのか。もし前者なら、再び両者**（＝過
去・未来）**には**［前偈と］**同様に限りない時間があること
になる。‖ 1830 ‖**

［即ち、］**そこ**［過去・未来］**において、ある一瞬間が生
じるときそれは現在であり、生じて後に消滅した**［一瞬間］
が過去であり、これから生じるであろう［一瞬間］**が未来
である**［ことになってしまう］**。‖ 1831 ‖**

［627,9］さらにまた、過去・未来のものは**瞬間的存在であるのか**、または、瞬間的存在**でないのか**という二者択一である。そのうち、**もし前者なら**［即ち］瞬間的存在［なら］という意味である。そうなら、［前偈と］**同じく限りない時間があることになる。**［1830］

［627,11］「**ある一瞬間が**」［云々］とは、まさにそのこと（＝限りない時間があることになること）を示す。［1831］

IV－2－2　**瞬間的存在でないとき**　TS1832

また、もし［過去・未来のものは］**瞬間的存在でないなら、
汝の定理**（**kṛtānta**）**は矛盾したものになる。なぜなら、**
［有部の］**定説では「すべての因果的存在は瞬間的存在で
ある」と明示されているからである。‖ 1832 ‖**

［627,12］また、もし**瞬間的存在でない**という選択肢なら、［有部］の定説との矛盾がある。**定理**（**kṛtānta**）とは、定説（**siddhānta**）と言われる。即ち、「**すべての因果的存在は瞬間的存在である**」という定説である。［1832］

IV－2－3　推論式　　　TS1833

推理による論駁もある。「［これこれが］**存在する**」**と言うなら、**［それらは］**必ず瞬間的存在である。現在のものと同様に。しかし、以前にこれ**（＝証因〈存在すること〉）**の**［所証〈瞬間的存在であること〉との］**結合関係は証明されている。**‖**1833**‖

［627,14］また、［瞬間的存在でないという］主張には、定説との矛盾だけではなく推理との矛盾もある。即ち、［その推理とは］「存在するものはすべて瞬間的存在である。現在のものと同様に。」[121]である。［有部は］過去・未来のものは**存在する**［と言う］から、［それらは］**必ず瞬間的存在である**ということになる。**しかし、前に**［即ち］刹那滅［を論証する］章[122]で、**これ**［即ち］証因（＝〈存在すること〉）**の**［所証＝〈瞬間的存在であること〉との］**結合関係**は証明されているから、［この証因は］不定［因］ではない。即ち、効果的作用をなすこと[123]が〈存在すること〉の特徴である。そして、瞬間的存在でないものには、継時的または同時的に効果的作用［をなすこと］との矛盾がある[124]から、効果的作用はない。そのときそれ（＝効果的作用）を特徴とする〈存在すること〉もないから、〈存在すること〉（証因）は所証（＝〈瞬間的存在であるこ

---

[121] 周知の通り、この推論式及び以下の説明はダルマキールティの刹那滅論証に基づいている。cf. PVin 29~. 赤松 1984: 184-215（特に 207-209）参照。

[122] TS & TSP 第 8 章「恒常的存在の考察」（Sthirabhāvaparīkṣā）を指す。cf. TS392: tathā hi santo ye nāma te sarve kṣaṇabhaṅginaḥ | tad yathā saṃskṛtā bhāvās tathā siddha anantaram ‖（即ち、およそ存在するものはすべて刹那滅である。有為の諸存在のそのような在り方は直前で証明された。）

[123] 存在の定義としての「効果的作用能力（arthakriyāśakti）」については、桂 2002 参照。そこでの論旨は、効果的作用には、従来、「因果効力」（結果を生じる能力）と「人間の目的を成就する能力」（壺が水等を保持する能力等）の二つの意味があるとされているが、この二義の間には本質的違いはなく、一義的に理解することができるというものである。

[124] 効果的作用は瞬間的に次々と生じてくる存在に順々に続いて起こるか一時的に起こるかであるが、それが瞬間的存在でないものには起こらないということ。

と〉）の異類例にはない。［故に、存在するものは必ず瞬間的存在である、と結論される。］［1833］

IV－3　過去・未来のものと効果的作用能力　TS1834-1841

これら過去・未来のものは効果的作用の能力をもつものかそうでないものかである。［その］**能力が実在するなら、**［それら過去・未来のものは］**現在のものである**［ことになってしまう］**。それ**（＝主題である過去・未来のもの）**以外の**［現在の］**ものと同様に。‖1834‖**

他方、現在のものでないなら、消滅したものと未生起のものはすべての効力を欠いたものとなってしまう。虚空の紅蓮等と同様に。‖1835‖

作られたものではない虚空等　（＝三無為）**はすべて［過去・未来のものと］同じ論難の対象となる**[125]**から、それら**［三無為］**は、**［〈現在のものでない〉という］**証因が不定［因］であると想定する根拠とはならない。‖1836‖**

諸存在の限定された[126]**効果的作用能力は所縁によって生じるものである。もし原因をもたない**［で生じる］**なら、すべてのものがすべてに対して等しく有効であることになってしまう。‖1837‖**

---

[125] cf. TS1802c: tulyaḥ paryanuyogo 'yaṃ.

[126] TS 1837a: niyamārtha-を niyatārtha-と訂正。テキスト註参照。cf. TSP 628, 16: pratiniyatārthakriyāśaktir bhāvānāṃ.

諸縁によっておこされる限定された効果的作用能力の生起
が現在の存在の特徴であって、それ以外の［特徴］はない。
‖ 1838 ‖

そして、あなた方［有部］にとっては、過去・未来のもの
にもそれ（＝現在のものの特徴）が欠けることなくある。
よって、これら［過去・未来のもの］は現在のものである
ということにどうしてなってしまわないであろうか。
‖ 1839 ‖

IV－3－1　　効果的作用能力をもつとき　TS1834-1840

［627,20］また、**これら過去・未来のものは効果的作用能力をもつものか**、または、能力をもた**ないものか**の二者択一である。もし［それらが］能力をもつならそのとき［即ち］ **能力が実在するなら、**［そのときそれらは］**現在のものである**ことになってしまう。今の議論の対象でない現在のものと同様に。

推論式：［肯定的必然性］効果的作用能力をもつものは現在のものである。例えば、今の議論の対象でない現在のものと同様に。

［主題所属性］過去等のものは効果的作用能力をもつものである［とすれば］。

［［結論］過去等のものは現在のものであることになってしまう。］ 以上は、本質的属性を証因とする帰謬論証である。［1834］

［628,11］また、これ（証因＝〈効果的作用能力をもつこと〉）は不定［因］ではない。なぜなら、**消滅したものと未生起のもの**は、現在のものでないのなら、すべての能力を欠いたものとなってしまうからである。虚空の蓮と同様に。

推論式：［肯定的必然性］現在のものでないものはどんな［効果的作用］に対する能力もない。虚空の蓮と同様に。［主題所属性］過去等のものは現在のものではない。［［結論］過去等のものはどんな ［効果的作用］

に対する能力もない。］ 以上は、能遍（＝現在のものであること）の非認識［に基づく推理］である。［1835］

［628,14］また、因果的存在（＝有為）でない虚空・択滅・非択滅［の三無為］によって、［〈現在のものでない〉という証因が］不定であることにはならない。それら［三無為］も［過去・未来のものとともに］主題とされているからである。従って、それら［三無為］は、［証因が］**不定**であるという想定の根拠とはならないのである[127]。［1836］

［628,16］即ち、**諸存在のもつ**限定された**効果的作用能力は諸縁によって生じる**ものと認められるべきである。さもなければ、［即ち、］もし［その能力が］無原因に生じるならば、［このときこの能力をもったというような］限定のための原因がないことから、諸存在の能力は無限定となってしまう。そうすれば、**すべてのものが**すべての結果に対して**有効であることになってしまう**。従って、作られたものでない虚空等[128]［の三無為］に［効果的作用］能力［があると］限定することは不合理であるから、それら［三無為］によって［〈現在のものでない」という証因が］不定［因］であると想定されることには、根拠がない。［1837］

［628,20］また、第一の証因（＝効果的作用能力をもつこと）は異類（＝現在でないもの）にもあることが疑われるということもない。なぜなら、**限定された効果的作用能力の生起は諸**因**縁によって起こる**が、まさにその［能力の生起］こそ**現在の**ものの**特徴**である。［1838］

［628, 21］この現在のものであることの特徴は、［有部によれば］過去等のものにも欠如しないから、［また、］それ以外の［特徴を知る］手立てもないから、［過去・未来のものは］現在のものであるということにどうしてならないであろうか。［1839］

---

[127] TSP 628, 15: nātinibandhanam を na te nibandhanam と訂正。テキスト註参照。

[128] TSP 628, 19: tasmāt kr̥tākāśādīnām を tasmād akr̥tākāśādīnām と訂正。G 516, 3: tasmāt kr̥（tasmād akr̥?）tākāśādīnām. cf. B 628, n.1, gā-: akr̥tā-. D 88a3, P 123a7: ma byas pa.

> **従って、**［過去・未来ものにも現在のものの特徴がある（＝三世実有）なら果報も常にあることになるから］**天界・解脱獲得のためのこの努力は無駄になる。なぜなら、この場合**（＝三世実有なら）**努力によって実現されるべきどんな果報も認められることはないからである。‖1840‖**

［629,8］また、ある人にとって過去・未来のものが実在するときその人にとって果報もまた常にあるから、**天界・解脱**獲得のための**努力**は無駄になってしまう。**努力によって実現されるべき**どんな**果報**も存在しないから、その場合、誓い・約束等を特徴とする努力にどんな効力があろうか。［結果を］生じさせる効力があると言うなら、生じさせることというものは前に無くて今存在する、ということが成立する。

［629,11］また、もしそれ（＝生じさせる効力）も［三時］にあると言うなら、一体それは何の何に対する効力なのか。現在のものにする効力であると言うなら、この現在のものにすることとは一体何か。別の場所に引くことであると言うなら、それなら実在は常にあるということになってしまう。［有部によれば、引くこともまた］常に存続する［はずである］からである。物質でない感受等［の四蘊＝（受・想・行・識）］には、［場所を移動する等の］活動はないからどうして引くことがあろうか。そして、その引くことというものは［生じさせることと同様に］前に無くて今存在する、ということが成立する（iti siddham 倶舎論）。

天界とは、スメール山の上方等である。**解脱**とは解放である。それらの達成が**獲得**である。それに対する**努力**とは誓戒・抑制等[129]である。［1840］

---

[129] TSP 629, 16: yatna=vrataniyatādiḥ を yatno vrataniyamādiḥ と訂正。cf. G 516, 18: yatno vrataniyatādiḥ. “niyama”は、個人的に決めた戒。“vrata”は、ふつう「誓戒」と訳し、祭主が祭式時期で守る、食事、睡眠、言語活動等の抑制・禁止事項である。なお、阪本（後藤）純子氏より、日本印度学仏教学会（2015/9/19 於高野山大学）の発表レジュメ及び提出予定の論文原稿も送付いただいた。深く謝意を表す。

IV – 3– 2　効果的作用能力をもたないとき　TS1841

また、それら［過去・未来のもの］**に効果的作用能力**[130]**が認められない**［という第二の選択肢があったが、］**もしそうであるなら、これゆえにこそ**（＝能力がないからこそ）**これら**［過去・未来のもの］**は存在しない**［ことになろう］。‖**1841**‖

［629,17］また、「もし**効果的作用能力**がないなら[131]」と、第二の選択肢が［ここで］取り上げられる。その場合には、**これゆえにこそ**［即ち］効果的作用能力を欠くから、［過去・未来のものは］存在しないことになってしまう。虚空の**花と同様に**。存在しないものはすべての効力から離れているからである。［1841］

V　教証・理証批判

［629,20］以上のように、まず過去・未来のものの非存在を証明する認識根拠を述べた後、［過去・未来のものの］存在を証明する［有部の］認識根拠を否定するために「［**他方、**…］**諸々の証因**」云々と［師は］言う。

他方、存在の属性である諸々の証因は、成立していない［過去・未来の］**ものに対しては確立されない。あるいは、現在のものであるとの論証は基体**（＝過去・未来のもの）**を拒斥するから、**［諸々の証因は］**矛盾**［因］**である。**
‖**1842**‖

---

[130] TS 1841a: nârthe kriyāśaktis を nârthakriyāśaktis と訂正。

[131] TS 1834: arthakriyāsamarthāḥ ... na vā を受けている。なお、TSP 629, 17: nârthe kriyā samarthā を nârthakriyāsamarthā と訂正。

［629,21］**諸々の証因**とは、先述された「時間に包摂されているから」等[132]の［教証・理証の］ことである。［それらは］所依不成［因］[133]である。基体（主題）即ち過去のもの等が成立していないからである。「［基体（主題）の存在が］成立していないとき、存在の属性（証因）は［成立しない］」[134]と［ダルマキールティが］論じているように。

また、もし［属性（証因）は］成立しているとしても、［その属性（証因）による］**現在のものであるとの論証は基体**（＝過去・未来のもの）自体[135]と反対のことを証明するから、**諸々の証因は矛盾**［因］**である**。［1842］

V－1　第一教証批判　TS1843-44

［629,25］「では一体どうして過去・未来の色等が時間に包摂されていると説かれたのか。というのは、絶対に存在しない兎の角[136]は過去のものであるとか未来のものであると確立されることはないからである」と［有部が言うなら］、「**存在し終って**」云々と言う。

> **存在し終わって消滅した物質が過去のものであり、諸縁がそろったときに存在するであろう**［物質］**が未来のものであることは明らかである。‖1843‖**

> **他方、**［過去・未来のものが］**存在するなら、**［それらは］**現在のものであることになってしまうということはすでに証明された。というのは、現に存在していることが、唯一、現在のものの特徴であるからである。‖1844‖**

---

132 TS 1787～1789 & TSP に見える有部による二種の教証と理証とである。

133 所依不成因とは、基体（主題）の存在が成立していないときに用いられる証因のことであり、この場合の基体、即ち過去・未来のもの自体が存在しない場合の証因を意味する。

134 PV I k.191a.

135 TSP 629, 24: dharmasvarūpa を dharmisvarūpa と訂正。

136 「兎の角」という認識の対象を巡る議論は、ADV（271, 1-15）で行われる。

［630,13］［以上は］よく理解できる。［1843・1844］

［630,14］それでは、［過去・未来の］物質・感受等の［五蘊］の存在がどうして［世尊によって］説かれたのか［という問いに対して］、「［**過去等のものが**］**色等である**」云々と［師は］言う。

> **過去等のものが色等**［の五蘊］**である**[137]**ということは、これ**（＝過去等のもの）**がそのようにあった・あるだろうというその状態を**［まるで存在するかのように］**仮想して**［世尊によって］**説かれているのであって、**［過去等のものが真に］**存在するからではない。** ‖**1845**‖

［630,15］**その状態**とは、［時間の］その位態である。［1845］

V－2　第二教証・第一理証批判　TS1845-1848

［630,16］それでは、二に依拠した認識がどうして［世尊によって］説かれたのか［という問に対して］、「**二に依拠して**」云々と［師は］言う。

> **二に依拠して認識は**［生じる］**と、真実を見る人**（＝世尊）**によって説かれたが、その教説は対象をもつ心**（認識）**を意図して**［説かれた］**と認められる。** ‖**1846**‖

実に、**認識**は二種類であって、対象をもつものと対象をもたないものとである。対象をもつ［認識］を**意図して**、世尊の二に依拠した知識の教説がある。［**1846**］

［630,19］また、もし対象をもたない認識もあるとどうして想定されるのかと［問うなら］、「［**実に、**］**恒常な自在神**」云々と［師は］言う。

---

137 「過去・現在・未来のものはすべて色等の五蘊である」ということ。

> **実に、恒常な自在神等の認識には対象は存在しない。音声・名称等の存在要素はそれ**（＝自在神等）**の形象と無関係であるからである。‖1847‖**

［630,20］［恒常な自在神］**等**という語によって、勝因・時間等[138]の構想されたものが把握される。そして、これらの知は音声等を対象とすると考えるべきではないから、**音声・名称等**云々と［師は］言う。**それ**［即ち］自在神等［、それ］の**形象**［即ち］〈恒常性〉や〈一切のものの原因であること〉等は、知によって想定されるが、その形象と、音声や特定の心不相応行である名称とは無関係である。「［音声・名称］**等**」という語によって、他の人々[139]によって認められている、対象の影像等を本性とする〈相〉(nimitta) 等［が把握される］。［1847］

［630,25］それでは、もし対象のない認識もあるとすれば、どのようにしてそれが認識であると言われるのか。即ち、「認識するから認識である」と言われる。そして、認識の対象がないとき、認識する人にとっての[140]認識とは何なのかと［問うなら］、「**知が伴うだけで**」と［師は］言う。

> **知が伴うだけで認識と言われる。また、それ**（＝知が伴うということ）**はこれ**（＝認識）**が無感覚なものではないということであると考えられる。**［認識は自ら］**顕現するからである。‖1848‖**

[138] 自在神はヨーガ派や 6 世紀以降のヴァイシェーシカ派、勝因（または根本原質 prakṛti）はサーンキヤ派、時間はヴァイシェーシカ派がそれぞれその実在を認めるとされる。

[139] 「他の人々（para-）」とは唯識派を指しているであろう。高橋 2005: 35-38 等参照。

[140] vijānataḥ（現在分詞「認識する人にとって」）は G にはない。J 195b7: vijā-nata（ḥ は見えない）.

[631,8]「知が伴うこともまた、認識の対象がなくてはありえない」と言うなら、**「また、それは」**と[師は]言う。**「それ」**とは、知が伴うことである。**「これが」**とは「認識が」である。[これ(認識)が]何であると言われるのか。**無感覚なものではない**ということである[141]。他に[知によって]顕現させせられるものはないからであり、[知以外の]他の顕現もないからである。空にある光のように。顕現を性質としているから知を性質とすると言われるのである。[1848]

V-3 第二理証批判 TS1849-1851

[631,13]また、過去の行為がどうして結果を与えるのかという[問い]に対して、[師は]「**[過去の]異熟因**」云々と言う。

> **過去の異熟因が結果を与えることは認められない。しかし、それ**(=異熟因)**によって薫じられた**(=潜在化した)**知識の連続**(心相続)**から結果は[生じる]と認められる。**
> **|| 1849 ||**

「**薫じられた**」とは、「連続して結果を生む能力をもって[各瞬間に]生じた」という意味である。[**1849**]

[631,15]もしそうであるなら、どうして世尊によって「滅尽し消滅し変壊した行為は存在する」[142]と説かれたのか[と問うなら]、「**[心相続における]まさにその薫習**」云々と[師は]言う。

> **心相続におけるまさにその薫習について、隠喩として「その行為は存在する」と教示されたのである。例えば、元素は消滅しないように。|| 1850 ||**

---

[141] Schayer(1938: 65, n.1)は、TS2000を引用して、「自己認識」として理解している。TS2000: vijñānaṃ jaḍarūebhyo vyāvṛttam upajāyate | iyam evâtmasaṃvṛttir yâjaḍarūpatā.(認識は無感覚なものとは無関係なものとして生じる。無感覚なものではないということこそ自己認識に他ならない。)

[142] AKBh 299 9-10.

［631,16］「**隠喩として**」とは、「比喩として」である。例えば、元素から生じた金等の結果の連続が起こるとき[143]、［金等は］消滅しても元素は消滅していないと言われるように、行為もまたそのように［説かれているのである］。［1850］

［631,19］比喩に拠る教示の目的は何か［という問いに対して］、「**断見**」云々と言う。

> ［行為（＝業）の結果はないという］**断見を否定するために教師（＝世尊）によってそのように明示されたのである。さもなければ『［勝義］空性経』における説示はどのように通釈[144]されようか。‖1851‖**

「過去の行為はない」と［世尊によって］説かれたとき、所化［の有情］は、過去の行為によって連続してもたらされる〈結果を生じる能力〉さえも存在しないと理解する**断見**に陥るであろうことから、「［過去の］行為は存在する」と世尊は説かれたのである。なぜなら、**さもなければ**［即ち］もし過去のものが本性をもって存在するなら、『**勝義空性経**』で「眼は生じるときどこからもやって来ない。消滅するときどこにも集まらない。実に、眼は前に無くて今存在し、存在し終わって消滅する」[145]という［世尊の］説示はどのように通釈されようか［され得ない］。

［632,9］もし「現在時において［眼は］前に存在しないで今存在する［と説かれたのである］」[146]と言うなら、それはおかしい。時間は存在と別のものではないからである。それら［諸存在］は時間に他ならない

---

[143] B 631, 17: samabhāve を sambhāve と訂正。cf. G 518, 17-18: sa（ma）bhāve.

[144] cf. nītārtha: 了義。

[145] この経文は『倶舎論』では第一教証批判の中で出て来る。AKBh 299, 12-16参照。

[146] AKBh 299, 14-15. この反論は、過去時、未来時においても眼は存在しているということを含意している。

［と］、そのような確立［された教義］が［有部によって］説かれているからである[147]。また、もし「［眼は眼］自体において前に存在しないで今存在する」と言うなら、そのとき未来の眼は存在しないことが成立する。

［632,11］さらに、［三時に］常に存続しているなら、諸々の因果的存在には因も果もないから苦［諦］（果）と集諦（因）はないことになる。それらがないから、滅［諦］（果）と道［諦］（因）も［ないことになる］。従って、四聖諦がないから、遍知・断・直証・修習[148]は不合理である［ことになる］。そして、それらがないから、結果に達し目的に向かう者たち[149]は存在しない［ことになる］。よって、すべての［仏］説は消失する［ことになる］から過去等のものの類を［実在として］構想することは正しくない。［1851］

V－4　第三理証批判　TS1852-1855

［632,16］「［過去・未来のものがなければ、これは］**過去・**［これは］**未来と判別された認識が**どうして**瑜伽行者達にあろうか**」（1788cd）という［有部の主張］に対して、「**間接的**」云々と［師は］言う。

> **間接的または直接的に、結果［または］原因となる現在の**
> **ものの様相を瑜伽行者達は認識する。‖1852‖**

---

[147] cf. AK I 7c: ta evâdhvā.（それら［有為法］は時間に他ならない。）；AKBh 5, 3 : ta eva saṃskṛtā gatagacchadgamiṣyadbhāvād adhvānaḥ, adyante ‘nityatayêti vā （それら有為［法］は、行った・行きつつある・行くであろうという様態から、あるいは、無常性に飲み込まれているから、諸々の時間に他ならない。）. 婆沙393c4-7参照。cf. SA 474, 2-8.

[148] AKBh 371, 11以降に、世親自身の三転十二行相の説明が見えるが、その中にこの4種の語が出る。AKBh 371, 17-20: kathaṃ ca punas triparivartam | satyānāṃ triḥ parivartanāt | kathaṃ dvādaśākāram | caturṇāṃ satyānāṃ tridhākaraṇāt | duḥkhaṃ samudayo nirodho mārga iti | parijñeyaṃ praheyaṃ sākṣātkartavyaṃ bhāvayitavyam iti | prajñātaṃ prahīṇaṃ sākṣātkṛtaṃ bhāvitam iti. 櫻部・小谷1999: 337参照。

[149] 結果に達した者（phalastha-）とは預流果等の四果に達した者、目的に向かう者（pratipannaka-）とは預流向等に入った者。四向四果の八輩のこと。

その後に、概念知を伴い、真実には対象をもたない清浄な世間知によって　［彼らはその様相を］**観察する。‖ 1853 ‖**

そこで、既にあった、またはこれからあろう因果の連鎖に依拠して、［瑜伽行者に］**過去・未来に関する教示が起こるのである。‖ 1854 ‖**

［他方、］**すべての概念知の網を離れた智の連鎖をもつ如来には、意志的造作なく**（＝無功用に）**教説が起こる。‖ 1855 ‖**

［632,17］過去の対象に拠れば**結果となり**未来［の対象］に拠れば**原因**［となる、ということである］。［1852］

［632,18］「**概念知を伴い**」とは「概念知をもち（＝有分別の）」という意味である。「**真実には対象をもたない**［知］」とは「言葉を伴う知」である。独自相（＝個物）を対象としないからである。［1853］

［632,19］「**そこで**（tat）」とは「それ故（tasmāt）」である。**既に起こった、またはこれから起こるであろう因果の連鎖に依拠して、**清浄ではない瑜伽行者に**過去**等**に関する教示が起こるのである。**［1854］

［632,21］他方、世尊［即ち］**如来には、**清浄な世間知もない。すべての無明を断ち切ることによって常に三昧に入っているからである。また、概念知は無明を本性とするからである。

［偈で］以下のように言われる。

「この概念知はそれ自身、無明をその性質とすることとなる。［概念知はそれ］自身の形象を外界のものだと増幅して起こるからである」[150]と。

本願と福徳と智という資糧の力によって如意宝珠にも似た身体を得られた彼のお方（＝如来）には、**意志的造作なく**（＝無功用に）**教説が**起こるのである。［1855］

[150] 同定できない。

第２節　校訂テキスト

TSP 613, 20-633, 12 ad TS 1785-1855 (ch. 21: Traikākyaparīkṣā)

I

[613, 20] [151] asaṅkrāntim[152] ity asya samarthanārtham āha **heme**tyādi |

hemānugamasāmānye trikārānugato nanu[153] |

avasthābhedavān bhāvaḥ kaiścid Bauddhair apîṣyate || 1785 ||

"nâvasthānaṃ tu kasyacid"[154] ity atrêdaṃ codyam | nanu katham idam ucyate "nâvasthānaṃ tu kasyacid" iti, yāvatā kaiścid Dhamatrāta-prabhṛtibhir Bauddhair api kālatrayāvasthito bhāva iṣṭo 'vasthābhedāt, **hemānugamasādharmyeṇa** | [1785]

II

[614, 7][155] etad eva dvitīyena ślokena darśayati |

avasthābhedabhāve 'pi yathā varṇaṃ[156] **jahāti na** |

hemādhvasu tathā bhāvo[157] **dravyatvaṃ na tyajaty ayam** || 1786||

atītājātayor jñānam anyathâviṣayaṃ bhavet |

dvayāśrayaṃ ca vijñānaṃ tāyinā kathitaṃ katham || 1787 ||

karmâtītaṃ ca niḥsattvaṃ kathaṃ phaladam iṣyate |

atītānāgate[158] **jñānaṃ vibhaktaṃ yogināṃ ca kim** || 1788 ||

---

[151] G 503, 20; J 191b6.

[152] TS 4a. 和訳註参照。

[153] この偈の前半（TS 1785ab）は、G では、"hemno 'nugamasāmyena sthiratvaṃ manyate tadā"であるが、その後半部"sthiratvaṃ manyate tadā"は、前章即ち第 20 章（Syādvādaparīkṣā）の 1783d と同一である。B, G のいずれも趣旨は同内容と取れるが、B で読む。J 90b3-4: hemānugamasāmānyena. J は a 句が 9 音節になっている。因みに、後半部のチベット語訳はサンスクリットテキスト（B,G）とも異なる。D 65a7, P 79a3: dus gnyis rjes 'gro ma yin no.

[154] この句は、TS 1782d（第 20 章）の引用で、直前の第 20 章（Syādvāda-parīkṣā）のシャーンタラクシタの主張である。B 613, 21: 1780 とあるが、誤り。

[155] G 503, 26; J 192a1.

[156] B 614, 1; G 503, 27; J 90b4: varṇyaṃ.

[157] B 614, 2; G 503, 28 （; J 90b4）: tathābhāvo.

[158] B: atītānāgataṃ. G, J90b5: atītānāgate.

na dravyāpohaviṣayā atītānāgatās tataḥ |
adhvasaṅgraharūpādibhāvāder[159] vartamānavat || 1789 ||

II – 1

II – 1 – 1

[614, 7][160] tatra bhāvānyathāvādī bhadanta-Dharmatrātaḥ | sa kilâha dharmasyâdhvasu vartamānasya bhāvānyathātvam eva kevalam, na tu dravyasyêti | yathā suvarṇadravyasya kaṭakakeyūrakuṇḍalādyabhidhāna-nimittasya guṇasyânyathātvaṃ na suvarṇasya, tathā dhamasyânāgatādibhāvād anyathātvam | tathā hi anāgatabhāvaparityāgena vartamānabhāvaṃ pratipadyate dharmaḥ, vartamānabhāvaparityāgena câtītabhāvam, na tu dravyānyathātvaṃ sarvatra dravyasyâvyabhicārāt | anyathânya evânāgato[161] 'nyo vartamāno 'nyo 'tīta iti prasajyate | kaḥ punar bhāvas tenêṣṭaḥ | guṇaviśeṣaḥ, yato 'tītādyabhidhānajñānapravṛttiḥ |

II – 1 – 2

[614, 15][162] lakṣaṇānyathāvādī bhadanta-Ghoṣakaḥ | sa kilâha dharmo 'dhvasu vartamāno 'tīto[163] 'tītalakṣaṇayukto 'nāgatapratyutpannābhyāṃ lakṣaṇābhyām aviyuktaḥ | yathā puruṣa ekasyāṃ striyāṃ raktaḥ śeṣāsv aviraktaḥ, evam anāgatapratyutpannāv api vācyau[164] | asya hy atītādi-lakṣaṇavṛttilābhāpekṣo vyavahāra iti pūrvakād bhedaḥ |

II – 1 – 3

---

[159] G: adhvasaṅgraharūpād vibhāvāder. J90b6: adhvasaṅgraharūpādibhāvāder.

[160] G 504, 7; J 192a1.

[161] G 504, 12: evânāgate. J 192a2: evânāgato.

[162] G 504, 13; J 192a2.

[163] B 614, 15-16: varttamāno-tīto. G 504, 14: varttamāno 'tīto. J 192a3: varttamāno tīto

[164] G 504, 16: vācye. J 192a3: vācyau.

[614, 19][165] avasthānyathāvādī bhadanta-Vasumitraḥ | sa kilâha dharmo 'dhvasu vartamāno 'vasthām avasthāṃ prāpyânyonyo [166] nirdiśyate 'vasthāntarataḥ, na dravyataḥ, dravyasya triṣv api kāleṣv abhinnatvāt | yathā mr̥dguḍikaikāṅke[167] prakṣiptā ekam ity ucyate, śatāṅke śataṃ, sahasrāṅke sahasraṃ tathā kāritre 'vasthito bhāvo vartamānaḥ, tataḥ pracyuto 'tītaḥ, tadaprāpto 'nāgata iti | asya avasthāpekṣayā[168] vyavahāro yathā mr̥dguḍikāyāṃ | na hi tasyāḥ svabhāvānyathātvaṃ bhavati, kiṃ tarhi, sthānaviśeṣasambandhāt saṅkhyābhidyotakaṃ saṃjñāntaram utpadyate |

II－1－4

[615, 3][169] anyathānyathiko bhadanta[170]-Buddhadevaḥ, sa kilâha dharmo 'dhvasu vartamānaḥ pūrvāparam apekṣyânyonya ucyata iti | yathâikā strī mātā côcyate duhitā cêti | asya pūrvāparāpekṣo vyavahāraḥ | yasya pūrvam evâsti nâparaḥ so 'nāgataḥ, yasya pūrvam asti aparaṃ ca sa vartamānaḥ, yasyâparam eva na pūrvaṃ so 'tīta iti |

[615, 7][171] ete catvāraḥ Sarvāstivādā[172] bhāvalakṣaṇāvasthānyathānyathikasaṃjñitāḥ |

II－2－1

[615, 8][173] tatra prathamaḥ pariṇāmavāditvāt Sāṅkhyamatān na bhidyate | yas tasya pratiṣedhaḥ so 'syâpi draṣṭavyaḥ | tathā hi pūrvasvabhāvāparityāgena vā pariṇāmo bhavet parityāgena vā | yady aparityāgena tadâdhvasaṅkaraprasaṅgaḥ | atha parityāgena, tadā sadāstitvavirodhaḥ |

---

[165] G 504, 17; J 192a3.
[166] B 614, 20; G 504, 18: prāpyânyo'nyo. J 192a3: prāpyonyonyo.
[167] B 614, 2; G 504, 19; J 192a4: mr̥dguḍikā ekāṅke.
[168] B 614, 23; G 504, 21; J 192a4: asya vyavasthāpekṣayā
[169] G 504, 23; J 192a5.
[170] G 504, 23: omit "bhadanta." J 192a5: bhadanta-.
[171] G 504, 26; J 192a5.
[172] G 504, 26: sarve 'stivādā. J 192a5: sarvā-（or sarveḥ?）-stivādā.
[173] G 504, 27; J 192a6.

II－2－2

[615, 12][174] dvitīyasyâpi vādino 'yaṃ saṅkara eva, sarvasya sarvalakṣaṇayogāt | puruṣas[175] tv arthāntarabhūtarāgasamudācārād rakta ucyate 'viraktaś ca samanvāgamamātreṇa, na tu dharmasya lakṣaṇasamudācāro lakṣaṇasamanvāgamo vā prāptilakṣaṇo 'sti, anyatvaprasaṅgāl lakṣaṇasya prāptivad iti na sāmyaṃ dṛṣṭāntasya dārṣṭāntikena |

II－2－3

[615, 16][176] tṛtīyasya kāritreṇâdhvavyavasthêti[177] tasya vistareṇa dūṣaṇaṃ vakṣyate |

II－2－4

[615, 17][178] caturthasyâpy ekasminn evâdhvani trayo 'dhvānaḥ prāpnuvanti | tathā hi atīte 'dhvani pūrvapaścimau kṣaṇāv atītānāgatau madhyamaḥ kṣaṇaḥ[179] pratyutpanna iti | eṣā dūṣaṇadig eṣāṃ spaṣṭā |

II－2－5

[615, 20][180] tṛtīyam evârabhya bhūyas traikālyaparīkṣârabhyate | hemadṛṣṭāntena tu siddhāntopakṣepamātraṃ kṛtam na tu Dharmatrātadarśanam evâbhimatam | tathā ca vakṣyati "kāritreṇa vibhāgo 'yam adhvanāṃ yat prakalpyata" (1790cd) iti | na ca Dharmatrātasya kāritreṇâdhvavyavasthā, kiṃ tarhi | Vasumitrasya | [1786]

II－3－1　　第一理証

---

[174] G 505, 3; J 192a6.
[175] B 615, 12: ruṣas. G 505, 4; J 192a7: puruṣas.
[176] G 505, 7; J 192a7.
[177] B 615, 16; J 192a7: -dhvasv avasthêti. G 505, 7: -dhvavyavasthêti.
[178] G 505, 7; J 192a7.
[179] B 615, 18: kṣaṇa. G 505, 9; J 192a8: kṣaṇaḥ.
[180] G 505, 9; J 192a8.

[615, 24][181] tatra yady atītānāgataṃ na syāt, abhūn Mahāsammato bhaviṣyati Śaṅkhaś Cakravartîty **atītājātayor** vijñānaṃ nirālambanam eva syāt | tataś ca vijñānam eva na syād ālambanābhāvād iti bhāvaḥ | tathā hi prati vastu vijñaptyātmakaṃ vijñānam, asati ca jñeye na kiñcid anena jñeyam ity avijñānam eva syāt | ［1787ab］

II－3－2

[616, 6][182] kiñca "dvayaṃ pratītya vijñānam utpadyata" iti Bhagavatôktam "katamad dvayam, cakṣūrūpāṇi yāvan manodharmā"[183] iti | asati câtītānāgate tadālambanaṃ vijñānaṃ dvayaṃ pratītya na syād ity āgamavirodhaḥ | ［1787cd］

II－3－3

[616, 9][184] api câtītaṃ karma phaladaṃ na syād yadi tan **niḥsattvaṃ** sattāśūnyaṃ bhavet, phalotpattikāle vipākahetor abhāvāt | na câsataḥ kāryotpādanaśaktir asti, sarvasāmarthyavirahalakṣaṇatvād asattvasya | ［788ab］

II－3－4

[616, 12][185] kiñca āsīn Māndhātā[186] Brahmadatto, bhaviṣyati Śaṅkhaś cakravartī Maitreyas tathāgataḥ, ityādinā vibhāgena **yoginām** atītādiviṣayaṃ **vibhaktaṃ** vijñānaṃ na syāt | na hy asatāṃ vibhāgo 'sti | ［1788cd］

II－3－5

---

[181] G 505, 12; J 192b1.
[182] G 505, 16; J 192b2.
[183] cf. AKBh 295, 14.
[184] G 505, 18; J 192b2.
[185] G 505, 20; J 192b3.
[186] G 505, 21: māndhāno. J 192b3: māndhānā （or māndhāmā?）. cf. B 616 n.2.

[616, 14][187] tasmād[188] atītānāgatā bhāvāḥ Śrīharṣādayo na dravyapratiṣedharūpāḥ, [1789ab]

[616, 15] **adhvasaṃgṛhītarūpādi**tvenôpadiṣṭatvād vartamānavat | uktaṃ hi Bhagavatā "atītaṃ ced bhikṣavo rūpaṃ nâbhaviṣyan na śrutavān āryaśrāvako 'tītarūpe 'napekṣo 'bhaviṣyat | yasmāt tarhy asty atītaṃ rūpaṃ tasmāc chrutavān āryaśrāvako 'tītarūpe 'napekṣo bhavatîti vistaraḥ, tathā yat kiñcid rūpam atītānāgatādi[189] tat sarvam abhisaṃkṣipya rūpaskandha iti saṅkhyāṃ gacchatî"tyādi[190] | adhvanā saṅgraho yeṣāṃ te **'dhvasaṅgrahā rūpādayaḥ** | **ādi**śabdena vedanādiparigrahaḥ | teṣāṃ **bhāvo** rūpāditvam | atrâpy **ādi**śabdena duḥkhasamudayānityānātmāditvenôpadiṣṭatvād iti gṛhyate | [1789cd]

III

III – 1

[616, 23][191] athâpi syāt ākāśavat sadāvasthitatvād atītādivyavasthā tarhi katham ity āha **na câivam** ityādi |

> **na câivam iha mantavyam adhvabhedaḥ kuto nv ayam** |
> **kāritreṇa vibhāgo 'yam adhvanāṃ yat prakalpyate** || 1790 ||
> **kāritre vartate yo hi vartamānaḥ sa ucyate** |
> **kāritrāt pracyuto 'tītas tadaprāptas tv anāgataḥ** || 1791 ||
> **phalākṣepaś ca kāritraṃ dharmāṇāṃ janakaṃ na tu** |
> **na vâkṣepo 'sty atītānāṃ nâtaḥ kāritrasambhavaḥ** || 1792 ||

[616, 24][192] yataḥ samprāptakāritro **vartamāna** ucyate, uparatakāritro **'tītaḥ**, **aprāpta**kāritro **'nāgata** ity adhvānaḥ kāritreṇa vyavasthitāḥ | [1790-1791]

---

[187] G 505, 23; J 192b3.
[188] B 616, 14: yasmād. G 505, 23; J 192b3: tasmād.
[189] B 616, 18; G 505, 26; J 192b4: atītam anāgatādi.
[190] cf. AKBh 295, 9-12.
[191] G 506, 3; J 192b5.
[192] G 506, 11; J 192b5.

[617, 8][193] kiṃ punar atra kāritram abhipretam, yadi darśanādilakṣaṇo vyāpāraḥ, yathā pañcānāṃ cakṣurādīnāṃ darśanādikam yataś cakṣuḥ paśyati śrotraṃ śṛṇoti ghrāṇam jighrati jihvā svādayatîtyādivijñānasyâpi vijñātṛtvam vijānātîti kṛtvā rūpādīnām indriyagocaratvam | evaṃ sati pratyutpannasya tatsabhāgasya [194] cakṣuṣo nidrādyavasthāyāṃ kāritrābhāvād vartamānatā na syāt |

[617, 14][195] atha phaladānagrahaṇalakṣaṇaṃ kāritram yathā cakṣuṣā sahabhavā [196] dharmā jātyādayaḥ puruṣakāraphalam [197] anantarotpannaṃ cakṣurindriyaṃ puruṣakāraphalam adhipatiphalaṃ niṣyandaphalaṃ ca etat phalaṃ jananāt prayacchad dhetubhāvāvasthānād gṛhṇac cakṣur vartamānam ucyata iti | evaṃ tarhy atītānām api sabhāgasarvatragavipākahetūnāṃ phaladānābhyupagamād vartamānatvaprasaṅgaḥ | atha samastam eva phaladānagrahaṇalakṣaṇaṃ kāritram iṣyate | evam atītasya sabhāgahetvāder ardhavartamānatvaprasaṅga [617, 19] ity etad doṣabhayād ācārya-Saṅghabhadra [198] āha "dharmāṇāṃ kāritram ucyate phalākṣepaśaktiḥ na tu phalajananaṃ | na câtītānāṃ sabhāgahetvādīnāṃ phalākṣepo 'sti, vartamānāvasthāyām evâkṣiptatvāt | na câkṣiptasyâkṣepo yukto 'navasthāprasaṅgāt | tasmād atītānāṃ **na kāritrasambhava** iti nâsti lakṣaṇasaṅkara" iti | [1792]

III－2

III－2－1

[617, 24][199] **tair** ityādinā pratividhatte |

> **taiḥ kāritram idaṃ dharmād anyat tadrūpam eva vā |**
> **abhyupeyaṃ yadanyâsti gatiḥ kācin na vāstavī** || 1793 ||

---

[193] G 506, 12; J 192b5.
[194] cf. B 617, n.1: tatsamānarūpasyêty arthaḥ.
[195] G 506, 16; J 192b6.
[196] J 192b7: sahabhavo.
[197] B 617, 15; G 506, 17: puruṣākāraphalam. J 192b7: puruṣakāraphalaṃ |.
[198] B 617, 19; J 192b8: saṃhatabhadra. G 506, 22: sahantabhadra.
[199] G 506, 26; J 193a1.

anyatve vartamānānāṃ prāg ūrdhvaṃ vâsvabhāvatā |
hetutvasaṃskṛtatvādeḥ kāritrasyêva gamyatām || 1794 ||
anyathā nityatāsattiḥ[200] **svabhāvāvasthiteḥ sadā** |
nâitadrūpātiriktaṃ[201] **hi vidyate nityalakṣaṇam** || 1795 ||

[617, 24][202] tat **kāritraṃ dharmād anyad** vā syād ananyad vêti **tair** abhyupagantavyam, anyānanyayor anyonyaparihārasthitalakṣaṇatvāt | ekaniṣedhasyâparavidhināntarīyakatvāt | nânyā vastuno gatir asti | [1793]

III – 2 – 1 – 1

[618, 11][203] tatra yady anyat tadā **vartamānānāṃ** prāgūrdhvāvasthayoḥ niḥsvabhāvatā prāpnoti | **hetutvasaṃskṛtatvāder** hetoḥ[204] kāritravat | ādiśabdena vastutvādayo gṛhyante[205] | [1794]

[618, 13][206] **anyathā** yadi prāg ūrdhvaṃ ca niḥsvabhāvatā na syāt tadā sarvasya saṃskṛtasya **nityatā** prāpnoti, svabhāvasya sarvadā vyavasthitatvāt | na ca sadāsattvavyatirekeṇa nityatvalakṣaṇam asti | yad āha "nityaṃ tam āhur vidvāṃso yaḥ svabhāvo na naśyati" iti[207] | [1795]

III – 2 – 1 – 1a

[618, 18][208] syād etat yadi nāma nityatā śaktiḥ, hetutvasaṃskṛtatvādes tu hetoḥ kathaṃ sādhyavipakṣeṇa virodha ity āha **nityasyêtyādi** |

nityasya hetutā pūrvaṃ kramākramavirodhataḥ |
niṣiddhā saṃskṛtatvaṃ hi vyaktaṃ nitye nirāspadam || 1796 ||
skandhādivyatiriktasya kāritrasyôpavarṇane[209] |

---

200 G 507, 3: nityatāpattiḥ. J91a3: nityatāsattiḥ.
201 B: nâitad rūpātiriktaṃ; **G**: nâitadrūpātiriktaṃ
202 G 507, 5; J 193a1.
203 G 507, 7; J 193a1.
204 G 507, 8: hetutvasaṃskṛtatvād dhetoḥ
205 B 618, 13: gṛhyate. G 507, 8: gṛhyante. J 193a2: gṛhya (ṃ?) te.
206 G 507, 8; J 193a2.
207 PV Pramāṇasiddhi k.206cd.
208 G 507, 13; J 193a2.

svasiddhāntavirodhaś ca durnivāraḥ prasajyate ‖ 1797 ‖

[618, 19][210] **pūrvam** iti | Sthirabhāvaparīkṣāyām[211] | sarvasya ca saṃskṛtasyânityatvābhyupagamāt saṃskṛtatvaṃ nitye na sambhavatîti spaṣṭam evâvasīyate | ［1796］

[618, 21][212] kiñca **skandhāyatanavyatiriktasya kāritrasyôpavarṇane siddhāntavirodhaḥ**, tathā hi Bhagavatôktam "sarvaṃ sarvam iti brāhmaṇa yad uta pañca**skandhā** dvādaśāyatanāni, aṣṭādaśa ca dhātava[213]" iti | ［1797］

III－2－1－2

III－2－1－2a

ananyatve 'pi kāritraṃ dharmād avyatirekataḥ |
svarūpam iva dharmasya prasaktaṃ sārvakālikam ‖ 1798 ‖
tataś câdhvavibhāgo 'yaṃ tadvaśān na prakalpyate |
na hi tasya cyutiḥ prāptir aprāptir vā vibhāgataḥ ‖ 1799 ‖

[619, 10][214] athânanyat **kāritram** abhyupagamyate tadā dharmasvarūpavat tadavyatirekāt tad api **sārvakālikaṃ** prāpnoti | ［1798］

[619, 11][215] **tataś ca** kāritrāt pracyuto 'tītas tatprāpto vartamānas tadaprāpto 'nāgata iti kāritravaśād ayam adhvavibhāgo na syāt | yato 'sya kāritrasya yadi vibhāgena cyutiprāptyaprāptayaḥ[216] syus tadā syād ayam adhvavibhāgaḥ, na ca tā[217] vibhāgena sambhavanti, sadāvasthitaikarūpasya vibhāgābhāvāt | ［1799］

---

[209] B 618, 8: -pavarṇanam. G 507, 17; J91a4: -pavarṇane. cf. B 628, 21: upavarṇane.
[210] G 507, 19; J 193a3.
[211] TS 第 8 章。
[212] G 507, 20; J 193a3.
[213] G 507, 22: cā（ścā?）bhava. cf. B 618, n3: pā-: cābhāvaḥ; gā-: ścābhāvaḥ. J 193a4: aṣṭādaśa dhātava.
[214] G 508, 1; J 193a4.
[215] G 508, 2; J 193a4.
[216] G 508, 3-4: yadi prāptyaprāptayaḥ. J 193a4: cyutiprāpty-.
[217] B 619, 14; G 508, 4: tāni.

III – 2 – 1 – 2b

kāritrāvyatirekād vā dharmaḥ kāritravad bhavet |

pūrvāparavyavacchinnamadhyamātrakasattvavān[218] || 1800 ||

[619, 16][219] kiñca kāritrād avyatiriktatvād dharmo 'pi pūrvāparakoṭiśūnyasattāyogī prāpnoti kāritravat | **pūrvāparavyavacchinnam** pūrvāparakoṭiśūnyaṃ, **madhyamātrakaṃ** ca tat **sattvaṃ**[220] cêti vigrahaḥ | tad asyâstîti tad**vān** | [1800]

III – 2 – 1 – 3

[619, 19][221] kāritram ityādinā parasparaviruddhābhyupagamodbhāvanenôpahasati |

kāritraṃ sarvadā nâsti sadā dharmaś ca[222] **varṇyate |**

dhamān nânyac ca kāritraṃ vyaktaṃ devaviceṣṭitam || 1801 ||

kāritrāntarasāpekṣā tatrâpy adhvasthitir yadi |

tulyaḥ paryanuyogo 'yaṃ nanu sarvatra dhāvati || 1802 ||

[619, 19][223] evaṃ tarhi rūpādidharmo na sadâstîti prasaktaṃ kāritrād avyatiriktatvād ity āha **sadā dharmaś cêti** | evam api dharmād anyat kāritraṃ prasajyata ity āha **dharmān nânyac ca kāritram** | **devāḥ** Īśvarādayaḥ, te hi yuktāyuktam anālocya svātantryeṇâiva vartanta iti[224] teṣāṃ yathāceṣṭitaṃ yuktinirapekṣaṃ svātantryeṇa pravṛttis tadvad etad iti yāvat. [1801]

[619, 23][225] kiñca yadi kāritrasya kāritram antareṇānāgatāditvam iṣyate, na tarhi vaktavyam adhvānaḥ kāritreṇa vyavasthitā iti, vyabhicārāt | yathā

---

[218] G 508, 7: -sarvavān. J91a: sattvavān.

[219] G 508, 8; J 193a5.

[220] G 508, 9: sarvaṃ. J 193a5: sattvaṃ.

[221] G 508, 11; J 193a5.

[222] B 619, 6: dharmas tu. G 508, 12; J91b: dharmaś ca. cf. B 619, 20-21: dharmaś ca.

[223] G 508, 16; J 193a6.

[224] B 619, 22: varttante iti. G 508, 18-19: varttanta iti. J 193a6 : varttanta iti

[225] G 508, 19; J 193a7.

kāritrasya svarūpasattāpekṣayânāgatāditvaṃ vyavasthāpyate, evaṃ bhāvānām apy anāgatāditvaṃ bhaviṣyatîti kiṃ kāritrakalpanayā |

[620, 9][226] atha mā bhūd vyabhicāradoṣa iti kāritrasyâpi kāritram abhyupagamyate, tadā tatrâpi vyatirekādicintayā **tulyaḥ paryanuyogaḥ** | anavasthādoṣaś ca | [1802]

III－2－2

III－2－2－1

[620, 11][227] yad uktam ananyatve 'pi kāritraṃ sārvakālikaṃ prāpnoti dharmasvarūpavad aviśeṣād iti | atra bhadanta-Saṅghabhadra[228] āha **svarūpetyādi**[229].

svarūpāvyatirikto[230] **'pi dṛṣṭaḥ sapratighatvavat** |
viśeṣaś ced idaṃ nâiva prakṛtasyôpakārakam || 1803 ||
na hi sapratighatvādiḥ padārthasyânugāminaḥ |
kādācitko mataḥ kaścid bhāvasyâiva tathodbhavāt || 1804 ||

[620, 12][231] "**svarūpāvyatirikto 'pi**[232] viśeṣako dharmo **dṛṣṭo** yathā sapratighatvādiḥ pṛthivyādīnām | te hi padārthatvenâviśiṣṭā api[233] sapratighā apratighāḥ sanidarśanā anidarśanā iti svarūpāvyatiriktair[234] dharmair viśiṣṭāḥ pratīyante tadvat kāritreṇâpi dharma" iti[235] |

---

[226] G 508, 23; J 193b1.
[227] G 508, 25; J 193b1.
[228] B 620, 12; J 193b2: -saṃhatabhadra. G 508, 26: -sahantabhadra.
[229] B 620, 12: āha svarūpād ityādi. G 508, 26; J 193b2: āha（omit svarūpetyādi）.
[230] B 620, 1; G 508, 27: svarūpād vyatirikto. J91b2: svarūpāvyatirikto. cf. D 66a2, P 79b6: rang hi ngo bo tha mi dad |
[231] G 509, 3; J 193b2.
[232] B 620, 12-13: svarūpād vyatirikto 'pi. G 509, 3: svarūpād vyatirikto 'pi. J 193b2: svarūpāvyatirikto 'pi. cf. D 84a3, P 119a4: rang gi ngo bo las tha mi dad |
[233] J 193b2: -viśiṣṭā 'pi.
[234] B 620,14-15, G 509, 5: svarūpād vyatiriktair. J 193b2: svarūpāvyatiriktair. cf. D 84a4, P 119a4: rang gi ngo bo las tha mi dad pa'i |
[235] NA 625a19-b2: 諸有為法歴三世時、体相無差有性寧別。豈不現見有法同時体相無差而有性別。如地界等内外性殊。受等自他楽等性別。此性與有理定無差。性既有殊有必有別。由是地等体相雖同、而可説為内外性別。受等領等体相雖同、而可説為楽等性別。又如眼等在一相續、清浄所造色体相同、而於其中有性類別。以

[620, 15][236] tad etat prakṛtān**upakārakam** | tathā hi idam atra prakṛtam, padārthāt kāritrasyâbhede 'bhyupagamyamāne saty ekasyâiva padārthasyâtmabhūtakāritrasyâviśeṣāt tadvaśād ayam adhvavibhāgo nâvakalpata iti | [1803]

[620, 18][237] pṛthivyādayas tu parasparam anyonyalakṣaṇabhedāsaṅgābhinnā iti yuktaṃ yat kecit sapratighā bhavanti kecid apratighā eva, yathā vedanādayaḥ | na tu ya evâpratighās ta eva sapratighā iti, yato na kaścid eko 'nugāmī padārthātmâsti pṛthivyādīnāṃ yatsapratighatvādidharmaḥ **kādācitko** bhavet | kiṃ tarhi | bhāvasya niravayavasya **tathā** sajātīyavijātīyavyāvṛttasyôdbhava iti na svarūpāvyatirikto dharma ekasya bhedako yuktaḥ | [1804]

[620, 24][238] kathaṃ rūpasya sapratighatvam iti vyatirekîva vyapadeśo yadi svarūpāvyatirikto dharmo bhedako na bhaved ity āha **anākṣipte**tyādi |

> **anākṣiptāny abhedena bhāva eva thatôcyate** |
> **tad rūpasyêti[239] śabdena cetaso vāsanâpi ca[240]** || 1805 ||

[620, 25][241] **anākṣiptāny abhedenêti** | bhedāntarapratikṣepeṇêty arthaḥ | **tathôcyata** iti | vyatirekîva | **tad** iti | sapratighatvam | **śabdenêti** rūpasya sapratighatvam[242] ity anena | atra dṛṣṭāntam āha **cetaso vāsanâpi cêti** | **api cêti** samudāyo nipāta ivârthe draṣṭavyaḥ[243] | [1805]

見聞等功能別故。非於此中功能異有。可有性等功能差別。然見等功能即眼等有。由功能別故有性定別。故知諸法有同一時、体相無差有性類別。既現見有法体同時、体相無差有性類別。故知諸法歴三世時、体相無差有性類別。

[236] G 509, 5; J 193b2.

[237] G 509, 8; J 193b3.

[238] G 509, 13; J 193b4.

[239] B 620, 6: sadrūpasyêti. G 509, 16, J 91b3: tadrūpasyêti. cf. D 66a3, P 79b8: gzugs kyis de shes.

[240] G 509, 16: ca. J91b3: vā. cf. B 620, n.2.

[241] G 509, 17; J 193b5.

[242] G 509, 18; (sa) pratighatvam. cf. B 621, n.1: pā-: pratighatva-. J 193b5: sapratighatvam.

[243] B 621, 10; G 509, 19: dṛṣṭavyaḥ. J 193b: draṣṭavyaḥ.

III－2－2－2

[621, 11][244] punaḥ sa evâha "na kāritraṃ dharmād anyat, tadvyatirekeṇa svabhāvānupalabdheḥ | nâpi dharmamātram, svabhāvāstitve 'pi kadācid abhāvāt | na ca nâsty aviśeṣāt[245], kāritrasya prāg abhāvāt, santānavat | yathā[246] dharmanairantaryotpattiḥ santāna ity ucyate, na câsau dharma-vyatiriktas tadavibhāgena gr̥hyamāṇatvāt, na ca dharmamātram, ekakṣaṇasyâpi santānatvaprasaṅgāt, na ca nâsti, tatkāryasadbhāvād" iti[247] | āha ca

santatikāryaṃ ceṣṭaṃ na vidyate sâpi santatiḥ kācit |
tadvad avagaccha yuktyā kāritreṇâdhvasaṃsiddhim iti [248]|

[621, 18][249] atrâha **tattvānyatve**tyādi |

tattvānyatvaprakārābhyām avācyam atha varṇyate |
santānādîva kāritraṃ syād evaṃ sāṃvr̥taṃ nanu || 1806 ||
ataś ca kalpitatvena tat kvacin nôpayujyate |
kārye santativad yasmād vastv evârthakriyākṣamam || 1807 ||
sannidhānaṃ ca tasyêdaṃ bhāvikaṃ nêti tat kr̥tam |
adhvatrayavyavasthānaṃ tāttvikaṃ nôpapadyate || 1808 ||

[621, 18][250] **santānādîvêti** | **ādi**śabdena samūhādiparigrahaḥ | yathā santānibhyas **tattvānyatv**enâvācyatvāt pudgalavat santāno niḥsvabhāvaḥ,

---

[244] G 509, 21; J 193b5.

[245] B 621, 12; G 509, 22; J 193b6: na ca na viśeṣaḥ. cf. D 84b4, P 119b5: med pa yang med yin te | khyad par med* pa'i phyir dang bya ba yang sngar med pa'i phyir rgyun bshin no ||. * P: yin. 正理も「不可説無」とある。 NA 633a28-b2 : 如是現在差別作用非異。於法無別体故。亦非即法。有有体時作用無故。不可説無。作用起已能引果故。和訳註参照。cf. 本書第3章参照。

[246] B 621, 13: tathā. G 509, 23; J 193b6: yathā.

[247] NA 633a24-b2 : 差別作用与所附体不可説異。如法相続如有為法。刹那刹那無間而生名為相続。此非異法。無別体故。亦非即法。勿一刹那有相続故。不可説無。見於相続有所作故。如是現在差別作用非異。於法無別体故。亦非即法。有有体時作用無故。不可説無。作用起已能引果故。

[248] NA 633b3-4: 「 相続無異体、許別有所作、作用理亦然、故世義成立」。

[249] G 509, 27; J 193b7.

[250] G 510, 7; J 193b7.

tadvat kāritram api niḥsvabhavaṃ[251] syāt | svabhāve hi sati tattvam anyatvaṃ vâvaśyaṃbhāvi[252] | [1806]

[621, 21][253] tataś ca **tat** kāritraṃ **kalpitatvān** na **kvacit kārye santativad** upayujyeta[254] | na hi kalpitasya santānasya kvacit kārye 'sty upayogas tasya niḥsvabhāvatvāt | svabhāvapratibaddhatvāt kāryodayasya | **yasmād**[255] **vastv eva** santānisvabhāvam **arthakriyākṣamam** | na santānaḥ kalpitaḥ | [1807]

[622, 12][256] tataś ca kāritrasya prajñaptisattvāt prāgvat[257] paścād api na paramārthataḥ **sannidhānam** astîti tadvaśād **adhvatrayavyavasthānam** api kalpitam eva syān na bhāvikam | [1808]

III – 2 – 2 – 3

[622, 15][258] athâpi[259] syād, bhavatu kāritraṃ prajñaptisat, tatkṛtaṃ câpy adhvavyavasthānam prajñaptisat, tataś ca ko doṣa ity āha **kāritrākhyêti** |

> **kāritrākhyā phalākṣepaśaktir yâśabdagocarā**[260] |
> **śakter eva ca vastutvāt sā prajñaptisatī katham** || 1809 ||
> **yac cêdam īkṣyate**[261] **rūpaṃ dāhapākādikāryakṛt** |
> **atītānāgatāvasthaṃ kiṃ tad evâbhyupeyate** || 1810 ||

---

[251] B 621, 20: tadvat kāritram api nisvabhavaṃ; G 510: （tathā kāritraṃ nis-svabhavaṃ）. cf. B 621, n.3-3: pā-: pustake nâsti; gā-: tathā kāritraṃ nisvabhāvaṃ. J 194a1: tadvat kāritram api niḥvabhavam.

[252] B 621, 21: tattvam anyatvam （omit "vâvaśyaṃbhāvi"）. G 510, 9; J 194a1: tattvam anyatvam vâvaśyaṃ bhāvi. チベット語訳（P, D）も G, J と一致する。D 85a1, P 120a1: gdon mi za bar de nyid dam gshan du 'gyur ba yin te.

[253] G 510, 9; J 194a1.

[254] TS 1807b では 'upayujyate'であるが、TSP では'upayujeta'と註釈している。意味としてはこの TSP の形（optative）が良い。B 621, 21; G 510, 10; J 194a1: upayujyeta.

[255] B 621, 23; G 510, 11; J 194a1: tasmād. cf. TS 1807c: yasmād.

[256] G 510, 12; J 194a2.

[257] G 510, 12; J 194a2: prāganu.

[258] G 510, 15; J 194a2.

[259] G 510, 15: tathâpi. J 194a2: athâpi.

[260] B 622, 1; G 510, 17: yā śabdagocarā. J91b5: yā'śabdagocaraḥ. cf. B 622, n1: śabdagocaraḥ. D 80a3, P 66a5: nus gsang sgra yi sbyod yul min.

[261] G 510, 15: iṣyate. J91b6: īkṣyate.

tad eva cet kathaṃ nāma tasyâivâikātmanaḥ sataḥ |
akriyā ca kriyā câpi kriyāviratir ity api || 1811 ||
ekasmin nirviśiṣṭe 'smin parasparaparāhatāḥ |
prakārāḥ katham ete hi yujyante nāma vastuni || 1812 ||
ekāvasthāparityāge parāvasthāparigrahāt |
nâivâitan nirviśiṣṭaṃ ced vastv adhvasv iti kalpyate || 1813 ||
kiṃ vai bhāvād vibhidyante 'vasthā nâkartṛtāptitaḥ |
tāsām eva hi sadbhāvāt kāryasattôpalabhyate || 1814 ||

[622, 17][262] **phalākṣepaśaktir** hi dharmāṇāṃ kāritram iti varṇitam[263] | yā[264] ca phalākṣepaśaktiḥ *=sā nânyā vastusvalakṣaṇāt, kiṃ tarhi tad eva | ata evâsau na śabdagocarā; asādhāraṇatvāt svalakṣaṇe śabdāpravṛtteḥ | tataś ca śaktir eva vastu nânyad iti **kathaṃ sā** śaktiḥ =*[265] **prajñaptisatī** bhavet[266] | nâiva bhaved iti[267] | tataś ca tadvaśād adhvavyavasthānaṃ tāttvikam evêṣṭaṃ bhavatêti[268] bhāvaḥ | ［1809］

[622, 21][269] kiñca yad etad **dāhapākādy**arthakriyākāri vahnyādirūpam upalabhyate, kiṃ tad **evâtītānāgatāvastham** āhosvid anyat | ［1810］

[623, 9][270] yadi **tad eva**, katham ekasmin nirviśiṣṭe[271] 'smin rūpādike vastuny akriyādayaḥ parasparaviruddhā dharmā yujyante, yena yathākramam anāgatavartamānātītavyavasthā syāt | ［1811］

---

262 G 511, 1; J 194a2.
263 B 622, 17: varṇitam（omit bhavatā）. G 511, 1; J 194a2: bhavatā varṇitam.
264 G 511, 1: sā. J 194a2: yā.
265 B 622, 18-20 の*=…=*の部分は、 J 194a3 にはあるが、G 511, 1 には欠落している。
266 G 511, 2: prajñaptisatī（kathaṃ）bhavet. cf. B 622, n.7: gā-: -satī kathaṃ. J 194a3: prajñaptisatī bhavet.
267 B 622, 20: iti（omit "yāvat"）を iti yāvat と訂正する。 G 511, 2; J 194a3: iti yāvat.
268 G 511, 3: bhavatîti. J 194a3: bhavatêti.
269 G 511, 3; J 194a3.
270 G 511, 4; J 194a4.
271 B 623, 9: niviśiṣṭe. G 511, 4-5; J 194a4: nirviśiṣṭe.

[623, 10][272] yadi hi viruddhadharmādhyāse 'py ekatvaṃ syāt, utsannā tarhi bhedavyavasthā, tataś ca sarvam eva jagad ekam eva syāt | ekatve ca sahotpattyādiprasaṅgaḥ | [1812]

[623, 12] [273] athâpy avasthāparityāgaparigrahabhedena bhinnatvād adhvasu vastu na nirviśiṣṭam iti kalpate, [1813]

[623, 13][274] evam api kiṃ tā **avasthā** bhāvād bhinnā āhosvid abhinnā iti vaktavyam | para āha **nêti** | bhidyante bhāvād iti sambandhaḥ | kasmāt | bhāvasy**âkartṛtāptito**[275] 'kartṛtvaprasaṅgāt | anvayavyatirekābhyāṃ tāsām evâvasthānāṃ kāryaṃ prati sāmarthyasiddheḥ | [1814]

III – 2 – 2 – 4

[623, 17][276] atra dūṣaṇam āhâ**bhedam** ityādi |

abhedam anumanyante katham adhvasu vastunaḥ |
tā abhūtvā bhavantyaś ca naśyantyaś ca[277] **tadātmikāḥ** || 1815 ||
avasthāyāṃ ca madhyāyāṃ svarūpeṇâiva kārakam |
tat tad eva svarūpaṃ ca daśayor anyayor api || 1816 ||
tad akriyākriyābhraṃśau[278] **katham asya tayor matau** |
pararūpeṇa kartṛtve prāptâsyâkartṛtā punaḥ || 1817 ||
atītānāgatāvastham anyac ced analādikam |
tat sāṅkaryādidoṣo 'yam asmin pakṣe nirāspadaḥ || 1818 ||
tad idānīm abhūtvâiva kāryayogyaṃ prajāyate |
na ca tiṣṭhati bhūtvêti siddhâsyânanvayātmatā || 1819 ||

[623, 17][279] **vastunaḥ** sakāśād **abhedaṃ katham** avasthāsv **anumanyante**[280] pratipadyante | nâiva | yasmād abhūtvā bhavanty avasthā bhūtvā ca

---

[272] G 511, 6; J 194a4.
[273] G 511, 8; J 194a5.
[274] G 511, 9; J 194a5.
[275] B 623, 15; J 194a5: -âkartṛtvāptitaḥ (-to). G 511, 11: -âkartṛtāptitaḥ (-to).
[276] G 511, 13; J94a5-6.
[277] B 623, 15: omit 'naśyantyaś ca'. G 511, 11; J92a3: naśyantyaś ca.
[278] G 511, 18: tadā kriyā-. J92a: tadakriyā-
[279] G 511, 24; J 194a6.

vinaśyanti | na ca tathā vastv iṣṭam, sarvadāstitvābhyupagamāt | tataś ca katham **tā abhūtvā bhavantyo vinaśyantyaś ca tadātmikā yuktāḥ** | nâiva | bhinnayogakṣematvāt | anyathā hi tadātmatvenâsām api sadāstitvaprasaṅgo vastusvabhāvavat, tato 'vyatirekād vastuno vâbhūtvābhāvādiprasaṅgo 'vasthāsvarūpavat | [1815]

[623, 23][281] bhavatu câvasthābhedaparikalpanā[282], tathâpi viruddha-dharmādhyāso na parihṛta eva | tathā hi vastu madhyāvasthāyāṃ kiṃ svarūpeṇa **kārakam** āhosvit pararūpeṇa | yadi **svarūpeṇa tad eva svarūpam anyayor** api **daśayor** atītānāgatāvasthayor astîti [1816]

[624, 9][283] **katham asya** kārakasvabhāvasy**âkriyākriyābhraṃśau**[284] syātām | atha pararūpeṇa, tad**âsyâkartṛtā punaḥ prāptê**ty avastu-tvaprasaṅgaḥ | evaṃ tāvat tad eva vahnyādirūpam atītānāgatāvasthāyāṃ na yuktam | [1817]

[624, 12][285] athânyat, **asmin pakṣe** na bhavaty ekatra kriyākriyādi-parasparāhatadharma**sāṅkaryādidoṣaḥ**, bhinnatvād vastunaḥ | [1818]

[624, 13][286] kiṃ tu yat tad dāhapākādi**kāryayogyam** analādikaṃ vastu **tad abhūtvā** jāyate **bhūtvā** ca vigacchatîti sadāstitvābhyupagamavirodhaḥ syāt anvayābhāvāt | [1819]

IV

[624, 16][287] syād etad yady api kāryayogyam abhūtvā jāyate, bhūtvā ca vigacchatîti tathâpy atītānāgatāvasthāyām akāryayogyaṃ vastu vidyata eva, tataś ca na sadāstitvābhyupagamavirodha ity āha **sa evêti** |

---

[280] G 511, 24: avasthā (sva) numanyante. cf. B 623, n.2: pā-: avasthānuman-yante. J 194a6: avasthā | anumanyante（間にダヌダがあるように見える）.

[281] G 512, 1; J 194a7.

[282] B 623, 23; G 512, 2: -parakalpanā. J 194a7: -parikalpanā. D85b, P121a1: yongs su brtags pa.

[283] G 512, 4; J 194a8.

[284] B 623, 23; G 512, 4: kārakasvabhāvasya kriyākriyābhraṃśau. J 194a8: kārakasvabhāva-syâkriyākriyābhraṃśau. cf. TS 1817a

[285] G 512, 6; J 194b1.

[286] G 512, 7; J 194b1.

sa eva bhāviko bhāvo ya evârthakriyākṣamaḥ[288] |
sa ca nâsti tayor yo 'sti na tasmāt kāryasambhavaḥ || 1820 ||

[624, 18][289] **sa evêty**[290] **arthakriyākṣamaḥ** | **tayor** iti atītānāgatāvasthayoḥ | **yo 'stîti** akāryayogyaḥ | [1820]

IV – 1

[624, 20][291] athâpi syāt, atītasya sabhāgahetvādeḥ kāryayogyatvam iṣyata eva, tataś câsiddham etan "na tasmāt kāryasambhava" (1820d) ity āha — **atītaś cêti** |

atītaś ca padārtho 'yam abhūtvā bhavanāt sphuṭam |
vartamāno 'nyavat prāptaḥ kādācitkatayâpi ca || 1821 ||
sadā sattvam asattvaṃ vâhetutve 'nyānapekṣaṇāt[292] |
hetor niyatasattvaś ca vartamāno 'rtha ucyate || 1822 ||
pratisaṅkhyānirodhādivailakṣaṇyaṃ parair matam |
saṃskṛtatvaṃ ca rūpāder jātisthityādiyogataḥ || 1823 ||
tatra jātir viśeṣaṃ kaṃ janayanty abhidhīyate |
janikâsyêti tadrūpād ajātād aparaṃ param || 1824 ||
aśakyotpādanas tāvad ananyo 'tiśayas tataḥ |
sattvāt prāg api niṣpatter niṣpattyuttarakālavat || 1825 ||
anyas tv atiśayo nâsti vyatirekād asaṅgateḥ |
asatkāryaprasaṅgaś ca tasya pūrvam asattvataḥ || 1826 ||
anyathātve sthitau nāśe cânyānanyavikalpayoḥ |
jarādiviṣayā doṣā eta evânuṣaṅginaḥ || 1827 ||

IV – 1– 1

---

[287] G 512, 11; J 194b1.
[288] G 512, 14: evâyam kriyākṣamaḥ. J92a5: evârthakriyākṣamaḥ.
[289] G 512, 16; J 194b2.
[290] B 624, 18: evêti. G 512, 16: evêti |. J 194b2: evêty.
[291] G 512, 18; J 194b2.
[292] B 624, 1; J92b1: 'syānapekṣaṇāt; G 512, 22: 'nyānapekṣaṇāt.

[624, 22][293] **anyavad** iti | avivādāspadībhūtavartamānavat | **kādācitka-tayâpi cêti** | vartamāno **'nyavat** prāpta iti sambandhaḥ | [1821]

[624, 23][294] na câyaṃ hetur ananvayaḥ, tathā hi hetupratyayajanito yo 'rthaḥ sa vartamāna ucyate, yaś ca kādācitkaḥ so 'vaśyaṃ hetupratyaya-nimittaḥ, yasmād ahetukasya dve eva gatī yad uta **sadā sattvam asattvaṃ vā**, anyānapekṣaṇāt | tasmād yaḥ kādācitkaḥ so 'vaśyaṃ hetupratyayanirmi-tasattvaḥ, yaś ca hetupratyayanirmitasattvaḥ[295] so 'vaśyaṃ vartamāna evêti siddham[296] | vartamānatvena kādācitkatvasya vyāptiḥ | [1822]

IV－1－2

[625, 11][297] kiñca yady atītānāgataṃ dravyato 'sti tadā sarva-saṃskārāṇāṃ śāśvatatvaprasaṅgaḥ | tataś ca pratisaṅkhyānirodhādibhyo rūpādīnāṃ viśeṣo na prāpnoti | atha **rūpādeḥ** saṃskr̥talakṣaṇayogāt **saṃskr̥tatvaṃ** nâkāśādīnāṃ, tena bhavati **pratisaṅkhyānirodhāder vai-lakṣaṇyaṃ rūpāder** iti **parair matam**, tad etad asamyak, tathā hi jātir jarā sthitir anityatā cêti catvārîmāni saṃskr̥talakṣaṇāni | tatra jātir janayati, sthitiḥ sthāpayati, jarā jarayati, anityatā vināśayatîty evaṃ jananādir eṣāṃ vyāpāra iṣṭaḥ | [1823]

IV－1－2－1

[625, 18][298] **tatra jātis** tāvat **kaṃ viśeṣaṃ janayantī** saty **asya** rūpāder **janikêty abhidhīyate** kiṃ tasmād rūpādeḥ **param** vyatiriktam āhosvid **aparam** avyatiriktaṃ viśeṣaṃ janayantîti pakṣadvayam | [1824]

---

293 G 513, 7; J 194b2.
294 G 513, 8; J 194b3.
295 B 625, 10: omit 'yaś ca hetupratyayanirmitasattvaḥ'. G 513, 11; J 194b4: yaś ca hetu-pratyayanirmitasattvaḥ.
296 J 194b4: siddha.
297 G 513, 12; J 194b4.
298 G 513, 18; J 194b5.

[625, 20][299] tatra na **tāvad** avyatiriktam, yasmād asau viśeṣo jātivyāpārāt **prāg api** niṣpannatvād aśakyakriyaḥ **niṣpattyuttarakālavat** | na hi niṣpannasya kriyā yuktânavasthāprasaṅgāt | [1825]

[625, 22][300] nâpi vyatirkto **'tiśayaḥ** kriyate, vyatireke hy asya rūpāder ayam atiśaya iti sambandhāsiddheḥ | tathā hi na tādātmyalakṣaṇaḥ sambandho vyatirekābhyupagamāt | anabhyupagame vā pūrvoktadoṣaprasaṅgāt | nâpi tadutpattilakṣaṇo jāter eva tadutpatteḥ | na cânyaḥ sambandho 'sti, ādhārādheyatvādīnāṃ tadutpattyantargatatvāt | atha tadutpattir abhyupagamyate [301] tanmātrabhāvino viśeṣasya nityotpattiprasaṅgāj jātir idānīm[302] kiṅkarī syāt | jātim apekṣyôtpādayatîti cet, na hy anupakāriṇyāṃ jātāv apekṣā yuktâtiprasaṅgāt[303] | upakāre vā tasyôpakārasyâtiśayavat tattvānyatvacintāyām[304] anavasthāprasaṅgāt | tasmād vyatireke sati sambandho na sidhyati | [1826ab]

kiñca **tasyâ**tiśayasya **pūrvam asattvād asatkāryam** abhyupagataṃ bhavet | [1826cd]

[626, 16] [305] evaṃ jaray**ânyathātve** kriyamāṇe sthityâvasthite 'nityatayā[306] ca **nāśe** kriyamāṇe, eṣām anyathātvādīnām **anyānanyavikalp**e sati ye **doṣās** te jātivaj jarādiṣv api vācyāḥ | [1827]

IV – 1– 2 – 2

> **svakāryārambhiṇa ime sāmarthyaniyamātmanā |**
> **jātyādayaś ca tadrūpaṃ prāk paścād api vidyate** || 1828 ||
> **samartharūpabhāvāc ca prārabhante na kiṃ tadā |**
> **svānurūpāṃ kriyāṃ tasyāḥ prārambhe câmitādhvatā**[307] || 1829 ||

---

[299] G 513, 20; J 194b6.
[300] G 513, 22; J 194b6.
[301] B 624, 1: abhyupamyate. G 512, 22 ; J 194b7: abhyupagamyate.
[302] B 624, 1 ; J 194b7: jātir idānīm. G 512, 22: jātiḥ.
[303] B 624, 1: apekṣā yuktâtiprasaṅgāt. G 512, 22: apekṣāyuktâtiprasaṅgāt.
[304] G 514, 1: tatvānyatvacintāyām.
[305] G 514, 3; J 195a1.
[306] G 514, 4: sthityâvasthiter anityatayā. J 195a1: -vasthitau | anitya-

[626, 20][308] kiñca jātyādīnāṃ **svakāryārambhi**tvaṃ yat tat samartha-svabhāvaniyamād iṣṭaṃ | [1828]

[626, 21][309] sa ca samarthaḥ svabhāvas teṣāṃ sarvadâstîti sadâiva svakāryārambhitvaprasaṅgaḥ | na ca hetupratyayavaikalyaṃ teṣām api sadāvasthitatvāt | tataś câtītānāgatāvasthayor jātyādibhir jananādi-svakāryakaraṇād ekasminn evâdhvany aparimitādhvaprasaṅgaḥ | [1829]

IV－2

IV－2－1

kiñcâtītādayo bhāvāḥ kṣaṇikāḥ syur na vā yadi |
ādyāḥ punas tayoḥ prāptā sâivâparimitādhvatā || 1830 ||
yaḥ kṣaṇo jāyate tatra vartamāno bhavaty asau |
utpadya yo vinaṣṭaś ca so 'tīto bhāvy anāgataḥ || 1831 ||

[627, 9][310] api câtītānāgatāḥ **kṣaṇikā** vā **syur na vā** kṣaṇikā iti pakṣadvayam | tatra yady **ādyāḥ** kṣaṇikā iti yāvat, tadā **sâivâmitādhvatā** prāptā | [1830]

[627, 11][311] **yaḥ kṣaṇa** iti tām eva darśayati | [1831]

IV－2－2

athâpy akṣaṇikās te syuḥ kṛtāntas te virudhyate |
kṣaṇikāḥ sarvasaṃskārāḥ siddhānte hi prakāśitāḥ || 1832 ||

[627, 12][312] ath**âkṣaṇikā** iti pakṣaḥ, evaṃ sati kṛtāntavirodhaḥ | **kṛtāntaḥ** siddhānta ucyate | tathā hi **kṣaṇikāḥ sarvasaṃskārā** iti siddhāntaḥ | [1832]

IV－2－3

---

[307] cf. B 626, n.1: J92b5: cāsinādhvanā とあるが、câmitādhvatā に見える。
[308] G 514, 11; J 195a1.
[309] G 514, 11; J 195a1.
[310] G 514, 19; J 195a2.
[311] G 514, 20; J 195a2.
[312] G 514, 24; J 195a2.

yuktibādhâpi santaś cen niyamāt kṣaṇabhaṅginaḥ |
vartamānā iva prāk tu pratibandho 'sya[313] **sādhitaḥ** || 1833 ||

[627, 14][314] kiñca na kevalaṃ siddhāntavirodho 'numānavirodho[315] 'pi pratijñāyāḥ | tathā hi yat sat tat sarvaṃ kṣaṇikaṃ yathā vartamānaṃ, **santaś** câtītānāgatā iti **niyamāt kṣaṇabhaṅginaḥ** prāptāḥ | **prāk tu** kṣaṇabhaṅgādhikāre, **pratibandho 'sya** hetoḥ prasādhita iti nânaikāntikatvam | tathā hy arthakriyākāritvaṃ sattvalakṣaṇam akṣaṇikasya ca kramayaugapadyābhyām arthakriyāvirodhād arthakriyānivṛttau tallakṣaṇasya sattvasya nivṛttir iti sādhyavipakṣān nivṛttaṃ sattvam | [1833]

IV – 3

arthakriyāsamarthāḥ syur atītānāgatā ime |
na vā sāmarthyasadbhāve vartamānās tadanyavat || 1834 ||
avartamānatāyāṃ tu sarvaśaktiviyoginaḥ |
naṣṭājātāḥ prasajyante vyomatāmarasādivat || 1835 ||
tulyaparyanuyogāś ca sarve vyomādayo 'kṛtāḥ |
anaikāntikatākḷpter na te 'pi vinibandhanam || 1836 ||
niyatārthakriyāśaktir[316] **bhāvānāṃ pratyayodbhavā |**
ahetutve samaṃ sarvam upayujyeta sarvataḥ || 1837 ||
niyatārthakriyāśaktijanma pratyayanirmitam |
vartamānasya bhāvasya lakṣaṇaṃ nânyad asti ca || 1838 ||
atītānāgatānāṃ ca tad akhaṇḍaṃ samasti vaḥ |
tat kiṃ na vartamānatvam amīṣām anuṣajyate || 1839 ||

IV – 3– 1

---

[313] G 514, 27; J93a1: 'tra. cf. B 627, 17; G 515, 3: asya.
[314] G 515, 1; J 195a3.
[315] G 515, 1: mānavirodho. J 195a3: anumānavirodho.
[316] B; G: niyamārtha-. J93a3: niyatārtha-. cf. B 628, 16: pratiniyatārtha-.

[627, 20][317] kiñca **ime 'tītānāgatā arthakriyāsamarthā** vā syur **na vā** samarthā iti pakṣau | yadi samarthās tadā **sāmarthyasadbhāve vartamānāḥ** prāpnuvanti, avivādāspadībhūtavartamānavat |

prayogaḥ: ye ye 'rthakriyāsamarthās te vartamānāḥ, yathâvivādāspadībhūtā vartamānāḥ, arthakriyāsamarthāś câtītādaya iti svabhāvahetuprasaṅgaḥ | [1834]

[628, 11] [318] na câyam anaikāntikaḥ, yato vartamānatvanivṛttau **naṣṭājātā**nāṃ sarvasāmarthyaviyogitvaṃ prasajyeta, ākāśāmbhoruhavat |

prayogaḥ: ye vartamānā na bhavanti te kvacit samarthā api na bhavanti yathā vyomāmbhoruham | na bhavanti câtītādayo vartamānā iti vyāpakānupalabdhiḥ | [1835]

[628, 14] [319] na câkāśapratisaṅkhyānirodhāpratisaṅkhyānirodhair asaṃskṛtair anekāntas teṣām api pakṣīkaraṇāt | ato **'naikāntika**tvakalpanāyā na te nibandhanam[320] | [1836]

[628, 16][321] tathā hi yêyaṃ prati**niyatārthakriyāśaktir bhāvānāṃ** sā **pratyayodbhavê**ty aṅgīkartavyam | anyathā yadi nirhetukā syāt tadā niyamahetor abhāvāt pratiniyatā śaktir bhāvānāṃ na syāt | tataś ca **sarvaṃ** sarvasmin kārye **upayujyeta** | tasmād akṛtākāśādīnāṃ[322] sāmarthyaniyamo na yukta iti na tair anaikāntikatvakalpanāyā nibandhanam | [1837]

[628, 20][323] na ca prathame hetau saṃdigdhavipakṣavṛttikatā[324], yasmān **niyatā**yām **arthakriyā**yāṃ yā **śakti**s tasyā yad etaj **janma** hetu**pratyaya-nirmitaṃ**[325] tad eva **vartamānasya lakṣaṇam** | [1838]

---

[317] G 515, 19; J 195a4.

[318] G 515, 22; J 195a5.

[319] G 515, 25; J 195a6.

[320] B 628, 15; G 515, 12: nātinibandhanam. J 195a6: na te nibandhanam. D88a1, P123a5-6: de'i phyir de dag ma nges pa nyid du brtag* pa'i rgyu mtshan ma yin no. *D : brtags.

[321] G 515, 27; J 195a6.

[322] B 628, 19: tasmāt kṛtākāśādīnām. G 516, 3: tasmāt kṛ{tasmād akṛ?}tākāśādīnām. cf. B 628, n.1: gā- : akṛtā-. J 195a7: tasmād akṛtānām ākāśādīnāṃ. D88a3, P123a7: ma byas pa.

[323] G 516, 4; J 195a7.

[628, 21][326] etac ca vartamānasya lakṣaṇam[327] avikalam atītādiṣv apy astîti nimittāntarābhāvāt kim iti vartamānatā na prasajyate[328] | [1839]

svargāpavargasaṃsargayatno 'yam aphalas tataḥ |
īhāsādhyaṃ na kiñcid dhi phalam atrôpalakṣyate || 1840 ||

[629, 8][329] kiñca yasyâtītānāgataṃ dravyato 'sti tasya phalam api nityam astîti **svargāpavarga**prāptyartho **yatno** viphalaḥ syāt, **īhāsādhya**sya kasyacit **phala**syâbhāvāt | kiṃ tatra vrataniyamādilakṣaṇāyā īhāyāḥ sāmarthyaṃ syāt | utpādane sāmarthyam iti cet | utpādanaṃ tarhy abhūtvā bhavatîti siddham |

[629, 11][330] atha tad apy asti, kasyêdānīṃ kva sāmarthyam | vartamānīkaraṇasāmarthyam iti cet | kim idaṃ vartamānīkaraṇaṃ nāma | deśāntarākarṣaṇaṃ cet | nityaṃ tarhi vastu prasaktaṃ sarvadāvasthitatvāt | arūpāṇāṃ vedanādīnāṃ niṣkriyatvāt katham ākarṣaṇaṃ bhavet | yac ca tad ākarṣaṇaṃ tad abhūtvā bhavatîti siddham | svargaḥ sumerupṛṣṭhādiḥ, apavargo mokṣaḥ, tayoḥ prāptiḥ saṃsargaḥ, tatra yatno vrataniyamādiḥ[331] | [1840]

IV - 3- 2

atha nârthakriyāśaktis[332] teṣām abhyupagamyate |
yady evam ata evâiṣām asattvaṃ vyomapuṣpavat || 1841 ||

---

[324] J 195b1: -vipakṣayāvṛttikatā. cf. B 628, n2.
[325] J 195b1: -nirmitaṃ（上方に-nimittaṃ とある）. cf. B 628, n3.
[326] G 516, 6; J 195b1.
[327] B 628, 22; G 516, 6; J 195b1 varttamānatvalakṣaṇam. D 88a4, P 123b1: de ltar byung ba'i.
[328] G 516, 7: vartamānatā (na) prasajyate. cf. B 628, 23 : pā-: omit 'na.' J 195b1: vartamānatā na prasajyate.
[329] G 516, 11; J 195b1.
[330] G 516, 14; J 195b1..
[331] B 629, 16: yatna=vrataniyatādiḥ. G 516, 18; J 195b3: yatno vrataniyatādiḥ.
[332] B: nârthe kriyāśaktis. G; J93a5: nârthakriyāśaktis.

[629, 17][333] **atha nârthakriyā**samarthā[334] iti dvitīyapakṣa āśrīyate | evaṃ tarhy **ata evâr**thakriyāśūnyatvād asattvaṃ prāpnoti kha**puṣpavat** | sarvasāmarthyavivekalakṣaṇatvād asattvasya | [1841]

V

[629, 20][335] evaṃ tāvad atītānāgatānām asattāsādhakaṃ pramāṇam abhidhāya sattāsādhakaṃ pramāṇam apākartum āha **hetava** ityādi |

hetavo bhāvadharmās tu nâsiddhe siddhibhāginaḥ |
vartamānatvasiddher vā viruddhā dharmibādhanāt || 1842 ||

[629, 21][336] **hetavo** hi pūrvoktā adhvasaṃgr̥hītatvād ityādaya āśrayāsiddhāḥ, atītāder dharmiṇo 'siddhatvāt | yathâha "nâsiddhe bhāvadharmo 'sti"iti[337] | athâpi siddhāḥ syuḥ, tathâpi **vartamānatvasiddher dharmi**svarūpaviparītasādhanād[338] **viruddhā hetavaḥ** | [1842]

V－1

[629, 25][339] katham idānīm adhvasaṃgr̥hītatvam atītānāgatānāṃ rūpādīnāṃ nirdiṣṭam, na hi śaśaviṣāṇam atyantāsad atītam anāgataṃ vā vyavasthāpyata ity āha **bhūtvê**tyādi |

bhūtvā yad vigataṃ rūpaṃ tad atītaṃ prakāśitam |
sati pratyayasākalye bhāvi yat tad anāgatam || 1843 ||
sattve tu vartamānatvam āsajyetêti sādhitam |
vidyamānatvamātraṃ hi vartamānasya lakṣaṇam || 1844 ||

[630, 13][340] subodham | [1843-1844]

---

333 G 516, 21; J 195b3.
334 B 629, 17; J 195b3: nârthe kriyāsamarthā ; G 516, 21 : nârthakriyāsamarthā.
335 G 516, 23; J 195b3.
336 B 516, 27; J 195b4.
337 PV I k.191a.
338 B 629, 17; G 516, 21; J 195b4: dharmasvarūpa-. P 124a2, D 88b4: chos kyi rang gi ngo bo…
339 B 517, 3; J 195b4.
340 B 517, 9; J 195b5.

V- 2

[630, 14] [341] rūpavedanādibhāvas tarhi kathaṃ nirdiṣṭa ity āha **rūpāditvam** ityādi |

rūpāditvam atītāder bhūtāṃ tāṃ bhāvinīṃ tathā |
adhyāropya daśām asya kathyate na tu bhāvataḥ || 1845 ||

[630, 15][342] **tāṃ daśām** iti tām avasthām | [1845]

[630, 16][343] dvyāśrayaṃ tarhi kathaṃ vijñānam uktam ity āha **dvayaṃ pratītyeti** |

dvayaṃ pratītya vijñānaṃ[344] **yad uktaṃ tattvadarśinā** |
sêṣṭā saviṣayaṃ cittam abhisandhāya deśanā || 1846 ||

[630, 16][345] dvividhaṃ hi **vijñānaṃ** sālambanam anālambanaṃ ca | yat sālāmbanaṃ tad **abhisandhāya** dvyāśrayavijñānadeśanā Bhagavataḥ | [1846]

[630, 19][346] atha nirālambanam api jñānam astîti katham avasitam ity āha **nityeśvarādī**tyādi |

nityeśvarādibuddhīnāṃ nâivâlambanam asti hi |
śabdanāmādidharmāṇāṃ[347] **tadākāraviyuktitaḥ** || 1847 ||

[630, 20][348] **ādi**śabdena pradhānakālādayaḥ parikalpitā gr̥hyante | na câitan mantavyaṃ śabdādyālambanā imā buddhaya iti kathayati **śabdanāmādî**tyādi | **tasy**êśvarāder **ākāro** nityatvasakalahetutvādiḥ, yas tayā buddhyâdhyavasīyate, **tenâkāre**ṇa viyogaḥ śabdasya nāmno vā

---

[341] B 517, 10; J 195b5.
[342] B 517, 13; J 195b5.
[343] B 517, 14; J 195b5.
[344] B 630, 7; G 517, 15 (; J93b3) : pratītyavijñānaṃ.
[345] B 517, 17; J 195b5.
[346] B 517, 19; J 195b5.
[347] B 630, 10: śabdānāmā-. G 517, 21; J93b4: śabdanāmā-. cf. B 630, 21: śabda-nāmā-
[348] B 517, 22; J 195b6.

viprayuktasaṃskāraviśeṣasya | **ādi**śabdena nimittādeḥ paropagatasyârtha-pratibimbakādisvabhāvasya | [1847]

[630, 25][349] yadi tarhi nirviṣayam api vijñānam asti tat kathaṃ jñānam iti vyapadiśyate, tathā hi vijānātîti vijñānam iti gīyate, asati ca vijñeye kiṃ vijānato[350] vijñānaṃ syād ity āha **bodhānugatimātreṇêti** |

bodhānugatimātreṇa vijñānam iti côcyate |

sā câsyâjaḍarūpatvaṃ prākāśyāt parikalpitam || 1848 ||

[631, 8][351] bodhānugamo 'pi vinā bodhyena[352] na sambhavatîti[353] ced ity āha[354] **sā cêti** | **sā bodhānugatiḥ** | **asya** vijñānasya | kim ucyate, yat tad **ajaḍarūpatvam**, prakāśyavastvantarābhāvāt prakāśāntaravirahāc ca nabhovartyālokavat prakāśarūpatvād abhidhīyate bodharūpatêti | [1848]

V- 3

[631, 13][355] karmâtītaṃ ca kathaṃ phaladam ity atrâha **vipākahetur** ityādi |

vipākahetuḥ phalado nâtīto 'bhyupagamyate |

tadvāsitāt[356] **tu vijñānaprabandhāt phalam iṣyate** || 1849 ||

vāsitaṃ paramparayā phalotpādanasamartham utpāditam | [1849]

[631, 15][357] yady evaṃ katham uktaṃ Bhagavatā, "asti tat karma yat kṣīṇaṃ niruddhaṃ vipariṇatam" ity āha **tām evêti** |

tām eva vāsanāṃ cetaḥsantatāv adhikṛtya tat |

---

349 B 517, 27; J 195b7.
350 B 631, 8: vijānataḥ. G 518, 1: omit 'vijānato'. J 195b7: vijānata.
351 G 518, 5; J 196a1.
352 B 631, 9; G 517, 21: bodhena. J 196a1: bodhyena.
353 G 518, 5: (na) sambhavatîti. cf. B 631, n.2: pā-: omit 'na.' J 196a1: omit 'na.'
354 B 631, 9; J 196a1: ced ity āha. G 518, 5: ced āha.
355 B 518, 9; J 196a1.
356 G 518, 11: sadvāsitāt. J93b5: tadvāsitāt.
357 B 518, 13; J 196a1.

asti karmêti nirdiṣṭaṃ bhaktyā mūlāvināśavat || 1850 ||

[631, 16] [358] **bhaktyêti** upacāreṇa | yathā mūladravyaprasūtasya hiraṇyādeḥ phalaprabandhasya sambhāve[359] vinaṣṭam api mūladravyam avinaṣṭam ity ucyate tadvat karmâpi | [1850]

[631, 19][360] upacāreṇa deśanāyāḥ kiṃ prayojanam ity āha **uccheda dṛṣṭīti** |

ucchedadṛṣṭināśāya câivaṃ śāstrā prakāśitam |
anyathā Śūnyatāsūtre deśanā nīyate katham || 1851 ||

[631, 19] [361] nâsty atītaṃ karmêty ukte pāramparyeṇa yat phalotpādanasāmarthyam āhitam atītena karmaṇā tasyâpy abhāvaṃ pratipadyerann ity **ucchedadṛṣṭim** āpannāḥ syur vineyā ity asti karmêty uktaṃ Bhagavatā | **anyathā** hi yady atītaṃ svarūpeṇa syāt tadā Paramārtha**śūnyatāsūtre** deśanā kathaṃ nīyate "cakṣur utpadyamānaṃ na kutaścid āgacchati niruddhyamānaṃ na kvacit sannicayaṃ gacchatîti hi cakṣur abhūtvā bhavati bhūtvā ca prativigacchati" iti[362] |

[632, 9][363] vartamāne 'dhvany abhūtvā bhavatîti cen na, adhvano bhāvānarthântaratvāt, ta [364] evâdhvānas [365] tathāvasthitivacanāt | atha svātmany abhūtvā bhavati tadā[366] siddham anāgataṃ cakṣur nâstîti |

[632, 11][367] api ca sadāvasthitatve saṃskārāṇāṃ hetuphalayor abhāvāt duḥkhasamudayasatyābhāvaḥ[368], tadabhāvān nirodhamārgayor api, tataś ca

---

[358] B 518, 17; J 196a2.
[359] B 631, 17: samabhāve. G 518, 17-18: sa (ma) bhāve. J 196a2: saṃbhāve (?) .
[360] B 518, 19; J 196a2.
[361] B 518, 22; J 196a3.
[362] AKBh 299, 12-14.
[363] B 518, 26; J 196a3.
[364] B 632, 9: tat. G 518, 27; J 196a4: ta.
[365] cf. AK I 7c: ta evâdhvā. cf. AKBh 5, 3: ta eva saṃskṛtā gatagacchadgamiṣyadbhāvād adhvānaḥ, adyante 'nityatayêti vā.
[366] G 519, 1: tathā. J 196a4: tadā.
[367] B 519, 1; J 196a4.
[368] G 519, 2: duḥsamudayasatyābhāvaḥ. J 196a4: duḥkhasamudaya-.

satyacatuṣṭayābhāvāt parijñāprahāṇasākṣātkriyābhāvanā na yujyante, tadabhāvāc ca phalasthānāṃ pratipannakānāṃ ca pudgalānām abhāva iti sakalam eva pravacanaṃ nirudhyata iti nâtītādivastujātakalpanā sādhvī | [1851]

V-4

[632, 16][369] "atītānāgataṃ jñānaṃ[370] vibhaktaṃ yogināṃ katham "[371] ity atrâha — **pāramparyeṇêtyādi** |

pāramparyeṇa sākṣād vā kāryakāraṇatāṃ gatam |
yad rūpaṃ vartamānasya tad vijānanti yoginaḥ || 1852 ||
anugacchanti paścāc ca vikalpānugatātmabhiḥ |
śuddhalaukikavijñānais tattvato 'viṣayair api || 1853 ||
tad dhetuphalayor bhūtāṃ bhāvinīṃ câiva santatim[372] |
tām āśritya pravartante 'tītanāgatadeśanāḥ || 1854 ||
samastakalpanājālarahitajñānasantateḥ |
tathāgatasya vartante 'nābhogenâiva deśanāḥ || 1855 ||

[632, 17] [373] atītārthāpekṣayā **kāryatāṃ** gatam, anāgatāpekṣayā **kāraṇatām** | [1852]

[632, 18][374] **vikalpānugatātmabhir** iti savikalpair ity arthaḥ | **tattvato 'viṣayair** iti āviṣṭābhilāpair jñānaiḥ svalakṣaṇasyâviṣayīkaraṇāt | [1853]

[632, 19][375] **tat** tasmāt | **hetuphalayoḥ santatiṃ bhūtāṃ bhāvinīṃ câśrityâtītādideśanā**[376] yoginām apariśuddhānāṃ pravartante | [1854]

---

[369] B 519, 6; J 196a5.
[370] G 519, 6: atītānāgatajñānaṃ. J 196a5: atītānāgataṃ jñānaṃ.
[371] cf. TS 1788cd: atītānāgataṃ jñānaṃ vibhaktaṃ yogināṃ ca kiṃ ||
[372] G 519, 11: sannatim. J94a2: santatiṃ.
[373] B 519, 16; J 196a5.
[374] B 519, 16; J 196a5.
[375] B519, 18; J 196a6.
[376] B519, 20; J 196a6: câśritya atītā-. G 519, 19: câśritâtītā-.

[632, 21][377] Bhagavatas tu **tathāgatasya** śuddhalaukikam api jñānaṃ nâsti, nityasamāhitatvāt sarvāvidyāprahāṇena | vikalpasya câvidyāsvabhāvatvāt | yad āha

[633, 9][378] "vikalpaḥ svayam evâyam avidyārūpatāṃ gataḥ |
svākāraṃ bāhyarūpeṇa yasmād āropya vartate" || [379]

iti tasya pūrvapraṇidhānapuṇyajñānasambhārasāmarthyād avāptacintāmaṇisadṛśātmabhāvasyânābhogenâiva deśanāḥ pravartante | [1855]

|| iti Traikālyaparīkṣā ||

---

[377] B 519, 19; J 196a6.
[378] B 519, 21; J 196a6.
[379] 出典不明。

略号（上巻）

テキスト

A　Aṣṭādhyāyī of Pāṇini.

AD　*Abhidharmadīpaḥ*. cf. ADV

ADV　*Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvṛtti*. Ed. Pad manabh S. Jaini. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1977.

AK　*Abhidharmakośaḥ*. cf. AKBh

AKBh　*Abhidharmakośabhāṣya*. Ed. P. Pradhan. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.

AKBh 1975　cf. AKBh.

AKBh D No.4090. Ku239a2-243b2. cf. D（但し、チベット語訳に言及するときは分類記号"Ku"は省く。他の文献についても同様。）.

AKBh P No.5591. Gu279b5-285a4. cf. P.

B　*Tattvasaṃgraha of Ācārya Śāntarakṣita with the commentary 'Pañjikā' of Śrī Kamalaśīla*. Ed. Swami Dwarikadas Shastri, in two volumes. Bauddha Bharati Series 1, 2. Varanasi, 1968.

BSOAS *Bulletin of the School of Oriental and African Studies University of London*. Published by the School of Oriental and African Studies.

D　デルゲ版チベット大蔵経

DN　*Dīgha-nikāya*. Vols. I-III. PTS, 1889-1911.

G　*Tattvasaṃgraha of Śāntarakṣita with the Commentary of Kamalaśīla*. Ed. Embar Krishnamacharya. 2 vols. Gaekward Oriental Series, nos. 30, 31. Baroda: Central Library, 1926.

J　Jaisalmer 写本. cf. TSP, B, G.

JIABS　*The Journal of the International Association of Buddhist Studies*.

k.　kārikā.

KV *Kāśikāvṛtti of Jayāditya-Vāmana*. Ed. Dr. Srīnārāyaṇa Miśra. Banaras Hindu University. Ratna Publications, Varanasi, 1985.

MBhṣ I *The Vyākaraṇa-Mahābhāṣya of Patañjali*. Ed. F. Kielhorn. 1880 (2nd Ed.:1892). [vol.1. 3rd Ed. K.V.Abhyankar; 4th Ed. 1985]

MN *Majjhima-nikāya*. Vols. I-III. PTS,1888-1896.

NA *Nyāyānusāriṇī*. 『順正理論』（大正 29, No.1562）

Nir *The Nighaṇṭu and the Nirukta*. Ed. Lakshman Sarup. Motilal Banar sidass, Delhi/Varanasi/Patna.

P 北京版チベット大蔵経

PV *Pramāṇavārttika of Āchārya Dharmakīrti with the com. 'Vṛtti' of Āchārya Manorathanandin*. Ed. Swami Dwarikadas Shastri. Varanasi: Bauddha Bharati, 1968.

PV I *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti*. Ed. Raniero Gnoli. Serie Orientale Roma XXIII, Roma, Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1960.

PVin II *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścayaḥ*, 2. Kapitel: Svārthānumānam, Teil I, Tibetischer Text und Sanskrittexte. Ed. Ernst Steinkellner. Wien, 1973

PVSV cf. PV I.

SA *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā*, The Work of Yaśomitra. Ed. U.Wogihara. Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store, 1990. （初版 1936）

SA D No. 4092. Ngu 113a4-121a3. cf. D.

SA P No. 5593. Chu 128a3-137a3. cf. P.

SN *Saṃyutta-nikāya*. Vols. I-VI. PTS, 1884-1904.

TA *Tattvārthā Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā*. cf. TA D, TA P.

TA D No. 4421. Do 135a1-150b1. cf. D.

TA P No. 5875. Tho 270a6-288a4. cf. P.

TA<T> TA（チベット語訳）cf. TA, TA D, TA P.

TS *Tattvasaṃgraha*. cf. TSP.

TS D No. 4266. Ze 65a7-67b7. cf. D.

TS P No. 5764. Ḥe 79a3-82a2. cf. P.

TSP *Tattvasaṃgraha of Śāntarakṣita with the Commentary 'Pañjikā' of Kamalaśīla.* cf. B, G, J.

TSP D No. 4267. Ḥe 80b1-90a4. cf. D

TSP P No. 5765. Ye 115a5-125b3. cf. P

Up *Abhidharmakośopāyikā nāma Ṭīkā.* D No. 4094, P No. 5595.

Vm cf. ADV, Abbreviations vii. (Ed. D. Kosambi. Bombay, 1940)

VP *Vākyapadīya of Bhartṛhari with the commentary of Helārāja,* Kāṇḍ III, Part 1. Ed. K. A. Subramania Iyer, Poona 1963.

WZKS *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für indische Philosophie*

アビダルマ灯論 cf. ADV.

倶舎論 cf. AKBh.

倶舎論明義釈 cf. SA.

倶舎論真実義釈 cf. TA.

玄奘 佐伯旭雅編『冠導阿毘達磨倶舎論 II』法蔵館, 1978.

光記 普光『倶舎論記』大正 41（No.1821）.

順正理論 cf. NA.

真実義 cf. TA.

真実集成 cf. TS.

真実集成釈 cf. TSP.

真諦 『阿毘達磨倶舎釋論』大正 29, No.1959.

大正 大正新脩大蔵経。

婆沙 『大毘婆沙論』大正 26, No.1545

宝疏 法宝『倶舎論疏』大正 41, No.1822.

明義 cf. SA.

参考文献

Cox, Collet. 1988

"On the Possibility of a Nonexistent Object of Consciousness: Sarvāstivādin and Dārṣṭāntika Theories", JIABS 11-1: 31-87.

Frauwallner, Erich. 1973

"Abhidharma-Studien V. Der Sarvāstivādaḥ ", *WZKS* XXVII: 97-121..

Jaini, Padmanabh S. 1959a

"The Vaibhāṣika theory of words", BSOAS XXII, Part 1: 95-107.

Jaini, Padmanabh S. 1959b

"The Sautrāntika theory of bīja", BSOAS XXII, Part 2: 236-249.

Jaini, Padmanabh S. 1959c

"Origin and Development of the Theory of Viprayukta-Saṃskāras", BSOAS XXII, Part 3: 531-547.

Poussin, Louis de La Vallée. 1971

L'Abhidharmakośa de Vasubandhu. Tome IV, Chapitres 5 et 6. Institut Belge des Hautes Études Chinoises, Bruxelles.

Skilling, Peter 2000

"Vasubandhu and the *Vyākhyāyukti* Literature", JIABS 23-2: 297-350.

Stcherbatsky, Th. 1920

"The Soul Theory of the Buddhits", Bulletin de l'Acađemie des Sxiences de Russie, Petrograd.

————1923

"The Central Conception of Buddhism", Prize Publication Fund, Vol. VII, London, 1923.

赤松明彦 1984　「IV ダルマキールティの論理学」『講座・大乗仏教 9 認識論と論理学』春秋社: 183-215.

————1998　『古典インドの言語哲学 1 ブラフマンとことばーバルトリハリ』赤松明彦訳注　東洋文庫 637　平凡社

秋本勝・本庄良文 1978　「倶舎論―三世実有説（訳注）」『南都仏教』41: 84-99

秋本勝 1991a　「ヤショーミトラの『倶舎論』註―三世実有説」『筑紫女学園大学国際文化研究所論叢』2: 83-116.

―――1991b　「ＴＳの三世実有説批判（摘要）」『筑紫女学園大学紀要』3: 1-11.

―――1993　「スティラマティの『倶舎論』註―三世実有説（和訳）I―」『筑紫女学園大学国際文化研究所論叢』4: 47-63.

―――1995　スティラマティの『倶舎論』註―三世実有説（和訳）II―,『筑紫女学園大学国際文化研究所論叢』6: 173-187.

―――1996　「スティラマティの『倶舎論』註―三世実有説（和訳）III―」『筑紫女学園大学国際文化研究所論叢』7: 103-117.

―――1997　「スティラマティの『倶舎論』註―三世実有説（和訳）IV―」『筑紫女学園大学国際文化研究所論叢』8: 101-111

―――1998　「スティラマティの『倶舎論』註―三世実有説（和訳）V―」,『筑紫女学園大学国際文化研究所論叢』9: 19-29.

―――2000a　「スティラマティの『倶舎論』註―三世実有説（和訳）VI―」『戸崎宏正博士古稀記念論文集　インド文化と論理』』, 九州大学出版会: 223-240.

―――2000b　「スティラマティの『倶舎論』註―三世実有説（和訳）VII―」『筑紫女学園大学紀要』12: 19-29.

―――2002　「仏教における存在の定義―その一系譜―」『櫻部建博士喜寿記念論集　初期仏教からアビダルマへ』: 23-36.

―――2003　「*Abhidharmadīpa*:「三世実有説」和訳（未完）」『瓜生津隆真博士退職記念論集　仏教から真宗へ』: 35-45.

―――2004　”Buddhist Definition of Existence: Kāritra to Arthakriyā”, *Three Moun tains and Seven Rivers*, Prof. Musashi Tachikawa’s Felicitation Volume: 107-116.

―――2016a　「仏説をめぐる論争―説一切有部の大乗・世親批判―」『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』29.

稲見正浩 2013　「『プラマーナ・ヴァールティカ』プラマーナシッディ章の研究（１２）」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系 II』 64: 89-114.
岩田孝 1983　Prajñākaragupta (PVBh)に於ける有形相知識説に関する一考察, *SAṂBHĀṢĀ* v.5: 39-67.
江崎公児 2004　「ダルマキールティによる差異の定義について—'viruddhadharmādhāsa'とは何か—」『比較論理学研究』2: 39-46.
江島恵教 1986　「スティラマティの『倶舎論』註とその周辺－三世実有説をめぐって」『仏教学』19: 25-32.
榎本文雄 1988　「Abhidharmadīpa のトルファン出土梵文写本断片」『印度学仏教学研究』37-1: 414-420.
小谷信千代・本庄良文 2007　『倶舎論の原典研究 随眠品』大蔵出版.
梶山雄一 1974　「第二部 論理学 第二章 後期インド仏教の論理学」『講座仏教思想 第２巻「認識論・論理学」』理想社: 243-310.
————1983　『仏教における存在と知識』 紀伊国屋書店.
桂紹隆 1983　「ダルマキールティの因果論」『南都仏教』50: 96-114.
———2002　「存在とは何か—ダルマキールティの視点」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』41: 263-275.
加藤純章 1989　『経量部の研究』春秋社.
金倉圓照 1973　『インドの自然哲学』平楽寺書店（初版 1971）
櫻部建 1956　「シャマタデーヴァの倶舎論註について」『印度学仏教学研究』4-2: 155-156.
———1959　「破我品の研究」『大谷大学研究年報』12: 21-112.
———1969　『仏教の思想２ 存在の分析<アビダルマ>』角川書店（共著者：上山春平）
———1972　「倶舎論における我論—破我品の諸説—」 中村元編『自我と無我』平楽寺書店: 455-478.
———1975　『倶舎論の研究　界・根品』 法蔵館. （初版: 1969）
櫻部建・小谷信千代 1999 『倶舎論の原典解明・賢聖品』法蔵館.

佐々木現順 1974 『佛教における時間論の研究』清水弘文堂

菅沼晃 1964 「寂護の三世実有批判論—Tattvasaṃgraha, Traikālya-parīkṣā—」, 『東洋大学大学院紀要』第一集: 75-105.

高橋晃一 2005 『『菩薩地』「真実義品」から「摂決択分中菩薩地」への展開—vastu 概念を中心として』山喜房佛書林

那須円照 2004 「Abhidharmadīpa (『アビダルマディーパ』) の時間論＜三世実有論＞試訳」 『インド学チベット学研究』7/8: 49-101.

服部正明 1970 『仏教の思想４ 認識と超越＜唯識＞』角川書店（共著者：上山春平）

福田琢 1988 「『順正理論』の三世実有説」『仏教学セミナー』48: 48-68.

———1996 「実在しない認識対象の可能性をめぐって—説一切有部と譬喩者の理論—コレット・コックス（福田琢訳） 」『同朋佛教』31: 154(15)-90(79).

福田洋一 1987 「ダルマキールティの論理学における svabhāvapratibandha の意味について」『印度学仏教学研究』35-2: 885-888.

本庄良文 1982 「三世実有説と有部阿含」 『佛教研究』12: 49-61.

————2014 『倶舎論註ウパーイカーの研究 訳注篇』上・下, 大蔵出版.

三友健容 2007 『アビダルマディーパの研究』平楽寺書店.

宮下晴輝 1986 『倶舎論』における本無今有論の背景－『勝義空性経』の解釈をめぐってー, 『仏教学セミナー』44: 7-37.

村上真完 1982 『サーンクヤの哲学』＜サーラ叢書 27＞平楽寺書店.

吉元信行 1982 『アビダルマ思想』法蔵館.

あとがき（上巻）

初めは 1 冊にまとめる予定であったが、出版助成その他諸般の事情により、上下 2 冊に分けることとなった。

全体を点検しながらも、訳語の不統一等、諸所において不足不備の点や細かいミスもあるかと思われるが、その点は下巻でできうる限り是正したい。ひとまず現時点での成果を示し得たことを喜びとしたい。

一部の章の校正については藤井隆道氏に助力を賜り、また氏からいくつかの重要な示唆を受けた。ここに感謝の意を表したい。

山喜房仏書林の浅地康平氏には本書の出版を快くお引き受けいただき、終始励まして下さったことに心より謝意を表したいと思う。

なお、本書（上巻）の出版に際しては、京都女子大学より出版助成を賜った。ここに謝意を表す。

著者紹介
秋本　勝（あきもと　まさる）
1951 年　大阪府東大阪市の浄土真宗本願寺派永照寺に生まれる
1975 年　京都大学文学部卒業
1980 年　京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学
1980 年　鉄鋼短期大学（他）非常勤講師
1988 年　筑紫女学園大学助教授
1995 年　筑紫女学園大学教授
1999 年　国立民族学博物館共同研究員（～ 2001 年）
2000 年　京都女子大学教授

仏教実在論の研究―三世実有説論争―　上

平成 28 年 3 月 1 日　初版発行

著　者　©秋　本　　勝
発行者　浅　地　康　平
印刷者　小　林　裕　生

発行所　株式会社　山喜房佛書林
東京都文京区本郷五丁目二十八番五号
電話 03-3811-5361　振替 00100-0-1900

ISBN978-4-7963-0263-0　C 3015